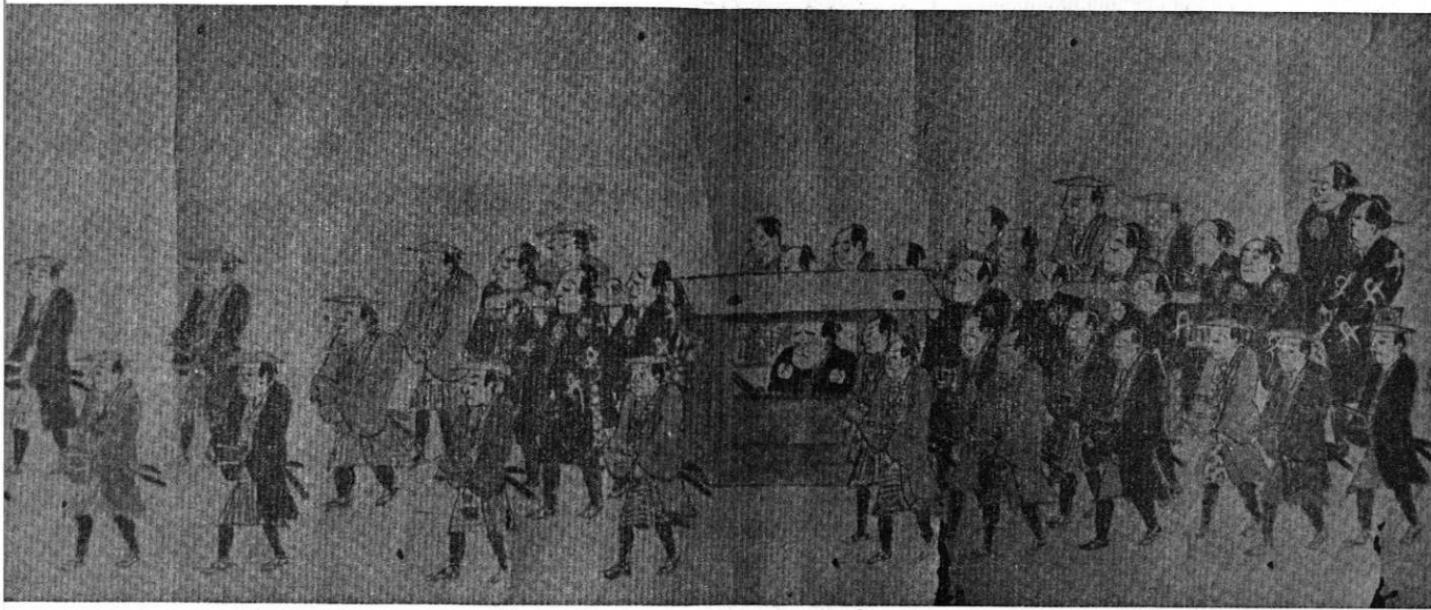


和
告
別



仙台城

序

仙台市教育委員会では、かねてより仙台市文化財保護委員会に委嘱して仙台城に関する調査を進めてまいりましたが、このほどその調査がまとまり、発刊の運びとなりました。

仙台城は、いまさらいうまでもなく藩祖伊達政宗公の築城になるもので、仙台藩六十二万石の居城として二百數十年の間、東北にその偉容を誇りました。

明治維新により、本丸は取り壊され、また二の丸も焼失するなど建物のはとんどが失われ、わずかにのこった大手門と、隅櫓も昭和二十年の戦災で焼失し、現在われわれにはその全貌を目にすることができません。ただのこされた石垣と、その規模の雄大さで当時の面影をしのぶよりほかにない有様です。

仙台城に関する本としては、旧第二師団で出版した「仙台城の沿革」や元東北大學教授小倉先生の「仙台城の建築」などがありますが、いずれも戦前のもので今日容易に手に入れるとのできない貴重な本となっています。こういうときに仙台城に関する総合的な調査研究がまとめられ一冊の本として出版されるということは、ただに研究者のみならず郷土を愛する市民にとっても大いに意義のあることと思われます。

この本の出版にあたり、本務のいそがしさをも顧みず熱心にご調査ご研究いただきました仙台市文化財保護委員会の諸先生はじめ、貴重な資料を提供して下さった方々に対し、深く感謝するとともに、本書が広く活用されることを願うものであります。

昭和四十二年三月三十一日

仙台市教育委員会

教育長 高 槻 英 男

発刊によせて

藩祖政宗公の生誕四百年を記念して、仙台市では去年いろいろの行事を行なつた。大学の先生による講演会や史跡踏査、丸光百貨店での遺品展示会等々……。そこであらためて感じられるのは政宗公の偉大さである。武将と/or また政治家として。

現在、市政を担当している私にとって、とくに政宗公にひかれるのはその政治力である。職園時代を生き抜き、徳川時代に六十二万石の大大名として幕府にも重きをなしたその基礎は、ひとえに政宗公の力によるところ大であつたと思う。

政宗公が仙台に城を築いたのは慶長五年（西暦千六百年）、今から三百六十七年前のことである。この築城とそれとともになう城下町の建設とが、今日東北の雄都として榮える仙台市の礎になつたものである。

仙台城の建築物は明治以後、取り壊しや火災で惜しくもそのすべてを失つたが、その城跡はかつての仙台城の規模をしのばせてくれるのに充分である。近年は仙台の名所として市民はもとより観光客の足を集めているが、本丸跡にたつて仙台市街を眺めると、政宗公が本拠としてここを選んだ理由もうなづけるのである。

ここに、仙台城に関することが一冊の本にまとめられて発刊されるということは、ひとり仙台市民だけではなく歴史研究家や郷土史家にとつて大いに意義のあることといわなければならない。「仙台城」の発刊にあたり、編集にあたられた諸先生に対し厚く御礼申しあげるとともに、この本が多くの人々に読まれることを心から望むものである。

昭和四十二年三月三十一日

仙台市長　島野武

目

序

発刊によせて

緒言

仙台城の歴史

伊東信雄

一 仙台城の創設 1

二 二の丸の造営 7

三 その後の変遷 17

仙台城の建築

佐藤巧

序 23

一大手門 24

二 本丸の建築 26

三 二の丸の建築 47

結び 84

仙台城の美術

佐藤明政
龟田

総説

本丸御殿の大広間障壁画

二の丸「松の間」襖絵

仙台城の年中行事

107

仙台城の地形・地質

102

一とくに兵用地図・石垣・刻印・湧水を中心として

97

一 総説

二 地形的項

89

三 土本地質学的項

123

仙台城一帯の鳥相

136

加藤陸奥雄

御裏林の植物

127

木村有香

167

仙台城年表

215

次

図版目次

第1図	奥州仙台城絵図	239
第2図	仙台御城下絵図	240
第3図	仙台城下絵図	240
第4図	鳳凰図屏風	241
第5図	二之丸松之間障屏画	241
第6図	北東からみた本丸跡	241
第7図	南からみた本丸跡	243
第8図	奥州仙台城並城下絵図	243
第9図	陸奥国仙台城普請窓	244
第10図	明治初年の仙台城二之丸	244
第11図	現在の大橋から二之丸跡を望む	245
第12図	大手門正面図	246
第13図	大手門背面図	246
第14図	大手門背面図	247
第15図	大手門正面詳細	247
第16図	大手門扉詳細	248

第17図	大手門隅櫓北面	249
第18図	大手門隅櫓南面	249
第19図	大手門遠影	250
第20図	大手門正面図	251
第21図	大手門側面図	252
第22図	大手門一階平面図	253
第23図	大手門二階平而図	254
第24図	大手門断面図I	255
第25図	大手門断面図II	255
第26図	大手門隅櫓平面図	257
第27図	大手門隅櫓南面図	258
第28図	大手門隅櫓東面図	259
第29図	大手門隅櫓北面図	260
第30図	大手門隅櫓西面図	261
第31図	大手門隅櫓断面図	262
第32図	本丸詰ノ門前面	263

第33図	本丸詰ノ門東方城壁屈折部	264																
第34図	本丸西脇櫓跡	265																
第35図	本丸東脇櫓跡	265																
第36図	本丸西側石垣	266																
第37図	本丸西ノ門脇石垣	266																
第38図	本丸堀門跡	267																
第39図	本丸切通門跡	267																
第40図	本丸車寄門跡幾石	268																
第41図	本丸天守台	268																
第42図	本丸艮櫓跡	269																
第43図	本丸巽櫓跡	269																
第44図	本丸大番土手	269																
第45図	本丸城番所入石階	270																
第46図	本丸御清水	270																
第47図	本丸水溜め	271																
第48図	二之丸大手門北側城壁	272																
第49図	二之丸大手門北側城壁東面漆	273																
第50図	二之丸寅ノ門跡	273																
第51図	二之丸東側土居	273																
273	273	272	272	271	271	270	270	269	269	268	268	267	267	266	266	265	265	264

第52図	二之丸残月亭跡	274																
第53図	二之丸蒙古の碑	274																
第54図	二之丸中奥杉並木	274																
第55図	二之丸貢橋跡から東方渓谷を見る	275																
第56図	三之丸巽門跡	275																
第57図	三之丸ノ門跡	276																
第58図	三之丸五色沼	276																
第59図	三之丸長沼より本丸をみる	277																
第60図	三之丸清水門脇城壁	278																
第61図	三之丸清水門清水涌口	278																
第62図	竹園屏風一隻	278																
第63図	扇面二曲屏風一隻	279																
第64図	扇面六曲屏風	279																
第65図	扇面六曲屏風	279																
第66図	本丸玄関裏殿	280																
第67図	本丸	281																
第68図	本丸所用透彫竹雀文	281																
第69図	本丸大広間花狹間	282																
第70図	本丸菊花彫	282																
283	282	282	281	281	280	280	279	279	278	278	278	277	277	276	276	275	275	274

第71図	本丸釘かくし	283
第72図	六葉飾り	283
第73図	二之丸万善堂扁額	284
第74図	二之丸圓綠殿扁額	284
第75図	大手門釘かくし	284
第76図	二之丸兵具藏造構	284
第77図	二之丸金成造構鬼瓦	285
第78図	シジニウカラ、エナガ	286
第79図	チゴモズ、キクイタダキ	287
第80図	エナガ、ウグイス、トビの巣	288
第81図	林中のキジ	289
第82図	果中のキジ卵	290
第83図	チヨウゲンボウの巣穴	291
第84図	樹上のチヨウゲンボウ二態	292
第85図	御裏林のモミ	293
第86図	御裏林のヒメノヤガラ	294
第87図	御裏林のユウジンラン	293
第88図	御裏林のヒメノヤガラ	294
第89図	肯山公造制木写之略図（本丸部分図）	294

第90図 肯山公造制木写之略図（二之丸部分図）
 第91図 御二丸御指図
 第92図 享和二年の御家作御絵図写（二之丸）
 第93図 御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図
 第94図 御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図
 第95図 御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図
 （第89図～第94図は袋入）

題字……………仙台市長 島野 武
 見返……………文久三年樂山公上洛の絵図
 表……………樂山公の鷲

裏……………槍持の部分

（仙台市博物館蔵）

緒 言

慶長七年（一六〇二）五月十八日仙台城の建設が完成して以来、今日すでに三百六十五年の月日が流れている。この間に大地震・落雷などの天災にあい、いくたびかその姿をかえた。とりわけ明治十五年（一八八二）九月七日の二の丸の火災で、ほとんどの建物を焼失し、さらに昭和二十年（一九四五）七月十日の空襲で仙台城建築物の最後の生き残りであった大手門・隅櫓が全焼するなど災害があつた。現在は苦むした城壁石組みと、戦後再建された隅櫓の存在から、わずかに往時の備容をしのぶにすぎない。

一方地域開発がすすむにつれて、仙台市周辺に道路・建物の建設が計画され、災害から免がれた現在のすがたさえも危うくなろうとしている。

このような関係から、仙台城とその周辺の現状の総合調査を行なつて、文化財に指定することが早急に心要となり、かつまたこれらの資料をとりまとめて、後世に伝えるためにも、ここに出版の運びとなつたわけである。

仙台城に関する記録は少なくないが、今回のように歴史・建築・美術・年中行事だけでなく、仙台城を背景とした地形・地質・動物・御裏林の植物など、あらゆる角度から調査・収録したのは初めての試みである。

今回の調査出版が計画・決定されて以来、調査に従事した各委員は資料のとりまとめに努力をしていたのだが、空襲による被害でかなりの資料が焼失、散逸したことがあって、意をつくしえない点も少くないが、残された問題点は今後にゆずることとし、とりあえず出版にふみきつた次第である。

終りに少なからぬ出版費を計上された仙台市および仙台市教育委員会に対し心からの謝意を表する次第である。

昭和四十二年三月三十一日

仙台市文化財保護委員会

委員長 奥 津 春 生

仙 台 城 の 歷 史

伊

東

信

雄

仙台城の歴史

一 仙台城の創設

仙台城は初代の仙台藩主伊達政宗によつていまから三百六十六年前に築かれたものである。政宗はいまの米沢、伊達、信夫、二本松、会津など東北南部に広い領地をもつた大名であったが、豊臣秀吉の小田原攻めに参陣することがおくれたため、天正十八年（一五九〇）旧領を没収され、その代りに桃山、牡鹿、登米、磐井、本吉、氣仙、胆沢、賀美、玉造、志田、遠田、柴田、伊具、亘理、名取、宮城、黒川、江刺、宇多の諸郡で五十八万石の土地を与えられたので、居城を米沢から玉造郡岩出山へ移した。政宗が新しい居城の地として岩出山を選んだのは徳川家康のすすめにしたがつたものといわれている。岩出山城は大崎一揆平定後、家康の都張りした山城で、軍事的要害であり、大崎氏の旧領を征圧するには都合のよいところであったが、広い領地を占有した政宗にとっては、その位置が領土の西北に偏在しているので、領内の支配には不便が多かつた。その上この頃になると秀吉による全国統一がおこなわれた結果、上方との交通が頻繁になつて來たので、領土の西北に偏つており、しかも奥羽街道からはずれたところにある岩出山は領主の居城の地として適當なところではなくなつていた。その不便は慶長五年（一六〇〇）の上杉攻めの際に、痛切に感ぜられた。

関ヶ原の役の際、政宗は徳川方に味方して、東北にあつて会津の上杉景勝を背後から牽制していたのであつたが、

この際政宗は上方から帰国すると、自分の本城のある岩出山には帰らず、名取郡北目（現在の仙台市北目）に陣所をおいて、ここを根拠とした。戦後の論功行賞において政宗は刈田郡を与えられてその領土がさらに拡大したので、岩出山はますます北に偏するようになり、どうしても領内の南方に便利のよい土地を見付けてここに居城を移す必要がおこつて來た。そこで家臣の山岡志摩を上方におった家康の許に派遣して仙台城普請の許可をとり、慶長五年の暮も押しせまつた十二月二十四日政宗自ら城普請の起張り始めをおこなつた。⁽¹⁾

政宗が新しい居城をつくるに當つて、青葉山の地を選んだことについて興味ある物語りがつたえられている。それは石巻の日和山、仙台の青葉山、榴ヶ岡を候補にあげ、幕府に伺いをたてた結果、青葉山になつたとか⁽²⁾、政宗としては榴ヶ岡をもつとも希望したのであるが、一番に望むところは許可になるまいと青葉山を第一候補として願つたところ、願いの通り許可になつてしまつたとあるが、おそらくこれは作り話であろう。政宗が仙台地方に居を定める意図は早くから見られたのである。⁽³⁾

政宗が山岡志摩をもつて家康に願い出たのは「貞山公治家記録」に「宮城郡国分ノ内千代城ヲ再興セラレ、公御居城ニ成シ玉ヒタキ旨、本多佐渡守殿正信ヲ以テ大神君へ仰上ケラル」とあるように千代城の再興であった。すると政宗の仙台城設置以前に千代城なるものが存在していたことになる。しかし「仙台城の子」「本荒萩」などの仙台古地誌によつて伝えられている絵図、縦体あるいは用明天皇の時代に千代城がきずかれたという説の荒唐無稽であるのは言うまでもない。鎌倉時代のはじめ、文治年間に島津氏が居住していたといつて説もまた信するに足らない。ただ、もと國分氏が居住したといつては國分氏とこの地方との關係から見てあり得ぬことではない。國分氏が小泉に移つた後は廢城となつて、本丸のところにはいま愛宕山にある虚空蔵堂があり、二の丸前にはいま新寺小路にある龍川寺があつたと伝えている。そうすると鬼柳文書にある承応二年二月の和賀義光や野田盛綱の軍忠状に宮城郡虚空蔵堂とあるのは千代城のことであるかも知れぬ。千代城という名称はここに千体仏が祀られていたからであるといわれ、現に

愛宕山の虚空蔵堂にはいまも千体仏がある。この千代城を仙臺城と改めたのは政宗であつて仙臺という文字の初見は今井宗薰に宛てた慶長六年四月十八日付の政宗の書状である。^{田中}

仙台城の地は西・南・北の三面は人馬の通行困難な山林続きで、南には深さ四五尋に達する龍の口の深谷があり、北にも沢があつて後顧の憂を断つてある。ただ一方打開けて大軍の押寄せるおそれのある東面には大四所の断崖があり、さらにその前に広瀬川が流れていて、天然の堀をなして、火砲や航空機の発達しなかつた当時にあってはまことに守るにやすく、攻めるに難き天險の地であった。

しかし近世大名の居城の地は単に軍事的な見地からばかりでなく、政治的、経済的な見地からも選ばなければならなかつた。仙台城も青葉山が天嶮であることによつてのみ、政宗の居城として選ばれたものではない。やや南によつてはいるが、領地のはば中央に當るその位置は領内統治の中枢地として當を得たものであつたし、奥羽街道に接して交通の便がよく、かつ広い仙台平野を前に控えたその地形は大都市発展の可能性を具備し、経済の中心地たるにも適わしく、正に六十二万石の領主の居城の地として十分な条件を備えていた。



第1圖 真珠内臓・原次右衛門・真綱十介であつた。

九日まだ本丸の壁さえつかないうちであつたが、政宗は仙台城へ移つた。しかしそまだ完成しないなかつたので工事はなおも続けられ、領内の百姓、町人までが城普請の人足として動員され、建築資材も領内各方面に求められた。十二月には仙台城と城下街を結ぶ仙台橋（大橋）が

広瀬川に架けられ、七年五月十八日には一応の完成を見た。政宗は翌八年八月江戸から帰つて仙台城に入つた。^{脚注}

仙台城が比較的短期のうちに出来上つたのは山城であつて天然の地形を利用したので、人工的に施工する部分が少なかつたことによるものであつた。近世の城では城をめぐつて全面的に設けられる石垣や堀も、仙台城では一部分にしかつくられなかつた。すなわち南側には深さ二〇〜二五間（三七〜四六尺）巾三八〜四五間（六九〜八二尺）に達する龍ノ口の深谷があつて「人馬叶わざる」ところであり、東側は広瀬川に臨んだ三五間（六四尺）の断崖で人のよじのぼることの出来ない地形であるからこの方面には格別な防禦施設を必要としなかつた。ただ峯続きの西側と比較的傾斜のゆるい北側にだけ人工的な防禦施設をする必要があつた。龍ノ口沢と深沢の間の尾根には深さ八間（一四・五尺）巾二大間（四七尺）長さ三四間（六二尺）の堀切りを設けて西方からの侵入にそなえた。その奥は「お裏林」といわれる原始林で（現在の東北大學植物園）樹木がウツラウと茂つていて「馬足叶わざる」ところであったから、この方面から大軍の押寄せてくる危険性はまずなかつた。したがつて東・西・南の三面は土塁や柵をめぐらせるだけで事足りた。これに反して北側は沢まで少し距離があり、且傾斜がゆるやかなのでこの方面的防備が大切であつた。ここに石垣がきずかれ、脇の門とその左右に脇櫓が設けられた。この土塁・柵・石垣で閉まれた山頂の東西百三十五間（二四五尺）、南北百四十七間（二六七尺）の平坦な区域が本丸を構成した。

詰の門から北に向つて屈曲した坂路を下ること四町五十間（五二七尺）で大手門に出た。

本丸には詰の門左右に脇櫓、東北隅に長櫓、東南隅の巽櫓など三重の櫓、西方西の門の二重櫓がそびえていたが、天守閣は設けられなかつた。本丸自体が山頂で見晴しがよいので、さらに高い建物を必要としなかつたためである。公館である大広間は慶長十五年、本丸の北部に落成し、前面には能舞台が設けられた。「縱十七間半、横十三間半」の広さを有し、「北へ三間に二間半、南へ七間半に六間」の曲屋が附属する桃山式書院造りの大広間は藩の大工棟梁梅村日向が紀州に上つて雇い來つた天下無双の匠人刑部左衛門国次によつてつくられた。作事奉行は渡辺近内、

油井善助であった。大広間と前後して御座間、鷺の間、焼火之間、御書院、博多間などを含む数棟の私館が、その南側に落成、東の断崖の端には崖作（懸作）と呼ばれる眺望亭が置かれ、この外に奥向の建物、小者の棟、火薬倉、兵具倉、厩などが造られ、仙臺城の構築の業はここに成就した。

翌慶長十六年十月、この完成後間もない仙台城を訪れたイスパニアの使節セバスチヤン・ビスカイノは、その「金銀島探險報告」に「城は彼國（日本）の最も勝れ、又最も堅固なるものにして、水深き川に囲まれ、断崖自身艮を越えたる巖山に築かれ、入口は唯一つにして、大いさ江戸と同じくして、家屋の構造は之に勝りたる町を見下し、又一レグワを距てて数レグワの海岸を望むべし」と仙台城の状況を書留めている。

註

- 1 貞山公治家記録慶長五年十一月十三日条「（前略）最前山岡志摩ヲ上方へ差登サルノ所、宮城郡四分ノ内千代城ヲ再興セラレ、公御居城ニ成シ給ヒタキ旨、本多佐藤守豊正守ヲ以テ大神君へ仰上ラル也ニ、諸請セラルベキ旨今度志摩一向ノ時移下サル。」
- 2 貞山公治家記録慶長五年十二月二十四日條「廿四日甲午辰時、公子代城へ御出、御善請御御願御歎メアリ、文字ヲ仙臺ト改ラル、當時此城ノ備ニ千躰ナアリ、因テ千躰ト號ス、其後文字ヲ千代ト改ム、此城元ハ國分ノ前主田分能登守駿盛氏先祖ヨリ居住セラルト云云、○晚御善請初ノ御祝御願御五番アリ、高砂、村田、野宮、桑老、羅々ナリ」
- 3 東奥老士夜話「仙台御城御取立之頃、御領内中御城地被成御吟味候處、社石巻之内日和山、宮城野瀬ケ門、御当地三ヶ所に相充り、御同被成御へば、御当地に相充候由諸人中傳承」
- 4 仙台名所圖書「政宗公御領之城地、羅瀬門、野手口、青葉山、此城地つじケ同一番なりけるに羅の所は被下されまじと青葉城を一番に御園、則ちせ番を下されけるとなり」
- 5 小林清治氏は「天正十九年九月より改々御家臣衆未だより岩出山へ引移候由、然共當分ハ名取國分之内所々ニ引越難在候山」という佐治家記の記述によつて該示が岩出山移転當時から仙台地方に居住しようという意図をもつていたことを推測している（仙台市史143頁）
- 6 註2
- 7 仙台城の子「天正中國分第五郎盛重公住す、其成宮城郡小原に要害を築き取移し其跡占城となる。」
- 8 仙台城の子「昔仙台城に隣空蔵堂ありしが、政宗公右の城御取立の時御本丸より今の愛宕山に移したまる。又御二の丸中の御門邊に愛宕の方への街道あり。又大下馬邊は八ツ塚御院の旧寺場にて大下馬の松は御院の裏印の松といへり。」
- 9 鬼柳文書

右義光去正月十六日任「御教諭旨」、御領被「相様一間、属ニ役手一筋中職參、岩切城海子太田口合ニ舊田」、同「正月十二日吉ニ大松」、麻葛貢ニ上

- 城内へ切入致二合戰、忠節丁、次同十四日古城郡近空襲射、居山上野一郎殿守但馬守三河守吉成四郎兵衛前源兼間、彼城難向致合戰草
之氣、上野一郎殿自「吾」、水所生御但馬守守三河守吉成四郎兵衛前源兼間、彼城難向致合戰草
註2 桁定元年二月
11 今井宗家別伊達改易書状（仙台市中資料篇二二六）「天十四日此地仙塗へ相移申候。誠練軍之跡木丸壁へつけ不申候林二株へ共、無理にうつし
中候。」
12 政宗治家記載引度記慶長六年正月條
13 一東山記九
14 上一日御城之舊諸初、物奉行安藤孫兵衛肥前、川島備前、金森内様後毛、厚次右衛門、真柳十介
註11 伊達改宗給木渡方里印状（仙台市中資料篇二二七）
仙塗之御苦請ニ付而、人足人數合七千百萬拾八人也此米五拾三石四斗六升也、但一日ニつめて老人ニ付七合五升也、仍加被
慶長七年三月四日
（政宗印）
但右之人數狂裏方より
切手を取可相渡者也
15 大町三四五丁目五人組頂古人通印願狀写（仙台市中資料六〇七）
慶長十年之頃右和泉義茂院石見守御指揮にて老武丁口月行事事被
仰付、三四五丁目右五郎左衛門支配仕、御本丸御石垣御苦請ニ付支配之者共
進御出、御口先に而相勸申候
義山公治家記錄承永十七年八月九日候「慶長ノ始、貞山公仙塗城經營ノ時、天神林ニ於テ杉坂ノ大木百本餘伐取ラン。其報費として慶長十六年ニ
廿九日（小山原天神社策）六百石地ヲ寄附シ玉フト云フ。」
仙塗城宝銘（寶塗松恩会所蔵）
仙塗城
仙塗下 河水子年
民安（義）泰
執事善天
慶長六年十月
仙塗城
仙塗城
16 17
18 藩政
内七川島田副守率遣
記録抜慶長八年八月策（伊達政宗縣傳資料所載）
一 同年八月從、台使院様表示露國の開破被下、江戸より罷下候。去年仙塗之城者諸出来係故、直ニ移徒仕候。御暦之日知不申候。
（徳川秀忠）
見了 芳印

二二の丸の造営

政宗によつてつくられた最初の仙台城はビスカイノをして日本において「最も堅固なるものの一つ」といわしめたのであつたが、天災には抗し難く、元和二年（一六一六）七月二十九日の大地震で城壁櫓橋がことごとく破壊した。⁽¹⁾しかしそれはまもなく元通り復活したものと思われる。

元和元年の大坂夏の陣以後、戦争はなくなつて泰平の世となつてからと、城のもつ軍事的な意義は薄らぎ、居館としての意義が濃くなつてくる。高さ三十五間（六四五）、大手門から四町五十間（五二七）の急坂を上下して通わねばならぬ山頂に居館があることは戦時ならざ知らず、平时には不便なことであつた。そこで青葉山の麓に居館としての二の丸の造営が計画された。もつとも「拾穂集」は二の丸普請の理由を「寛永十四年六月二十日ヨリ廿六日迄大雷雨ニテ御本丸石垣大崩ニ付、山坂通り協ハズ、之ニ依リテ忠宗公二ノ丸願被相達」としているが、根本的な原因は中世的な山城では不便になつて来たことにあろう。

寛永十五年七月十六日に「仙台城山下ニ屋敷櫓作事有之由繪図之通得上意候處普請可申付旨被仰出候」という老中奉書が下つて二の丸造営が許可となつた。⁽²⁾工事は同年九月四日からはじめられた。定御作事奉行は横田權之助、油井善助、本メは片寄理右衛門、黒沢善左衛門で、奉行中、奥山大学が惣奉行として監督に当り、鷹田駿河、和田因幡がこれをたすけた。

二の丸の地は東西百七十二間（三三三）、南北百十一間（二〇一）で、本丸よりも廿七間（四九）低い。こゝにはすでに家屋敷が存在した。「東奥老上夜話」には二の丸の地はもと伊達三河守（政宗の四男宗泰）の屋敷であつた。

つて、いま（元禄頃）の大広間は三河守邸の広間であった由が二の丸造営當時御作事方小役人であつた堀江伝七なる者の話として傳えている。また二の丸造営に当つて若林城の建物を移転して建てたということが伝えられている。当時の記録を集録した「忠宗君治家記録引證記」の二の丸造営に関する條には若林御家機方や吉材木受取渡方という役人がいたことが記されているから、若林城の建物を取壊し、それを二の丸の建築に使用したことは事実であろう。

寛永十五年十月十四日に二の丸地鎮祭が行なわれ、十二月十四日までに御焼火之間・虎の間・御納戸・御茶屋部屋・御鏡間・御上大所・御風呂屋・下大所・御小姓之間・御用之間・御肴部屋・御鷹部屋・御算用部屋などの棟上げが済んだ。翌寛永十六年一月二十七日には御座之間地鎮の祈禱が龍宝寺の僧侶によつて行なわれ、それから一月を経た三月二十八日に御座之間・御寢所・御奥方御寝所などの棟上げがあつた。御蔵・大手御門・大書院・御小姓之間・御舞台・御歩之間などは、それぞれ五月二十六日から十二月二十日までの間に棟上げを済ませてゐる。⁽⁵⁾

二の丸造営直後の仙台城の状態は齋藤報恩会所蔵の「奥州仙台城絵図」（國版1）に見ることが出来る。これは正保元年（一六四四）十二月廿五日の幕府の命令によつて正保三年に仙台藩でつくられ、幕府に提出されたものである。現存仙台城絵図の中で最古のもので、二の丸造営五六年後の仙台城の様子がよくわかる。ことに本丸諸門左右の脇橋、東北隅の良櫓、東南隅の賀櫓などは正保三年四月二十六日の大地震によつて崩壊してしまい、その後復興することがなかつたので、この絵図によつてその姿を知り得るのみである。

いずれも瓦葺き入母屋造り三階の櫓で、屋根は美しい勾配をもつてゐる。この他西の門にも重層の脇橋が見られる。本丸周囲の石垣や土手の上には矢狭間、鉄砲狭間を有する白壁の塀がめぐらされている。

おそらく仙台城のもつとも完備した時の姿であろう。ただし慶長十四年にはもうあつたはずの御懸作りが見えないのは不思議である。元和二年七月の大地震で最初の御懸作りは倒壊して、まだ復旧していなかつたものもある。昭和四年版の「仙台市史」には安倍彦右衛門という人の書いた「仙臺御城覺書」というものがせられてゐる。こ

の覺書には卷末に享保八年卯八月廿八日の日付があるので、昭和二十八年刊の「仙台市史」資料篇1では享保八年のところにおさめられているが、その内容からいって正保の頃のもので、おそらく正保の「仙台城縦図」の中に書込まれた説明を写し取つたものと思われる。非常に詳しいもので、当時の仙台城を知る上のよい資料があるので、ここに転載して置く。

仙臺御城覺書

山城無「天守」、本丸の西南方に天守臺あり。

東は海、本丸より寅卯（東）の方海也。一里或二里平地田畠。

南は山、本丸より辰巳午（東東南から南の間）の方城より続く。二里三里小山其より大山。

西は山、本丸より未申酉（南南西から西の間）の方城より続く。二里三里小山夫より大山。

北は山。本丸より戌亥子丑（西北北と北北東の間）の方、下二三町は侍屋敷の分平地。夫より五六里迄小山続き。

本丸、東西百卅五間、南北百四十七間、町屋の地形より三十二間半高し。

井の数三处、一つ指渡三尺二寸、深さ二間半、水溜二間、一つ指渡三尺、深さ五間、一つ清水、指渡一間、深さ三尺、本丸より五間低し。

本丸より大手門まで四百五十間。

本丸門より下馬まで坂道の廣さ十二間。

下馬より大手門まで道廣さ十五間。

子の方本丸門東脇三階櫓、良の方角三階櫓まで、辨長さ卅一間半。

石垣高さ、子の方櫓下にて五間五尺、良の方櫓下にて九間。

一 良の角三階櫓より巽(だなん)（東南）の角三階櫓まで。堀の長さ六十四間打廻し。

一 寄貫長さ五十間打廻し。

一 岩岸高さ、

一 良の角櫓の下まで十九間一尺、人馬不レ叶。

一 卯（東）の方にて三十五間、人馬不レ叶。

一 巽方三階櫓より午（南）の方、埋門まで。

一 堀長八十六間打廻し。

一 上手高十二間。

一 埋門上手下より沢底まで四十八間、人馬不レ叶。

一 沢幅三十八間、深さ二十間。

一 峰（対岸の峰）より沢底まで百十三間。

一 峰より本丸まで指渡三町十一間、本丸より七間四尺高し。

一 午の方埋門より同方切通門まで、

一 堀長八十七間打廻し。

一 士手高七間。

一 切通門より沢底まで五十二間、人馬不レ叶。

一 沢幅四十二間、深さ廿五間。

一 樹より沢底まで百三十八間。

一 塙より本丸まで指渡三町五十間、此塙本丸より十一間高し。

一 午の方切通門より酉の方二階門まで。

一 堀長百八間打廻し。

一 土手高五間。

一 押角堀より沢底まで四十六間、人馬不レ叶。

一 沢幅舟間、深さ廿五間。

一 墓より水底まで百十六間。

一 墓より本丸まで指渡三町十二間。

一 塙より十六間四尺高し。

一 中（西南）の方、堀切幅廿六間、深さ八間、長舟四間、馬足不レ叶。

一 西（西）方二階門より子の方西脇三階櫓まで長七十一間半。

一 石垣二階門高さ二間半、長十八間打廻し、長屋下高さ四間半、櫓下高さ三間半。

一 西方長屋石垣下より沢底まで十間半。

一 同方櫓より沢まで十三間四尺。

一 同門より櫓指渡一町二間。

一 此峰本丸より三間高し。馬足不レ叶。

一 木丸門見付堀長大十七間打廻し。右土手の高さ東の端にて五間、西端にて廿一間。

一 本丸と藏屋敷の間仕切、本丸より大手門まで道の東脇堀。

一 本丸艮の角櫓下より沢門まで堀長さ百十七間打廻し。土手の高さ十四間、長五十間。

- 一 沢門より中門（寅門）まで堀長百六間打廻、土手高さ八間。
- 一 中門より大手門南脇二階櫓まで堀長百間打廻、土手高十間。
- 一 同道西脇堀、本丸見付堀より中門まで長百十間打廻、中門西脇石垣高さ二間。
- 一 沢門より蔵屋敷脇清水門二階門まで道下坂百十間、道廣十二間より七間まで。土手高さ八間、長舟四間、清水井、長三間、横二尺、深さ二尺。
- 一 蔵屋敷、東西八十間、南北六十五間、本丸より舟二間低し。
- 南の方清水門より東留りまで堀長さ五十間、西堀下土手高さ五間。
- 一 蔵屋敷の南脇、清水二階門、臺石垣高さ三間、長さ二十七間打廻し。
- 一 同門より巽の門まで堀長四十間打廻し、堀長廿間、口八間、岸高五尺。
- 一 東方堀、巽の二階門脇より子の方牛形門長さ百四十間、堀口十五間、深さ二間半。
- 一 岸高、西岸、巽の門脇にて五間、子の門にて七間半、東岸二間。
- 一 北の堀、長さ五十七間、口十七間、深さ三間。
- 一 岸高南舟五間、西にて十五間、東北にて二間二尺。
- 二の丸
- 東西百七十二間、南北百十一間、本丸より廿七間低し。
- 一 井の數、五ヶ處、二つ指渡三尺五寸。深五間、水溜一間半、三つ指渡四尺、深四間半、水溜二間。
- 一 西の方堀より同方山の峯まで一町四十六間。此峯二の丸より地形廿一間半高し。
- 一 南の方、地形より沢底まで岸高さ三間。

同方山嶺より沢底まで二十三間。

同嶺より二の丸まで指渡一町廿二間、此嶺二之丸地形廿二間高し。

同沢末の溜池、二の丸より巽の方

東西五十三間、南北七十六間、深さ二間三尺、水落堀幅六間、深さ二間半。

大手門の西脇石垣土手南脇櫓下石垣、高一間、長十六間打廻し、北脇堀下石垣、高五間、長廿九間打廻し。

同西堀外より北の方蔵屋敷門まで堀下土手高さ六間三尺、長六十間。

石垣土手の上、共に堀長さ九十五間打廻し。

表門両脇の堀下石垣南溜池より北裏門臨高三尺、長百二十三間打廻し。

表門より大手門まで一町卅間。

裏門より乾（西北）の角まで二之丸と屋敷の間仕切堀長百七間打廻し。

裏門より藏屋敷門まで堀長五十間。

西屋敷、東西百二間、南北六十間、地形二之丸と同じ。

井之数三ヶ所の内、二つ指渡四尺、深四間、水溜一間、一つ指渡三尺五寸、深五間、水溜一間半。

西の方山岸より堀際まで二町卅間、山嶺西屋敷地形廿四間高し。

北の方堀下同屋敷前小路、土橋より上の溜池、東西卅五間、南北廿六間、深一間。

同溜池の水落の沢、幅十八間、深五間半。

同沢末大手門前小路土橋の上。

溜池東西百十間、南北廿間、深四間。

同土橋下の沢幅八間、深さ四間半。

仙台城の歴史

註

1 記録抜印（仙台市史資料館二五四）

・四月廿八日巳下割政宗至元大通鑑、店舗石壁等に損仕候

2 仙臺市史（昭和四年版）六四頁

幕府老中桑古（仙台市博物館所蔵）

仙臺城下ニ被敷屋敷作事有之度山駿國之通得

上志候免其請可申付旨被御出候、將又令弟兵部少輔へ竹田法印娘妹近之傳達 上開廢道可申合之

御用ニ准 息々難可

貞永十五年七月十六日

松平伊豆守

信綱花押

阿部豊後守

忠秋花押

酒井謙岐守

忠勝花押

土井大炊頭

利國花押

松平鶴間守

4 茂庭家記解良元石六見水十六年候（仙台市史資料館二五四）

此春若林御城ノ御足形ヲ由是ニ九へ暮シテ御作本アリ

5 忠宗若治家記解引註記（仙台市史資料館二五四）

一奉書。

若々在々ニ應在候御足輕も右之通可被申付候 以下

今度、第二丸地盤の仕 燒山櫓の助為相上被申候、委被成御質、大形御座甚く被成候、然者御地形之手御墨御御免無所へ付札御座候間、櫓の助口上可被申候、依舊御人足有之間御候間、乍太弱御足輕來官組舟人に付三十日死の頃ニ被為御深間、其段奉行／＼可被申候、定而色々御用御重候而引方も可有之間御、當年中ニ一報より三十日之間ニ御出候御者不苦深間、其段可被申付候、毛角宿ニ而認仕候得者、罷出候候も逐々可申候間、一トニ兩度之認仕候義、御召請場ニ小屋を為候奉行申付兩度之認仕候、空櫓御田代之助口上可被申候、恐怪體育

八月十八日

（古内裏御）

伊賀

（古今重慶）

主

臣

(竟成)
中島監物殿
(良輔)

茂能商助殿
(朝慶)

津田近江殿
(信忠)

夷山大學殿

右八百世田太田所持、御記錄へ字載之

第一九御書語之事大内吉七郎方より共出之字

御十九丸羽音請取立之由ニ付寛永十五年七月十六日御奉古相出義由及承候事

同上五年八月製取付、同十六年六月廿五日ニ御便移之由及承候

朱田中令(?)御門寺ハ御記錄へ不相載之品ハ總因ハ難之助侍參之由系書見に因面也

御二丸監同鶴成者ニ江口へ為紀伊守由、御防駿より横川謙之助、油井善助方へ同十五年七月廿三日ニ被御渡、田中金右衛門持參坐登候、免足口

聚相如不中候事

一 節作半奉行ハ定御作半奉行横田源之助、油井善助

一本メハ片寄理右衛門、黒沢喜左衛門ニ御便候

一 取付中安御家治同十五年十月十三日より地形仕、段々相立申候

窮焼火之間、虎之間、御納口、御茶道御門、御鏡之間、御上大所、御馬呂屋、大太所、御小川之間、御用之間、御香源殿、御座部屋、御貢用部屋

右之御家同十二月十四日迄ニ被上宿請申候

小役人

松木喜平、太倉六兵衛、櫻本次兵衛、遠藤長次輔、小沢太郎右衛門、安城茂左衛門、小川八左衛門、星野平平、小沢太左衛門、三浦方馬

草野十助、林次郎、久田隼人、橋口平治、土屋七郎兵衛、千葉半四郎、今泉次左衛門、鈴木五郎七、細原勘平、桐ヶ峰太左衛門、守屋七

兵衛、井上吉吉、印分又右衛門、小山伊兵衛、丹野五兵衛、船本正三郎、丹野半平、吉田助兵衛、高橋勘部、國分喜兵衛、本城久右衛門、油

屋左兵衛、水谷茂兵衛、堀江左助、山田源兵衛

若林御家挽方

小役人

齊藤七藏、齊田次左衛門、遠藤七藏、小關早兵衛、遠山源吉、國分又右衛門、桐ヶ峰太左衛門、井上茂作、安積茂左衛門、田手又左衛門、川

仙台城の歴史

右田又左衛門より五人ハ石垣方御用ニも御座候哉、役目不分明御座候

御村木請取渡方、古村木受取渡方四人名等ハ十六年ニ有

十月七日

右之内より段々御記録へ摘要之

御二ノ丸御普請始九月四日と御記録へ相敷候事ハ九月十日鶴田駿河ニ被下采御書ニ有之を以て記録也

一 鶴田駿河ニ被下采御書字
（右）時分諸事可申送候、取扱候事而早々申送候、以上、又申候事は油漆可申付候、去半ハ時分おそく候而風味あしく、すしも其分に因縁候、以上、急度申送候、然者来月其身要元当番ニ候へ共、当年ハ其地ニノ丸御普請候是用所共ニ有之申候間其身は其元ニ留候而、刑部可相上候為中送候

一 二ノ丸御普請ニハ四日より取付候由、一段珍重日出度候、奉行衆之内奥山大学主ニ取分一人申付候、其方、因縁、萬事大學と相談を以て申付候、用之事候者、早以飛脚可承候、委主候可申候、謹言

九月十日

鶴田駿河殿

右鶴田庄兵衛所持

一 古内主膳奉書字
為御意申入候、其方事十月初着御番ニ而被陞上候、左様ニ俟へ者其元万事御用共当年干支ニ被恩召、御國ニ当年ハ指揮候間、江戸エハ夷山刑部、可為相上候間、依様心得可申候山御意候、御二ノ丸之御普請候是当年ハ御事多ニ候間、刑部ハ鬼角若候間、因縁も萬事相談申候、其方よりハ機運も可有之かと被思召候、当年ハ色々御國ニ罷仕、萬事無端様可被申付候、御意候

御二ノ丸御普請ニハ奥山大学被付（付）候間、大学ハ萬事相談被申候、恐々謹言
九月十日

古内主膳
重広

鶴田駿河殿

右鶴田庄兵衛所持、御記録へ写候之

（中略）

一 十月十四日御二ノ丸地祭之事、評定所公事留候之内、十四日御二ノ丸御地祭礼と有之事、尤真山正兵衛記ニも有之事

（中略）

一 仙臺御二ノ丸 御墨形共御地鎮之事

一 大内玄七郎書出

一 寛永十六年二月廿七日ニ御座ノ間御地鎮御室寺被仰付相清申候
同年三月廿八日ニ御座ノ間、御穿所、奥方御室所御拂上御座候

大内甚五郎

御膳 大手御門 大舌院 御小間 門 御舞隊 御歩之間
右御家、同十六年五月廿六日より一月廿日迄ノ内御様上相模中候事

小役人

土谷七郎兵衛

新田市右衛門

万歳口四郎

戸田九郎衛門

河東四郎作

安久津五兵衛

安藤作藏

丹野五兵衛

高山右衛門

安久歲

新田仁右衛門

皆野次兵衛

丹野七郎

高橋七郎

千葉久助

明石慶兵衛

荒治保八郎

高橋勘十郎

宮永久歲

新田仁右衛門

皆野次兵衛

小川八左衛門

國分喜兵衛

千葉半四郎

石田仲三郎

小島八右衛門

小栗次助

一

御村木受取渡方

古材木受取渡方

遠藤源吉

吉傳七郎

遠藤源吉

右之通古御文共穿鑿仕候、右之外皆無御座候、以上

十月七日

右ハ日起假所ニ攝取之

吉内甚七郎

三その後の変遷

寛永の末年にもつとも完備した仙台城は正保三年四月二十六日の大地震によつて大きな損傷をうけた。⁽¹⁾ 仙台藩では早速その修理を幕府に願い出、幕府は翌正保四年五月十九日に至つて修繕を許可している。その際の老中奉書によれば⁽²⁾

仙台城大手西脇櫓下之石垣崩候付而築之事、大手之門東脇之石垣崩候所築之事、西裏門之石垣崩候所築之事、西之方長屋下石垣破損付而築直事、南之土手崩候付而築立事、

右之所々去年四月地震之節就破損修復有之度之由繪圖之通得御意候、以連々如元可有普請候。此外櫓、堀、門等

之義如先規修補尤候。

正保四亥五月十九日

恐々謹言

松平 伊豆守

阿部 対馬守
阿部 豊後守

とある。これに添えられた絵図がないので、詳しく述べはわからないが、大手西脇櫓というものはいまの隅櫓のことであろう。このほか櫓、堀、門などがこわれ、それを前々通りに修繕することも許可されているのであるが、実際には櫓、堀などは元通りには修理されなかつた。宮城県図書館所蔵の一仙台御城下絵図（図版2）は寛文四年に製作されたものと思われるが、この絵図には正保の「奥州仙台城絵図」に見られた本丸詰の門の東西の脇櫓、艮櫓、巽櫓などの三重櫓はすべて見えなくなり、櫓場だけが残つてゐる。また本丸詰門東脇櫓から艮櫓に至る間にあつた矢狭間をもつた内堀の堀もなく、それに代つて橋が設けられた。これらの三重櫓および門はその後修理されることがなかつた。そのほかこれまでくぐり門であつた切通門が屋根のある門と改り、屋根のあつた埋門がくぐり門となつてゐる。また二の丸においても、いままで二の丸と道を距てゝ分離してゐた西屋敷が二の丸の中に取込まれてゐる。

本丸と二の丸との間、中曲輪、沢曲輪のあたりにも変化があつて、溜池の傍には御兵具蔵が建てられてゐるし、沢曲輪の堀にも若干の増築がおこなわれてゐる。

また大手門前の南側に外堀が設けられ、その東端は子の門の馬出しに接続してゐる。

このような仙台城にさらに大きな変化をあえたのは、寛文八年七月二十一日の大地震であった。この時の被害について(13)は九月十二日に幕府へ呈出した報告書がある。

七月廿一日申下刻の地震ニ仙臺城本丸石垣破損

覺

一 大手詰之門右脇石垣西之平ヨリ折廻、東之入角迄七拾四間餘、高さ五間餘ヨリ段々九間迄、並此坪數五百六拾武坪餘崩申候。

一 右同門西脇東角ヨリ西へ折廻し、南迄三拾式間、高三間半、並此坪數百拾壹坪餘石垣ハラミ出、少之地震ニモ破損可仕牀ニ御座候。

一 西裏門左脇南之方石垣拾式間、高四間並此坪數四十八坪崩申候。

一 右同門右脇西の方石垣武拾式間半、高三間四尺、並此坪數八拾武坪餘ハラミ出申候。重而地震候ハバ崩可申牀ニ御座候。

一 墓作り家之北脇惡水落之處石垣三間、高式間、此坪數六坪崩申候。

一 右同所右垣式間半、高八尺餘、此坪數三坪餘ハラミ出申候。

一 中門右脇北の方石垣式間、高式間、此坪數四坪崩申候。

一 右同門北脇石垣折廻八間、高式間、此坪數合拾六坪ハラミ出申候。

一 南門左脇東の方石垣折廻三間、高壹間、此坪數三坪崩申候。

一 右九箇所石垣坪數合八百三拾五坪餘

内六百式拾三坪餘ハ崩申候。

式百拾武坪餘ハラミ出申候。

同年十月四日に幕府に呈出したこの破損箇所の修理許可願では数字が少しづかっていて石垣の修理総面積は八百六拾坪餘となつてゐる。これらの記録では石垣の損害のみが書上げられているが、それは武家諸法度によつて石垣の新築、修繕は幕府に届出て許可を得べきことが規定されているが故、塀、門などの建築物の修繕については届出の義務

がなかつたためであつて、実際には堀なども大きな被害をうけた。その状態は寛文九年から十一年までの間に製作されたと思われる「仙台城下絵図」(図版3)を見ればよくわかる。この図には今までの絵図に見られた本丸周囲の石垣や土手の上にめぐらされていた白壁の堀はなくなり木柵に代っている。また中曲輪の西側の堀もなくなつてある。これらはいずれも寛文八年の地震で崩壊した結果であつて、その後復興されることなく、明治に至つている。

このように仙台城は二の丸設置以後も地震による破損の結果、構造物には変化はあつたが、城の平面形にはほとんど変化はなかつた。それが、天和元年(一六八一)頃に至つて本丸の西北方、切通門の外に腰曲輪の増設がおこなわれ、切通門の内側には西丸が新らに設けられた(図版8)。それに北接して御城番所の置かれたのもこの時であろう。西丸の新設とともにいままで御米蔵と呼ばれていたいまの三の丸は東丸と呼ばれるようになった。

この後幕末まで仙台城の城地には大きな変化はなかつた。その間しばしば城の修繕があつたことは幕府に提出した普請窓やそれを許可した老中奉書によつて明らかであるが、いずれも崩れた石垣や土手の修復であつて根本的改造ではない。しかし建物にはいろいろ変遷があつたようであつて、のこつてゐる絵図にはちがつてゐるものが多い。その中でも大きな変化は文化元年(一八〇四)六月二十四日の二の丸の建物の全焼であつて、これは翌文化二年三月十日から文化六年四月朔日までかかる再建された。このような仙台城内の建築の変遷について本書におさめられている佐藤委員の論文を参照せられたい。

戊辰の役に仙台藩は官軍に抗した故をもつて六十二万石から二十八万石に減封されたが、城は依然として仙台城であった。明治二年に版籍奉還がおこなわれて藩主伊達龟三郎は仙台藩知事に任命された。同年十月二の丸に勅政庁が置かれ、翌三年二月、勅政庁は藩庁と改称された。さらに明治四年七月、廢藩置県が断行され、それにともなつて仙台城は兵部省の管轄に移り、二の丸には東北鎮台が置かれた。藩政時代にも儀式の際にしか使用されなかつた本丸の

建物は、このような状勢下では全く不用のものとなり、明治四・五年の頃、取扱されてしまった。いま方々に遺つてゐる本丸の遺物（図版62～71）はこの際に取はずされたものである。二の丸の建物もまた明治十五年九月七日に火災によつて全焼した。最後までのこつた大手門も昭和二十年七月十日の空襲の際焼失したので、いまは本丸および大手門左右の石垣がわずかに昔のおもかけを伝えてゐるだけである。

註

1 義山公治家記録五正保三年四月號（仙台市史資料館二八〇）

○廿八日申辰、夜仙台より飛脚參着、去ル廿六日ノ大燒殿へ御城石垣數十丈削し、三層ノ亭換三ツ櫓換シ、其外破損許可多ノ由註進アリ。

2 鶴山府志中華書（仙台市史資料館二八一）

3 鶴山公治家記録全書前編五、寛文八年九月十一日號（仙台市史資料館二九六）

4

一 本丸大手門右之方石垣門際より東築留後長八尺大間余之内、長七拾五間余、高五間余より段々九間迄、此坪數五百三拾六坪崩之所、門際長四間高七尺より老間六尺迄此坪數六坪崩落之所、東築留長三間高四間より七間迄、此坪數六坪崩落之所、所云之方石垣北西へ折廻長四拾間間之内門際より東角迄長九間、高七尺より三間半迄、此坪數六坪崩落之所、所云之方石垣南之方石垣西之築留より東長拾八間之内長六間高半間より武間半迄此坪數九坪長拾八間高四間此坪數四拾八坪崩之所并數合五拾七坪之所築留中度事

同所右鷹西之方石垣式拾武間半、高二間四尺此坪數八拾七坪余出中度所築留中度事

一 本丸左側作之家北築留水落之所石垣三間高武間此坪數六坪崩中候、同所右鷹武間半高八尺余此坪數三坪余出中度何モ築留中度事

一 本丸中門右鷹北之方石垣、高高一間此坪數四坪崩中候、同所北鷹石垣折廻八間高二間此坪數十六間出中候、何モ築留中度事

一 本丸南門左鷹東之方石垣折廻三間高間此坪數三坪崩中候、築留中度事存候、委細注跡圖指上中候、被成下御奉書候様奉願

以上

寛文八年十月四日

松平忠子代内

古内志摩

5 仙台城の普請窓としては次のものが二つております、

寛文八年十月四日（註4）

承保六年十一月五日（宮城県図書館蔵）

仙 台 城 の 歴 史

承保二年十月廿八日（「仙台城の建築」所収）

承保五年十一月十八日（鶴岡社蔵）

元文四年七月
（宮城県図書館蔵）

またこれを許可した老中奉書には次の口付のものが伊達家文書にのっている。

正保四年九月十九日

寛文十三年九月十五日

天和元年一月廿一日

元禄七年十一月廿九日

宝永三年十月廿八日

宝永四年九月廿七日

正徳二年六月廿九日

正徳六年二月十一日

享保六年十一月十九日

享保八年四月廿八日

享保十年十月廿八日

享保十三年九月廿八日

仙
台
城
の
建
築

佐

藤

巧

仙台城の建築

序

仙台城に関する建築としては、本丸の諸殿は早く明治初年に取り壊され、二丸の建築もまた明治十五年の火災によつて灰燼に帰し、僅かに大手門^{おほてびら}、角櫓^{すみやぐら}、巽門^{たつみのん}の存在によつて旧時の面影を偲ぶに過ぎなかつたが、これらも不幸にして昭和二十年の戦災によつて失い、從つて現在その遺構は皆無である。

本丸旧建築の家具、装飾品の類で諸家に保存されているものがあると聞くが、未だ調査の機会に恵まれていないので、筆者にはこれに触れる資格がない。

遺構の存在しない現在、勢い文書、古図の検討による他はなく、まことに隔靴搔痒の感なしとしないが止むを得ない。

仙台城および大手門の建築に関してはすでに小倉強氏の研究がある。⁽¹⁾さらに遡つては明治三十二年版の矢野顯藏氏による「仙台藩祖尊王事蹟」中に、また同三十八年佐澤廣畔氏の「仙台青葉城御本丸御殿略図」、「仙台青葉城二丸御家作略図」に、更に大正七年第二師匠版になる「仙台城沿革」に、また降つて昭和五年には清水東四郎氏の「宮城縣史蹟名勝天然記念物調査報告」中に、それぞれ仙台城の本丸、二丸殿舎の図を掲げて説明を加えている。

これら諸書をもとにし、更に新資料を加え、大手門等遺構の実測を行なつて論を進めたのが小倉氏の諸研究である⁽²⁾。筆者もこれら諸先人の業績に教えられるところが少くないので、充分参照して論を進めようと思うが、從来はその用途面や変化については触れるものがむしろ少いので、とくにここに重点をおいて私なりの論述を試みてみたい。

不明の点も多く、誤りも少くないと思うが、諸先学の御教示、御叱正を希うものである。

註

- (1) 小倉強氏「仙台城の建築」昭和五年仙台高等工業学校版、同「松島城跡と仙台城大廣間」仙台郷土研究一卷十一號、同「仙台城大廣間築造圖ニテ」仙台郷土研究十二卷十二号、同「仙台城大廣間築造圖ニ就て」昭和十八年歴史研究第五卷一号、同「仙台の古街及び土木建築」仙台市史3別編1等
 (2) 他に三原良吉氏「仙台城址の再踏査」仙台郷土研究十一卷二号及び「仙台市史本編1の第一章、第二章」、昭和四年版「仙台市史」等がありその建築に就いても触れている。また本丸、二丸の城廻に就いては阿刀田今透氏「仙台城下論國の研究」昭和十一年刊に詳しい考証が行なわれている。

— 大 手 門 —

大手門 横 角

大手門は戦災に遇い、あとかたもないが、実測の結果によれば（図版20～31参照⁽¹⁾）、東面して建ち、大橋側より向つて左に角櫓、右に多聞櫓を連続せしめ、二階建て、軒高約二十七尺、入母屋造り、瓦葺で、大棟の両端に鰐が載つていた。一階の梁間二十二尺三寸、桁行六十五尺、二階の桁行は一階と同じであるが、梁間は二十六尺と、すなわち三尺七寸程一階より前面に張り出し、柱間が一階と二階とでは異なる。二階部は十間に四間で、一間が六尺五寸間となる。規模の雄大さと細部手法にみられる力強さは桃山式の特徴を遺憾なく發揮しているとみられる。

建築造営年代に関しては未だ疑問の余地なしとしないが、本丸大廣間とともに藩創設期の威容を如実に語る貴重な

建築であったと言うべく、しかもその唯一の遺構を失つたことは惜しみても余りありあり、学術上の損失もまた大きいと言わねばならぬ。

その様式、柱間の寸法の点等から、これが桃山時代の建築的特徴をよく伝えるもの、とすることはほゞ誤りなからう。様式的特徴はそのまま建立年代を示すものではないことは言うまでもないが、実は引証記に大手門の寛永十六年⁽²⁾ 為上昇の記事が載つていてことから問題となる。即ち二丸造営に当つて、二丸諸殿舎の個々の名称と共に大手門⁽³⁾ が記されていることから、寛永期の創建、再建、移建を考えるのである。またこの事実を否定して、二丸詔之門の誤記にあらずやとするのである。桃山様式として様式上の一段の古さを認める立場からは、寛永期の創建をそのままにはおそらく承認したいであろうし、従つてその他の諸考が生まれる所以である。技術的には古材を一部補修して使用したらしい点も指摘され、その時期を考慮に入れる時には、更に慶長時移建説も充分なり立つ。即ち移建にあたつての時期を、慶長の本丸造営期とするか、寛永の二丸造営期とするかである。更には二重の移建を考えることさえ可能であろう。

また柱間の大尺五寸は一般に大尺三寸間に比してより古式であると考えられ、慶長の本丸廣間は八尺五寸間であるに対し、寛永の二丸小広間は大尺三寸間に推定されることで、大手門の造営年代もしくは移建年代の慶长期説を傍証することになる。しかし柱間寸法はこの場合あくまで傍証にすぎず、様式の中に含まれるべき性質のもので、建築年代の決め手にはならない。また二丸の小広間及びその他の諸建築の大尺三寸間は今のところ推定の域を出ず、確証はない⁽⁵⁾。合わせて今後の考究に待つところが多いのである。

註

- (1) 前掲「仙台城の建築」所載図を転載、更に一部簡略の要因を添加した。
- (2) 忠宗君治家記録引証記寛永十五年同十六年條
- (3) 未だ充証はない。「仙台市史本編」では大手門の位置、様式の点より慶長時の存在を認め、寛永記事中の大手門を二丸詔之門の誤記ならずやと

する。前掲「仙台城下絵図の研究」の考え方より出たものであろう。

(4) 前掲「仙台城の建築」

今までに二九小廣間の柱間を六尺三寸間なりとする根拠について述べられたものはない。後述の如く、創建期の二九小廣間において、次之間は実長四間四方、三之間（いわゆる小廣間）は実長四間に九間の座敷とするのが正しいようであるが、柱割は前者が三等分、後者が三等分と七等分で、六尺三寸とすれば三分割、七分割ともに割り切れて整合がよい。勿論充分な延焼とはならぬが推測の一つの手がかりとなろうか。

二 本丸の建築

(1)

天正十九年九月政宗は米沢より岩出山に移り、更に慶長六年四月末竣工の仙台城に入つて、以後ここを本拠としたが、当初の城館の内容ははつきりしない。

懸造り
大広間
焼博敷書院
黒鶴院
多聞院
火見院
寄院
間院
御院
書院
黒書院
博院
敷院
大広間
・間
懸造り

⁽²⁾ 慶長十四年、懸造りの座敷でつるべ鉄炮を望見しているのが、治家記録中における、具体的建物名としての初見である。主要建築としては同記録中の慶長十五年竣工の大広間が嚆矢である。慶長八年には普請成就の祝儀を行ない、その後慶長九年、十一年、十四年の元日祝儀を仙台城で行なつてゐるから、本丸における大廣間以外の諸建築も、この頃までには体裁を整えるに至つたものと推測される。治家記録中には慶長年間に懸造り、大廣間、焼火間、博多間、数寄屋勝手、御座間、黒書院、鷺間の名が、元和年間には書院、⁽³⁾ 頃、⁽⁴⁾ 錦間次間などの用例が加わつて見える。大廣間を晴れの中心建物として、その奥にこれらの建物が廊により互に接続して配置されていたものと考えられる。

伊達氏仙台入部以前の、例えば米澤城等の城館の詳しい様子は更に不明であるが、一応検討して参考としたい。

天正年間に諸書に散見する建物名を拾つてみると、米澤城に關しては

てい、たいのや、たかや、大てのにかい、南のかぶきもん

(天正二年⁽⁴⁾)

「御てい」衆、座しき、「御きは」のしゆ、およりどころ、御すきの屋、御たかや、かけづくり(御せんすいの懸

つくり)、北門

(天正十五年一十八年⁽⁵⁾)

等である。更に他の諸城に關しても、天正年間に、御ていざ、御てい、御小座、御鷹屋等の語がみえる。

「てい」はこれを「テイ」と呼んだか、「デイ」と称したか明らかでないが、その用例をみると、輝宗自身が

「かのへさるていにてまち候」

「ていにてたいさんほくの花見候」

と述べ、家臣の日記には

「田村殿御出キ被成候御つかい物御太刀御具足御馬折番おともの衆宗林斎……宮内大夫殿も御ていざへ御まいり候
おのまき物上御申……」⁽⁸⁾

また

「自小手森邊申候者御ていにて小十郎敵衆の様體尋被申候」⁽⁹⁾

と述べ、また輝宗日記正月行事中に

「一日、禮衆座へ參候ていにねまり候ほと者皆々めし出しけ中にてしき三こん」⁽¹⁰⁾

とあつてかなり重要な晴れの座敷もしくは建物を予想せしめる。

また「てい衆」という語も見え「御てい衆鐵炮横尾修理指南被申候」⁽¹¹⁾とある事実を、治家記録編者は「遠侍ノ聖ニ鉄
炮槍古仰付ラル横尾修理指南⁽¹²⁾」としている。即ち、御てい衆=遠侍ノ輩であり、さらには「てい」=遠侍 という
ことにもなりそうであるが、「てい」はさきの例からみてもそのような狭い限定された場所ではないようである。む

しろ館の中心たるべき性格が濃厚に感じられる。

この「てい衆」に対して「御きはのしゆ」という語もみえる。「御年始衆一坐おのおきはのしゆめし出し候」⁽³³⁾を、同じく治家記録は「御禮ノ裝一座畢り近習ノ面々御召出シニ御酒ヲ賜フ」と言い、御きはのしゆニ近習ノ面々、とする。つまり「てい衆」は表向の、「きは衆」は内向、側近の衆の意であるから、従つて「てい」は表の、晴れの場所であるのに対し、「きは」は内の、不斷むきのそれであろう。「てい」は晴れの座敷の、「きは」は城館主人坐臥の附近を指すようである。

後世、藩主御座間附近の、近習の控室、伺候室を「きば」と呼び、時に「寄場」の字を當てているが、あるいはこれと関係があるであろう。

小 座

座しきとして別に「小座」という語があり、天正十六年七月十八日

「石川殿御越候御むかいに田村ちん所迄御出候顯(昭)光様へ御引手物御くそく御きる物御かふと御馬御申候御とともに衆へ御くそく御こし物御まき物くたされ候其後御小坐へ御越し候御とうほうニはかたひら被下候うちまいいたし候」と見える。石川大和守昭光は當時まだ完全に伊達氏の家臣になりきっていない、いわば客人ともみられるものであつて、そうした人との接客、対応の場として小座と称する部屋が用いられたらしい。儀禮的目見などの行なわれる場所とは違った性格を持ち、さきの「てい」とは趣きを異にする。

御よりところ

「御よりところこほせられ候……御新おより所たち申候」の「御よりところ」が寢所、休息所を指することは明らかで、かくて一應表向と内向、晴れと不斷との場所が生活上区別され、建物を異にしていることが理解される。

たいのや

さらにその奥には離れて別の「割、即ち「たいのや」があり、しばしばそこに出かけている。ここは夫人、子女中心のすまいになつていたものと考えられる。

大てのにかい

「大てのにかいへあかり田村より状參候」⁽³⁴⁾とあるから、大手口に櫓も設けられていたことが分る。

池辺に臨んで、清遊のための建物として「懸つくり」^四があり、これは後の仙台城「懸造り」の先例とみられる。

「たかや」のことは天正二年の輝宗日記中にやゝ詳しく述べ、その頃たまたま造り替えがあつて

(天正2・6・20)

たかやたて候

(同 6・21)

たかやのはりあけ候

(同 6・26)

たかやのむねあけのいはひ

(同 6・29)

たかやのきつけ候

(同 7・2)

たかやしふせ候

(同 7・10)

たかやのしやう子たて候

(同 11・16)

たかやのやうつり

(同 12・5)

たかやのれんしはる

(同 12・18)

即ち鷹屋は草葺、かやぶきで、建具にも障子、連子を用い、かなり吟味した建物らしく、単に鷹の飼育のみに用いられるものとは考えられない。

事実、「去ル六月ヨリ御鷹屋造り替ヘノ普請仰付ラレ今日造畢御移徒ノ儀アリ学頭坊參上鎮宅ノ祈念修行セラル此以後時々御鷹屋ニ於テ一家一族ノ輩ナト饗シ玉ヒ御拍子等アリ」と言ふが如く、「晩にたかやへあゆかい殿遠州御参候はやし候」²²、「晩御鷹屋ニ於テ下乗折某桜田右兵衛元親砂金又次郎實常ニ御料理ヲ賜フ」²³とあつて、伊達氏の上位家士たる一家一族衆との饗應の場所となり、また伊達藤五郎、白石右衛門の家士等を召出して酒を賜り、「入夜遠藤若狭參上ス御鷹屋ヘ召サレ上方ノ様体聞カセラレ」²⁴、また太平記を読み、相撲を見る例さえみられ、さらに「御鷹屋ニ而十六まい遊被遊」²⁵れるなど極めて多方面に使用されている。

なお「鹿口ニ於テ名取郡作並野伏新左衛門首三級獻上ス」、「相州小田原ヨリ參ルモノアリ、折節御履へ御出馬御覽ニ就テ御履へ召出サレ小田原筋ノ唱ヒ共委細聞セラル」などに示されるように、履、鹿口は鷹屋より一段と低位の謁見場所となつてゐるが、「御名懸士ノ斐百人許リ御庭ニ於テ御目見アリ」、「御城下ノ町ノ者共御庭ニ於テ御目見アリ」にみられる、組士、町人の庭上目見とは一応区別される。

天正年間は、伊達氏の家土制の確立される時期に当り、「在郷居住ノ誓御札二座アリ……夜桑折播磨中島伊勢ヲ變セラル時ニ成田右兵衛大町民部座席ノ争論ニ就テ遠侍ヨリ退出ス」とあるように、すでに家士の席次にも強い規制があり、これに対する家士の関心も強く、従つて目見や饗應の場所にも差別が行なわれていたものと思われる。

註

- (1) 政宗書状（仙台市史資料館）
- (2) 貞山公治家記録　慶長一四・七・二四
- (3) 「公御城懸幕ノ御座敷へ御出聽御燐炮組ノツルヘ仰付ラレ御覽アリ」
- (4) 政宗若治家記録引説記には
「七月廿四日　惣殿院フルヒカ為打可被成と兼思召御内見公ハ御座作ニ御座候而花壇之東川端より御徒小姓衆ヲ初と面……」
- (5) 大日本古文書　伊達家文書之一　伊達家天正日記
- (6) 政宗若治家記録引説記所収　伊達家天正日記
- (7) 同右
- (8) 伊達輝宗日記　天正一四・一六及び二・四・八
- (9) 天正日記　天正一七・八・三〇　この場合　ていざニ序座とすれば「ティヂ」と呼んだことになる。
それにしてモ「アシ」と「アシ」とはヤシニヨアシスが異なるようであり、つねに　ていざと云ふことには問題もある。
- (10) 天正日記　天正一六・五・二二
- (11) 伊達輝宗日記　伊達輝宗店月行事天正一二・一二
- (12) 天正日記　天正一五・四・一九
- (13) 貞山公治家記録　天正一五・四・一八　天正日記は四月十九日とあるを治家記録は四月十八日とする。
- (14) 天正日記　天正一六・一・一

例えは吉山公治家記録卷四・一

「御座開室等ニ於テ高麗并安逸室密謀田村國書……各嗣子八人挙姓」

天正日記 大森城の記事であろう

天正日記 天正二・五・七・八

輝宗日記 天正二・二・一二及び天正二・一・一・一〇

輝宗日記 天正二・六・一〇

天正日記 天正二・五・四・八

「天氣よし御せんすいの懸つくり罷出候」

性山公治家記録 天正二・一二・九

輝宗日記 天正二・二・八

貞山公治家記録 天正二・六・一・一〇

同 天正二・六・一・一七

同 天正二・六・九・二六

天正日記 天正二・六・一・一八

天正日記 天正二・六・七・一七

天正日記 天正二・五・一・七

貞山公治家記録 天正二・六・五・六

同 天正二・八・四・四

天正二・七・九・二

天正二・七・七・一三

天正二・六・一・一〇

(2)

かくして仙台城の本丸居館が建築されるに至ったのであるが、いま貞山公治家記録によつて慶長十八年から寛永十一年までの本丸の主要な建物もしくは部屋の使用状況を整理してみたのが表1である。この事情をなお少し説明すると御一家御一族衆御出仕大廣間ニ而為会候

慶長十八・八・一

そぞろ御見舞申大廣間ニ而被急会候

大廣間ニ於テ越後少将殿御使者右平次有右衛門而人御目見右平次密柑百五十有右衛門御處ノ決拾三指進上ス

慶長一八・一・七

即ち一家・一族衆の月次の御礼、南蛮人や大名使者との謁見などは大廣間で行なわれている。

年始儀式に關しては、慶長十九年元旦の条に「一門一家一族ノ誓太刀目録献上セラレ年始御礼御目見アリ」とだけあ

表1 仙台城本丸における諸部屋の使い方（内山公吉著記述による）

	御座間	堀火間	書院	黒書院	梅多ノ間	簾ノ間	大廣間	厨	斎宿廊	附武門	簾ノ間	膳所
牛馬御礼	一門御子等 (4)						一 二番座 (4)					
月次御礼							一 二番座 (2)					
茶							三 四番座 (2)					
煙	初加脱糞 (1)	落生ノ禁 (9)	常風ノ煙 (1)	見足取ノ 煙 (3)	東風ノ煙 (1)	家臣ニ茶 (2)	見足取ノ 煙 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ料理 (1)	
茶	落生ノ禁 (1)			東風ノ煙 (1)	子孫元服ノ 院 (1)	家臣ニ茶 (1)	常風ノ煙 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ茶 (1)	家臣ニ料理 (1)	
茶の他	寝敷元治 (1)		山神ノ相談 詩歌ノ会 (1)								つるへ鉢 通御室 (1)	
膳	茶											

※「黄ニテ」を「大広間」とみたのが1例含まれる
※※「堀ノ御座間」を「御座間」とみる
()の数字は例数を示す

つて、その場所は明らかでないが、降って寛永代になると、例えば寛永六年正月一日の項に

御座間ニ於テ伊達治部殿宗實伊達左衛門殿宗實伊達又四郎殿宗元茂庭石見綱元入道了庵原田雅樂宗輔大廣間ニ於テ
一番座石川民部殿宗昭伊達安房殿成実伊達武藏殿剛伊達安藝殿定宗伊達相模殿宗直鉢兵庫宗定……同御召出ノ
翌泉田源三郎元時……

同二番座白川宮内殿義綱伊達清次郎殿重隆……副君ノ御使者宇和島侍従殿ノ御使者ニ御盃ヲ賜フ次ニ御召出ノ翌伊
藤肥前重綱……

と詳しい記述があり、まず御座間において一門衆副子等との間に祝儀、御礼があり、つぎに大廣間で一門・一家・一族・召出等諸上の賀礼を受けているので、慶長年代においても年始の中心儀式はやはり大廣間で行なわれたものである。

慶長十九年元旦の例では、今みたように治家記録に一門の語がみえているのであるが、その基礎となつた引証記には同条を

朝御一家御一族衆御太刀馬代ニ而御禮也

とあり、一門衆の語が見当らない。

またさらに、慶長十八年の八月一日、十一月十五日の例月御礼では治家記録、引証記ともに一門のことがない。

伊達家において一家の上に一門の制を設けたのが何時であるかはつきりしないが、一説にはおそらく政宗の慶長十一年には定つたものとされる。⁽²⁾ とすれば慶長の末年におけるこれら儀式に関して一門の語が特に見えないのは不思議である。

「一家」の中に一門をも含めていたと解釈すべきであるか、あるいは當時一門は別格で、月次御礼にはとくに家臣として参加せざりしもの、もしくは参加したとしても大廣間以外即ち御座間、書院等において行ないしものとすべきで

あらうか。

書院については「朝御書院ニ於テ石川大和守殿ヲ養セラル相伴小野宗碧名村金右衛門ナリ」とあり、また黒書院の語もみえ、「因テ御城へ入セラレ大坂御陣ノ義申来ル旨仰出サレ石川大和守殿昭光ヲ始メトシテ一門一家一族以下ノ輩ヲ召集メラレ黒書院ニ於テ御出陣ノ御相談アリ」と述べ、引証記ではこゝを「大坂御陣之義申來候間被仰出石川大和守殿始何も御登城於黒書院御相手」と記している。

博多間、鷺間については「朝松前竹松殿松前豊膳殿御見廻トシテ御出竹松殿ヨリ御太刀目録并ニ若黄麿二隻虎皮一枚典膳殿ヨリ若黄麿一居進セラル博多間ニ於テ養セラレ御拍子アリ四番過テ御帰リ」、「朝鷺間ニ於テ和久又兵衛入道殿宗是ヲ養セラル相伴横田道彦遠島康庵小野宗碧ナリ」とあり、大廣間とはいすれも違つた使われ方を示す。

石川氏にしても、和久氏にしても、当時すでに伊達氏の班列に入つた家士ではあるが、未だ多分に客分的待遇をうけていた時期であることに注目するとき、ともに接客、饗應中心の部屋としての色彩が強いと言えるので、合わせて天正期の「小座」に近いものを感じさせるであろう。

御座間

御座間は元口の祝儀の場所となつた他に「初卯御祝儀アリ朝御座ノ間ニ於テ御具足解召上ラル」、「朝御膳御座間ニ於テ召上ラル御相伴猪苗代正益遠島康祐小野宗碧……」⁽⁶⁾のようすに藩主の食膳の場ともなり得た。藩主の食膳、料理等は「朝焼火間ニ於テ御膳召ラル御相伴高屋快菴小野宗碧鍋織休意茂庭采女兼綱松本左兵衛宗成ナリ」⁽⁷⁾の如く、むしろ焼火間にその用例が多くみられる。

菊ノ御座間

「菊ノ御座間」の語もみえるが、御座間と同じものでもある。書院、黒書院、博多間、鷺間のなかには同室別名のものもあるいはあつたかと思われるが、用例から推して少くともこれらが御座間、焼火間とは異つたものであることは間違いない。

表を代表する晴れの中心座敷は大廣間で、御座間、焼火間は表においては内むきで、書院、博多間、鷺間がその中

間的性質を示すようである。

おそらく表部分の諸殿舎はこの順序で配置されたであろうことは想像に難くない。さらに、数寄屋、数寄屋勝手、舞臺ノ間等の茶室関係の建物が附属し、別に眺望のよい地に懸造り座敷が設けられたとみられる。

これら諸建築の配置、構成を示すものとして「肯山公造制木寫之図」なる絵図がある（図版89 参照）。表題の言う如く綱村時代に作成されたものと考るが、本丸・二丸を併せて城廓全体が一望のもとに見渡せるように画かれている。後世の綱村代に作成されたこの図が果して創建期の本丸の実態を忠実に再現し得ているものか疑問にも思われるが、現在では本丸諸建築の相互の関係を考える唯一の参考資料である。残念なことは略図の性質上、各建物や部屋の名称の記入はないが、殿舎の平面囲取りが簡略ながら示されているのはせめてもの幸いである。

後述するように、この図の二丸殿舎の部分には、かなりの具体性と真実性とがあることが指摘される点から考えても何らかの根拠がなくては到底画かれ得ぬもので、従つて架空の圖案として一蹴することは適当でない。おそらく本丸の盛時を偲び、願望をも加え、やゝ紛飾して表現した計画図の如きものであろう。やはり創建期殿舎の構成をみる上で資料的価値は少なくないよう思う。

なかでも大廣間と、それに直接附属する一連の建物は、綱村のこの図作成の時点においてなお現存中のことでもあるし、この部に関する限りは敢えて歪曲して表現しなければならぬ理由もなく、本丸の中では最も信用しうる部分とみてよいであろう。

この図によれば、詰ノ門を入り、左に曲折して正面の玄闇に到る。敷地の関係で詰ノ門、玄闇は本丸敷地の西側に設けられ、従つて西方より建物に接近し、順次東方の奥に及ぶ配列となつてゐる。玄闇式台につゝいて、三棟から成る、いわゆる遠侍部分がある。遠侍の北側に大廣間が建ち、その前面に能舞台を配する。大廣間の西側は腰掛、屏によつて外部と隔てられ、御成門、堀地門を経て大廣間車寄、舞台、前庭に導かれる。

大廣間は採光上不利となりながらも、北側、西側に主要な座敷を配する。即ち敢えて北面して建ててあるが、この種建築としては珍らしい現象である。本丸の敷地が、北側、東側に展開、それへの接近が西側から行なわれているためであろう。

虎ノ間の南に台所、虎ノ間の奥に後になつて「祈福所」と呼ばれる部分が付く。更にその奥に連る数棟の名称が判然としないが、さきにみた書院、博多間、鷺間、焼火間、御座間および數寄屋關係の建物がこゝに含まれるものとみられる。最東端に、崖際に施設されているのが懸造り座敷で、遠侍の裏手に厩がある。以上の男子中心の表の建物から長い廊下によつて奥方に連絡する。

奥方部分は本丸敷地の南半を占有する、いわば藩主の私的場所であり、奥の御座間、休息所、寝所をはじめ、妾妻、子女の住所、さらに女中衆の長局等が付属して構成されている。

表部分に属する主要建築は雁行形に連続せず、大廣間が最も前面に位置し、他の諸建築はかなり不規則にその背後に展開している。その配列上の位置、および正倒的規模の優越性は、大廣間がこの城館における中心的建物であったことを如実に物語るものである。

二條城殿舎にみられるが如き雁行形もしくは斬然たる階段状の配列は、やゝ時代が降つた、より整備された時期における新配列形式であると思われるが、従つてより古い慶長時代の殿舎配列の特徴をもつて伝えていくものと云うことができよう。このことは後述の二条殿舎配列に比較してみたとき一層はつきりするであろう。

註

(1) 伊達治部は政宗の子、一門伊達安房成光の義嗣。
伊達左衛門は一門伊達安房成光の嗣子。

伊達久四郎は一門伊達相模宗直の三子にして、京の東父伊達清宗の跡を継ぐ。
茂庭卿丸は國老數十年を経て隠居、當時八十一才の高齢者。原田宗輔は後の甲斐、當時十一才。隠居者もしくはまだ独立して家を成していないのがこゝでの共通した特徴。

慶長十五年竣工した大廣間は長方形の主屋に、北と南に鍵形に曲り屋を付けたものである。⁽¹⁾ 北の表側に三室、南の裏側に三室、その間に小部屋を介在させ、さらに西南に二室を配し、これら十一の座敷をめぐって拭縁、落縁を設け、西側拭縁の延長上にいわゆる中門廊突出部を施す。表の最奥に上段、上々段を付し、中門廊、色代部（廊之間がこれに当る）を有し、車寄せを備えるなどの諸点からみて、まさに古書にみる主殿之図、廣間図を忠実に踏襲し、拡大したもので、廣間建築の古式に適つたものである。

当時の大名の間で、廣間を晴れの中心座敷として設けることが流行したが、かくの如き三列系の大規模のもので現存

(3)

- (2) 小林清次氏「伊達氏に於ける家臣制の成立」史学雑誌六二編八号
 (3) 貞山公治家記録 元和四・一・一・五
 (4) 貞山公治家記録及び宗宗君治家記録引証記 慶長一九・一〇・七
 (5) 治家記録 慶長一八・一・一・五
 (6) 治家記録 慶長一九・一・二・六
 (7) 治家記録 慶長一九・二・八
 (8) 治家記録 慶長一九・一・三〇
 (9) 治家記録 慶長一九・一・四
 (10) 治家記録及び引証記 寛永二・一・一
 (11) 治家記録を白紙に貼付したもので、貼付のときの墨が甚だしく、各建物の方向が乱れて統一していない。後述の二丸部分（圖版90）もまたこの傾向がある。二丸の他の詳細な殿舎図と比較してみると、二丸建物の方向は整然と統一されているべきもあることが認められる。従って本丸の構造も大廣間の方針に合わせて配置されたものと考えられるので、並を修正して作図しておいた。
 (12) 例えは正保年間の仙台城絵図と較べたとき、正保園にない天守や西南隅櫓の存在が示されておりして、疑問の点がある。
 (13) 熊谷台の建築年代は明らかでないが、慶長十八年には能興行が催されていることからみると、大廣間の造営とそう遠くない時期に建てられたと考えてよからう。なお寛文四年作仙台城絵図には大廣間前面に舞台が両かれているので、網村代頃までは少くとも存在していたとみられる。

する実例は皆無で、古図にしても僅か聚楽第大廣間図と想定されるものが紹介されている程度に過ぎず、武家の大廣間建築に関するものとしては貴重な具体例である。

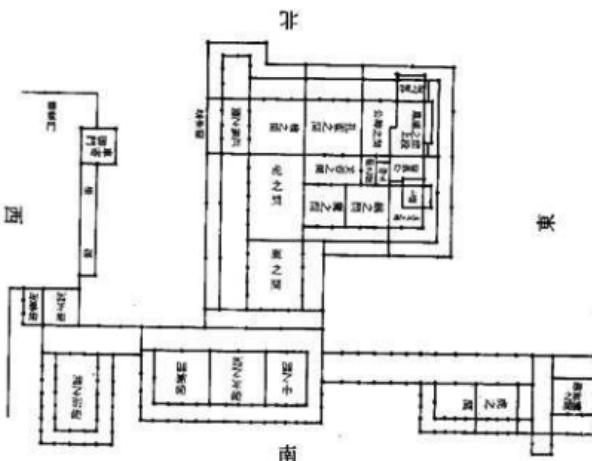
仙臺城大廣間の詳細は古図に頼らなければならないが、現存する諸絵図には細部において多少の喰い違いがあるので注意を要する。比較的正確に表現されていると考えられる数例についてみてみよう（**挿図1～4**）。ともに一長一短があるが、比較総合すれば正誤を得るであろう。

挿図1、2はともに明和四年に藤博兼が写したとする、出所を等しくする絵図である。各室の名称はほど一致しているが、**挿図1**では中門廊突出部分（首実検之間とも称される）が三間位に、**挿図2**では三間半程度に表現され、また**挿図1**では虎之間を東西四間、南北六間、即ち四十八帖敷とするのに対し、**挿図2**では南北を柱間にして五間、実長五間半、即ち四十四帖敷とする。従って、鶴之間、鳩之間が南北の実長三間、即ち十八帖に対し、二間半十五帖となる。同じ出所のものにこのような違いの生じるのは理解に苦しむ。⁽⁴⁾

挿図3、4はともに中門廊の突出を三間半としているところ

は**挿図2**に、また虎之間を六間、四間とし、鶴之間、鳩之間を三間四方とするところは**挿図1**と同巧である。また**挿図1、2**では帳台の西、柳之間との間に約四帖の小室をさしはさむが、**挿図3、4**はこれを独立した部屋とせず、帳

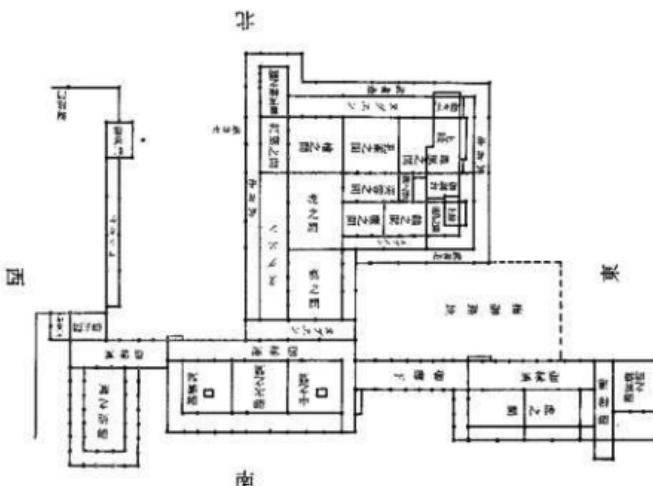
挿図1 仙台城本丸屋形図・明和四年藤博兼写（仙台藩祖蔵王手稿）



台より連續せしめている。擇図1ではこゝを下段と称しているし、おそらくこゝは間仕切りがなく、床高に高低の差があるにすぎず、それをあたかも一部屋の如くに取り扱つたものであろう。安永四年の御本丸拝見覚書中にも御帳台、柳之間について述べているが、この部屋についてはとくに觸れていない。その覺書に「一、上段の下の御座敷十八畳、此南に四疊敷有り、御襖柳の絵、其南十八疊敷、松に鶴の絵、御襖立其下西の方に十八疊敷有り、御襖松に鷹の鳶を捕る絵、此南は御通通りなり」と、即ち鶴之間、鳶之間はともに十八畠であることを述べているから、擇図2の二間半とするのは納得が行かず、虎之間を五間半とするのも不當である。従つて擇図2に最も大きな缺陥がみられ、擇図1がこれにつぎ、擇図3、4が比較的信用しうるものと考えられる。このことはさきの背山公造制要図の大廣間部と対照せしめても首肯されるところで、ひるがえつて図2大広間部の表現がかなり正しく行なわれている証ともなる。

大廣間は俗に千疊敷きとも称されるが、仙臺城の大廣間は疊敷の部分が約二百六十帖、拭縫部を含めて約四百三十帖の廣さをもち、上段之間、下段之間、孔雀之間、鳶之間を統けて使用すると丁度百帖の廣間となり、鳶之間、虎之

擇図2 御本丸御座形大略之図・明和四年藤博兼写（仙台城の建築）



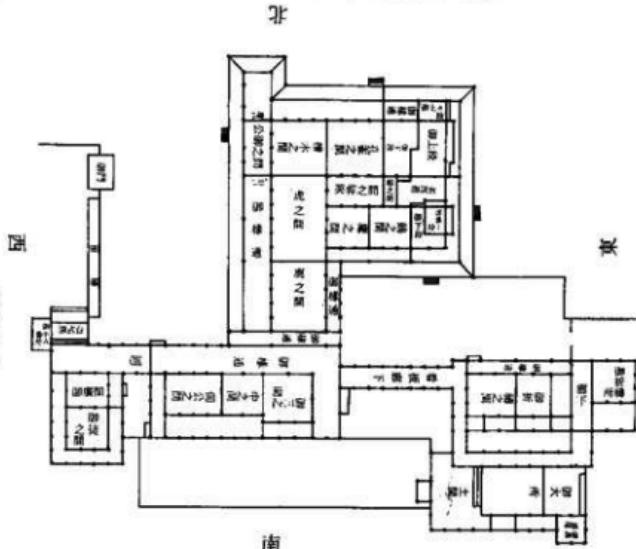
廣筋裏 鹿虎
之之上 之之
間開段 間間

間、鹿之間を開放すると百二十帖の大座敷となり、裏側の部屋も上段、下段、鶴之間、廊之間とつづけて五十一帖の大室となる。

この間取りから大廣間の表座敷は、上段より松之間に至るものと、桧之間を上として鹿之間にわたるものとの二通りの使用目的を考えて計画されたものであることが観取できる。插図4は詳細な寸法の書き入れがある。誤記もあるが、整理してみたものが插図5である。大廣間の柱間一間が六尺五寸間よりなることがこの図から知りうると同時に、慶長十五年竣工の記事「此年御城大廣間造賞作成堅良十七間半横十三間半北へ三間ニ式間半南へ七間半ニ大間之曲あり」とある建物規模の寸法内容を具体的に知る事が出来る訳である。対照してみると、両者は正確には一致しないが、この程度の違いはあるいは表現上のニアインスとして許されるべきであろうか。

紅葉之間（公卿之間）の北半に車寄せ、もしくは御成玄関の記入があり、この部分に軒唐破風が設けられ、出入口が付けられていた。貴人は御成門を通ってこゝに車、輿、駕籠を寄せる。御成玄関と呼ばれたことがあつたとしても、こゝには階段があつて、いわゆる玄関にみる式台の形式ではないことに注意すべきである。つまり貴族的昇殿方

插図3 御本丸御家作御絵図（宮城県立図書館）



色代
中門寄せ

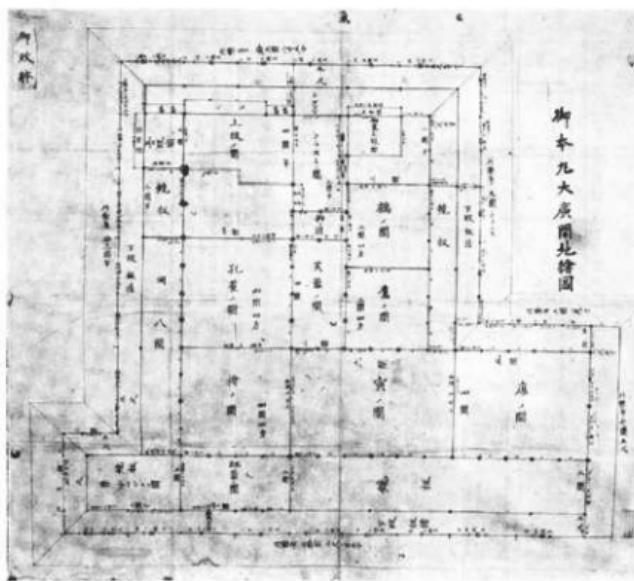
中門
代
色
首実検之間
廻之間

法が受け継がれているとみる。一般の人は正面の表玄関、遠侍経路で色代（廻之間）方向より大廣間に入る。大名邸においては天皇、將軍のお成り時以外は、中門（廻）車寄せは用いないのが通例で、従つて仙台城大廣間の御成門、車寄せは施設があつても現実には用いられることなしに終つたと想像される。車寄せの出入は唐戸、向つてその右二間は、^{よし}、さらに虎之間、廻之間の前面は障子となり、車寄せの左手は二間が連子窓、続いて唐戸となり、落縁前面は一樣に板戸が施される。

この種の主殿、廣間の典型と見做される円城寺光淨院客殿、（拵図6）同勧学院客殿から推して、車寄せ側に本屋大棟の入母屋破風をみせ、軒唐破風を出して車寄せとし、本屋と直角に首実検之間、廻之間の棟がそれぞれ接続していたものと想像される。瓦葺か柿葺か明かでないが、後世の姿図によれば柿葺らしく表わされている（拵図7、8⁽⁶⁾）。

なおこれららの姿図によれば中門廊、色代部はそれぞれ棟高を異にし、大屋根の入母屋妻、中門廊妻をそれぞれ西側に、即ち車寄せ側に向っている。柱の位置や柱間の間隔、そして車寄せ及び中門廊妻の意匠などに多少の違いがみられ

拵図4 御本丸大広間地盤図（齊藤報恩会）

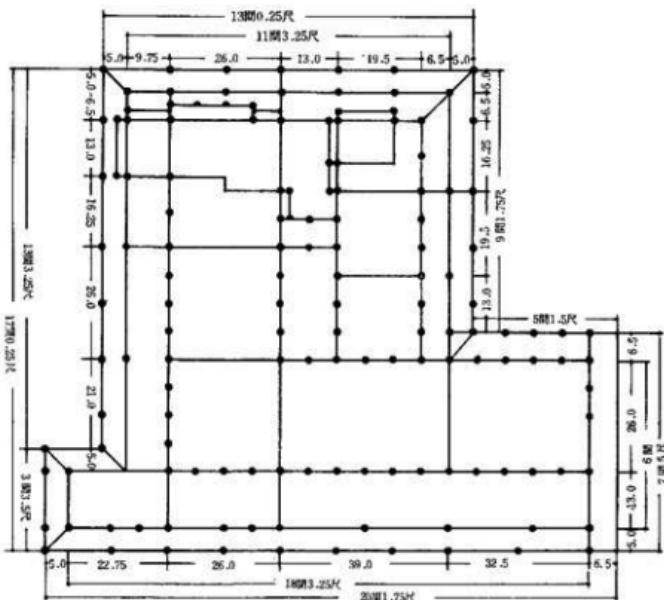


るが、ともに中門廊突起部の長さが、全体の比例から推してほど実長九間位いに表わされている。もともと中門廊の長さは三間半、落縁部を加えてもせいぜい四間半どまりである。

第二節刊の「仙臺城沿革」中に挿

図8とともに大廣間平面図をも掲げているが、それによると、本来の中門廊を北側座敷落縁の線で切り、それに新たに長さ七間の建物が附加され、車寄せ左手、即ち西側が計約九間半で、姿図とは一一致する結果となっている。この平面図には他に明らかな誤りがあり、中門廊部の詳細に付いても何處まで信用しうるものか疑問であるが、姿図が単なる想定図でないとすれば、それに符号する平面図の存在とあいまって、幕末頃にかけて中門廊部に増築、改築の手が加えられたか、あるいはその計画があつたかとみるべきであろう。

図5 本丸大廣間寸法(単位尺。御本丸大廣間地盤図)



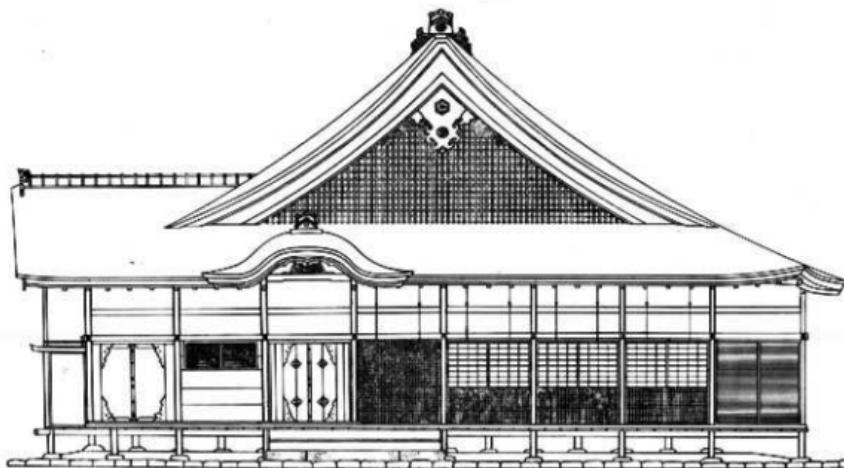
留意したい。円城寺光津院客殿の場合の本屋と中門廊との比例からも理解されるであろう。

伊達家では江戸の上屋敷にも慶長末年頃迄に「千疊敷の家」⁽⁷⁾が存在し、さらに京都伏見の伊達邸にも慶長初年に廣間がみえ⁽⁸⁾、さらに遡って天正末年の聚楽伊達邸⁽⁹⁾の作事関係にも廣間の語がみられるので、その経験はかなり古いとみてよく、こうした経験の上にはじめて仙台城大廣間の如き雄大な建造が可能であつたのであろう。

大廣間に接続する建物として、挿図1、2では玄関寄り付きに徒之間⁽¹⁰⁾の一棟、中之間、次之間、廣間より成る一棟、その奥に廊下を経て二室よりなる虎之間が画かれている。挿図3では挿図1、2の徒之間を前後に仕切り、前を廣間、奥を徒之間とし、また中之間、次之間、廣間をそれぞれ三之間、中之間、伺公之間⁽¹¹⁾と称し、虎之間を祈禱之間とする。

虎之間、中之間、次之間、廣間は一体となつて遠侍郎⁽¹²⁾之番所を形成し、大番士の詰所となる。伊達氏における大番組の制はすでに戦國大名の頃に成立していたと思われるが、詰所による虎之間衆、中之間衆、次之間衆、廣

挿図6 円城寺光津院客殿東面姿図 (北尾春道 國宝書院国聚)



大
廣
間

間衆の名称は遅くも政宗の寛永期、あるいはさらに元和期にさかのぼることも出来るから、かかる室名の呼称もその頃までに成立していたことは明らかである。その点からすれば、挿図1、2に示された室名は古制と言うことが可能である。またこのことから、当時すでに大廣間的廣間とは別に遠侍的廣間がともに廣間と称されていたことが分かる。

寛永末年に至つて二丸が新たに造営され、本丸の番士詰所機能も必然的に二丸に移り、従つてその名称も二丸に継承され、本丸におけるかゝる呼称はやがて現実性を失つて單なる形骸と化し、挿図3にみる如き呼称を生じたものと考える。番所虎之間は中之間奥の、後世俗に祈禱之間と称されるところがこれに當り、大廣間中にある虎之間座敷とは別のものである。

二丸造営にともない、從来本丸で行なわれていた主要儀式は佛儀を遺すのみで完全に二丸に移り、大廣間は直接には藩主初入部の時に限り利用されたに過ぎない。

従つて虎之間もやがて祈禱之間へと大きく変質したものであろう。

挿図7 仙台城本丸大廣間西面姿図（尊王事蹟附図）スケッチ

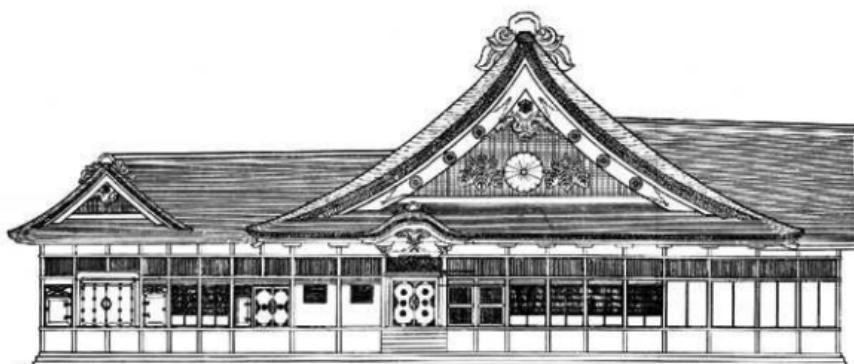


かつては大廣間東南部より御座間等の奥への連絡廊下があつたが、藩主常住の空間は同じく二丸に移り、初入部の際も主君は玄関より入って大廣間の上段に着して祝儀を行ない、その後直ちに二丸に入る式としたから、奥部との直接の連絡路を必要とせず、やがてこの廊下は破却撤去されたものとみられる。肯山公造制図にはこれが存在し、後世図にはこれを欠くのはその現われとみる。大廣間と遠侍關係の建物以外には命脈を保つたのはおそらく先述の懸造りくらいである。こゝは遊宴場として後世にもしばしば利用されていた。

註

- (1) 政宗著『治家記録引説記』慶長十五年の條
「此年御城大廣間營作成於長十七間半幅十三間半北へ三間ニ貯酒半所
へ七間半ニ六間之曲あり奉行役邊内油井善助大工極梁樋村彦作日向
親子右衛門絆ニ上り其頭天下無双之匠人肩部左衛門ト云者ヲ雇來テ
令得指図也西工佐久間左京同奉行茂庭利兵衛眞山式部」
- (2) 大船喜邦氏「豊公著第の大廣間」
- (3) 昭和一五年建築史二卷一號
「此年御城大廣間營作成於長十七間半幅十三間半北へ三間ニ貯酒半所
へ七間半ニ六間之曲あり奉行役邊内油井善助大工極梁樋村彦作日向
親子右衛門絆ニ上り其頭天下無双之匠人肩部左衛門ト云者ヲ雇來テ
令得指図也西工佐久間左京同奉行茂庭利兵衛眞山式部」
- (4) 指図1は前掲「仙台城組尊王事蹟」の附図中「仙台城旧本丸脇形図
明和四年藤井兼厚木繪写」として摘要せるもの
指図2は前掲「仙台城の建築」中において「御本丸御城形大幕之図明
和四年藤原兼写」として掲載せるもの
指図3は宮城県立図書館所蔵の「御本丸御城作御絵図」
指図4は著者撮影所蔵の「御本丸大廣間地絵図」

指図8 仙台城本丸大廣間西面姿図（仙台城沿革附図）



仙 台 城 の 建 築

のは遺憾である。

(5) 安永四年 安倍景右衛門記 昭和四年刊「仙台市史」所載

(6) 摂國7は前掲「仙台藩祖尊王事蹟」に載る仙台城御木殿岡（出所不明）のスケッチ。

(7) 当代記尾長一九・八二八

「末刻闇東江戸大風大名小名屋形一字そ不全其内ニ倒側之原形多之臣臣以下可察之伊達政宗平氣直守千葉義ノ家向門已下猶況哉外家無不可勝計。」

(8) 上用集 延長二・一〇・一六

「十一月廿六日早朝村大助少将波大間今度御成也御車始於廣間進物被點御目也御小袖武十被獻大關（紅）花千斤寫政所様秀頼公ノ母雅光忠ノ御則

（マ）兼御座三重御茶湯退具一傳歎秀賴公其後於御書院着御服聞所記御御禮之尤御厚也」

(9) 伊達家文書之、 大正一九・四・二七 梅野長吉著「中

「一、御作坐當秋中祭所可被御付御座要候廣間之御者奉手可被御付御事」廣間の作事は実現されたかどうか不明であるが、少くともその計画が行なわれたことは知られる。なお文政四年九月、政宗は聚楽より伏見に足利に移転を移す。同文書四・九・一九政宗書狀に「此地へ聚楽私之家共移中ニ付而、西口在沿仁風下向仕候」とある。

（10）伊達家文書之三 寛永一三・六・二三「伊達政宗御次第書」によれば廣間間衆、中之間衆、次之間衆、廣間衆の名前がみえる。また「伊達世臣家譜」によれば「廣江……江原初御宮川姓聚先山由佐松家以宮川左近前門次男廣江云左衛門吉清為祖元和七年為元和七年為元和四年

十一月先祖為廣間上」とあり、元和頃までにかかる番衆の名称が存在する。

（11）本丸においては大廣間、廣間と呼ぶされ、兩者には別ではないよう計算されている。二丸においては小廣間、廣間と呼ぶ同じく廣間ではない。

遠侍の儀間は、後にひろく玄関寄り付きの部屋名として、義化する。さして大室でもないのに敢えて「廣間」と称される。武士住宅の玄関発生となりにかゝわりをもち、（大）廣間と並び、遠侍との密接な關係から產生した言葉ではないかと考える。福島「武家住宅に於ける玄関に就いて」日本建築学会論文報告第六二号参考。

(12) 治家記録及び鶴入郡方略図（宮城県立図書館蔵）、御入御者城之御次第（登米伊達家文書、東北大学図書館蔵）等

(13) 例えば吉山公治家記録 元禄五・九・二八

「末刻本丸ニ御登裏付 上下津田民請御先ニ何候於屋形上段御斗腰襷セラレ腰襷ニ入セラル」。

また前述の安倍景右衛門記によると、安永年間にも存在し「御掛作り長ナ九間半横三間にかけ下け有東向の子孫引通し有らんかん有」とあって、國譜89中のかけづくりの圖を思われる。前掲「仙台藩祖尊王事蹟」の附図中のかけづくり圖は墨末のものと推測されるが、綱村代、安永代のものはかなり変化している。

三二丸の建築

(1)

豪者を誇った本丸殿舎もその利用期間は政宗一代約二十年に過ぎず、忠宗以来幕末に至るまでの二百二十余年は二丸が政廳及び私邸の中心で、近世的城廓殿舎としての事實上の機能はあげて二丸にあったと云うことができる。^{（一）}寛永十三年襲封した忠宗は同十五年早速二丸の普請を起こした。正保年間絵図によると「東西百七十二間 南北百十一間 本丸地形ニ廿七間低」とあり、廣さ約二万坪の平坦な矩形の敷地である。

二丸の敷地は後には更に北方（西屋敷と称される部）に拡張されるが、当初における総面積は本丸に較べてとくに廣大なものではなかつた。

本丸敷地の輪郭は極めて複雑で、かつ西南部に起伏があり、その立地条件からは整然たる建築物の配列に難点なしとしなかつた。

従つてほど矩形に近い平坦な地形は強い魅力となるが、さらに本丸より遙かに低く、城下との連絡が容易であること

が、新しい時代の城館敷地の条件とし何よりもまして望まれたであろう。

忠宗君治家記録引証記によれば、まず焼火之間、虎之間、納戸、茶道部屋、鎗之間、上大所、風呂屋、大大所、小性之間、用之間、看部屋、廄部屋、笄用部屋が寛永十五年十二月十四日迄に、次いで御座間、御食所、奥方御食所が

歩舞小大萬東御御
方大御座屋
之廣吉手裏
間台間院門所所間

同十六年三月二十八日に上棟し、更に同十六年五月より十二月迄の間に蔵、大手門、大書院、小廣間、舞台、歩之間が順次上棟した。⁽¹⁾ 政宗死去に伴う若林城經營廢止により、その撤去建築の部材がこゝに運ばれて転生したとも云われるが、本丸建築の中にも一部二丸に移築転用されたものがあったかもしない。こゝにいう大手門は前述の如く、この時期に移建、再建、もしくは新築されたものか、あるいは二丸詰の門の誤りなるやさだかではない。

同十六年六月にはやくも移徒の祝儀を行い、同十七年の元日儀式は二丸において行なわれた。⁽²⁾ 本丸での諸規式は心経会、鐵法、護摩供等の仏儀を残してことごとく二丸に移行する。⁽³⁾ 即ちこれより二丸が事實上の仙台城の中心となつた。

二丸殿舎に関する古絵図が現存し、その数例はすでに紹介もされている。⁽⁴⁾ いずれも幕末期に作成されたもので、その示す内容はともに文化元年二丸殿舎焼失後に属するものとみられる。文化元年の火災を前後にして、二丸殿舎の構成に大きな違いのなかつたことは、その前後の絵図の比較や、儀式帳などから確認される。⁽⁵⁾ しかしこれらによつて直ちに創建期もしくは初期の様子まで窺知しようとした試みるのは甚だ危険である。治家記録によつても綱村時代に大きな改造の事実がみられるし、寛永の引証記中の大書院は後世圖ではなく、後世圖にみえる内対面所の如きは引証記中に見当らない。

即ち創建期の殿舎構成と後世圖との間にかなりの変革が予想されるし、またそれなら後世圖に示される殿舎構成が定つたのは何時であるのか改めて問題となるであろう。

治家記録によると、綱村代、とくに元禄初年を中心として一連の新築工事の行なわれた事実がある。例えば元禄三年に新造御休息所への移徒、⁽⁶⁾ 同四年に新造御座間への移徒、萬善堂の移築、⁽⁷⁾ 敷寄屋、⁽⁸⁾ 園の新築、また同三年迄に新焼火間、⁽⁹⁾ 同七年には新舞台、新座敷が出来、⁽¹⁰⁾ 同八年には新座敷を内対面所と称し、他方書院の語およびその用例が見えなくなるのが天和二年以降で、従つてこの元禄初年を前後として書院が失われ、新たに寝所、休息所、御座間、内対面所が出来、また新たに焼火間が出来ることにより從來の焼火間を元焼火間と称しているなど構成面における移動が

元内新敷萬新御休所
新御休所
燒火面
舞火面
間所台間御座間
御座間
御休息所

指摘できる。この改造以後においても多少の改変、修復が行なわれているが、主に奥方関係の作事が多く、表向きにおいてはその構成を変えるような大改造の事実はない。

ここではまず一つの二丸指図（図版91）^{（説）}を紹介しておきたい。年代不明であるが、後世図と較べてかなり古い時期のものと考える。東面詰之門を入った玄闇の右脇に徒之間が、玄闇につづいて中之間、次之間、廣間より成る一棟があり、この奥に虎之間、客之間、小廣間、書院が階段状に連り、客之間の奥、書院の北裏に焼火間、その奥に御座間、髪所が続く。焼火間と御座間の間に小姓衆之間、小姓衆之間の裏に風呂屋がある。これらの建物の背後に納戸、上大所、大大所、肴部屋等が配置される。西南の一角に數寄屋關係の建物がある。この図面の示す建物名と寛永代引証記の述べる建物名とはよく一致している。そして奥部の記入はないが、後世図にみるような複雑さがなく極めて単純な構成配列を示し、よく初期の特徴を表わしている。

二丸の初期の建物名、部屋名を治家記録で調べてみると、寛永代にはます書院、御座間、小廣間、数寄屋、鑑ノ間、正保年中には焼火間、番所、談合ノ間、用ノ間が加わり、万治年中にはさらに小姓衆ノ間、物書部屋、虎ノ間、夜居ノ間、廣間等が加わる。延宝年中には客ノ間、中ノ間、次ノ間、學問所、小書院、虎ノ間押込、連歌ノ間、書院勝手ノ間、御座間寄場、御寢所、小廣間裏座敷、書院裡座敷、伺公ノ間、祠堂等が、そして天和、貞享年間には対面所、奉行ノ間、馬場座敷、大所、團、時計ノ間、小廣間勝手座敷、鑑板廊下、内舞台、御座間圓、因縁殿等が加わってみえる。これらの中には同一の建物で別呼称のものも含まれている。^{（脚）}

いずれにしても先述の二丸指図に示された部屋名は大体延宝以前に出揃っている。この指図の作成年代の確かなことは分らないが、書院が存在し内対面所がない点から、元様を中心とした改造より以前の状態を示すものであることは明らかである。

書院が用いられなくなつたのは天和二年以降であるが、その頃には小廣間脇に馬場座敷が設けられていたが、馬場座

虎之間押込
学問所

敷の語及び用例は天和元年にすでに現われている。この指図には未だ馬場座敷が見えていないし、また虎之間の向いに押込みもない。虎之間押込の語及び用例は延宝三年にはみられる。學問所（小書院とも呼ぶ）も延宝三年十一月にはすでに經營成っていたが、この図には示されていない。

従つてこの図の内容は天和以後のものではあり得ない。寛永から延宝頃にかけての、二丸初期の殿舎の状態を伝えるものと考へてよい。しかしその時に氣付くことは引証記に云う館之間、用之間の語がこの図ではなく、また逆にこの図に示された中之間、次之間、廣間及び客之間が引証記中に見当らぬことである。館之間の語は治家記録中にも見出しが出来ない。とすれば引証記に云う館は一般には別の呼称を持つていたものと想像される。

客之間

指図中に示される客之間が引証記中に無いのは、寛永の創建時には未だ客之間が計画されていなかつたからではないかとも考えられる。

引証記に云う用之間の語は治家記録にも散見し、正保二年すでに現われているので問題はない。それは上・中・下の三間取りから成つていてことが知られる。²³⁾客之間は上・下の二間取りであるし、客之間と用之間とは同時の使用例があるので両者は別の建物であることが明らかである。よつて指図に示された客之間は引証記の用之間ではなく、規定するならば館之間がこれに相当するとみる。その時には残りの中之間、次之間、廣間が、同じく三間よりなる用之間に当ることになりそうである。その用例の点でも大變近い性質を感じさせるけれども、番所Ⅱ用之間の関係は概念的には認めかねるものもつ。なお今後の考究に待たねばならない。

引証記に云う用之間の語は治家記録にも散見し、正保二年すでに現われているので問題はない。それは上・中・下の三間取りから成つていてことが知られる。²³⁾客之間は上・下の二間取りであるし、客之間と用之間とは同時の使用例があるので両者は別の建物であることが明らかである。よつて指図に示された客之間は引証記の用之間ではなく、規定するならば館之間がこれに相当するとみる。その時には残りの中之間、次之間、廣間が、同じく三間よりなる用之間に当ることになりそうである。その用例の点でも大變近い性質を感じさせるけれども、番所Ⅱ用之間の関係は概

(1) 註

忠宗治家記源引鑑 究永十五年同十六年候

茂徳家記錄 嘉永君六 寛永十六年候 (市史資料室)

本丸の御多間は正保年間には存在していたことが明らかである。義山公治家記錄正保一・二〇・一四「此日御本丸御多間ニ於テ御祝儀應案アラ」

義山公治家記錄

貞山公、義山公、雄山公、青山公治家記錄

藩主初入城の時に腰掛けて、まず本丸大廣間上段に着席して腰掛の祝儀を行ない、それが終えてから一丸に入るのが常例であった。初入部以外の入

居時は腰掛に二丸に入った(治家記録及び御入前方繪図、御着城之御次第等による)

前掲「仙台藩御多間工事記」以下「仙台の市街及び土木建築」に率る諸氏の議考に「一丸が腰掛されている。

仙台城主和一郎治家記錄略圖等(吉城県立図書館・國版92に示す)

仙台城文化元年御造営御多間等(吉城県立図書館)

御二丸御城中並御中車六枝掛御筋圖(小倉強氏・仙台城の建築所収・國版94に示す)

御二丸御城作木垣御筋圖(吉城縣立図書館・國版93に示す)及び寒松園(笠木伊達家文書)

青山公治家記錄 元禄三・一〇・一一

元禄四・四・二

元禄三・一・一・一「御外傳爲木垣始」

元禄三・一・一・三「御外傳爲木垣初アリ」

元禄三・一・一・六「御外傳爲木垣」

元禄四・一・八「萬葉空林立」

元禄四・四・二六「萬葉空安築」

元禄四・四・二七「御外傳空林」

元禄四・三・一六「御外傳空林ノ貢奉」

元禄四・四・三〇「御外傳ノ御附アリ」

元禄三年すでに新焼火間は設けられていたと考えられる。

青山公治家記錄 元禄三・一二・一三の条に
「地下割於御新毛燒火間 大鳥居殿御論語」とある。

新毛(新休憩所のこと)にも焼火間が施設されたことが分るが、これによつて以後焼火間は二ヶ所あることになる。はじめは從来の焼火間を元焼

火間と呼ぶことがあるが、元禄四・一・二六)、やがて元禄五年になると元禄火間、新築火間とはっきり区別した呼称を用いる。

青山公治家記録 元禄七・八・六「御新宅今日地鎮執行之就す」、同元禄七・八・一「新築毫頭院ニ就テ仰刻新宅座敷上之間ニ御者候」とあり、元禄七年八月以降はしばら新築の語があり、同元禄七・九・一八の記録に「白河主殿殿宇當居、一家一族衆料理ヲ賜ヒ御能行原陛下刻新築御用主殿殿於二之間御湯於賓座舖上之間御能拜見其外御能拜見帝セラル蒙裏座敷二之間井焼火間廊下ニ於テ拜見」(上刻能始ん)とある。

舞臺との關係、部屋の構成からみてこれが後の内対面所であることは明らかである。

なお元禄九・一二・二九「今辰内御対面所と段間成就安鎮」とあるから、上段はしばらく後になって成就し、こゝに内対面所が完成したとみられる。

青山公治家記録によれば元禄八年正月元日の儀式より内対面所の語が見える。その後しばらく新築の語を用い、元禄九年以後より内対面所の語を正式に採用している。

なお以上の改造の事情について元禄三・一・一二の御京より御村あての書状(伊達家文書四所取)によって察い得る。

「然者先達体所出来押付取付之家共作り申候當年出来仕上之由萬善寫末春造行申候是ハ因縁殿山之上而小自由ニ候故急腹不仕候時分萬善堂にて御所所地形を蒙共之地形同様にいたし右之所えつくり申候。

去十一日平新立同十三日臘治十六日地鎮延首尾能相調申候之由 例假嚴作り出来次第只今迄之萬善堂移し候而右之家並只今迄之休所所置杯こほし居間並圓形地形作成奉り申候因之手新立米廿一日ニ仕合の由只今迄之居間ハ其儘差異内々之對面所ニ用可申か居間庭之内ニ可致か奉る様子次第可為之由寄付計にて合点參かね既半事も難計被存候へ共地鎮之作法も有之事故様子等ニも被申候候由委細令承知念人候義令承知満足申候候……」

第四十九御指図(宮城県立図書館蔵)

例えは小鹿間(外面所・隅間所・小書院、

連歌ノ間(同公開)(=奉行ノ間か)、荷室(内緑殿

青山公治家記録 天和一・九・二七、天和一・九・二八の条。

馬場更衣の語はあるが當時別の呼称をもっていたかも知れない。しかしその用例がみられることからして、呼称はともあれ、この位置に座敷が存在していたことは確かであろう。

延宝三・一〇・一
延宝三・一一・三「御學問所ノタメ經營ノ小書院ニ於テ内藤園古ニ中庸ヲ講セシム」

鶴岡
同

(2)

小廣間は二丸の中心となる建物で、上段、次之間、三之間と鍼形に續き、疊継がめぐり、前面に切目縁が付く。上段、次之間、そして表舞台が一直線上にあり、大廣間の古式に対し新形式の座敷構成をとっている。上段十六疊、次之間は柱間三間に三間（寛長四間四方）の三十二疊、三之間は柱間三間に七間（寛長四間に九間）の七十二疊、縁通りは東面、西面二間は $\frac{1}{2}$ 、南面、北面二間半は $\frac{1}{2}$ で、総面積一四五坪、大廣間の約六割七分程の廣さとなる。⁽¹⁾ 本丸大廣間に比べて、その間取りが單純化され、規模が縮少されているのが注目される。小廣間と称される所以である。しかし次之間と三之間との間の襖を取り拂つて使用するとすれば百二十疊の大室となり、一空間の規模としては大廣間に較べて特におどるものではない。客之間を加えて考えれば後に大廣間を凌駕するのである。寛永の創建時に当つて引証記は小廣間とするに対し、治家記録は大廣間としている。これは明らかに治家記録の誤りと思うが、二丸居館を

同
姫宝三・九・二七「…客之間繋側ニ當番ノ脇番頭松木内蔵助女間ヨリ小廣間ニ御入ノ間間所ニ於テ番士ニ御番ヲ賜フ」
姫
姫之間＝番所（中之間、次之間、廣間）ということとも考えられる。かかる時は客之間に相当するものを発見出来ず、従つて客之間は創建期にこれ
を失いたとみなければならない。

22 義山公治家記録 正保一・一〇・二六

例えば喜山公治家記録、元禄元年二月十二日の初卯具足餅頭戒に關して

「於御用間上ノ間定供大番組番外同朋頭中ノ間徒組頭組付士大所人坊主頭同朋坊主馬方下ノ間足輕小人諸職人萬籠ノ者等直敷」とある。

他にも同元禄四・二一一に用之間の上座敷、中座敷、下座敷の同様の使用例がみられる。

23 喜山公治家記録 元禄三・九・二九

四 後述

24 番所＝鍋之間の方がむしろ可能か。註²⁴参照

獨立の屋敷として取り扱う立場からはその晴れの中心建物を廣間、もしくは大廣間と称しても当時の慣例からは一向に差し支えない訳であるが、仙台城總体としてみると、すでに本丸に大廣間が存在するので、敢えて小廣間と称して區別したものであろう。⁽³⁾

一層敷内に大廣間、小廣間と廣間關係の建物を二つ持つ場合が近世初頭の大大名邸にみられるが、大廣間の建築が逓れるか、何等かの理由でこれを欠く場合に小廣間がその機能を兼ねることはあっても、当初から廣間の中心建物として小廣間を設置する例は余りみられない。

伊達家においては、寛文度の江戸上屋敷においても中心建物が小廣間であり、この名称は仙台城、江戸上邸ともに後世まで用いられ、通常の大書院、表書院の語を採用しなかつた。寛永以後においては主要中心建物を常に小廣間と呼称するのが伊達家の伝統となっていた。

二丸小廣間は寛永より幕末に至るまで、途中に焼失、再建の経験を経たけれどその間取りは全く変化していない。⁽⁵⁾

書院は上之間（三間に五間、三十坪）、次之間（三間に四間、二十四坪）、周圍に縁通りを付し、七十八坪の廣さをもつ。⁽⁶⁾ 治家記録では常に書院と呼ばれていたが、引証記には大書院とある。書院の裏には書院勝手が付いていた。玄関より小廣間に至る間に徒之間（四〇・五坪）、廣間（火長三間半に六間）、次之間（三間半に四間）、中之間（二間半に七間）。中之間、次之間、広間は合して一棟となり、前面に縁側、後面にそれぞれ夜着部屋を有し、総面積（二三・五坪）、虎之間（三間に七間、縁側、夜着部屋を含んで四二坪）、客之間（鎗之間か。六間半に十五間）が介在するが、この関係は本丸の場合と同巧である。客之間部分が加わり、より延長され、拡大されているところに相違を見出す。

客之間
焼火之間
書院勝手
徒之間
次之間
中之間
虎之間

歌之間とも云う。指図にはこの部屋に室名がない)には床が設けられている。小廣間、書院と共に焼火之間、何公之間、客之間は比較的上位の座敷であることを物語り、いずれも上、下の二部屋より成つていて他室との格の差を窺うこと出来る。

遠待、客之間、小廣間、書院、御座間、御寝所は創立期の二丸殿舍構成のいわば骨格をなすものであり、そのうち遠待より書院に至る配置は、各棟の線を交差に水平、垂直に置きながら、東北より西南にわたつて斜の方向に、すなわち雁行形というより階段状に連續し、配列上の特徴となつてゐる。そしてそれにもかゝわらず客之間の、床の間を背にした上、下の線、小廣間の同じく上、下の線は同一方向に統一されている。

客之間の南面、小廣間の南面、東面、書院の南面はともに開放され、この部には腰障子が施設され、従つて採光上も有利である。小廣間では後述のように座敷利用の面で、上段と次之間と縁通りによる方法と、次之間と三之間とにによる方法と、二通りが指摘できるが、その配置と間取りが巧く工夫され、採光上でも不利となる。また小廣間の上段と次之間とを結ぶ線上に表舞臺が位置し、主君は小廣間の床の間を背にした観覧が可能であり、また小廣間と客之間で舞台を抱き、それらの間に格好の空間を形成し、客之間の前面は脇正面として利用されるなど、すぐれた配慮がなされている。⁽⁸⁾

こゝでは本丸のように大廣間を中心とし、そしてそれを最前面に置く配置方法から離れて、むしろ諸建築の相互関係が重視され、綜合によつて効果を發揮することと、使用上の便利さといふことが強く表面に出ているようにみうけられる。客之間の向いに夜居之間、裏に坊主部屋、舞台樂屋脇に奉行休息所があり、虎之間、中之間、次之間、廣間の、いわゆる番所四間にはともに番士の夜勤、宿直のための夜着部屋が備え付けてある。

焼火之間の奥に御座間、その奥に寝所が續く。寝所に物置が付く。御座間、寝所の附近に風呂場、小姓衆之間、右筆奉行休息所、夜居之間、夜着部屋、納戸が配置し、これに上台所、さらに大台所が連接する。上台所には上段部があり、大台所には二階部分がある。

御次

る。上台所に接して栗子部屋、肴部屋、酒部屋、八百屋部屋、物置等が附属する。大台所と坊主部屋との間に「惣御次」と称する一棟がある。

敷地の西南隅や、小高いところに蔵が配され、御座間前庭には池があり、前庭前の土手を越えた位置に數寄屋関係の建物が置かれ、数寄屋、鍛之間、数寄屋台所を備え、御座間、書院から長い上り廊下によつて連絡し、また二丸敷地の正面南より路地を通り、「ひとやどり」を経て同じく数寄屋に達する。初期の数寄屋関係の建築の内容がかなり詳しく知られる。数寄屋関係の建物はおそらく枯蒼⁽¹⁾か草葺きであつたものと思われる。⁽²⁾

正面の詰之門⁽³⁾に入つてやゝ右折し表玄闇に到るが、向つて左側の屏地門⁽⁴⁾を通り、舞台後方を廻つて小廣間、書院に達する径路も工夫されている。詰之門より右手の既の前を通つて台所玄闇、さらに遠侍の裏手、台所、惣御次との間に設けられた中之口に導かれる。

北側北門の線と、以上の諸建物との間が奥向建物の存在する敷地に當ると考えられるが、この図には一切その建物の記入がない。この北門の線がほど二丸敷地の北限と見做されるが、これは正保年間作成の城下図中の二丸敷地と較べて納得出来る。即ちこれが初期二丸敷地の限界であつたと考える。

以上が二丸初期殿舎の大様であり、その後元禄初年を中心に行なわれるが、改造の方向およびその結果を窺わしめるものとしてそれぞれ図版90、92を掲げる。図版90はさきの本丸の部分図（図版89）と同じく、肯山公造木写之図に示された二丸部分図である。建築名の記入がないが、その前後の図（図版91、92）を参照することによつて、建物名を推定することが出来る。

二丸指図（図版91）に較べて、すでに御座間、寝所等の主要建物の移動、内対面所等の記入が行なわれているので、もし現状を示したものであるとすれば、元禄時の一連の改造工事の済んだとのもので、少くとも元禄七年以降のものであるということが出来よう。⁽⁵⁾しかしその時期には書院は使用されない状態、もしくは破却除去されたと思われる

敷地門
数寄屋
鍛之間
ひとやどり
中之口屏地門
台所玄闇
中之口

にかゝわらずこゝには未だ残っているし、また馬場座敷南脇の馬場や虎之間押込みなど当然存在していなければならぬものが記載されていない。略図のため省略されたのか疑問の点が多い。

いまもし元様の改造を前にした計画図とみれば、それらの諸点も納得出来るが、その場合、天和元年記録に見える馬場座敷が、その呼称の点で誤りなものならば、当然後世図に見る如くその脇に馬場を施設していたものとみなればならず、馬場の出現は書院南側の前庭をいたく狭める結果となり、書院は使用面での大きな支障をうけ、書院機能は低下し、やがて破却される運命を招來するであろう。

治家記録において、天和二年以後書院の語及び使用例がなくなる事実からして、馬場の出現と書院の消失とは互に無縁ではなかつたものと察せられる。

この図に書院がなお存在し、馬場座敷に相当する座敷もありながら、馬場が未だ出現していないのはその意味で矛盾せず、このことは、この図が馬場の設置の未だ実現をみない時期のものたることを暗示するであろうし、また馬場座敷なる呼称は馬場の実現によつて始めて意味を持つのであるから、この座敷は当初より純粹に馬術の閑覧所として企画されたものではないかとの考えをいだかせるであろう。¹⁰⁾

國の作成年代を改えて推測すれば、従つて、馬場座敷の呼称の成立しない、即ち少くとも天和以前ということになるであろう。しかし延宝以前にまで遡ることもまた無理であろう。

さて享和二年図（國版92。二丸の文化焼失以前の状態を示すもの）を参考として國版90を國版91と比較してみるとき、從来倉庫類の置かれていた屋敷西南隅の地まで主要建築が延び、もとの寝所の地に新しい御座間が、その奥に新たに寝所、休息所、新焼火之間が營まれ、その附近に四角之間、御風呂場、御物置、調合之間が施設され、またもとの御座間が改変して内対面所となり、その前面に内舞台を設けたことが知られる。また西の丘陵上には因縁殿、三十間御蔵が両かれている。書院はやがて消失して、もとの書院勝手部分を元書院と称した事情も分り、御座間附近に

萬善堂が移建された事実もみとめられるなどかなり大規模な変化のあとが指摘できる。しかし小廣間より表の部分には全く異状がない。図版90の屋敷地は図版91の時と変化なく、従つて表部分の拡張によつて奥部分はさらに狭少となり、奥御座間、奥御裏所の他は僅か数棟の長局が存在するに過ぎない。

綱村の元禄代に図版90に示された計画はほど実現されたわけであるが、さらにこの頃までには二丸敷地そのものも從来より拡張し、北に隣接する西屋敷の大半を奥部の敷地として包含していたことが諸種の城下図より知ることが出来る。二丸敷地の点からも図版90が元禄以前の計画図たることに矛盾しないように思われる。

拡張された奥部の敷地にはやがて奥関係の諸建築が建ち並び、次第に整備されて図版92にみるが如き状態を現出したものである。

かくして文化の二丸焼失以前において、大奥部の敷地はほど表部のそれに匹敵する規模にまで成長している。

なお参考のために図版93⁽¹⁾をあげた。これは二丸焼失後に再建された状態を示すが、図版92と較べて、大奥部を除いては全くと云つてもよいほど移動がなく、従つて綱村代の一連の改造工事後は主要座敷に關する限りこれが固定してしまつたことが分り、元禄の改造は二丸建築變遷の上で極めて大きな事件であったと云わねばならぬ。書院の消失に代つて出現した内対面所はとくに重要な意味をもつ。

内対面所は元禄九年上段の工事を竣えることによって完成した。⁽²⁾上段、次之間、三之間と表の座敷および附属した内舞台⁽³⁾から成り、全体で約八十一坪の廣さをもつ。上段、次之間、三之間、舞台が一直線となつているのも新しい形式であろう。三之間、裏座敷、舞台部がほどもとの御座間の位置に相当することが理解される。

この内舞台の完成は元禄七年であるが、内舞台に關してはこれよりさき貞享二年すでに内舞台落成の祝儀が行なわれており、その後しばしば内舞台能が催されている。その位置は明らかでない。内対面所に連する座敷舞台は従つてこれとは別のもので、内対面所造営にともない、従来の内舞台はおそらく除去されて新舞台へ転生したものであろう。

治家記録に

元禄七年八月十一日「新舞毫御披三就テ卯刻新宅座敷上之間ニ御簾座……樂屋二入セラル節於新廊下献上物御覽」、つゝいて同九月二十八日「白河主殿殿井當番ノ一家一族衆へ料理ヲ賜ヒ御能御興行辰下刻新座鉢ニ御出主殿殿於二之間拜謁於裏座敷上之間御能拜見一家一族衆於二之間拜謁於裏座敷二之間御能拜見其外御能拜見命セラル蓋裏座鉢三之間井焼火間廊下ニ於テ拜見已上刻能始ル」とあり、内対面所の裏座敷、焼火之間廊下が家臣達の見所となる。この時の樂屋とは何處を指すか明らかでないが、舞台、走掛り、鏡之間の位置から考えて、後にいわゆる六間御屋と云う部屋あたりがそれとして用いられたものかと思われる。

註

- (1) 前掲「元指図（圖版91）」、御二十九御家作木板御絵図（圖版93）及び御二十九城中並御中奥下水抜御絵図（圖版94）等によれば三方面は大長四間×九間に表現されているが、仙台城文化元年御造営御絵図では四間×九間半となっている。御入部分絵図（宮城県立図書館蔵）等に記載された二之間繋通りの壁の致き方から推して九間とするのが正しいと思われる。
- (2) 引延記には「御藏、大子御門、大内院、御小廣間、御舞臺、御能御、之間、右御家同十六年五月廿六日より十二月廿日迄ノ内御棧上相済申候事」とあるが、治家記録の寫本二六・一二・一〇の条には「五月廿六日ヨリ今日マチ御藏、大手御門、大書院、大廣間、舞臺、御歩行間上棧アリ」とあって、小廣間を大廣間とする。そして更に寛永年中は大廣間の語を用い、正保年間以後は小廣間の語を用いている。
- (3) 他に通作、番所の部屋名としての廣間がある。
- (4) 摘稿「寛文重伊伊良下戸屋敷について」昭和三八年 東北大学建築学科創立十周年記念誌
- (5) 前掲諸図による
- (6) 商場「丸指図（圖版91）」による
- (7) 二九指図中の建具記載による
- (8) 二九では脇正面はあるが後正面はない。
- (9) 江戸邸では伊達家の寛文重伊良下戸屋敷、延宝慶芝上屋敷とともに後正面を施設している。愛宕下上邸については前掲拙稿参照。延宝度の芝上屋敷については青山公治家記録元禄七・三・二三の条に「御講祝御拝聞ノ賀儀奉行衆及諸所有之益精組士匠料理ヲ賜ヒ御能御見ヲ命セラル……於臨止商御能肴見於望所料理二汁ヲ賜フ聲……於後正面御能拜見於望所赤飯ヲ賜フ聲……」

仙台城の建築

(9) 二九指図中の建物は大別して青と赤褐と二種の色分けになっている。これが屋根の別を示すものとすれば青が瓦葺を、赤褐が柿葺かかや葺、草葺をあらわすものと想像される。

その時

吉

青

玄関、庭之間、廣間、次之間、中之間、虎之間、客之間、夜居之間、楽屋、樂器所等主として表側の諸建物と、塹所、物置、廻回屋、祐華御屋、小姓衆之間等中央部の一部と、敷居戸への途中の勝手道見廻所、勝手所、路地兼廻所。

赤褐

物であったのかも知れない。この建物から敷番屋への廊下が通する。
東西の長さが寛長六間あるために六間尾、六間座敷の名が生じたのである。

(3)

元禄初年を中心として二丸殿舎の構成に大きな変化のあった事實を指摘したが、それではこの前後において表座敷の用の面でいかなる相違がみられるであろうか。

小廣間 年始御礼は最も重要な儀式であることは論をまたないが、本丸においては大廣間、二丸においては専ら小廣間が中心であった（表2参照）。御座間で連枝、奉行、近習と共に祝儀が行なわれ、ついで一番座、二番座の召出以上の御礼は小廣間で行なわれる。諸役人、大番組以下の諸士の目見も小廣間である。

書院においても一時、母公、北方の使者、一門衆の嗣子などの御礼が行なわれることもあったが、これは年始儀式としてはいわば從属的なものであったようで、書院で行なわれることもある。

元禄改造後は一時中心が内対面所に移ったが、後に再び元に戻り、幕末まで変らない。

二番座が二日目に行なわれるようになつたのが改造後における主な違いであつて、場所の移動はない。

月次の御礼もまた次くことの出来ない行事であつて、本丸では大廣間で行なわれ、二丸に移つてからは一時書院がその中心となつたが、綱村の延宝六年頃から全く小廣間に移行した（表3参照）。元禄改造後は書院が消失し、内対面所が新設されて、連枝、奉行は御座間で、一門衆は内対面所、それ以外は小廣間とに分けられる。なお天和元年頃から対面所の呼称が現われるが、全く小廣間と同じである。狹義には小廣間のうち、上段と次之間によつて構成する一割を呼ぶ場合が多い。⁽²⁾ 内対面所が出来てからは一般に表対面所と呼んで区別する。

表2 年始御礼と建物との関係

〔治家記録、仙台城年始入賀次第書による〕

本 丸	御座間	書院	大廣間
寛永6・1・1	○		○
二 丸 (元様改造前)	御座間	書院	小廣間
万治3・1・1	○		○
寛宝8・1・1	○	○	○
1・2	○	○	○
天和2・1・1	○		○
1・2	○		○
1・3	○		○
二 丸 (元様改造後)	御座間	内対面所	小廣間 (対面所)
元禄10・1・1	○	○	○
1・2	○	○	○
1・3	○		
享保4・1・1	○		○
1・2	○		○
宝曆9・1・1	○		○
1・2	○		○
文久2・1・1	○		○
1・2	○		○
備 考		寺院案は除く。 ○は一番座、二番座で年始御礼 の中心をなす。	

御礼の場合、小廣間（表対面所）は上段と次之間（下段とも云う）さらにはその歓通り（この部は巾二間の疊縫）とを上、下の軸として一饗場として用いる時と、次之間と三之間（この時は小廣間の上之間、下之間と云う場合がある）を上、下軸として一つの式場として使う時とがあるが、例月の御礼のときは、例えば「御対面所へ御出……上段三御席座當番并在府ノ一家一族衆當日ノ御礼畢テ間ノ襖障子間之諸役人一同ニ御礼」とあるように、一家、一族衆の御礼は前者、諸役人の御礼は後者と、同時に二様の座敷利用が行なわれ、これが定型化している。

その他の主要儀式について、元様改造の以前と以後とに分けてみたものが表4である。これらの儀式は伊達家において戦國大名時代より引き継ぎ行なわれて来たものが多いのであるが、改造後多く内対面所に移行したものがないのは注目すべきである。（初卯が一時内対面所で行なわれるが、後に元へ戻る）。伝統的な諸儀式は御座間と小廣間を軸として営まれるものであることを知る。

書院はもともと儀式、対面の場としての性格はうすいといふべく、謡初が以前に書院で行なわれていたのも、謡初が対面ではなく、鑑応を主としたものであつたからでもあろう。

この謡初は、江戸藩邸においても書院で行なわれ、諸大名、旗本衆を招請して行なつてゐるが、仙台ではこの謡初に参加するものが専ら自家の家臣に限られているのも、城館におけるこの種の儀式の特色である。⁽⁵⁾

表3 月次御礼と建物との関係

〔治家記録、御入部以後諸御規式並御参詣等之覚による〕

仙台城の建築

本丸御座間	書院	大廣間		
慶長18(11・15)		一家、一族		
二丸(元禄改造前)	御座間	書院	小廣間	間
寛永20(6・1)		一門、一家、一族	諸士	
明暦3(2・15)		一門、一家、一族	士	
延宝3(10・28)		一門、一家、一族		
延宝6(3・28)	連枝		一門、一家、一族	
天和2(2・28)			一門、一家、一族	
二丸(元禄改造後)	御座間	内対面所	小廣間	(表対面所)
元禄7(11・15)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人	
享保9(4・28)	連枝・奉行	一門	品所以上	
宝暦2(11・28)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人	
文政11(8・1)	奉行	一門	一家、一族、諸役人	

表4 主なる年中儀式と建物との関係

〔竹山公治家記録による〕

	連歌	政治	初詣	初法	間初	卯立	猪	歌会	初瀬	祭	初仕	算	初
延宝4~8	連歌間	御座間書院	小廣間	小廣間	小廣間	小廣間	御座間						
(元禄改造前)													
元禄8~16	連歌間	御座間	御座間	小廣間	小廣間	小廣間	御座間	御座間	内対面所	内対面所			
(元禄改造後)													

* 元禄14~16は内対面所にて行なわれる

内舞台

天和二年より元禄六年に至る間は、書院がなくなり（少くとも使用されなくなり）、そして内対面所は未だ造立されない時期に当たるが、この時には玄猪は御座間で行なわれたが、脇初は小廣間で行なわれた。⁽⁶⁾

講祝初、仕舞初の儀は新設の内対面所、内舞台（内対面所の前面に接続する座敷舞台）と共に新たに加り、以後二丸に於て恒例の行事となつた事も注目に値しよう。⁽⁸⁾

つぎに饗応、接客の面についてみると、鶴領の上使の応対は、寛永十七年の時の書院で面接し、御座間で饗しているが、以後寛永十八年、同二十年、正保二年、同四年、慶安二年等の例ではいずれも小廣間で面接し（鶴を小廣間上段に置く）、書院で饗応し、表で能、数寄屋で茶、鑑之間に出で帰恩という順序で行なわれている。⁽⁹⁾ その拜領の鶴は直ちに家臣達に分配されるが、「朝御拜領ノ鶴御披御」一門中ハ書院一家一族ノ族ハ小廣間御家老及ヒ番頭御相伴ノ輩ハ御談合ノ間焼火ノ間廊下窓上ハ御用ノ間に於テ御料理」を賜り、饗膳の場として、書院は最上位の使われ方を示す。

延宝三年綱村入國の際に、父君、母公よりの質使は書院で拜謁し、焼火之間で料理を賜り、稻葉氏（綱村夫人の里方）よりの使者は書院で拜謁し、客之間で料理を賜り、そして諸大名よりの質使はすべて小廣間で接見し、客之間で料理をうけている。⁽¹⁰⁾ 即ち使者の性格により、接見の場所、饗応の場所をそれぞれ異にしている。そして書院が斯く拜謁の場所として用いられることがあつても、小廣間に較べて、より内向きの性質をもつことが特徴的である。

奉行職（家老職）を命ぜられる時は御座間で、その御礼は小廣間で行い、そして料理は書院で賜る。⁽¹¹⁾
元禄四年、即ち書院も内対面所ともにない時期に、田村右京大夫参勤に就いて挨拶のため登城した際は、右京大夫はまず小廣間に着座し、次いで御座間に請じ入れられて面接し、かつ饗を享けている。新たに内対面所が出来た後の元禄十年、鉄牛和尚登城し、内対面所で暫く待つてから御座間に於いて饗応された。⁽¹²⁾ 八重姫入興調査を貢するため、元禄十一年、水戸家より参じた使者は、まず客之間に案内され、表対面所で接見し、口狀を述べ、盃を賜っている。

客之間

御座間

数寄屋

鑑之間

元禄十一年八月「公去年御能命セラレ且御能拜見ノ賀儀トシテ能アリ一門一家一族衆諸役人及大番組等ニ至^テ拜見ヲ命セラ^レれた時は、一門衆、同子息、一家、一族衆は対面所（小廣間）、家老衆は内対面所裏座敷、大番頭は元焼火間上ノ間、小姓組番頭以下江戸番頭、出入司は同下ノ間、芝田文久郎は焼火間（新焼火間）、小姓組小共見習・〆切番以下は大台所廊下に於て料理を頂戴^{シテ}している。

小廣間で一門、一家、一族衆等に料理が費せられることもしばしばあったが、儀式を作らうか儀式的性格の強い場合が多い。

また内対面所も裏座敷は家臣、寺院衆の料理の場となることがある。さらに焼火間、客之間、匂公間等も、身分に應じ、機に臨んで接応の場所としての機能をもつたものであつた。^{（注）}

これに比し、書院は當時接応を考慮に入れた格式高い接待用の部屋であったと思われる。居館においては江戸藩邸などとは異り、その性格上、当然のことながら家臣に対する接応の例は比較的多いが、客人來訪の機会は少く、眞の意味での接客、客への接応の例は極めて少いのが実情である。

君臣の間に行なわれる、拜謁、命令、御礼といった行為は最も頻繁にみられるが、そのうち年始、月次の御礼に就いてはすでに述べたので、これを除いたものにつき、改造前後に分けてみたものが表5である。

改造前では、諸大名の使者、公儀關係の使者との接見が小廣間に限られていること、また使者を命ぜられる場合の使者の性質から推して、小廣間には御座間、焼火間、書院に較べて、より对外的、公式的傾向がみとめられる。

御礼關係については、奉行職のときだけが小廣間で行なわれる。一門、一家、一族の総目御礼も行なわれるがその例數が極めて少く、一般には他の御礼は焼火間、書院がむしろ中心である。この時期の御座間では、使者や重役の拜命が行なわれ、接見ならびに御礼の例は殆んどみられない。御成りに対する御礼は、まゝ御座間のことであつたが、専ら焼火間で行なわれていた。

表5 接見、拝命、御札と建物との関係
〔吉山公治家記録による〕

	菊 座 間	焼 火 間	書 院	小 廣 間 (表 対 面 所)
基業3 見・拝 謁			<ul style="list-style-type: none"> ○將府馬賀衆 ○父若、母公ノ使者 ○伊達志実(妹清姫ノ婿) 	<ul style="list-style-type: none"> ○將府馬賀衆 ○公方ヘノ使者 ○集中ヘノ使者 ○母方ノ使者ヘ狀ヲ送ツ ○守社、廟等ヘノ名代 ○一門、一家、一族ノ休暇、參府 ○詔大名ノ使者 ○守社、廟ヘノ名代 ○一門、一家、一族ノ休暇、參府
	使者	○禁中ヘノ使者ヲ命ズ	○公方ヘノ使者ヲ命ズ	○公方、公儀ヘノ使者ヲ命ズ
	役日等 ラ合ズ	<ul style="list-style-type: none"> ○父若、母公ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、大番頭、奉業医等 ○守社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○近習、准一家ヲ命ズ 	<ul style="list-style-type: none"> ○父若、母公ヘノ使者ニ書サ ○守社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○小姓頭、名掛頭曰頭ヲ ○一門、一家、一族ヘ休暇ヲ命ズ 	<ul style="list-style-type: none"> ○禁中ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、大番頭、奉業医等 ○守社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○近習、准一家ヲ命ズ
基業8 (改進前) 御 禮	御成り(家臣宅)	<ul style="list-style-type: none"> ○御成リノ御札 ○一門様組ノ御札 ○着座命セラル御札 ○出入司、納戸役、浅布作事奉行、江戸出入司、品川老命セラル御札 	<ul style="list-style-type: none"> ○一門ニ命セラル御札 ○一門、一家ノ家督、同居、初チノ御札 	<ul style="list-style-type: none"> ○奉行職命セラル御札 ○一門、一家、一族ノ雜用ノ御札
	御 家 間	焼火間、元燒火間	内 対 面 所	小 廣 間 (表 対 面 所)
	<ul style="list-style-type: none"> ○公方、公儀ヘノ使者 ○父若、嗣君、北方ノ使者 ○一門參府 		<ul style="list-style-type: none"> ○公方、公儀ヘノ使者 ○親戚大名ノ使者 ○大名ヘノ使者 ○守社、廟等ヘノ名代 ○一家、一族恭所 	<ul style="list-style-type: none"> ○大名ノ使者 ○一家、一族諸子參府
元 標 9	使者	<ul style="list-style-type: none"> ○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、若老、大番頭、武頭、近習、小姓頭→不 断頭、名掛頭ヲ命ズ ○所持、役目替、加増ヲ命ズ ○一門、奉行、若老等ニ休 暇ヲ命ズ 	<ul style="list-style-type: none"> ○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○仙洞ヘノ使者ヲ命ズ ○守社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○一家、一族ニ休暇ヲ命ズ 	
	御 賀	<ul style="list-style-type: none"> ○宿老、永代着用、着座命 セラル御札 ○生所押領ノ御札 ○奉行隨店ノ御札 ○奉行、若老、銀奉行、廣 木足綱頭、小姓頭、小作 与頭、近衛命セラル御札 ○一門休暇命セラル御札 	<ul style="list-style-type: none"> ○一家、宿老、着座、着頭 戴命セラル御札 ○分知ノ御札 ○一門、一家、一族、番頭 格以上ノ家督、隸屬、初 テノ御札 ○大番頭、監番頭、中次役、 武頭、足駕頭、鉄奉行、 歩小姓頭、不断組上頭、 密守番頭、評定所役人、 歩小姓頭、名掛頭等命 セラル御札 ○一家、一族休暇命セラル 御札 ○御成リ、入院ノ御札 	<ul style="list-style-type: none"> ○詔所以上、徒小姓頭、城 番支配等ノ家督、隸屬、 初テノ御札 ○微出ノ御札 ○組免許ノ御札 ○入院ノ御札
	16 (改進後) 礼			

改造後は御座間と内対面所とにこれらの諸行為が集中され、秩序化される傾向にあり、その場合、御座間では奉行、若老等の重職、および近習諸役の御礼、そして内対面所ではそれ以外の表諸役の御礼というように区別され、小廣間では役目の御礼は影をひそめる。

一門、一家、一族等大身侍が仙台へ参府した時の拜謁や、在所への休暇の命令を受ける時、そしてその御礼に關しては、一門衆が御座間、一家、一族衆が内対面所と、これも區別されるようになつた。諸大名よりの使者は依然として小廣間で接見するが、公儀への使者は御座間、内対面所で拜謁するようになる。これは公儀への使者は自家の家中より任命するため、他藩よりの使者とはおのずから區別した扱いをうけるようになつたものであろうか。

焼火間は改造前にはその利用範囲が廣かつたが、改造後は藩主が親しく出座して使者や家臣に接する場所ではなくなるのも大きな変化と云えよう。むしろ家老、若老等による主君の命令伝達の場、家臣への料理の場としての性格を強めて行く。

即ち二丸に於てはまず書院の重要性が薄れ、ついで改造を機にして対面關係に重点がおかれて、対面關係の強化、格式化、秩序化という方向が頗るに打ち出されている。

以上のように重要な儀式、対面、接客、饗應、御礼等の場合に小廣間（表対面所）、書院、内対面所、御座間等がその主役をなしていたことが理解されるが、なお他にこれらの補助的な役目を持つた諸部屋がある。

焼火間に加えて何公間、客之間がこれで、上之間、下之間より成り、床の間を備えているなど、上位の部屋としての共通した特徴を持つのである。ともに父君、母公、北方、嗣君を始め諸大名の使者等を接する時に使用され、その面では極めて類似した性格を示す。

三者の使者対応に関する使用例を挙げてみると、

延宝三年	燒火間(元)	伺公間	之間
○父君・母公ノ使者	○宇和島伊達家ノ使者	○伊達郡孤高代官ノ使者	
○父君ノ使者	○水戸家・真田家等大名ノ使者	○細井家ノ使者	
○父君、北方ノ使者	○母公ノ使者	○宇和島伊達家ノ使者	
○父君ノ使者	○田村家ノ使者	○伊達郡孤高代官ノ使者	
○副君、北方ノ使者	○宇和島伊達家使者	○宇和島伊達家ノ使者	
○副君ノ使者	○細井家ノ使者	○伊達郡孤高代官ノ使者	
○母公ノ使者	○宇和島伊達家ノ使者	○宇和島伊達家ノ使者	

(青山公、鷹山公、忠山公治東記録による)

燒火間
伺公間
客之間

即ち元禄の改造期を境として焼火間、伺公間、客之間に、使者要応の面で変動があつたとみることができる。従来の焼火間は、使者要応に限つて云えども、そのまゝ元焼火間としてその機能を存續させ、新焼火間に移らなかつた。

焼火間、伺公間、客之間の他の用例についてみると、「朝表ニ於テ番頭目付ノ輩焼火間ニ於テ小姓組右筆ノ輩ニ御鷹ノ鷹料理ヲ賜フ」とあつて、焼火間は客之間、伺公間に較べてその位置の示すように、より内向きの場所であつて、小姓組、右筆等の要応に使用される。萬治二年綱宗入國祝儀の際は、祝儀そのものは書院で行なわれ、奉行衆が焼火間で料理を賜つてゐるが、この時小姓組は小姓衆ノ間で、右筆、茶道の輩は物書部屋で料理をうけ、大番組以下

燒火間
伺公間
客之間

定供、小道具役衆までは虎之間で、御納戸衆等は夜居之間で、そして歩行衆、鷹師衆等は廣間で、それぞれ料理を賜つてゐる。家主に対する饗膳の場合は、焼火間では奉行衆、若老衆、近習関係諸士の例が多い。

將軍家への献上物は、例えば貞享四年の菓子鶏⁽¹⁾、元禄三年の黄鶴⁽²⁾、焼火間で覽るのが例であつた。新焼火間が出来ると、從来の焼火間は元焼火間と呼ぶに至るが、元禄五年には焼火間で献上の初鶴、元焼火間で献上の鷹を覽つてゐる。この点では新焼火間も旧焼火間も全く同様の使われ方を示す。

貞享四年七月十五日「於焼火間上將監殿大藏殿致馬鹿兵庫殿へ新米ヲ賜フ」と、即ち焼火間で連枝衆が新穀を賜つてゐるが、新焼火間が出来上つてから元禄五年の七月十五口には、元御座間（やがてこの位置に内対面所ができる）で連枝、宿老が、新焼火間で若老、若老並、出入司、小姓組番頭等が、そして元焼火間で郡司が新米をうける。元禄九年には新焼火間で連枝、奉行衆以下出入司、若老、若老並、小姓組番頭等が、元焼火間では郡司が新穀を賜つてゐる。新穀下賜の儀に關しては元禄改造期を境にして、かつての焼火間の機能を新焼火間に移したようにみうけられる。

新米拜賜の儀は伊達家において幕末までつゞいた恒例の行事でもあつた。

初卯の儀式は小廣間（表対面所）が中心の儀場となつたことはすでに觸れたが、その時の具足餅を家中に分配するのを例とし、元禄元年「於御対面所下之間伊達將監殿大藏殿御具足餅御酒頂戴於焼火間諸役人頂戴於御次日野鉄船佐藤七之丞頂戴於大所小姓組右筆茶道ノ張頂戴於御用間上間定供大番組番外同朋頭中ノ間徒組頭組付士大所人坊主組頭同朋坊主馬方下ノ間足輕小人諸職人馬取駕籠ノ者等頂戴」と、即ち焼火間では諸役人が頂戴する。この關係は元禄四年の時にも同様で、元焼火間で奉行衆若老以下諸役人が具足餅を頂戴していく、新焼火間でなく元焼火間に受け繼がれている。新焼火間は藩主の饗膳の場となることもあつたが、元焼火間にはそのような例はない。

要するに焼火間は元禄改造後には藩主との直接の拜謁、命令、御札等は全く行なわれなくなり、父君、母公、北方、

仙台城の建築

兩石等伊達家個人の使者や家士に対する饗應の場としての性質がより強くなつて來たことが認められる。

元焼火間は元禄以降、若老、出入司、納戸奉行、日付等の詰所でもあり、従つてこゝでは奉行、若老等による君命の伝達が行なわれるに至つてゐる。元禄の改造後もしばらく元焼火間は上、下の二間より成つてゐたが、後に改めて一部座のものとなつた。

新旧焼火間を通じて云えることは、元来その位置が御座間、休息所に近いためか、その用途も御座間の延長、御座間の補助的な色彩の強いのが特徴である。

同公間は小廣間の裏にあつて、また連歌間とも称される。上之間と下之間より成り、上之間をとくに連歌間、その場合上之間を同公間と云つて区別することもある。

連歌間では毎年正月七日の恒例の連歌会が催された。連歌間の呼称のある所以である。

その時こゝで連歌衆に料理が饗應されることもある。また「奥方安鎮龍宝寺執行因テ於連歌間料理」と、寺院の饗應に用いられているし、元禄六年能始めのときは、一門衆には馬場座敷、家老衆には元焼火間、そして一家、一族衆にこの連歌間で料理を賜つてゐる。同公間は諸士の詰所の一つであり、同公間詰と称され、彼等の家督、継目御礼等がしばしば行なわれ、その廊下では大所人等の微出御礼も行なわれている。

寺社への名代が同公間で拜謁することもあり、また真淨殿（將軍家の位牌を安置する）が落成し、その名代と造営奉行が登城して、対面所で拜謁した時、造営副奉行が同公間の下之間で拜謁している。天和三年には一門衆の住所への休暇が御座間で出され、一家、一族衆の休暇はこの同公間で賜うてゐる。

元禄三年九月日光普請成就の賀には、一門、一家、一族衆へは小廣間で、一家、準一家、一族衆の嗣子には同公間で餅及び料理が出された。

天和二年より元禄三年に至る間は、書院も内対面所もともにない時期であることに注目するならば、同公間に表対面

所の補助的なもしくは後の内対面所に近い用法のあることもうなづかれるであろう。

綱村入部後の延宝五年に一門、一家、一族、宿老、奉行等の詰所を規定したが、その際に一門、一家、准一家、一族は小廣間次之間、片倉小十郎及び宿老は小廣間の裏座敷、奉行衆は連歌間とした。^{柳之間} そして伺公間詰、焼火間詰、配膳所詰等々元禄三年頃までにそれぞれ役目、出自、功績に従い君命によつて部屋付けが次第に整えられた。この場合の小廣間裏座敷とは「覺籠寺名代帰還藤山城於伺候間^{柳之間}」、「保春院殿御代參取小梁川修理小廣間裏座敷ニ於テ拜謁」の用例を比べて、伺公間を示すようにもうけとれるが、一般には小廣間次之間の裏縁通り（後世俗に柳之間と称する）とみる方が無難であろうか。

元禄初年に二丸大改造があり、従つて詰所にも改訂が行なわれた。即ち元禄五年、

一 私共奉行衆 本御座間ノ次ニ可罷在由被仰付候事

一 若年寄衆 本焼火間 下之間ニ出入可、御納戸奉行、御口付可罷在事

一 本焼火間 上ノ間ニ可罷在事

奉行衆の詰所は連歌間であったが、このたび元御座間の次之間に変つた。この元御座間は新御座間が出来るに及んでやがて内対面所として新出発するが、それからは内対面所の續きの部屋（後に六間座敷と称される）が奉行詰所となる。

元禄五年には更に元焼火間下之間、伺公間上之間、同下之間、同縁通り等、常日の詰所および例月御礼等の詰所がそれぞれ役目、家格によつて区別することが言い渡されている。^{柳之間}

即ち詰所にも元禄改造の影響は及んでおり、家士の秩序化に大いに努めている事実が認められる。伺公間、元焼火間、大間座敷等は時により奉行、若老等の詰所であったため、彼等と諸役人、諸士との間に君命の伝達等が行なわれていたし、また主君のお通りの際、それぞれの詰所において立札目見が行なわれていた。

客之間はさきに觸れたように、諸大名よりの使者を應するときによく用いられ、また大名使者および一門衆との対面が小廣間（表対面所）で行なわれる場合に、ひとまずこの客之間で待たされる仕組みであった。

初卯の具足餅頂戴の際にはしばしば対面所や煙火間と共に併せ用いられるが、その時には例えは元煙火間では奉行衆、諸役人、そして客之間では大番頭、脇番頭、不斷頭、給主頭、名懸頭、新名懸頭、足輕頭等のように、家士の役柄、身分等によって區別した用い方をする。

野初めの煙の料理を櫻武頭中に客之間で振舞っている。組頭、武頭の用例が多く、煙火間とは應応をうける家臣の性質が異つていて氣付く。

「鉄牛和尚東昌寺萬寿寺御礼トシテ登城御燔城ノ砌於客間對顔」、「於客之間極樂院年始ノ賀儀太刀目録拜謁」、「於客間普導寺十帖一柄献上入院ノ御札」のように寺院との対面、入院御札にもまた廣く用いられている。

明暦大火直後の江戸浜屋敷にまづ客之間なる部屋名がみられ、つゝいて寛文度の愛宕下上屋敷にも客之間なる呼称の部屋があつて、同様の用例が指摘できる。客之間といふ呼称は江戸邸の影響で仙台城にも用いられるようになつたと考えられ、江戸邸においても慶長、元利、寛永代の上邸においてはその名を發見できない。明暦大火後にはじめてあらわれる語であり、従つて寛永の二丸造営期の引証記中にこの名が見えず、後になって現われてくるのもうなづけるところである。

古くは客之間の呼称を用い、別呼称をもつていたらしいことがこゝからも推測される。客之間における特色ある用法として、一門衆刷子の元服埋髪の儀が挙げられる。「於客之間伊達安藝殿長男伊達源五郎殿元服埋髪大條監物公御書院ニ御出初冠素袍并認基御字ヲ賜フ御一字及ビ兵庫ノ名目錄柴田中務御前ニ授ク公御手自賜之」、「石川松之助殿伊達兵力殿伊達孫吉殿各元服命セラル於客之間松之助殿上理髮柴田源四郎堵兵力殿上理髮柴田上佐吉殿ハ前年中刺セラルニ因テ無此式」。この他伊達卯之助の元服（元禄三・十二・十四）、伊達吉之助の元服（元禄十五・九・一）

夜居之間
客之間座敷
客之間押込

三沢門弥の元服（宝曆八・大・九）等いずれも客之間においてその理髪の儀式が行なわれている。

客之間の向いにある夜居之間はまた客之間向座敷、客之間押込とも云われるが、寺社衆、医師等の御礼、拜謁が行なわれるのが特色で、その例を二、三しめすと

「於夜居間熊野本宮尾崎坊札卷數并樽肴矢根百木献上并医師ノ嗣子於聞所諸土及嗣子拜謁ノ裝六十七人其外乱舞方并諸職人奉伏謁」⁵⁰

「御出ノ刻客之間向座鉛栗原郡三追岩箇崎黃金寺牡鹿郡門脇普請寺各一束一柄前ニ置入院ノ御礼」⁵¹

「晝表ニ御出於夜居間鉛木道竹櫻目ノ御礼」

また贊⁵²の場合は「奥方安鎮龍宝寺執行因テ於連歌間料理⁵³鑿應役和田織部於夜居間六供僧ニ料理振ヲ賜フ」、「公新造ノ御座間ニ御出⁵⁴安鎮御拜畢テ……於連歌間龍宝寺ニ料理ヲ賜フ中島伊勢屋待於夜居間六供ノ僧ニ賜之高平彦兵衛⁵⁵」。即ち安鎮の寺院が連歌間で、六供の僧が夜居之間でと區別して料理をうける。連歌間より一段と低位のところである。また「於夜居之間進物役人并ニ鷹師兩人ニ料理及ヒ白銀ヲ賜フ」、「進物副役人加藤左助ニ於夜居間料理ヲ賜フ」とあって、進物役人に対する御馳走が夜居之間で行なわれる。岡で見る如く、夜居之間に隣接して進物部屋があつて、これが進物役の役所であったので、こうした使用例が夜居之間でみられるのであろう。

書院の裏にある書院勝手敷⁵⁶は「書院勝手ノ間」とも呼ばれる。書院裏座敷とある場合、こゝを指すのか、あるいは書院北側の縁通りの部を云うのか明確でない。

書院勝手では儀式、饗饌の例がみられず、その内容を具体的に知り難い。書院が破却消失してからはこゝを元書院と称しており、文化の二丸焼失後も依然として元書院⁵⁷と呼んでいるが、字義の示すまゝ元の書院とみるのは誤りで、実は元の書院勝手に当るのである。

廣次中虎
之之間
間間間

「拜謁」と、小姓組、右筆の嗣子等の拜謁がここで行なわれるが、一般には「書院勝手座敷ニ於テ品川小姓組齊藤作右衛門子十三郎……家督ノ御礼」のように品川小姓組（綱宗隠居の品川屋敷付きの小姓組）の嗣子の家督および初めての御礼等に限つて使用されているところが特異である。

虎之間、中之間、次之間、廣間はともに遠侍系統の部屋で、大番士の番所四間を構成する。例えれば比較的早い時期の正保元年十月十三日「此日大番組并嫡子ノ輩及ヒ御用人小人組不斷組鷹師組御番所前縁類ニ於テ御通リニ御目見」、同年十月十四日「此日御木丸博多間ニ於テ御祝儀饗宴アリ……二丸御番所前縁類ニ於テ給主組名懸組御通り御目見」にある「番所」とはこれらの諸部屋を指すものであろう。延宝三年

「御畠城ノ節於虎之間武頭熊谷平左衛門直治……拜謁江戸勧番罷下リ御入國御礼同所縁類ニ於テ相州大山寺繁昌坊夜居間平井松庵山元一雲正木玄興客之間下座常州龍崎大統寺虎之間押込猿樂春藤源七幸清六……此余中之間次之間廣間等ノ縁類ニ京都江戸ノ市人或ハ工人等御入國ヲ賀シ奉リ罷下各獻物奉伏謁」
また同年十二月二十六日

「書院勝手ノニ座敷於テ品川小姓組ノ嗣子一人虎之間武頭及ビ役人等八人役人并番上ノ嗣子七人中之間番十四人嗣子二人中之間縁類通り番外士十二人嗣子一人次之間六人嗣子三人廣間八人嗣子七人各太刀馬代獻上拜謁」
とあるように、こゝでは藩主の外出及び帰邸の際の、通り目見や立札の行なわれるのが普通である。番士及びその嗣子は一般にそれぞれの番所で、武頭、役人等は特に虎之間に於て、また各番所の縁通りで番外士、小人組、不断組、鷹師組、給主組、名懸組等の組士、更には市人、工人等に至るまで拜謁する。市人、工人等いわゆる凡下の衆は伏謁という形をとる。

虎之間向いの押込みは虎之間向座敷とも云われ、一門衆の使者の伏謁や、医師、猿樂師等の拜謁の例が多い。
虎之間向座敷

番所は藩主の出入の際必ず通るので、その際の拜謁が多いのであるが、また種々の祝儀時に料理を賜る場所ともな

る。

萬治二年五月十五日の御宗入國の祝儀は書院で奉行衆、小姓衆之間で小姓組、物書部屋で右筆、茶道衆、台所番頭、坊主頭、そして虎之間では大番組、腰物奉行、手水番、薬込、定供、小道具役衆、廣間では台所衆、歩行衆、薬師衆が賜っている。

家臣饗應に虎之間、廣間等の番所も利用されることがあるが、最も低位の使われ方であると考える。

用之間は絵図上ではその位置が判然としないが名称はすでに早くからみられ、寛永以來存在していたことは確かである。用例は治家記録によれば正保二年よりみられる。「朝御拜領ノ鶴御波御一門中ハ書院一家一族ノ族ハ小廣間御家老及ビ番頭御相伴ノ輩ハ御談合ノ間焼火ノ間廊下惣士ハ御用ノ間ニテ御料理調理」を賜わる。その使用内容からみて、書院、小廣間、談合ノ間、焼火間より下位の部屋であることは明らかで、さきの虎之間、廣間等番所の使用に類似している。この時の談合ノ間なる呼称は後にみられないが、あるいは何公開のこと云うのであろうか。

元禄元年の初卯のとき「伊達將監殿大藏殿」等の一門衆は対面所の下之間で、「日野鉄船佐藤七之丞」等の近習は御次（御座間の次之間ならん）で、「小姓組右筆茶道ノ輩」は大所で具足餅と酒を頂戴し、その時に用之間の上ノ間で「定供大番組番外同朋頭」^{脚注}が、用之間の中ノ間で「徒組頭組付土大所人坊主組頭同朋坊主馬方」^{脚注}が、用之間の下ノ間で「足輕小人諸職人馬取馬籠ノ者等」がそれぞれ具足餅と酒を享された。

つまり用之間は上、中、下の三間より成り、大番十以下の饗應の場所となつていて。

元禄三年九月、日光普請成就の賀儀のときは数日間にわたって宴席が設けられ諸士に御馳走が給されたが、用之間ではまず「大番組并次医師」、ついで「江戸番組留守番組定供出入司以下評定所役人ノ嫡子大番組六番ヨリ十番迄一「諸色小奉行二十四人番入大番組歩小姓組共ニ七十人」、「諸組士番外二百七十二人」にそれぞれ料理が与えられた。

元禄四年初卯の時も元禄元年の場合と同様で、用之間の上座敷では詰合の奉行見習、定供、大番組、諸役人、同朋頭

御座間

が、中座敷では番外、徒組、諸組付、大所人、坊主組頭、同朋、坊主、馬糞が、下座敷では足轡、小人、諸職人、路番組ノ弟次男等於同所下聞詰賜之」と、即ち料理の場所としては常に大番組以下五二の衆に用いられ、焼火間、伺公間、客之間等より低位のものであったことが分る。

元禄六年一月二十五日、伊達安藝を饗し能興行を催したときは「大組番ノ輩并家督於用之間上料理五二組付ノ輩番外大番組ノ弟次男等於同所下聞詰賜之」と、即ち料理の場所としては常に大番組以下五二の衆に用いられ、焼火間、伺公間、客之間等より低位のものであったことが分る。

御座間は藩主の表の居間であるが、先述したように、使者や家臣が拜謁し、諸種の役職を直接命ぜられ、またそれに対する御礼を行うとともに、元日、月次、政治始め、讀書始め、玄猪、歌会始め、等々の年中恒例儀式の際にます連枝、近習と共にこゝで祝儀を行い、それからそれべくの座敷に出座する慣習である。

そして節分、月見安、誕生祝い、あるいは能興行、帰國祝いに際しての諸祝儀もいずれも御座間でとり行なわれるが、これら祝儀には食餌が伴い、連枝、奉行、近習等が侍食に加わるのが常である。

諸所から贈られたり、諸所へ獻上したりする壺口切の茶開き、重陽内書の拜覽、諸寺院、父母、北方等よりの守護札を貯藏し、初卯の聖像拜礼、さらには仕押等もまたこの御座間で行なわれた。儀式、婚礼、法事、能興行その他諸種の行事が調査した時に、連枝、奉行がその賀詞を述べるのも御座間である。

家老衆（奉行衆）はしばく御座間に呼ばれて萬般の相談をうける。

表に出る時、表より入る時、家老並、近習、近習医等の嗣子が、あるいは御座間縁側で、あるいは御座間の次之間、寄場ゆせばで拜謁して諸種の御礼を行なつた。

田村右京大夫、鉄牛和尚のような人は御座間に請じ入れられて接見し、靈應をうけている。一般に客人の來訪する機会は稀であったが、この種の客人は本来書院において饗されるべきであるが、右の例はいずれも書院のなくなつてゐる時期のものであることに注意したい。一門衆子息の元服名拜受の儀、聖像拜礼なども從来は書院で行なわれていた

のが、御座間で行なわれるようになつたことと併せ考へると、書院消失と共に書院機能が御座間へ一部移行したものかと解される。

表における藩主の就寝、休息のためには別に寝所、休息所があつて、これがいわば私室に相当し、そこから毎日御座間に出席するのであり、御座間は純粹に私的な部屋ではなく、公的な性質をも持つものである。

小広間脇の馬場座敷は規模は小さいが、上、下二間より成る。寛永代二丸造営の当初にはその名は未だ見えていない。

すでに述べた如く、治家記録によれば書院の語及び用例は天和二年頃よりみられなくなり、逆に馬場座敷は天和元年頃より現われてくるので、書院の消失と馬場の出現、馬場座敷の呼称の確立とは互に関係があつたものと考えられる。天和元年九月二十七日、綱村妹夏姫婚儀が馬場座敷で行なわれ、「夏姫御方今日伊達安房殿へ婚ニ就テ伊達將監殿屋敷ヨリ登城門ヨリ馬場座敷ニ入ラセラレ御祝儀アリ……夏姫御方客之間重縁際ヨリ乘輿玄闇ヘ徒組昇之式臺ヘ……」との記事が見えるが、馬場座敷へ屏地門を経て入っている。

馬場座敷の呼称の生ずる所以は、馬場における馬術の閑覧がこの座敷の主目的となつたからに他ならないと考えるが、実際は種々に用いられている。例えば將軍家の献上の茶の試飲¹⁷、近臣に対する茶の饗応¹⁸、家臣よりの茶の奉¹⁹、茶事に関する用例が多くみられる。

元禄初年二丸の大改造後は新築の数寄屋、園等に専ら茶事が移つたためであろうかこのような例がなくなる。御座間の園の普請中は藩主はこゝを居間の如くに使用している。

「於馬御覽所晚食將監殿侍食」、「已刻表ニ御出詰所アル諸役人拝謁能興行……於馬場座舎公湯瀬上之於連歌間御一門衆家老衆へ後段等出」²⁰、「直ニ馬場座敷ニ入セラレ晚食於外舞臺慰能三番」²¹等馬場座敷は藩主の食膳の場ともなつたし、「将監殿若狹殿數馬殿助三郎殿田手亥之助殿砂金臨吉貞理孫吉へ御能拝見命セラレ於馬場座敷料理²²賜²³」、

「能始メアリ御一門衆及住府ノ一家一族衆以奉書登城見物詔所アル役人并大番組ノ装ニ拝見セツル……於馬場座鋪御一門衆於連歌間一家一族衆於元焼火間家老衆大町備前茂庭下野奥山長十郎古内源吉料理師^{アタマ}アタマ^{アタマ}」とあるように、一門衆に対しこで料理が与えられている。また幕府の奥州馬賀衆に料理を享している例もある。

藩主の食膳といふ、幕府の役人にに対する馳走といふ、はたまた上級家士に対する贊応といふ、能興行とともにこの座敷が利用される場合が多いが、書院に類似した性格が認められるのである。これは小廣間前に表の能舞台があり、小廣間脇に馬場座敷があり、互いに近接した位置にあるためにもよううが、小廣間の奥にあつた書院が失われることにより、その役割を一部この馬場座敷が受けついだものと見られないこともない。

客之間、焼火之間（元）、連歌間（伺公間）、そして新設の馬場座敷も含めて、これらの部屋はともに上、下の二部屋よりなり、あるいは床の間を備えていて、形の上から他の諸部屋に較べて上位の部屋たることを思はせたのであるが、これら諸部屋には藩主が直接出座することがあつても、他の部屋には全くその例がなく、その違いは用途の上からも指摘できるようである。

以上、一見複雑に見える二丸の殿舎も、個々の建物の間取り構成は上・下の関係を強調して表現され、主要建築相互は階段的に曲折して配列されているが同じく線的な繋がりを基調とする。また諸建築ないし諸部屋の用いられ方をみると儀式、対面、饗應等殆んど藩主とその家臣によってとり行なわれ、城館における諸行為の主軸となつてゐる。二丸殿舎の構成も個々の建築の間取りも全くこの関係をもとにして成り立つてゐる。元禄の改造はこれを建築の上で更に充実し、明確にしたものに他ならない。

君臣間の御礼という行為を中心としてみたとき、家臣の身分、格式、役柄の、上位から下位に応じて、個々の部屋、建物における御礼の時間的順位、御礼形式の輕重、礼席の上下は勿論のこと、行為の場所自体も、御座間→内対面所→小廣間の順に、位置でいうなら内から表への順に段階的に秩序化されて來ていることを知る。

(1) 註

「青山公治家記録 天和一七・二」

「辰上御所ニ御出御一門一家ノ事ヲ悉セラル小廬間上ノ間ヨリ下ノ間ニ至リ附類ニ着用。」

「伊達安房守登城……於御對面所桂馬太刀一腰一匹、馬一頭三疋、荷車上駕斗出……安房守退出ノ御小廬間上ト下ノ間仕切障マテ公御出修原伊達は同天和一九・二七

(2)

「伊達安房守登城……於御對面所桂馬太刀一腰一匹、馬一頭三疋、荷車上駕斗出……安房守退出ノ御小廬間上ト下ノ間仕切障マテ公御出修原伊達は同天和一九・二七

翼長門山城玄関通縫ニ出

即ち小廬間次之間（下段）に於て挙揚しているが、この部を特に内面所といふ。

(3) (4)

同元禄七・一〇・一

輝宗代（天正一六年）、政宗代（天正一六年）、輝村代（天和二年）の正月行事を比較してみると、その内容に随分と変化がなく、伊達家における古くからの恒例行事であったことが分る。（天正二年一月正月仕置之事）、貞山公治家記録、青山公治家記録による）。

正月恒例行事の比較

口	輝宗代（天正二年）	政宗代（天正一六年）	輝村代（天和二年）
二	貢始・書始	野始	野始
三	連歌 心経会 詠合始	連歌 心経会 詠合始	連歌 心経会 詠合始
四	乱舞始・轟始	乱舞始	乱舞始
五	法印	法印	法印
六	講法	講法	講法
七	さう所はじめ		
八	選舉		
九	薦舉請願		
一〇	慶賀請願		
一一			
一二			
一三			
一四			
一五			
一六			
一七			
一八			
一九			
二〇			
二一			
二二			
二三			
二四			
二五			
二六			
二七			
二八			
二九			
三〇			
三一			
三二			
三三			
三四			
三五			
三六			
三七			
三八			
三九			
四〇			

- (5) 例えば青山公治家記録 天和二・一・一四 同 同 元禄三・一〇・六

同	天和二・一・一・四、貞享一・一・一・四、元徳一・一・一・四、元徳四・一・一・四
(6)	講詔始は以前にもあったようであるが、日時は未だ一月に恒例化していない。場所も御座間で行なわれ、後のように内対面所に固定化していく。
(7)	かった。例えば元徳三年には十一月六日、元徳四年には四月二日、御座間もしくは御座間で講詔始の儀が行なわれた。より古い例は見当らぬ。
(8)	義山公治家記録 寛永一七・二・七、寛永一八・一・五、寛永二〇・一〇・一五、正保二・一〇・二一、正保四・一二・一、慶安一・一一・三
(9)	同 正保二・一〇・二一
青山公治家記録	寛永三年の條 延宝五・一一・三月、天和二・三・一九、天和二・三・二一
同 同	元徳四・三・一二 元徳一・一・一五 元徳一・八・三 元徳一・八・二七 青山公治家記録中にも類繁にみられる 義山公治家記録 正保四・六・一六 義山公治家記録 正保二・五・一五 義山公治家記録 貞享二・五・二七 義山公治家記録 貞享三・九・三 元徳九・九・二九「焼火間ニ御山御歎上ノ初膳御斎又於元焼火間御歎上ノ膳御斎」
同	元徳九・九・七・七 元徳一・二・一二 元徳四・二・一 元徳四・四・一
同	「於新定燒火間ニ御斎又於元焼火間御歎上ノ膳御斎又於元焼火間口野鉢船若老並……ニ御膳ノ段ヲ膳フ」
同	元徳五・八・二二 同
同 右 邦ち	「一、若年者衆本焼火間上ノ門ニ可通仕事 一、本焼火之間下ノ門ニ出入司御納戸奉行御口付御仕事事 なお元徳二・八・二七にも元焼火間上闇、下闇の語が見える。
同	寛永の引証記中に、これに相当するものがみえない。また前掲二九指図中（四版91）にはこの部の間取りは示されているが、名称が欠けている。こ

の指図作成當時未だこの楽歌の正式名が明確に定っていなかったためであろうか。こすれば創建期には存在せず、後に附加された施設であると想

察される。延宝三年にはすでに延歌ノ間の用例がみえる。

延宝年間延歌間、何公間の両呼称を持つていて両者間にとくに差異はない。

「肯山公治家記」
延宝六・三・二

「父君ノ御使者小丸伊右衛門何公間トノ間ニ於テ料理ヲ賜フ」

同
延宝五・六・一

「御一門一家第一家一族兼小廣間次ノ間片倉小十郎宿老小廣間裏厚敷御奉行延歌間各筋所ヲ命セラル」

例えは肯山公治家記延宝四・一・六、貞孚一・一・七、元禄一・一・七、元禄四・一・七、元禄六・一・七、元禄一〇・一・七、元禄一四・一・七等、正月の七日に行われるのが一般であった。

同
延宝四・一・六

「御樂例延歌アリ……御通來ニ於延歌間料理ヲ賜フ」

同
元禄三・一・二・二・七

同
元禄六・一・九

例えは同延宝四・二・一六「今朝御出ノ時延歌ノ間廊下ニ於テ酒川伊豫家督御礼」

同
延宝五・五・一三「何公間上ノ間ニ於テ吉内酒呑屋左大夫太刀自縛紙上拜謁」

同
大和二・三・一「延歌間廊下大所人……各新ニ微出ナル御札目録紙上拜謁」

元禄以前は家老（奉行）の詰所でもあり（註因参照）、從つて「奉行ノ間」とも称された

天和一・九・一三「奉行ノ間廊下ニ於テ大所人久保田其之承業日御札目録」

延宝七・八・八「覺羅寺御名代船遠藤山城於荷役間舟焉」

天和一・五・一

天和三・一〇・一

元禄三・九・一八

元禄五・六・一（註因参照）

延宝五・六・一

延宝七・八・八

延宝七・一〇・八

元禄五・八・二二

元禄五・九・一三

元禄一・一・八・三

元禄一・一・八・三

「水戸守相殿少將殿ヨリ八重冠石御入奏御賀儀ノ使安藤亦左衛門登城式臺ニ大町清九郎若年寄大番頭申次役中之間上級頻通ニ奉行來出客之間ニ香苗我部庄兵衛案内ス下刻御對面所ニ御出候下段ニ御着座……」

60	貞享一・一・六「御野始ノ達於客間或武頭中ニ料理ヲ賜フ如例」
61	元禄一〇・一・十五
62	天和二・二・六
63	元禄四・二・八
64	元禄一・九・二二
65	延宝三・一・一・四
66	元禄三・二・一七
67	延宝四・三・八
68	貞享四・六・四
69	元禄四・四・二一
70	元禄三・二・一七
71	元禄四・四・一
72	延宝二・一〇・一九
73	元禄三・一・一・七
74	延宝三・二・一
75	延宝七・一・一八
76	延宝六・一〇・二二
77	元禄三・一・一・六、元禄三・二・一・八、元禄三・二・一・七、元禄四・一・一・八、元禄四・五・二等
78	元禄三・一・一・六「於虎之關押込石川大和殿使名古屋右衛門伊達安房殿使者加藤左右衛門伊達安房殿使者石川兵衛伊達外之助殿使者
79	元禄四・二・一六「於各之間葉木守於夜危間平東中尊寺經藏別当名取郡岩沼郷法常守於虎之關押込天神別當各十帖一柄献上入院ノ御礼」
80	元禄四・二・一六「中上刻御端於虎之間押込安房殿諸守就役後著久留」
81	元禄三・一・一・六「於虎之關押込石川大和殿使名古屋右衛門伊達安房殿使者加藤左右衛門伊達安房殿使者石川兵衛伊達外之助殿使者
82	元禄三・九・二六「於虎之間押込高野山觀音院使僧宗光院弟子箱獻上西關日光御普請成就ニ就キ御祈請ノ札共十帖一卷獻上」
83	元禄三・九・二六「於虎之間押込高野山觀音院使僧宗光院弟子箱獻上西關日光御普請成就ニ就キ御祈請ノ札共十帖一卷獻上」

入院御札の使用では、客之間、夜戻間、虎之間押込と順次表に至って低位の用いられ方をする。

元禄六・一・五「於書所向押込小川支御札阿彌陀書歎上」

義山公治室記録
正保一・一〇・一六

同

元禄三・九・一八、元禄三・九・二五、元禄三・九・二九

元禄四・一・一

元禄三・一〇・一八、元禄三・一・一、元禄三・一〇・二七

元禄三・一二・一五、元禄三・一二・一三、元禄三・一二・晦

延宝三・一〇・一三、延宝三・一・一、延宝四・一・一、元禄三・九・二五

元禄四・三・一三、元禄一〇・一・一六

元禄一・二・六

「於馬場座敷馬御覽」

同

「於馬場御膳馬御覽」
従つて元禄代に入つてからは馬場も施設済みの点と考えられる。

同

天和・一〇・一〇
「御献上ノ茶御試喫於馬場御膳侍食御達將藍坂石川十馬藏小平川修理〔木上野〕」

同

天和三・一・一、四
「晚於馬場座敷吉内造酒祐芝田之丸翁木謙安ニ茶ヲ膳フ」

同

天和三・一・二、一
「晚於馬場座敷橋本虎林日野篠巣川助太夫福井玄孝ニ茶ヲ喫フ」

同

天和三・一・六
「於馬場座敷伊達左衛門口切ノ茶奉饗アリ」

同

貞享四・五・一九
「御本舖ノ御書請初メ就テ馬場座敷御出己刻奉行御用有之」

同

「……御所御座御書請ニ就テ馬御所ニ入セラル」

吉山公治家記録 貞享四・五・二八

元禄四・四・一

元禄二・三・一

元禄三・一二・一五

元禄六・一・一九

貞享四・八・二二

「門奈助右衛門殿御訪邊喜右衛門叛御別トシテ登城……於御方面所公御櫻見料理出土茶刷附アリ鐵ノ墨リ茶ヲ燒セラル於馬御所吸物菓子出舉手
通語」

結び

以上概略ながら仙台城本丸及び二丸の建築の配置と構成、個々の間取りとその用いられ方等について述べ、またそれらの変化の実情やその時期についてもある程度触れた積りである。

終りにこれらをもとにし、全体を通じての城館の変化の方向とも云うべきものについて私見を述べ結びとしたい。

戦国期によく生育しつゝあつた、儀式・接待・饗應等の諸行為に対応する居館の構成法を素地として、その上に近世大名としての性格を賦與しながら集大成したものが慶長年間に於ける政宗の本丸居館の内容であったと考えられるが、しかし大廣間の実現は単に戦國一大名独自の力のよくなし得ることではなく、秀吉を中心とした當時の中央文化との接触による、領國を越えた廣さでの経験の上で始めて可能のことであつた。

聚楽、伏見の伊達邸において、より小規模のものであつたにせよ、「廣間」の作事はすでに経験済みであつた。機あらば領國において、さらに「大廣間」の実現を果したい、との強い希望が持たれていたことであろう。

藩創業として仙台城の造営に際会するや、中央の技術の導入のもとに一挙にこゝに実現する運びとなつた。⁽¹⁾

遠侍、台所、そして集約的間取りの大廣間等だけですでに城館の諸機能を大方含みうるものであるにもかゝらず、別に多くの公的、私的施設を配したのは如何なる理由によるのであるうか。

本丸の大廣間が、やがて細分化されることによつて二丸殿舎の主要構成が招来されたことを考へるとき、この時点において、單なる実用性を超えて、多分に精神的、感覚的な効果を大廣間に求めていたものと思われる。

創葉期における大名の権威は、けだし視覺的、造型的手段によつてこそよく示しうる。大廣間はその格好の象徴となり得た。実用性の如きは、従つて始めから余り重要な意味をもたず、二義的に止まつたともみられる。

出来上つた本丸の主たる構成は、儀式・接見を主とする大廣間に他に、接客・饗應に重点のおかれている博多間・書院、また藩主の居間・食事のための御座間・焼火間、そして家上の詰所・番所たる遠侍であるが、なお城塞としての峻峻、複雜な立地のもとに多分に閉鎖的な構えをとる。

大廣間の他建築に対する位置、その規模の圧倒的優越性、その間取りにみられる集約性、複合性とも併わせ、大廣間を中心の權威主義的、武威主義的傾向も強くあらわれている。こゝに慶長年代としてのまた限界がある。

これらの批判の上に、より城下と密接な、より開放的な平坦地を選んで計画されたのが忠宗による寛永の二丸建築であつた。

大廣間は小廣間となつて規模ならびに平面構成を単純化し、遠侍との間に新たに客之間を設け、詰所部分も拡大し、従つて小廣間は相對的位置が後退し、諸建物個々の規模は平均化され、その間取りも平明となり、建物相互間の連絡や配置に重点が置かれるなど、時代の要求に応じた実用本位の合理化が進められていて、大廣間中心主義の性格はかなり薄れ、便利主義に傾いている。

しかしその表向きの主たる構成は小廣間、書院、御座間、焼火間、そして遠侍関係諸部屋であることには依然として変化がなく、接客関係にもなお重點が置かれていた。

この状態はしばらく続くが、やがて寛文事件を経た網村の時代に大改造が行なわれるに至った。

この網村の時代は藩主の絶体權が強化され、藩制の確立された時代といわれ、改造計画の行なわれた前後には家臣の幕紋の制定⁽²⁾、大番組の改組⁽³⁾、一門・一家・一族衆大身の在國中の番割⁽⁴⁾、奉行職以下諸役人の詰所の確立⁽⁵⁾、諸役人子息の拜謁所の規定⁽⁶⁾、諸上番所の格付け等、家士に対する秩序化に大きな関心と努力が拂われている。

建築面においては、早くも網村初入部の延宝年代から城館の整備、改造が計画され、着行に移された。天和、貞享を経て次第にこれが進行、実現して行くが、とくに日光普請が済んだ元禄初年より本格的工事が進歩し、そして完了するのである。

天和頃から小廣間が対面所と呼ばれ、元禄の改造によつてさらに内対面所が加わるなど、そうした時期を背景として考えるとき、君臣關係を主軸とする対面行為の重視、秩序化の具体的な現われに他ならない。

このことはその前後における諸建築、諸部屋の使い方を通じて確かめられたところである。

改造を契機として書院が失われるが、それはなお一門等門闇、上士に対する鑑鏡など小廣間脇の新設の馬場座敷で行なわれることがあつたとしても、大勢はすでに独立の書院を必ずしも必要としなくなつたことを意味するであろう。元来大名の居館においては、江戸藩邸とは異つて、將軍のお成りを始め、上使、公儀の役人、諸大名、旗本衆等いわば身分的にみて対等かもしくはそれ以上の人達との交渉は極めて少いのが現実で、従つて彼等との直接の接見や鑑応の機会は殆んどなかつたと云つてもよい。且つその可能性すら次第に少くなるというのが趨勢でもあつたし、また一門等の取り扱いにおいても、從来書院において純粹に客人扱いをしていたものが、藩主權力の強化にともない、家臣として意識的に取り扱われるようになり、従つてその接客専用座敷としての書院の存在意義もまた失われるに至つたものであろう。⁽⁸⁾

他方では役所、詰所部分の一層の細分化、序列化が進行している。

ともかくこうした変化が、焼失後復興の如き外的要因によつて止むなく結果されたものではなく、改造という形で押し進められたところにかえつてこの時期の積極的方向が示されているとみることができる。後世細部における多少の変動はあるが、その主たる構成が固定し、諸建物、諸部屋間の序列、及び個々の用途が確立されたのは実にこの時期である。

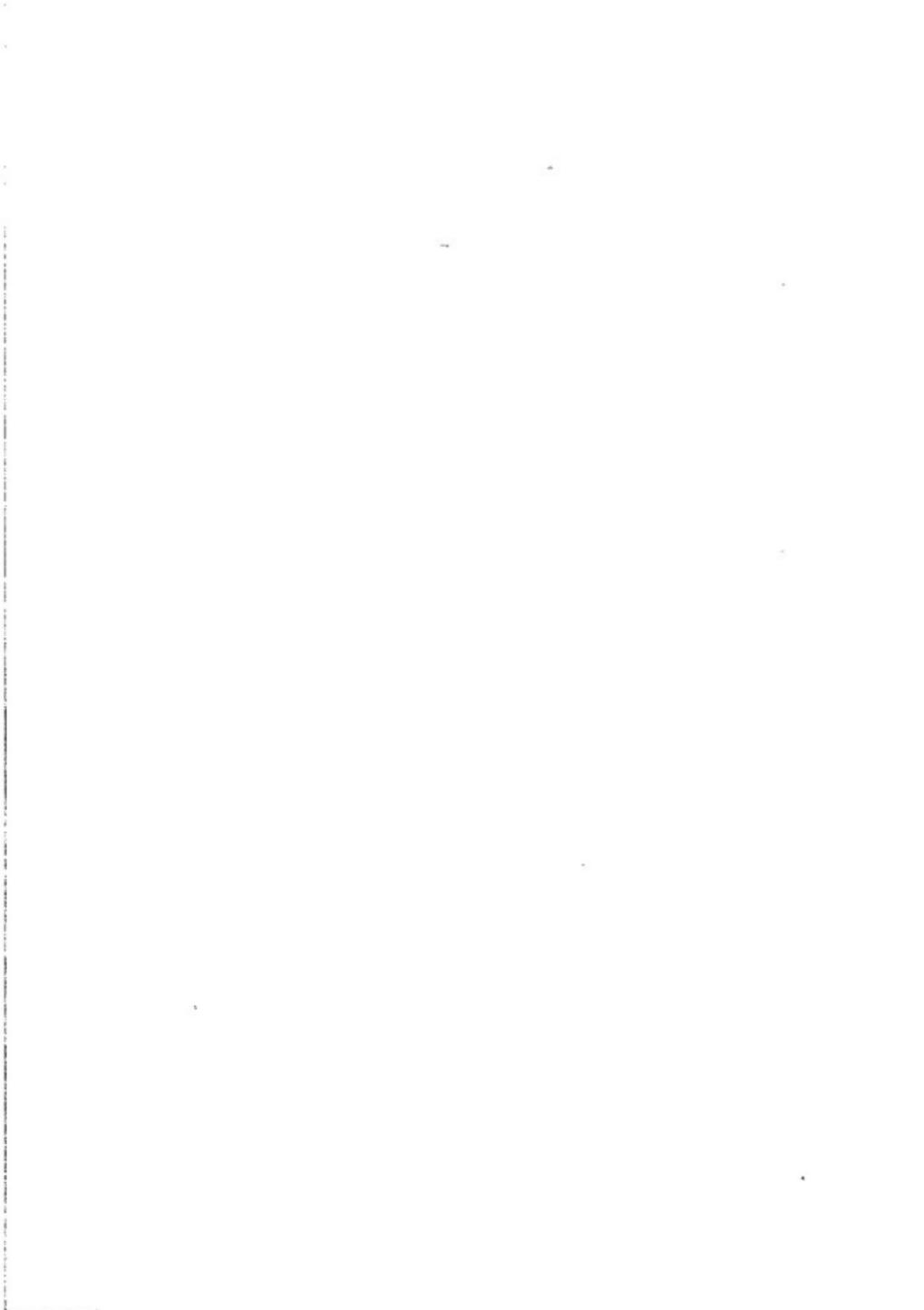
綱村時代の改造のもつ意味は從つて決して小さいものではなく、このことは仙台城廻舎の変遷の上で特筆すべきことのようだ。

註

- (1) 政宗宮治家記書引鑑記　慶長十五年の頃。
- (2) 本丸の建築(5)の註(1)参照
- (3) 芹山公治家記録
天和二・一・一二
延宝五・一二
- (4) 同
延宝五・五一九
- (5) 同
元禄五・八・一二
- (6) 同
元禄二・三・九
- (7) 同
元禄二・四・三・一五
- (8) 仙台城二・丸においては接客行為とその場所の優遇が著しいのに對し、江戸上部では書院はついに消失することなく、新たに白書院が加わり、内対面所も接客座敷として広く用いられるに至るなど、接客關係の整備、格式が顯著に認められるのは対照的である。
- (9) 吉村時代に至つてもなお一門に対し「昔之様ニハ無之御得共以テ全ク御者來之様ニハ無之御下曰とも客人ともつかぬ様威御あひ志らるニ而候」(伊達家文書之六)と云わしめているが、純粹の客人扱いの域からはずして脱却していることは明らかである。

〔附記〕
本稿は、「さきの拙稿『仙台城尾瀬の更造とその意義』(日本庭園学会論文報告集六・六号)をもとに修正、補充、加筆し、岡田類を添加したもの。このたび元東北大教授田原良新先生の御恩恵に充り、浅学を厭みず執筆することになった次第ですが、稿を了えるに当り、先生に対し驚く御礼申し上げます。
また因縁、資料の閲覧に關し、宮城県立図書館、吉澤叢書会の方々にはよい間特別の御便宜をいたしました。感謝いたしました。教室の諸兄には岡田の浅学などに協力を得ました。併せて附記し感謝いたしました。

(昭和四十一年五月)



仙 台 城 の 美 術

佐 龜

藤 田

明 孜

仙台城の美術

総

説

佐

藤

明

仙台城の美術を問題とする時、主要な問題となるものは、本丸の大広間の障壁画と、二の丸の表対面所の障壁画である。周知の如く本丸は明治四・五年の頃盡く取毀され、また二の丸も明治十五年失火で全焼してしまったが、これら仙台城の主要な建物については若干の記録が遺っているし、またその障壁画の一部分が、取毀しや失火の際に持ち出されて、現在仙台市博物館をはじめ各所に保存せられているので、ある程度まで、仙台城の美術がどのようなものであつたかを知ることが出来る。

本丸大広間

本丸の大広間に關しては、政宗公治家記録慶長十五年の章に

一慶長十五年 此年仙台城大広間御造営成就ス。縱十七間半、横十三間半。北ニ長三間、広二間半。南ニ長七間半、広六間の曲屋アリ。是ヨリ前大工棟梁梅村彦左衛門家次ヲ紀州ニ差遣サレ、天下無双ノ大近刑部左衛門國次ト

云者ヲ雇ヒ來テ、大広間ノ指図ヲ致サシム。御作事奉行渡辺内藤不知、油井善助景成ナリ。御張付ハ佐久間左京畫ス。其奉行ハ茂庭利兵衛定元、真山式部懸重ナリ。御造單ノ月日等ハ不知」（貞山治家記録三二）

という記事があり、大広間の御張付一床の間の壁画や襖絵の制作の責任者は佐久間左京という画家であったことが明記されている。

佐久間左京は修理とも称し、晩年は剃髪して常闇と云い、明暦三年十一月二九日、七十七才を以て、若林の別墅に没し、その墓は新坂通莊嚴寺に現存している。政宗公の伏見藩在中に取り立てられ、画を以て政宗に仕え、仙台藩最初のお抱え絵師となり、その子孫は明治に至るまで代々その業を世襲したのであった。佐久間左京は仙台城大広間の張付だけでなく、建築の刑部左衛門と共に、大崎八幡宮や松島瑞巌寺の造営にも当つていることは様札やその他の記録で明らかであるから、幸にして現存し、国宝にも指定されているこれらの建造物の絵画は仙台城大広間の絵画を考察する上によい参考になるわけである。

まず、本丸大広間の張付がどのような規模のものであり、またどのような構成になっていたかゞ問題になる。これを知るには、実際にこれを見た人々の拜見記のようなものや、大広間そのものの図面等に據る他はない。幸にして、前者に属するものに、安永四年四月に記された安倍彦右衛門の御本丸拜見覚書というものが昭和四年刊行の仙台市史に載っている。

御本丸拜見覚書、安倍彦右衛門記

一、上上段の間六疊折上げ格天井、牡丹の花彫もの有、高鷹縁り御床七尺斗袋棚四枚あり、襖絵は三保の松原なり。大縁り小縁り今織。其他連糊有、金渡金具、梅に鷺の絵、御床の向に押込有、御襖の絵海棠也。

一、上段の間十八疊敷、格天井、此上段下段の所御座敷に鉤ぎ有り、大床有り、御床御張付松に連雀の絵、上下袋糊有、其脇に御襖有り、牡丹に金雞、裏の方は御襖通りなり。

一、上段の間の南にみちよう殿有（俗にくらやみの間といふ）、此内は惣御張付、桜の花に似て唐絵なり、御襖の口通り斗見得て開く見分かぬ事。

一、上段の下御座敷十八疊。此南に四骨敷有り、御襖柳の絵。其南十八疊、松に鶴の絵、御襖立。其下西の方に十八疊有り、御襖松に鶯の聲を捕る軸。此南は御縁通りなり。御縁通の西に鶯の絵、板襖有り、前通御路地有り、大木の梅松有。

一、右の東に御座敷有、上段下段あり、上は六疊下は八疊、御床は一間半、御張付にて雲に梅の花の様なる唐絵なり、四色の鳥有り、凌霄迎樹有、此絵は花鳥唐絵にて不分りえ事。此の御座敷の向に御縁通り有、手まり花に紅葉の絵西面。

一、上段の西御座敷有三十二疊、孔雀に海棠の絵、北の方は御縁通り也、此西杉の間とて有り、三十二疊、御張付御襖の絵は杉なり。

一、右の西北の方に大將生捕柱有、右へ並びて虎の間鹿の間有、但刻限遅く相成候に付此所委しく拜見不レ仕候に付略す。

一、御掛作り長さ九間半、横三間にかけ下げ有、東向すの子縁引通し有、らんかん有、内は富士山松の絵なり、御床御張付水に藤の絵。

右御張付は惣金御張付御座候事。右の所拜見済而日暮門より拜見仕候。菊の御紋形物すさまじ、中々筆に及不シ申候金めつきかな具有、其脇に首じつけんの間とて有。御縁有りて此所は血の流れ候様にみぞをつけ候もの也、此邊おそらく成候ゆへ委く書留不レ申候事。

安永四年四月

この「御本丸拜見覚書」は本丸全体ではなくて、本丸の大広間だけの拜見記であつて、時刻の制限で虎の間や、鹿

の間を拜見せず、また柳の間に続く芙蓉の間と、虎の間に続く紅葉の間を見逃しているが、随分丁寧に拜見し、克明に記録していく、全体的に見て、大いに信頼が出来る。

しかし、安倍彦右衛門の覚書だけでは、大広間の間取りなどは具体的には充分明瞭ではない。この間取りを知るには図面が必要なのであるが、幸にして小倉強氏がその「仙台城の建築」に載せておられる常盤雄五郎氏所蔵の「御本丸大広間地絵図」や、同じく小倉強氏が昭和二十五年刊行仙台市史第三巻に引用しておられる茂木新九郎写「御本丸千骨敷之図」のようないまが残っている。両者とも大座敷の平面図であるが、殊に後者は間取りの上に、床の間や襖絵の画題が書き込んであるので、前記の拜見覚書とこの千骨敷之図の書き込みとを組み合せて、次のような表をつくることが出来る。

仙台城本丸大広間隣壁西題一覧表

室	名(別稱)	畳 数	安倍彦右衛門覚書	茂木新九郎 図面
上段の間		6	(炎脚) 三条の松原 (玄脚) 海に鷺 (押込) 御座 湯葉	(遠脚) 左昌五郎形刻梅月
上段の間(風の間)		18 36	(御座) 牡丹に金雞 (御床) 松に豪華	(上段脚) 桐に金鷄 (下段脚) 金張付櫻ノ絵 (御床) 金張松ニ鳳凰
孔雀の間		32	孔雀に豪華	(裏) 板ニデンマリ
椿の間(杉の間)		約14 内 板數4	(御櫻) 杉	(壁) 椿丸表
御張臺	(御櫻) 張 くらやみ 御座 の 間		桜の花に似て店舗	無張付草花ヒラキ扇
柳の間	(御櫻) 柳			金張付 柳
芙蓉の間				銀裝付 アフヒ

表上段の間（上段お座の間）		上段 下段	
		9	6
		15	
居	の	（寝）松に葉を描る軸	（御床）空に鷺のようなる唐絵
虎	の	（御機）松に鳥	（御床）櫻と連雀
虎	の	（寝）松に虎	（御机）櫻と鳩
鏡	板	（板襖）手まり花に紅葉図、君一、波、水沢、唐木半、桜三児、柏、モミ	（御床）富士山松の松の絵
座	作	（板襖）君一、波、水沢、唐木半、桜三児、柏、モミ	（御机）櫻と鳩
作	り	（板襖）君一、波、水沢、唐木半、桜三児、柏、モミ	（御床）富士山松の松の絵

この表によつて、俗に千疊敷と呼ばれていた凡そ三百疊余りの大座敷がどのような間から成り、どのような画題の絵画で装飾されていたかが概観されるであろう。

しかし、もともと安倍源右衛門お見覚書も前記の如く簡単なものであるし、茂木新九郎写図面も平面図に画題を書き込んだだけのものであるから、各部屋のデテールや、床の間の張付や、襖絵の絵画の様式などはこれによつて知る由もない。

ところが、前述の如く仙台城本丸大広間と同じ工匠、同じ画工によつて建築された松島瑞巌寺は桃山式のいわゆる御殿造りの佛殿であつて、上段の間や、上段の間を持ち、広縁や武者走りの様側を備え、建築のデテールや、襖絵の絵画の寸法や装飾の方針など、大広間と多くの共通点を持つてゐることは、両者の平面図を比較しただけでも充分察しのつくことである。そして、瑞巌寺の画工の名も、佐久間左京の他に、長谷川等嵐とか、吉備幸益とかの姓名が「古画備考」に書き残されている。瑞巌寺六世の住職であつた夢幻和尚の「松島諸勝記」には

「蓋殿之規模宏博、大経寒焼輪奐一新焉、縱於十四間壱尺、横於二十一間四尺、良匠名工屈力殲厥、寃下櫓大室構也、障壁彩飾繪金聞矧、画工百余人最極好手、光影相映如帝網、珠璣憲影闡金輔玉鑊、爛綺眩眸、不良筆舌之所及也、（下略）」

などと書かれているところを見ても、佐久間左京の下に百余人の画工が働いていたことは明らかであり、従つて仙台城大広間の場合にも、前記の画工をはじめ多くの画工が左京の下で働いたに違いない。とにかく、仙台城本丸の美術を知るには、僅か数年後に完成した瑞巖寺の絵画は不可欠の参考資料となる。

かくの如く、仙台城の美術をしのぶには、絵図面や、辨見覺書やに加えて、恐らくは同じ画工の手になったと思われる瑞巖寺の絵画を参考にすることによつて、大体のところは可能ではあるが、何といつても美術の調査や、研究は美術品そのものについて行なわなければならないことは勿論のことであつて、仙台城の大広間の絵画も、その様式や、その美術的な価値等は、前述した通り幸にして残存している作品に関する綿密な調査鑑定によつて行なわれなければならない。

現在のところ、仙台城大広間の遺品と稱されている絵画は次の如くである。

仙台市博物館藏（伊達家旧蔵）六曲屏風二枚（仙台市博物館伊達家寄贈文化財目録二八頁参照）

松島博物館藏（伊達家旧蔵）六曲屏風一枚

仙台市阿部礼三郎氏蔵
繪絵四枚

此等の遺品の解説は各論で行なう。

二 の 丸 表 対 面 所

次に二の丸表対面所の美術であるが、仙台城二の丸は、二代藩主伊達忠宗によつて、寛永十五年九月繩張りが行

なわれ、同十六年末にはほど完成したことは治家記録等で明らかであるが、本丸の大広間式居館に比して、やゝ小規模な建物多数を廊下で連結したものであり、政宗の晩年臨居所であった若林城の古材等も利用したものであつたらしく、僅に表御門対面所の一廊だけは豪華の風を誇つてゐたようである。ところが、この二の丸の居館は文化元年六月二十四日に全焼し、翌二年三月十日に再建の地鎮祭を行ない、四年余の年月を費して、文化六年四月一日完成している。しかも、この二の丸は明治維新後ここに勵政廳が置かれ、更に明治四年には仙台鎮台が置かれ、明治十五年には失火のため全焼してしまった。從つて二の丸の美術を論究するにも、やはり種々の記録や、絵図面や、僅かに残存する遺品に依つて、全体を偲ぶ他はない。

さて、仙台城二の丸に關する記述としては矢野顯蔵著「尊皇事蹟」の中に次のような記述がある。

二の丸大略

- 六間御家御奉行衆六十二万石の政務を執る所、其他大小諸役の詰所として備らざるなし。
- 表御門対面所、封内の門閥他藩よりの使者を引見する所、城中第一に美を盡せり。
- 松の間、七十二畳唐紙南面四枚、松に牝雉、西十四枚松、北雄雉の画、寶金地東洋の筆。金色翠影社藏云はん方なし、城中第一晴れの間所重大なる儀式に用らる。
- 柳の間、四十八畳、柳一株を両く、柳一葉最も長きもの九寸ありしと云ふ。寶金張り付け東洋筆、剣術等の御覽所に用ゆ。
- 虎の間
- 中の間
- 御次
- 御広間、皆な大番士三千六百人の交番する所。

○間所數百略して記せず、二の丸總家作、式臺方面約一丁半、御座の間方面約二丁、要するに一丁半四方の建物と見は可なり、屋根最高約八間御中奥等々記し難し。-

この記述に依つて、文化年間再建後の二の丸の大略を知ることが出来、殊に城中第一に美を盡した表御門対面所の中でも、城中第一晴れの間所で、重大なる儀式に用いられた松の間は、西側十四枚の松の絵の襖、南面四枚の松と牝雉の絵、北面は同じ四枚の雉雉の絵の襖で取り囲まれていたこと、そしてそれは東東洋の筆であったこと、また柳の間も同じく東洋の筆であつたことが知られる。

もつとも、柳の間の襖絵に関しては、次のような記述もある。

一 荒川 洞月

洞月は本姓中山氏岩沼邑主古内氏の臣にして万治年間義山公に殉せし其主古内重広に追腹をなしたる中山藤左衛門の孫なりしが、天資画才あり藩命に依り画員荒川氏の嗣となり、青葉城御二の丸文化元年火災後の御造営御襖柳の間の襖は洞月の揮毫に属し、金碧設色伎懸懸日獨得匠心、惜哉、今見るべきなし。文化五年五月二日卒し、北山荘嚴寺に葬る。辞世の句に曰く風去りて歸も踏まずに今行ぞ。一（佐沢広胖「風流余韻」）

この記述に従うと、洞月は二の丸再建完成の前年に歿しているから、柳の間の襖は最晩年の作品であつたことになるが、再建は四ヶ年の歳月を要したから、洞月の生前にこの襖絵が描かれたことも決してあり得ぬことではない。一方、東東洋は伊達藩領栗原郡若柳村の出身で、当時京都にあって四条派の画家として名声が高かつたから、藩が二の丸の再建に當つて、彼を招いて、松の間や、柳の間の装飾に当らせたことも、当時佐久間左京の家系の佐久間家の衰微していたこと、また既に文化二年、文化三年の正月に席画を君侯の御覽に入れていること（経山公治家記録）、また数年後には養賢堂視学所の襖絵を描いていることなどから見て、充分あり得ることと思われる。柳の間の襖が東洋の筆であるか、洞月の筆であるかは他の確実な資料でも発見されぬ以上は、その襖そのものが焼失してしまっている

から、確定し得ないことであった。

以上の如く二の丸で美術に関する最も問題になるのは松の間と柳の間であるが、それは二の丸のどの位置に位する部屋であつたであろうか。この事は二の丸の絵図面によつて知る他はない。松の間は七十二疊の部屋であつたから、坪数は三十六坪であつたことになる。三十六坪の部屋は、縦四間横九間か、縦三間横十二間かの部屋と考えられるが、小倉強氏が二十五年刊仙台市史第三巻に附録として複製せられた仙台城二の丸図に依つて、探して見ると複雑な構成になる二の丸の建築群のうち最も東側の能舞台を前にする御上段の間、御次の間に統く二の丸で最大の部屋が縦四間横九間になつてゐるから、「松の間」の記入はないが、その用途から考へても、いわゆる「松の間」に違いないであろう。

以上に依つて、松の間の位置、広さ、襖の数、筆者が東洋であつたことなどを知るのであるが、その襖絵がどのようなものであるかは、やはりその襖絵それ自身に即してでなければ充分に知ることは出来ない。

ところが、仙台市博物館に二の丸の遺品で、東洋筆と稱する「松の絵屏風二曲一隻」がある。これは伊達家伝来ではないから仙台市博物館「伊達家寄贈文化財目録」には載っていない。

この屏風を二の丸松の間の襖絵の遺品として解説で検討することにしよう。

一 本丸御殿の大広間障壁画

亀 田 孝

大広間は明治初年まで残っていたのに、その取りこわしの時の記録も、残され保存された移動可能な襖絵について

の事情も、いまとなつては明らかにしにくくなつてゐる。本稿では大広間の襖や板戸、壁貼りつけの絵の西題や室配置などについては、小倉先生の論文に詳細図が附してあるので、その図を参照し、次の三点をこの関係絵画として解説することとした。

(1) 松島博物館蔵 鳳凰図屏風 一隻 (図版第4)

紙本着色 四曲屏風

豎一六〇・六疋 橫三一九疋

松島博物館所蔵の鳳凰図四曲屏風は、伊達家が本丸大広間の上段の間の張り附絵を剥して屏風に改装し、祝言の時の立廻し屏風に用いたといふ。上段の間は公卿の間とも称し、上段奥床の壁に貼りつけた絵は広さ三間で、一桐に鳳凰の図柄と記載されている。いまの四曲屏風では横巾が三一九疋で、右端の雄鳳の尾羽が欠け、上方から桐の花と葉とがそれとわかる程度にさし出しているのを見ると、大床張り附絵から主要部を切りとつて仕立てたというのは信用してよさそうだ。

三寸二分角の金箔貼りの懶金地に雌雄の鳳凰が翹をひろげて呼應している動きのある姿を以て、図を組み立てゝいる。いわば大広間にある十三家の各種画題を描いた障壁画のうちの大画面となる肝要な壁画である。これと同様な空割りになる瑞巌寺方丈の上段の間の大床張り附絵ほどの大きさであったとすれば、上に桐の枝があり右側に桐の幹があろう。構図の中央は中ほどの土坡に草花である。左側から海棠のような花枝が横にのびている。これはすぐに左側につゞく上々段の間に海棠が描かれているというから、それと画意において連絡するのであろう。

大広間は慶長十五年の完成で画工は佐久間左京と「治家記録」にしるし、慶長十二年竣工の大崎八幡宮も同じ画師である。瑞巌寺方丈襖絵には異説もあるが、慶長十四年三月以降に完成しているとする、やはり佐久間左京が主だった画師であろう。これらの障壁画が大広間を除いては殆どこされていて、一群の地方における慶長絵画が系統づ

けられる。大広間には花鳥障屏画が主体になつて計画されていて、これらを併せてみると、大広間では従来の社殿や禅宗方丈障屏画に最後の仕上げとして、武家住宅の障壁画を様式的に統一して敷設しようとしたものと考えられる。鳳凰図では絵画は整つて密になり彩色も固よくつけ、構図はひきしめられ、やゝ様式化した圖配りで画面をまとめた。岩を描くにも小さく角振り、枝を簡潔に整理するというぐあいで、装飾的な両面構成になつてゐる。政宗の公式儀礼の儀形に立て廻す主殿障壁としての絵画を充分に考慮して作られてゐるとするべきであろう。次の竹図にしても断片的ではあるが、このような様式化では一步をすゝめている。

(2) 後藤久三郎氏蔵 竹図屏風 一隻 (國版第62)

紙本著色

二曲屏風

豎一六三・六疋 橫一六〇疋

竹林の絵襖を一枚折りの屏風に改裝したもので、当初は捲りとして伝えていたそうである。二寸角の金箔を貼り懸金地として漫彩色で描いている。右側の一曲の中ころ右端に近く引手金具をつけた痕がみえる。同様に左側のにも左端にあるので、もとは襷絵であった。構図としてはこの二曲は連続しているが、両端で図柄が的確に連続しないのは、この二枚が引き違いに敷居立してからである。上部には葉形を胡粉で緑どりして墨で輪郭線をひいており、これは連続している。雲の扱いからは瑞巖寺方丈襷絵に似ている。

竹は緑青を厚く塗り、葉も丁寧に葉脈を墨で描き中心を金泥にして重厚な仕上げである。色彩が落ちた下書きのところに「ハ」という字が三十四個所ほどあり、また「六」字が六個所ほど残っている。「ハ」は葉であつて、竹葉が茂つてゐるのを下書きしており、その間の生地と区別する為の名さしである。「六」は緑青を塗る指図であり、ほかの例としては、数は少いが、瑞巒寺方丈の鷹間や仏間に見出される。これはむろん彩色画工と下書きし仕上げする西師とが別人であり、障壁画は一般に数人の画工の手で完成するから当然のことである。

この竹図は瑞巖寺方丈板戸絵の竹のような線の太い大きさではなく、十本の竹幹が力強く立ち並び奥行をつけているが、金地の上には落葉などは描かず、葉はすべて強い輪郭線で描き起した勾動体であり、隅々まで同様筆法であつて、狩野派の院体漢画風である。僅かに根もとに竹根が節をくねらせて横に伸び、草が五葉ほどの花をひらいているので地面を暗示している。加えて春さきの情態である。これは竹林の構想とすれば右端に位置する図柄であろう。茎の葉や竹葉の線がきは手慣れていて、桃山時代画家として修練を積んでいた作である。

この二枚の襖絵が本丸御殿の大広間から明治の取りこわしの際に持出されたとする、竹図があるのは「竹に虎」の間である。六間に四間の室の三方に絵襖が立ち、半間二枚の襖としては、東側の室「鷹の間」との間の板敷から入る通路に立つのがある。構図からみて右側寄りの絵襖であり、虎が描かれることなどからみて、板敷との境に立つ一間板戸の内面にある、内襖二枚に該当するものらしく思われる。これなら持ち運びも容易であり、画面の痛みからつて開閉の多い立襖であろうとして良さそうである。大広間の絵襖で現存しているのはこれだけだとすると、復原資料としても興味がある。

(3) 仙台市博物館藏

扇面図屏風

紙本著色

六曲屏風一雙

(図版第64、65)

豎一五八・五疊

横三三〇疊

紙本著色

二曲屏風一雙

(図版第63)

豎一五八・五疊

横一五四疊

扇面を散し描きした一群の壁貼り附絵を屏風に改装したと思われる絵に、本丸使用という伝来がある。屏風を包んでいる表引の紙に「御本丸天上張附 扇之画 古水徳筆」と書いてあり、六曲と二曲との四枚の屏風の本紙には銀の小箔と砂子とを蒔いて草花を描き、その上に扇面を図した同類屏風である。昭和三年の東北遺物展覧会に出品されて

いるが、もとはまくらだつたのを適当に図組みして改装したものらしい。大広間絵図面では天井画のことは記していないし、また永徳筆でもない。たゞ銀地の絵としては上段と裏上段の間に中間にある御帳台、俗に武者廻しにあたる所で、図面ではクラスマの間とか、くらやみ御座敷とか呼ぶ室の壁面に銀張附草花と記されているのがある。ほかに葵の間にも銀張附があるが、屏風のはうす紅と白緑と二色の唐花であつて葵ではない。安永四年安倍氏の「御本丸拜見記」では櫻の花に似て唐絵である、御帳の口からみただけでよく見えぬと記し、茂木写千疊敷図に「銀ハリ付草花ヒラキ扇」と書入れ、この両記録を併せみると、銀地唐花に開き扇を描いたこの屏風がそれに該当する。蛇足ながらこの屏風にどう壁面画を配置したかを想定してみよう。上段の間の方からみて中央に引戸がある壁面は二間半で、矩形の狭い方は一間余である。引戸から覗いて奥の左右壁にあたるのが、それぞれ二曲屏風の貼り附絵である。二間半の奥側のは六曲屏の両端にある四扇、一扇を合せると八扇分の壁になる。六曲扇中央の二扇は銀焼けが黒ずんでいる。これは引戸の両側の壁貼り附絵であろう。改装の際に二扇で一群の構図を適当に配図したものらしい。

扇面屏風は室町時代から描かれているが、この扇面散らしのように並み扇や半開き、または倒置したりする散扇の面白さを描写した壁貼り附絵が、慶長十五年ころの座敷絵にあるのは注目すべきことである。扇を開いたのは廿七面半開は十面、並み扇は一本ですべて卅八。図柄では桃山百雙にある「桶と蛇籠」「桶と水車」や、大井川紅葉・吉野山櫻・富士山などの名所絵、それに桐に鳳凰・瓜・葡萄のように大崎八幡の壁画と共に通の画題もある。擦衣と杵とを描いた砧図に色彩剥落のあとにみえる「うら」「おもて」という衣の表裏を指示した字がある。また鷹図に「水」字が藍色の下に見える。これは竹図屏風と同様なやり方である。総体に扇の小菊とか秋草などの小品画には鳳凰図壁貼り附や竹図裏と異った画題がみられるので、これら扇面画家のなかには狩野修理進定吉らの画師もいたことを考慮してよいかも知れぬ。

なお政宗自書の和歌譜の菊図貼り附絵四枚は、政宗屋形の菊御座の間にあつたとも思われるが、晩年の筆蹟でも

あり、その確証がないまゝにこゝに図掲せざ後考にまつことゝした。

二二の丸「松の間」襖絵 佐藤 明記

仙台市博物館所蔵の二の丸「松の間」の遺品と稱される二曲屏風一隻は図版第5図の如きもので、その画面の寸法は各曲共に縦一・六七尺、横一・二八五尺であつて、松の巨樹と、その枝に止まつてゐる雉を金地に墨彩式で描いたもので、松の葉の部分などは補修の跡が著しいが、雉はその羽毛など細密で、なかなか見事なものである。屏風の裏側に次の様な貼紙がある。

記

一 此屏風は仙台城二の丸松の間の襖なり

二 仙台城は伊達政宗の築かるゝ所にして政宗公の嗣子忠宗公は二の丸に殿館を造営せられ寛永十五年九月御縄張翌十六年六月竣工爾來伊達氏の居館たりしが其の広大なる殿館中に松の間あり矢野顯藏著仙台藩祖尊皇事蹟附録に曰く「松の間七十二疊唐紙南面四枚松に牝雉東面十六枚松北面雄雉の画東洋の筆金色翠影莊鐵云はん方なし城中第一の晴れの間所重大なる儀式に用らる」と此屏風は即「南面四枚松に牝雉」の唐紙なり

三 仙台城は明治維新後官有となり明治四年二の丸に東北鎮台本營を置かれ明



治六年仙台鎮台本營と改称せられしが明治十五年九月七日仙台鎮台本營火災に罹り二の丸の伊達氏累代の殿閣悉く灰燼に帰せり此屏風は其時火焰の中より取り出されたる松の間の襖にして鎮台より商人に拂下られ仙台市新坂通細谷徳治は剥き取りて巻かれたる該襖絵を古物商より買取り損所を修理して之を現在の二枚屏風三張に改造して所有しありたり仙台旧藩士の来觀して往事を追憶する者多かりし

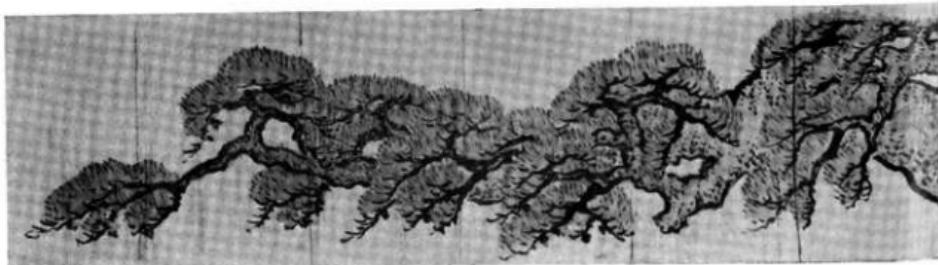
四 其後故あり小子請はれて之を買受け宇都宮市の住居に藏し置き大東亞戰爭中敵軍米利加空軍の宇都宮空襲にも他に疎開して難を免る、を得たりしが仙台市も亦敵空軍の襲撃に罹り瑞鳳殿及城門等數多焼亡して伊達文化の遺財残存するもの実に少くなり殊に仙台城に属するものは今や稀有なるべしと思はる、に至れり依て此屏風を私有して仙台以外の地に置くを欲せず仙台の宝として永く我故郷の史料に供し度く茲に仙台市に献呈するものなり

昭和二十九年十月

栃木県宇都宮市四条町一三五八番地

星野胞治

寄贈者星野胞治氏のこの文章には、先ず第一に二の丸が文化年間に焼失し再建せられたことが書かれていません。また矢野顯成著「仙台藩祖尊皇事蹟附録」の引用の部分でも、松の間襖「東西十六枚松」は「西十四枚松」が正しく、「北面・雄雉の画」は「北雄雉の画」が正しく、引用が正確ではないが、第三項の記述はいかに



あり、その確証がないまゝにこゝに図掲せざ後考によつこととした。

二 二の丸「松の間」襖絵 佐 藤 明

仙台市博物館所蔵の二の丸「松の間」の遺品と稱される二曲屏風一対は国版第5図の如きもので、その画面の寸法は各曲共に縦一・六七尺、横一・二八五尺であつて、松の巨樹と、その枝に止まつてゐる雉を金地に極彩色で描いたもので、松の葉の部分などは補修の跡が著しいが、雉はその羽毛などを細密で、なかなか見事なものである。屏風の裏側に次の様な貼紙がある。

記

一 此屏風は仙台城二の丸松の間の棟なり

二 仙台城は伊達政宗の築かるゝ所にして政宗公の嗣子忠宗公は二の丸に殿館を造営せられ寛永十五年九月御細翼十六年六月竣工爾來伊達氏の居館たりしが其の広大なる殿館中に松の間あり矢野顯嘉著仙台藩祖皇事蹟附錄に曰く「松の間七十二疊唐紙南面四枚松に北雄東面十八枚松北雄焼の画東洋の筆金色翠影在歟云はん方なし城中第一の尋ねの間所重大なる儀式に用らる」と此屏風は即「兩面四枚松に北雄」の唐紙なり

三 仙台城は明治維新後官有となり明治四年二の丸に東北鎮台本營を置かれ明

治六年仙台鎮台本營と改称せられしが明治十五年九月七日仙台鎮台本營火災に罹り二の丸の伊達氏黒代の殿筋悉く灰燼に帰せり此屏風は其時火燐の中より取り出されたる松の間の襖にして鎮台より商人に拂下られ仙台市新坂通細谷徳治は剥き取りて巻かれたる該模絵を古物商より買取り指所を修理して之を現在の二枚屏風二張に改造して所有しありたり仙台旧藩士の米觀して往事を追憶する者多かりし

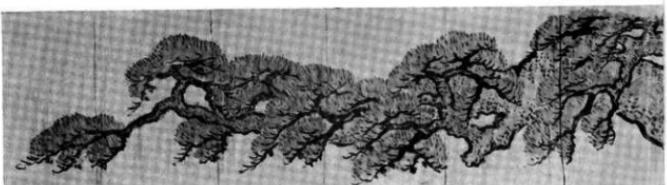
四 其後故あり小子請はれて之を買受け宇都宮市の住居に藏し置き大東亞戰争中敵軍利加空軍の宇都宮空襲にも他に隣接して難を免る、を得たりしか仙台市も亦敵空軍の襲撃に罹り瑞鳳殿及城門等多数焼亡して伊達文化の遺財残存するもの実に少くなり殊に仙台城に歸するものは今や稀有なるべしと思はる、に至れり依て此屏風を私有して仙台以外の地に置くを欲せざ仙台の宝として水く我故郷の史料に供し度く茲に仙台市に獻呈するものなり

昭和二十九年十月

橋本県宇都宮市四条町一三五八番地

星 野 脘 治

寄贈者星野胞治氏のこの文章には、先ず第一に二の丸が文化年間に焼失し再建せられたことが書かれていません。また矢野顯嘉著仙台藩祖皇事蹟附錄の引用の部分でも、松の間襖「東面十六枚松」は「四十四枚松」が正しく、「北面雄雉の画」は「北雄雉の画」が正しく、引用が正確ではないが、第三項の記述はいかに



も真実らしく、仙台旧藩士がこの屏風を見て、往事を追憶したとあるからには、明治十五年全焼前の二の丸の姿を見知つていた人々がこれを松の間の襖と認めていたことになる。

ところが、その屏風の絵そのものを見ると、それを描いたといわれる四條派の東洋の画風とはかなり違った所があり、むしろ狩野派の装飾画風なところがあり、松の間の襖が東洋筆であることをそのまま信する以上、この屏風をその残けつと考えることはやゝためらわれるのであつた。

ところが、この屏風を考える上に新しい資料が出現した。其は挿絵（図版頁下段）の如きもので、美濃紙六枚を横ながに継ぎ合せ、巨大な松樹一株を描き、最も右側の枝上に一羽の雉雞を止ませ、その斜め左下の地上に雌雉を遊ばせている。そして十本の縁の墨線で十二の部分に区切られ、最右端と最左端はやゝ狭くなつていて、なお伸びていた部分があつたことは右端の松の枝の先端が切れてしまつてることから見て、当然のことであろう。これは糊が利かなくなつて、離れて失なわれたものであろう。

この十二に区切られた巨松と雉の絵は十二という数からして、六曲屏風一双の見取図と考え易いが、それにしても殊に左側の屏風半双が巨幹の中途から始まる構図になつて、六曲屏風としてはおかしい。この巨大な大構図を一連の挿絵とすると、そういう挿絵が用いられた部屋は仙台附近では仙台城を除いては考えられない。しかも、仙台市博物館の二の丸松の間の襖であったと稱せられる二曲屏風一双と、この粉本の最右方の部分を比較すると、誰もが両者の近似性に気付くであろう。もしも、この粉本が松の間の西側の十四枚松の絵の襖のスケッチだとすると、この博物館蔵の二曲屏風も、旧蔵者の記述の如く、正に二の丸松の間の襖の遺物を、屏風に直したものに違いないことになるであろう。画風が東洋の画風らしくことは、東洋の構図に基きその監督の下に、多数の画工が共同で制作したものと考えれば理解出来ないわけではないであろう。

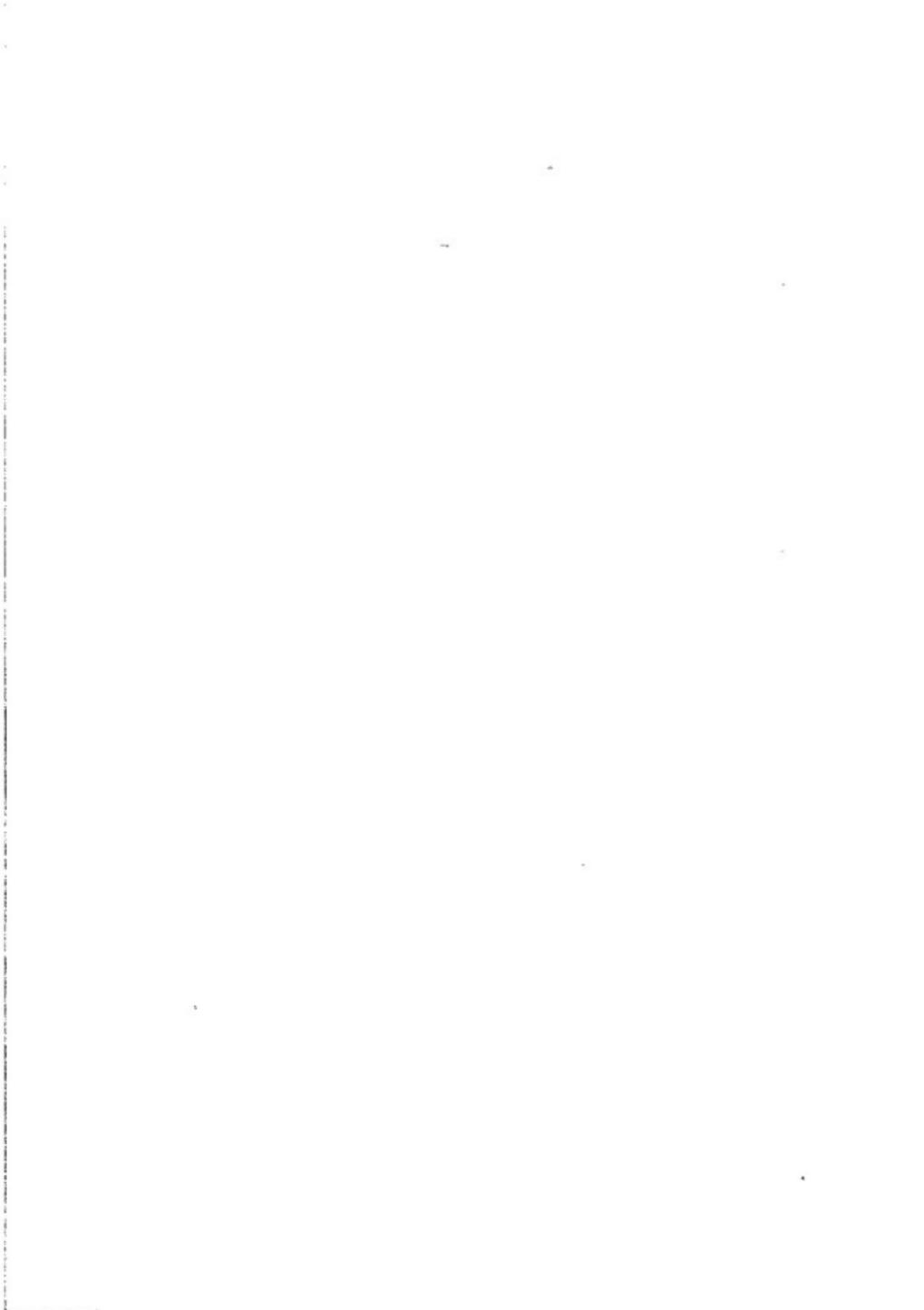
この粉本は私が私の恩師故阿部次郎教授の集蒐せられた仙台関係美術資料の中に発見し、未亡人の好意によつてこ

こに発表を許されたものであつて、先生が故一條十郎氏の遺族から入手された粉本類文書類の中に入っていたものであり、一條家に關係ある絵に堪能な人物が、松の間の現場で、その襖絵の大構図をスケッチした見取図と考える他なく、その人物としては一條家に来泊した高久謫居に師事し、九臘と号したことのある一條正直（十郎の父、明治二十一年歿、享年八十四才）などは、そういう機会を持ち得た人物であったかと思われるが、これは勿論推定に過ぎない。

とにかく、この粉本の出現に依つて、両者を比較して見ると、屏風は随分補修が甚しく、襖絵の上方も下方もいくらか切りつめられ、巨幹の部分には、外の部分から葉群を持って来て、屏風一隻の体裁を整えていることが明らかになるし、粉本にある牋雉は画面から取り除かれていることも明らかである。

そして更に、屏風がこの粉本の示す大構図の一部であるとする、この屏風は松の間の西側の十四枚の襖絵の一部であるから、寄贈者星野胞治氏が「此屏風は即『南面四枚松に牝雉』の唐紙なり」と記しているのは間違いと断ぜざるを得ない。

とはいっても、この粉本が果して二の丸松の間の襖絵のスケッチであるかは別に確証があるわけではなく、勿論まだ断定は出来ない。今はしばらく、屏風とこのスケッチの近似性に注目するにとどめる外はない。



仙台城の年中行事

三

原

良

吉

仙台城の年中行事

正月

元旦

番頭格以上の士は君公に拜謁のため二日に分れて總登城する。元日に出るを一番座、二日に出るを二番座と称した。大番士は番頭格以外、玄闇で記帳するだけである。元旦、君公は早朝奥対面所で典医、茶道、同朋、右筆等側近の者から小性頭の披露で賀辞をうけ会釈あり、明半時（あけはんどき、午前六時）染小袖、麻上下の通常礼服で國老を隨え表対面所に出席、一門九人に会釈あり、一門衆は君公左右に千鳥がけに着座する。次に一家十七人、一族二十二人、宿老三人、太刀上九人、一番座召出が一人ずつ進んで國老の披露で太刀目録を献上、終つた者は次々に左右に退き着座する。次に土器をのせた三宝を君公に進め小性が酌をとする。終つて銚子を君公の座から三疊目に置き、一門首席の士が土器をいたゞく、この時肴を供する。この土器を君公に返上した後、一門の士が同様に次々に土器を頂戴する。一家衆は五疊目で上器を頂戴、一族は敷居の外一疊目、太刀上は三疊目で頂戴する。以下名代や番頭格は九疊目、十五疊目となつていて。二日は同様一門二人、準一家八人、蕭座三十人、二番座召出、その他番頭格以上の太刀目録献上、土器頂戴が行われる。太刀目録は五百文位で五、六日後に勘定所へ届けるのである。お流れ頂戴の肴というものは烹雜羹（ぼう

ぞうかん）といつて矢野頭藏の手記によれば、径四寸ばかりの土器に島芋の皮を六角にはいだものを盛み上げ、上に三寸四方ほどの紅白の餅を置き、それに干鰯をこまかく切ったものをのせ、これを三宝にそなえ、君公が食うまねをして順次家臣に賜うとあって宝慶菴の字をあてゝいるが、これは民間のお手かけ、土分の家で、「いたゞき」と称するものに當る。浜萩には台所頭高橋某の談として雑煮のことだと記してある。

読書始、君元旦の行事である。

鉄砲擊始、陣貝吹始

二日 二番座登城拝質。

買初め 輸宗、政宗のころは家来を町にやつて錢を持たせ米、塙、飴おこし、米を買わせた。

三日 御野初 オノノメ、君公在國の年に行われた。戰陣に準ずる行事で、一門、一家、一族等の重臣は狩場の装束で騎馬、武装した家来を従がえ寅の刻（午前四時）所定の扇坂から大手門前を東へ大橋阿元までの位置に集結する。君公はこれも狩場の装束で馬に騎し、伊達家重代の槍、馬標、旗幟を立て弓銃槍の諸隊を従がえ儀衛は五百名内外、卯の刻（午前六時）陣貝を合図に行進を開始、大町を真直ぐに塙笠街道の案内に向う。松原にお假屋があつて御竜（おたつ）と称する。君公はこゝで道路を前に床几に腰を下ろし使番をして先陣役の片倉小十郎に出勤を命ずる。よつて片倉氏軍勢を先鋒として一門、一家以下しゆくしゆくと君公の前を馬上礼をしながら通遡し聞兵をうける。これを一騎打ちという。これが終ると旗元足輕の銃隊が空砲を齊射、陣貝を七五三に吹き鳴らし、君公以下全隊は岩切に向つて前進する。君公は岩切の諏訪ノ森の高地に馬標を立て、本陣とし、こゝから諸隊列兵の雉子狩りを見る。この諏訪の森を一番御竜として旗幟を立てる御竜が合せて十一ヶ所ある。

岩切 諏訪ノ森 一番御竜

鳥居崎	二番
花立	三番
高森	四番
入生田森	五番
相馬坂	六番
松森	七番
陣ヶ森	八番
松ノ木沢	九番
台ヶ森	十番

古館 十一番
脇ヶ沢 十一番

雉子を追う者は組士と足軽で、その人員は凡そ二千名を分けて三十一隊とし総指揮官を山奉行と称し、その下に使番二名がいて傳令を勤める。各組とも待ち場があつて十一の御竈場にひるがえる紅白の職を目がけて雉を追い、捕えたなら首を取る。これを抜き鳥といつて最初に首を献じた者を戦場の一番首に擬して銀銭三枚、二番二枚、三番一枚を賞賜する。以上を追鳥狩と称し今市橋まで追つて冠川の線で終了する。

君公は松森城跡の假宮に移り、戦勝に擬する祝の吉例があつて、獲た雉を雑煮とし二汁五菜の酒宴を開き國老、宿老に侍食を命じ、お供の家臣にも酒肴が出る。終つて引揚げの陣貝を吹かせ七北田へ出て奥州街道を城下に入つて北一番丁、片平丁から中ノ瀬橋を渡り筋違橋から扇坂の搦手口新御門を経て帰城する。御座之間で当日の山奉行に羽織を賜い、重臣のお祝い言上をうけた後、山奉行を名代として祠堂に無事終了を奉告させる。

四日

御茶挽き 年男が勤める。

五日

寺院登城拝賀 真公は染小袖、麻上下、国老を先立ちとして表対面所に出席、寺院住職は五ツ時（八時）まで表対面所敷居外に控え、国老の披露で順々に十帖一本を歓上、左右に着座する。一門格寺院は敷居外三疊目で拝礼、君公から会祝がある。次に着座格寺院は五疊目、召出格寺院は九疊目で拝礼する。

七日

七種連歌 ナナクサレンガ、連歌之間で行わる連歌家業の猪苗代家が奉仕する。

八日

御所的ゴショマト、城中の的場で後間行われ、弓術家業の家と稽古人十名が毎年正月二日に指命があつて出仕する。十五箭的を射る。破魔矢の意に基づく行事である。

心経会

シンギョウエ、一門格東昌寺以下出仕。

十一日

談合始 真公の政治始めで表対面所に出席する。

御兵具藏鏡開き

講祝始 真公初めて儒臣から講祝を聴く。

十四日

謡始 ウタイソメ、夜、二之丸表舞台で行われ金春流の桜井家、喜多流の小野家の両乱舞頭、脇の春藤流長命家、大鼓の白極家、太鼓の福井家、笛の白岩家、小鼓の宇治家以下が出仕し、真公は一門、国老以下重臣が左右に列座するうちに出席する。この謡始には必ず岩ヶ崎邑主家格一家四千五百石の中村家と栗原郡川口千八百石の宿老遠藤家が出仕する。三宝に熨斗と土器二つをのせたものと、これも三宝に蒸した麥をのせたものを吸物とともに君前に並らべ、側近に宿老遠藤氏が侍座する。君公先ず土器をとつて酒を酌させて呑みそれを中村氏にさす。中村氏は豫め火打ち袋の巾着を懷中し、君公へ土器を献するとき頭の頭に添えて巾着を献する。君公はそれを受け別の巾着をとり出して看の代りに中村氏に取らせ土器をさして自から酌をとつて酒をつぐ。七献九献過ぎて飯を出し宿老遠藤氏が折毬布を引く時、太夫が高砂を詔い始

め狹々を切りとする五番立ての能が行われる。年によつては舞難しや誦だけのこともある。前記の嘉例を巾着引きと称する。これは政宗の父公輝宗の時代、元龟元年四月四日、宿老牧野彌正久仲が米沢の館山城を不意に襲い輝宗を亡ぼそうとして小松城に反乱を企てたが遠藤氏の祖、遠藤山城基信と中村氏の祖、新田道江景綱の機軸によつて鎮圧した。この時、周囲を警戒して密書を火打袋の巾着にかくして君公と授受したことが始まるもので、幕末まで嘉例として行われた。

十八日 懇法 ゼンボウ、年頭の祈禱で一門格寺院以下住職が登城して行われ、君公から引出物として十帖一本が出る。終つて五番立ての能の鑑応がある。切り能は毎年海人に決まつていて切りの誦いになるのを切っかけに列席の住職たちは皆われ勝ちと退場する。これを逃げ倍立ちと称した。

二十日 千日灸 ハツカキユウ

廿二日 護摩供 この日から祈禱寺の真言宗童宝寺法印が登城して七日間行われ二十八日を結願とする。豫め蠟燭百丁が渡され、護摩木は年内の十二月二十七日根白石村の御門松百姓八人が門松といつしょに馬で二駄四百七十本を上納することになつていた。

二 月

上丁日 祝菜 セキサイ、藩学養賢堂の孔子廟の祭で二月と八月の初めの丁（ひのと）の日に行われ、君公がこれに

臨む。

初卯 具足開き 表対面所に伊達家歴代使用の甲冑、武具を飾り具足の餅を供える。政宗専用の三日月の前立の兜と黒塗胸の具足をはじめ歴代君公の甲冑一領は必ず飾る定めで、対面所の前庭には馬標、旗幟、行列の道具の重器を立てるのが例で、祝儀に登城した諸臣に雪菜清汁の雑煮と酒、餅を賜う。君公に長柄の酒を酌

する者の作法を大づくばいと称した。

三月

三日 上巳節供 五節供の一で番頭以上祝儀のため登城する。

雑祭 中奥では豪華な雑壇を飾り、上席以下御殿女中が参加して雑拝見が行われた。

十五日 馬屋祭 マヤマツリ、追廻しの本丸崖下にある五島の墓の祭日である。五島は後藤肥前信康が献上した名馬で、元和元年大坂夏陣に政宗が出陣する時、五島は年老いて長途の戦には乗用不可能だったので、政宗は五島を愛撫して留守を命じたところ、それを口惜しく思つて本丸の厩から駆け出し崖から落ちて死んだといふ。墓をゴト（五島）ハカさんと称して小児の馬脾風に靈験があるという俗信があつた。馬屋祭には猿引丁の山王櫻現別当村上清太夫が子猿を肩にのせ五島の墓に詣で、それより追回の三厩と称する南厩、中厩、北厩を回り、二之丸厩にも召され、子猿を馬の背に乗せると、立て髪に飛びつき、耳を引き、尻尾につかまりなどする。最後に別当が幣束をとつて馬の除災のため呪文をとなえる。

遠矢、流鏑馬 トウヤ、ヤブサメ、この月、榴ヶ岡で行われ君公の見分がある。

四月

江戸参勤と入国 たいていは、この月で、参勤発駕の前に家老を下河原（今の新河原町）の旅立明神に道中無事祈願のため代参させ、笠と杖を奉納する例であった。行列の供揃い人員は幕末まで略す事がなく文久三年二月十三代慶邦が朝命で上洛した時の儀衛は二千二百余名であった。特に雑封最初の入国は人員も多かった。寛文事件が終つて網村が十七才で初入部した時は三千四百八十余名と記録されている。常時三千

名近く一日の道中費が千両を要し、道中十日で一万両といわれた。仙台城発駆は七ツ立ちといつて午前四時、朝食をとらずに出発し、先供の挾箱持ちが中田の駅に達した時、全隊その場で行進を停止する。この時、君公の位置は五軒茶屋で、君公は河岸の赤壁棧が朝食の場所になり、他は沿道の民家にはいる。入国の時は帰城時刻が暗くならぬように配慮し岩沼辺に泊る。家老は長町まで出迎える。参勤入国とともに城下沿道の店は休業する定めで町中堀は蓋をし、道路に撒き砂をする。店は休んでも大戸を下ろさず、店内を片着けて屏風を立てる。ただし暖簾をかけることは許されなかつた。

五 月

五 日

端午節供 五節供の一セ、番頭格以上は麻上下、無紋白帷で登城する。

櫛見 城下町人町の家々には藩命で幟を立てさせる。戰時にこれを微集して作戦上の偽装に供するためであつたので町々は競つて幟を立てた。君公は表対面所で諸臣の賀辞をうけた後、膳食をすましてから本丸の崖端に舞台式に作られてある御座作家（おがけづくりや）に臨んで城下の櫛見をした。幕末に夫人が国元勝手を許されてからは夫人も同伴した。当日崖下の追廻馬場では馬上侍が背に長い綱をつけ地上を引きずらないように馬を駆けさせる綱引きを演じ君公は崖作家から見分した。

六 月

朔 日

歯固め 歯を丈夫にする事は長命を意味するための行事で、歯固めの朔日と称し、城中台所で正月の饅餅を寒の水にいれて密封し、この日君公に進める。

十六日

嘉祥 カジヨウ、嘉定とも書く。女房言葉ではカツウ、カヅウという。十六個の餅または菓子を神に供え、

同時にたべると夏の病魔を払うという。カツウは勝つに通じ武家に重んじられた行事で、城中勤務の諸臣や中奥の女中に餅を振舞つた。

晦日 名越の秋い ナゴシノハライ、名越は夏越のことである。城中でも白紙を切りぬいた形代の飾物を川へ流して祓いをした。

七月

七日 七夕 五節供の一で番頭以上が祝儀に登城する。

十日 一宮社参 君公在國の年は、この日、一宮塙兼大明神の祭につき參詣する。

十三日 土用干し 二日からこの日まで行われ、特に重器は国老が立会つた。

十四日 松火 マツビ、慶長十一年六月政宗第一女五郎八（いろは）姫が江戸から下向した時、政宗は城下の土屋敷、町屋に残らず灯籠をかゝげさせ、本丸隅櫓の上から見物させた。慶長十三年には触れを出して盆中松火を焚かせ、戦没した家臣の供養のため七月十六日夜、大手の前に大かぶり火を焚かしめた。歴代の君公は十五日夕方から本丸屋端の御屋作家に臨み、城下の松火を眺める慣例で、幕末には夫人も見物するようになつた。

火見せ馬 盆中の三日間は若い馬上侍が五、六十人一団となり、三つの組が三日間に日を定め追廻厩から馬を牽き出して勢揃いをした後、馬乗り袴に馬上提灯を腰にさし、大町から河原町まで盆火の燃えさかる間を乗りまわして職の時、馬が火に驚かない訓練をした。

水馬見分 スイバケンブン、広瀬川で家臣の水馬を君公が見分する行事。

水練見分 小人組が広瀬川の茶屋町下賢潟で水練を行い、君公の見分をうける。

川狩 君公の川狩は広瀬川の大橋から上流の森合までの間で、六月から今月にかけて行われ、君公は川幅祥に脇指をさし草鞋をはき、鮎の鶴綱、毒もみ、投網などをした。

八月

朔日 八朔 ハツサク、三朔日の一で番頭格以上祝儀のため登城、この日から城中始を着る。

鉛虫献上 この日を以て将軍家へ宮城野原の鉛虫を献上する。これが終らない内は一般に鉛虫を捕ることを禁じた。

宮城野お成り 秋の花盛りに君公、夫人、姫が宮城野で花を眺め鉛虫を聴く行事があつた。野の東側野守（太田氏）屋敷内、原に面して五間四方ばかりの壇が築かれ鉛虫壇と称して休息の場所となつた。

十五日 仲秋名月 名月の祝と称した。二代忠宗の時から侍臣に詩歌を獻ずる例を開いた。

九月

九日 重陽 チヨウヨウ、五節供の一で俗に菊の節供という。番頭格以上賀儀のため登城する。この日から城中縄

入着用を許される。

十三日 十三夜 この日も名月の祝と称する。

十七日 東照宮社參 祭神東照公命日は四月十七日であるが、忠宗は承応三年三月東照宮落慶の際、大祭を九月十七日に定めた。この日、蒸命により全城下町人町から渡し物（祭花車）を出すことが明暦元年第一回の祭礼から始ったが地方から見物に来る者のため四月の農繁期を避け、稻刈りの終った九月に定めたものである。君公在國の年は未明七ツ（午前四時）前に供揃い、君公は衣冠の装束で親拝する。出仕の家臣は染小仙台城の年中行事

袖麻上下を着る。社參終了後、君公は国分町西側の外人屋（ガイジンヤ、横断米川氏屋敷、奥筋諸侯の江戸参勤の旅宿）に入り、裏付麻上下に着替え、渡し物を見分し神輿渡御を拝する。侍臣一同に赤飯と精進料理を給する。終って夕刻君公は直垂（ひたたれ）に改め再び東照宮に社參帰城する。着城後奉行以下に神供の饅餅を給する。

杉山台の花火見分 日は一定していないが九月に行われる。杉山台ノ原で砲術家業の士が屋間は狼煙、夜間は花火を打ち揚げ、君公が臨場する。

野仕合 九月頃、榴ヶ岡または宮城野原八幡森の前で行われ君公の見分を受ける。刀槍二手に分かれ、防具の面類の額に堤焼の土鎧を下げ打ち落された者は退き、最後に残った人数により勝敗を決定する。君公は宮城野原の際は野守屋敷に休息し昼食後再び仕合を見て帰城する。

辯狩り 幕末には君公は登米伊達氏の別荘天遊館のあつた向小田原松林山で松茸をとり、娘や側室は郷六屋敷へ行く例であった。

十一月

朔日 戻上祝 カリアゲイワイ、新米を餅について親しい家に贈り又は振舞うことを刈上げ振舞という。城中にもこの祝があつて君公へ宮城郡国分荒井村から新米の餅を献上した。

初亥 玄猪 亥の子と称し、城中でも亥の子餅について祝いがあつた。

二十日 梅子講 エビスコウ、城中にも祝いがある。この日から足袋が許される。

十一月

遠馬 トオバ、君公が郊外へ遠乗りに出かけることで、山ノ寺、岩切、笠懸などに出かける。

雉島屋 キジトヤ、郊外の山に稻むらのような小屋を作り、その中にはいつて雉を待つことをトヤマチと称し、キジオギ（雉笛）を使って雉を誘い出し鉄砲で撃つのであるが時刻によつて朝鳥屋、夕鳥屋といふ。

幕末のころ十二代齐邦、十三代慶邦は、燕沢の安養寺沢塚田、堤下へよく出かけた。お供は国老二人、小性頭、旗本頭、膳番各一人、台所役人二人、鳥屋頭以下五人などである。この雉うちは十一月から十二月にかけて行われた。

お山追い 政宗の時代から行われた鹿猪の巻狩である。鹿猪は士民が捕獲することを禁じたが、田畠をそれらの獣害から保護することと、平時に戦斗訓練を実施する二つの目的を持ち、狩猟期は君公在國の年の十月中旬から三月上旬までの間に二回乃至三回、君公出動して行われた。政宗、忠宗時代は主として遠島と称された牡鹿半島方面で一週間位にわたって行われ、五代吉村以後は城下郊外の山野を獵場とした。出動人員は士分以下二千名乃至四千名である。その一例として宝曆八年（一七五八）十二月十九日、七代重村が仙台郊外の葛岡権現森で行なつた時の出動人員と組織を示すと、總員三八〇四名、これを東西各一五隊に分け、總指揮官をお山の大将と称し、その下に勢子奉行九二人、徒目付三〇人、太鼓打三〇人、帳付八人、組士五六九人、旗元足輕六五人、並足輕五三〇人、勢子二三〇〇人、旗卒一二〇人、太鼓持六〇人、他に軍師、螺役若干という構成である。君公の本陣を御龍と称し、その下に竹矢來を結い猪鹿を追い入れ、君公が鉄砲で手撃し、その他を家臣が獲る。目付は勇敢な者、臆病な者を監視し、鹿猪を撃ち留めた者の姓名とともに帳付に記入させ、後日その賞罰が行われた。獵場は城下周辺の御裏林、越路山、御竜沢、芦ノ口、金剛沢、堂ヶ沢、佐保山、權現森、横向山、吉成山、中山、鶴ヶ谷であったが、仙台城から半径四キロ以内、主として城背で行われた御山追の獲物は次の通りである。

五代吉村

亨保一二

一四二二

一五三二

一六二二

元文

一七二二

一八三二

一九三一

一九三一

一九三一

寛保

一九三一

一九三一

一九三一

六代宗村

延享

一九三一

一九三一

寛延

七代重村

芦ノ口 佐保山 金剛沢

芦ノ口 佐保山 佐保山

芦ノ口 佐保山 佐保山 佐保山 佐保山 佐保山 佐保山

猪鹿

四九頭

八一頭

一一頭

四一頭

大〇頭

一三四頭

六二頭

八三頭

六九頭

七七頭

六〇頭

七四頭

一四九頭

一九三一

四六頭

一九三一

六九頭

一九三一

明和 元一二一三 佐保山

五一一一九 佐保山

九〇頭
九二頭

七一一二五 芦ノ口

七二頭 狼一頭
六六頭

安永 五一二一五 金剛沢

以後この城背地帯では八代斎村が天明五年御裏林で一回、十一代斎義が文政年中に越路山で三回、御竜沢で一回、十二代斎邦は文政十二年から天保十二年まで越路山で六回、堂ヶ沢で一回、十三代慶邦は嘉永二年から元治元年まで越路山で五回、御裏林で二回出獵したが獲物の数は記録されていない。稀にお山追に参加した家臣の記録に散見するところによれば二、三頭から七、八頭で猪鹿は漸次絶滅をたどっていたことが分るが、戰時に対する訓練であるため出動人員は旧来と變っていない。

鶴のお早や、仙台から最も近い丹頂鶴の渡來地は七郷の荒井で、鶴の下りる所を鶴代（つるじろ）という。鳥目役が馬で城中へ急報すると、君公は馬で急行し城下端れでお供を残して馬上侍だけを従がえて鶴代へ急ぐ。これを鶴のお早やと称した。鶴は鷹で合わせることもあり鉄砲で撃つこともあった。

十一月

初旬 初鰯獻上 三陸海岸で初漁の年取魚の鰯を將軍家に獻上する。

八日 鈿供養 中奥御殿の女の行事で、小豆汁にこんにゃく、豆腐、大根等六色のものを煮た汁を食う。これをムジツ汁と称し無災の縛を除くためといわれる。

十三日 煤掃き

初旬 寒鶴出馬 早い年は十一月下旬から行われる。袋原辺を振り出しに君公が七日位假屋や肝入屋敷に泊りを重

ねて鳴、クリなどを狩り浦崎で終り、竹駒神社に社参して帰城する。

下旬 寒暑の見舞 年二回寒暑に君公から一門などに書状で見舞を出し、これに添えて物を賜う。

節分 豆ばやし 豆まきのことと、年男が勤める。八、九才の子供で御試めしと称する資格審査があつて両親健在が條件である。一人は国表、一人は江戸藩邸で勤める。侍鳥帽子に素袍を着け、豆をいれた三宝をかゝえ、明きの方に向かって『福は内、福は内、鬼は外、鬼は外、天打つ、地打つ、四方打つ、鬼の日玉ぶつづぶせ』といふ。この声が君公のお耳に達した際は褒美が出る。年男の勤めぶりが良い時はそのまま兒女性に登用された。

廿九日 松飾り 根白石村で持高十一貫百九十二文を所有する八人の百姓から年々門松を仙台城に納めることになつていていた。これを御門松百姓と称し郡役諸税を免除されていた。その中の組頭を勤めた鶯尾氏の寛文十年の記録によると、門松四十二門、五階松、新柱八十四本、長さ一丈一尺、鬼打ち木二百五十二枚、長さ三尺、巾五寸、年重ねの年は門松五門、新柱十本、鬼打ち木三十枚、祝儀の賜金は一分判七切、年重ねの際は一割増とある。これを十二月二十七日に城へ納め、二十九日に立てる。

年初 表対面所に棒を質門のように立て横木に塙鮎一本、雉一羽、鰯一把を吊り下げ、傍に伏せ臼に注連飾りを巻き、上に鏡餅を供え、菰かぶりの四斗樽を置く。

城中の用日

出入司用日	二日	五日	八日	十二日	十八日	廿三日	廿六日	廿八日
藏取納日	二日	六日	十六日	廿一日	廿三日	廿七日		
藏渡日	三日	七日	十一日	廿二日	廿五日	廿八日		
評定日	三日	九日	十九日	廿五日				

證　日　二日　五日　六日　七日　八日　十一日　十六日　十八日　廿一日　廿二日

廿三日　廿七日　廿九日

城中の休日

朔日　四日　十三日　十五日　二十日　二十四日　二十六日　晦日

五節供

初午

嘉祥

彼岸中日

盆中

冬至

立春

評定日の内三月十九日道祖神祭、七月九日塙釜神社祭、初卯、庚申、甲子にあたる日は休日となる。

〔参考文献〕

伊達家文書第一卷

義山公、獨山公、忠山公各治家記録

六代治家記録

城中年中行事（写本）常盤雄五郎氏蔵

御目付年中行事（写本）三原良吉蔵

御小人目付行事（写本）三原良吉蔵

登米伊達家御制令秘書（写本）米谷健一郎氏蔵

落合時住手記小姓勤方覚（落合氏蔵）

浜田景長手記涙のたね（浜田善雄氏蔵）

菅野屋卯兵衛御用留（写本）菅野氏蔵

伊達家史雜稿（伊達邦宗編著）

仙台風俗志（鈴木省三著）

仙台城の年中行事

仙台祭資料（仙台郷土研究会編）
續刊仙台叢書第一巻

仙台城の地形・地質

奥

津

春

生

—とくに兵用地誌・石垣・刻印・湧水を中心として—

仙台城の地形・地質

—とくに兵用地誌・石垣・刻印・湧水を中心として—

第一章 総 説

一、はじめに

仙台城は稀にみる天險の要害としてしられていては、階段状に発達している自然地形をうまく利用しているなど、地形地質学的にも興味深い問題をもつていて。また仙台城をとりかこむ水系の水源、用水などの水理地質学の問題や、築城を中心とした地盤強度、城壁石垣の石材の種類、产地、運搬方法などの土木地質学的なことなども再吟味してみる必要がある。

この報告書をまとめるにあたっての調査要点を示すと次のようになる。

1 地形学的事項

- イ 地形のなりたちと本丸、二の丸、三の丸の位置
- ロ 外堀(濠)の水系とその水源
- ハ 天險の要素となつた広瀬川の変遷と竜ノ口峡谷の成因
- ニ 広瀬川～竜(方位の辰の意)ノ口間の空谷を利用した堀切(隄)
- ホ 仙台城背後の地形と間道のルート

2 土木地質学的事项

イ 仙台城周辺の地質と築城からみた地盤強度

ロ 城壁石垣の石材の種類、产地、運搬系統・方法

ハ 本丸、二の丸、三の丸の用水の水源とその水理地質

要するにこの報告書は、仙台城の立地条件を兵用地誌・軍用地質学の立場からみたものの一部を収録したものである。藩政時代の絵図を参考にしながら現地調査を行なった結果を主としているので、従来の考察と一致しない点もあることと思われる。なお文化財保護の立場から、石垣保護対策にもふれることにした。現地調査は東北大学教養部地学研究グループの協力のもとに行なつたもので、野外・室内作業を通じて、いくつかの新事実が明らかになつたことを特記してその労をねぎらいたい。

二 築城を容易にした地形地質のあらまし

1 地 形

築城の原則としては、守るに易く攻めるに難い条件をもつことが大切であるが、一面、構築の難易や経済上の問題も一つの要素になつていていた。帰するところ、立地条件に恵まれた自然地形をうまく利用すること、生活や防備（水源）に欠くことのできない水資源が豊富であること、城の構築に必要な資材（木材、石材）の入手が容易であることなどが重視されたことになる。

このような観点から仙台城を再吟味してみると、まず第一に気のつくことは広瀬川の急崖や竜ノ口峡谷が城郭の三方（北・東・南）を囲んで、天嶮の要害になつていている。さらにその内側には広瀬川に流入する谷や低湿地があつて外堀的な役割をはたしていた。仙台城の外堀にあたる長沼や五色沼は、当時の谷・低湿地を利用してつくられたものである。また本丸西方背後の間道ぞいには、このルートを横切る五本の谷があるが、そのうちの三本は一の堀切（隠）

二の堀切、三の堀切として切りとられるなど、自然の地形を利用した効率のよい防備体制をとつていた。

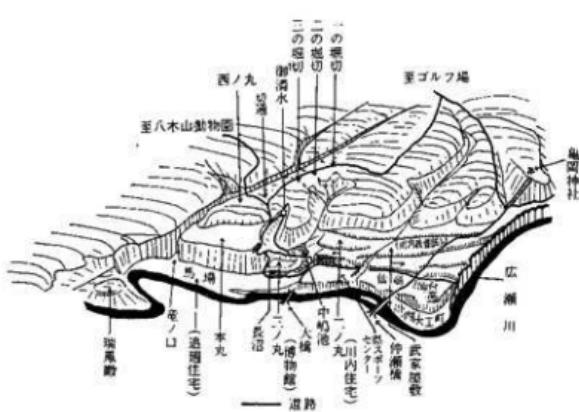
このほか、建築物の建設や戦闘要員の配備のためにも、また敵が侵入してきた場合の戦いのためにも平地が適当に配備されていることが必要である。仙台城構築前の原地形は、このような目的にはおあつらえむきの段丘地形なので、海拔一—五一一四〇筋の丘陵性台地の頂は西の丸（天主台）や本丸に、また海拔六—七八筋の面、その下の四〇筋の面、さらにその下の三〇筋（三四〇筋の河岸段丘面は三段の平坦面に区分されていて、それぞれ原地形をいかして二の丸、三の丸、追廻馬場に利用された。段丘地形は広瀬川そいに広く分布しているが、このような小範囲に立体的な面（段丘面）と崖（段丘崖）が適当な割合で配列されている所は仙台城周辺以外に求めがたい。政宗の築城前に国分氏は青葉ヶ崎とよばれていたこの一帯に千代城を築いたと伝えられていることからみてもこの段丘地形は、古くから城として利用されていたことがわかる。

要するに仙台城はこのように自然の地形をうまく利用して

山城を構築したもので、築城に必要な土地造成や防備上の付帯工事は、かなり能率的、経済的に行なうことができたと思われる。

また城の構成として大切なことは、万一撤退を必要とするときには、婦女子を含めた全員が安全に退却できる間道

第1図 自然地形を利用した仙台城の構成模式図



経路（虎口）を必要とするが、この点でも仙台城は背後地の地形に恵まれていて、城の西方にはモミ・ナラなどの密林に被われた丘陵性台地がつづいていて、間道をつくるのに好都合な地形になっていた。このルートの現状はかなり開発変形されたため、当時の面影はその一部に残されているにすぎない。

2 土木地質

仙台城を土木地質的にみると、本丸の位置していた丘陵性台地や、二の丸・三の丸があつた段丘面下には、礫を主とした砂礫層が分布したことが幸して、整地作業が容易であったほか、構造物の建設に対しては安定した地盤になっていた。しかしこの砂礫層のうち、地表下一メートルの部分は軟弱なローム層を中心としているので、軟弱層の切り取りが不十分の場合には長雨・地震などによる不等沈下、ひいては建物の傾きや亀裂を生じやすい結果になる。仙台城の城壁石垣や隅櫓などが、幕政時代におこった三回の地震（正保・寛文・天保）でかなりの損害を被ったことが記録されているが、この点で本丸・二の丸の建物、城壁などの基礎地盤については、土木地質的な問題を残している。

仙台城は湧水・地下水に恵まれている点でも特徴があつて、平時はもちろん、籠城時にも用水をまかなく十分な湧出量をもつていて、外堀の水源は沢の湧水を流入させて作った中船池の余水であることも仙台城の特色である。また二の丸の中島池や三の丸周辺の外堀は井戸の地下水を人工的に養ううえにかなり効果的であつた点など科学的な配慮もなされていた。現在は仙台城内外から湧出している湧水はかなり減水してはいるが、当時はこの五倍程度の湧出量があつて、外堀にあたる五色沼や長沼を養つてなお余りがあつた。湧水は減少したというものの、現在、丘陵性台地に生活している農民の貴重な水源になつていている。

仙台城の壁の石垣は良質の安山岩が使用されているが、この産地が仙台城から一〇キロの範囲内にあつて、運搬に便利であったことも築城を容易にした要素になつていた。

このほか、仙台城の位置は陸上・水上ともに物資収集に便利な位置にあるほか、城下町を眼下に見おろす要點にあ

つて、夕日に輝く仙台城の偉容は、城主の威厳を士民に示す点でも効果的な地形と背景とをもつていた。

第二章 地形学的項目

一 仙台の地形のなりたち

仙台城の建物や石組みの基盤になつてゐる階段状の地形は、第四紀洪積世（数百万年前）のころに形成された段丘地形をうまく利用したもので、その構成を地形学的にみると次のような関係になつてゐる。

第一表 仙台城の構成と地形学的区分

仙台城の構成区分	海抜高度	地形学的区分
西九（天王台）	一四二・三五	青葉山段丘
木切（濠）	一五・五〇～一七・三五	タ
二の丸上段（御宝蔵その他）	七〇・〇～七八・〇五	/
二の丸（東九）	六一・〇～六四・〇五	仙台台の原段丘
三の丸（東九）	四〇・八五	仙台下町段丘
三連馬場	三〇・〇～三四・〇五	仙台下町段丘
長兵（外濠）		

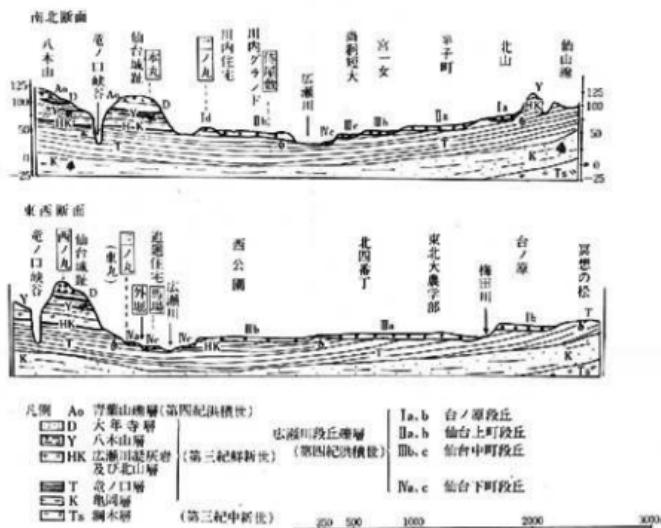
以上の関係を図示すると第2図のようになり、四段の段丘面は広瀬川によつてつくれられた河岸段丘面で、広瀬川を

はさんだ仙台城と城下町間に規則正しく分布していることがわかる。このように仙台城の城下町は、広瀬川が残した四段の平面（段丘面）上に位置しているため、上下の段を結ぶにはこの間にある崖（段丘崖）を切る坂道をつくる必要があった。

この段丘崖は直線ではなく、ゆるやかに屈曲した線上に分布しているため、いつの時代でも整然とした区画整理・都市計画には好ましくない存在になつてゐる。藩政時代の絵図をみると、碁盤目状の町割りをした城下町の所々にゆがみ（歪）がみられるが、これは段丘崖の形や、広瀬川河岸の屈曲に支配されたものと思われる。県庁前と齊藤報恩会前を走る段丘崖や、米ヶ袋上町・中町・下町をくぐる段丘崖や広瀬川の河岸の形などはそのよい例である。

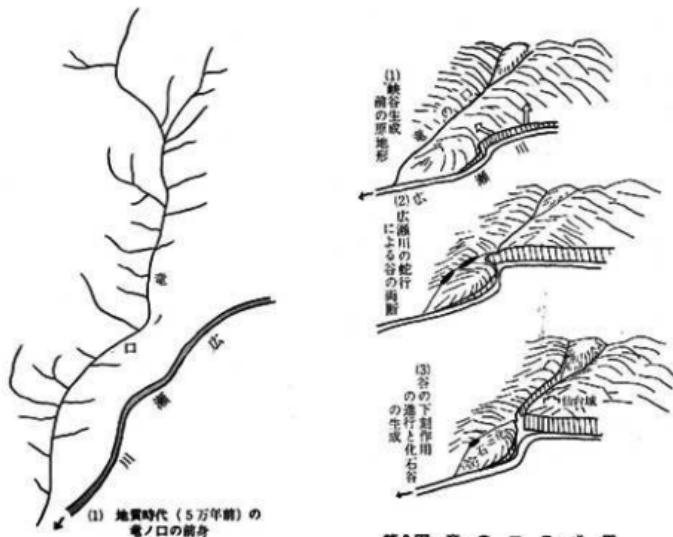
一方、仙台城を天城の要害として特徴づけたのもも広瀬川の所産で、広瀬川自身が外堀としての役割をはたしているほか、仙台城東面の断崖や竜ノ口峡谷の絶壁は、広瀬川が今よりも西によつて流れていった時代に侵食作用でけずられて生じたものである。

第2図 仙台城と河岸段丘との関係



二 天城の要素となつた広瀬川の変遷と、竜ノ口峡谷の成因

天然の要塞を形づくつている仙台城東面の急崖は、広瀬川の側侵食でけずられたもので、寛文四年（一六六四）の地図では、この急崖の直下を広瀬川の蛇行部が流れていたように画かれてある。正保三年（一六六六）や寛文八年（一六六八）の絵図でもほぼ同じ傾向がみられるが、やゝ後退期にはいつた点もみられる。これが安政三年（一八五六年）になると、急崖からかなり離れた流路をとるようになり、さらに後退して現在の状態になった。このような河道の変遷は当時の地殻運動に関係があつて、南西方向への傾動運動で広瀬川は本丸東面の急崖下まで追いこまれたが、その後の青葉山一帯におこつた隆起運動の影響をうけて、その周辺部にあたる広瀬川蛇行部は周辺におこつてある地圖には、この影響をうけているものとみてよい。このような隆起運動は筆者がボーリングを通じて研究した青葉山一帯に分布しているものとみてよい。このような隆起運動は筆者がボーリングを通じて研究した青葉山一帯に分布してい



第3図B 仙台城の直下から後退しつつある広瀬川の過去と現在

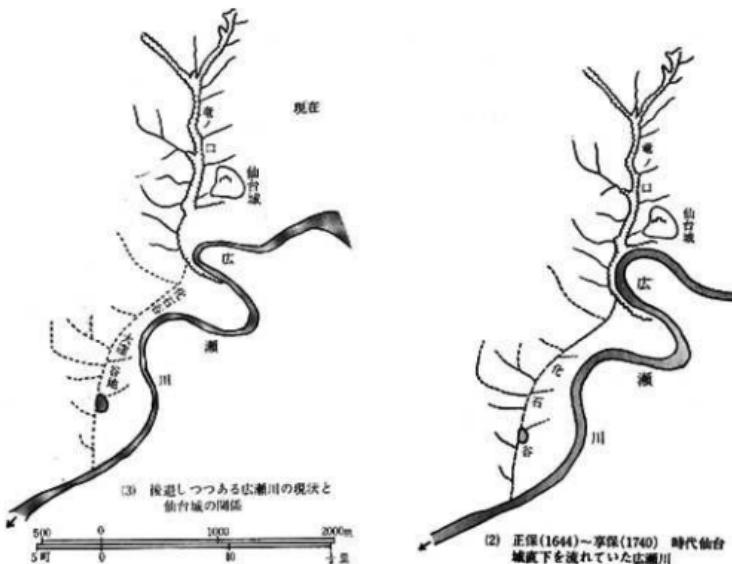
A 広瀬川の蛇行の側侵食でつくられた竜ノ口峡谷
B 第3図 竜の口の成因

る青葉山礫層の分布や傾斜などからも証明することができる。(仙台都市地盤図に発表予定)

青葉城南面の絶壁になっている竜ノ口峡谷は政宗築城のかなり以前(約五万年前)に生じたものである。

前にものべたように、広瀬川は段丘面を残しながらしだいに南西方向に移動したが、その極限に達したころに蛇行部の西端が旧竜ノ口の谷を両断した。したがつて谷の上流部は広瀬川との落差が大きくなつたために谷底を深く掘り下げる下刻作用が進み、深い峡谷になった。下流部は水深を失つたため空谷の化石谷となつて、現在の大庭谷地の町の中を流れている小川や沼に、その名残りをとどめている。

本丸に接した竜ノ口峡谷の最深部の現状は六五メートルであるが、藩政時代の記録で同一地点と思われる個所を調べてみると約九メートルの差がみられる。これは測量の誤差も考えられるが、広瀬川の後退に結びつけて考えてみると政宗時代からの下刻作用は少なくも五メートル程度は進んだとみることができる。



三 外堀（濠）の水系とその水源

仙台城の西北側から南にかけて大きく蛇行している広瀬川と、城の南側を深く切っている竜ノ口峡谷とは、ともに仙台城の天然の外堀ともいべきもので、人工的な掘削を必要とする内堀は必要としないほどの好条件にあった。しかし城の防備をいつそう堅固にするために、かつて広瀬川が三の丸直下を流れていた時代に淵として残された低湿地をうまく利用して、内堀式のものを掘った。これが長沼で、三の丸の北側と東側をなぎ形に囲んでいる。長沼は仙台城の構成からは外堀としてあつかわれているが、当時の長沼は水量に恵まれ、防備の面はもちろん、城の景観を一段とひかせる点からも有意義な存在であった。現在は変形されているうえに、土砂の流入がはげしいため、当時の面影はかなりうすれている。参考までに藩政時代の絵図にのってある長沼と現状とを比較すると第4図のような関係になる。当時の長沼の水深は二・五間（四・五尺）になっているが、現状は長沼北端では〇・五尺、南進するにつれて深くなり、最深部（長沼南端附近）でも八五尺で、築城当時から今日まで約三・四五尺の土砂が流入したことになる。この堆砂量の大部分は米軍が中島池をうめた終戦後からの量で、終戦前後を通じて採掘された上流並炭坑からの土砂流入量も関係している。このようなことから外堀の現状を保護するためには、ぜひとも中島池を復旧することが必要で、そのうえ中島池に流入する深沢や本沢の湧水群を保護する対策をたてることも大切である。

外堀に入流する水系は第4図に示した二本の沢（深沢・本沢）であるが、その水源は湧水である点が大きな特徴になつていている。この水源から流入する水量と水温の関係を測定してみると次のようになつていてることが判明した。（昭和四〇年一月一ヶ月間、測定者奥建外四名）

沢名	水量（m ³ /日）	水温（℃）
深沢	六〇～一〇六	九・三～一二・五（平均一〇・九）
本沢	一八七二一四	七・二～九・五（平均八・五）

仙台城の地形・地質

合計 一七八〇三二七

平均 一二九

第2表 仙台付近の地質層序からみた仙台城の地盤・地下水。

二の丸建物基礎		武家屋敷		地盤		中仙上・仙台下町上・町台		河岸段丘帯層		第四紀洪積世	
二の丸井戸	水脈	本丸建物基礎	地盤	御清水・本丸井戸		本丸石垣基礎地盤		木年山寺		木年山寺	
牛込門前	面急崖	九十九谷底・礎橋	本丸井戸	本丸石垣基礎地盤		三亜屯北広八大	青葉山	木年山寺		木年山寺	
城壁石垣	の石材橋	口谷底・礎橋	本丸井戸	本丸石垣基礎地盤		流安閣山口	山	木年山寺		木年山寺	
				本丸石垣基礎地盤		群山	山	木年山寺		木年山寺	
				本丸石垣基礎地盤		第三紀中新世	第三紀中新世	木年山寺		木年山寺	
				本丸石垣基礎地盤		群山	山	木年山寺		木年山寺	

この測定結果では中島池に注ぐ二本の沢の流入量の平均日量は一二九立方メートル(トン)になる。しかし沢の水源についている湧水群の湧出量は時季的の変化があるので、この値を年間平均量とすることはできないが、次の計算から得られる年平均地下水量からみると、ほぼこれに近い値であることがうかがわれる(湧泉の湧出量の年変化は第3章・六の水理地質の項にあり)。

年間降水量(仙台) 一、二三〇錢

地下浸透率 三〇%

集水面積 深沢 七八、一二五平方メートル

本沢 一八三、一〇〇 ヘクタール

として地下水包藏量を求める

深沢 七九四日

本沢 一八五㍉/日

合計 二六四々

また一月の降水量は六二・三㍉であったので、これから地下水を求める

深沢 四八・八㍉/日

本沢 一一五々

合計 一六三・三々

この計算値の日量一六三立方㍍は実測値の一九立方法に近い値になっているが、その差は浸透率や蒸発量を計算にいれていない点が関係しているものと思われる。

さて当長沼をかん養していた流入量がどれほどであったかが問題になるが、五色沼に流入している総量（深沢+本沢+下水量）は十一月の測定では七五二・四立方㍍で、さらに五色沼から長沼への流入量は一、一二三・二立方㍍になっている。この測定値から判断すると、長沼に満々たる水をたたえる必要水量は少なくも日量一、〇〇〇立方㍍は必要で、下水量の少ない当時は、ほとんどが湧水量であったと思われる。この量は現在の湧泉群の湧出量の約五倍で、仙台城の背後地全山が密林に被われた当時としては、この程度の湧出は当然で、現在八〇才台の老人が記憶している深沢の水源、御清水（おすず）の湧出量も現在の三一五倍のことと、筆者の推察と合致するものがある。

なお深沢と本沢との水温では二℃程度の差があるが、深沢の水温が高いのは沢水の大部分が湧泉であるためで、年間の温度変化がきわめて少ない特徴をもつていて。本沢は流路が長いため、表土下からしみ出てくる浸透水がかなりの割合をしめているので、外気温の影響をうけやすく、夏季は高めの冬季は低めの水温になるためである。

四 広瀬川と竜ノ口間の空谷を利用した掘切（跡）

仙台城西丸西方はゆるやかな起伏をもつた海拔一五〇㍍程度の丘陵がつづいている関係で、防備上の弱点になつて

いた。それで自然の地形を利用した堀切を設けたことが当時の絵図に残っている。享保十年城堀凌伺の絵図にのつて、いる堀切（隍）は御清水の西方に大きく一本だけが画かれている。安政三・六年の絵図では一・二・三の三本の堀切がえがかれている。（第5図参照）

これらの堀切のあとを現地形にあてはめてみると、第4図のような関係になることがほぼ明らかになった。これらの堀切はいずれも広瀬川から派生している三つの谷と、これに対応した位置にある竜ノ口の小谷を結んだもので、現在の仙台城から青葉山ゴルフ場に通ずる道路を切ってその両側に存在している。したがって道路はこれらの堀切をうめて造ったため、堀切の部分だけやや低くなつていて、地形も不自然なくぼみになつていて、

絵図に示されている堀切の位置をみると、竜ノ口峡谷の分歧点から北に派生している沢の延長線にある沢が第三の堀切りの位置で、これからほぼ南北に走る尾根ごとに第二の堀切と第一の堀切とが平行してならんでいるようく画かれている。現地の地形から推察した堀切間の距離は、第一と第二堀切間は約一二〇m、第二と第三堀切間は約一四五mになっている。絵図に示されている第一と第三堀切間の距離は二三〇m内外で、數字的には一致しないが、絵図の北西隅に位置している關係で、かなり粗雑に画かれている点が原因しているようである。

五 仙台城背後の地形と間道のルート

城の構成として間道（立退口）も重要なものの一つになつていて、この問題は記録が乏しいので、兵用地誌的に考察している場合が多い。仙台城も同様であるが、考えられることは政宗ゆかりの地である米沢・山形方面に連絡路があつたということである。連絡路としては関山・二口篠谷間に通ずる街道があるが、これらの街道への連絡拠点となりうる地形を考えてみると網木を含む折立・郷六一帯が浮かびあがつてくる。

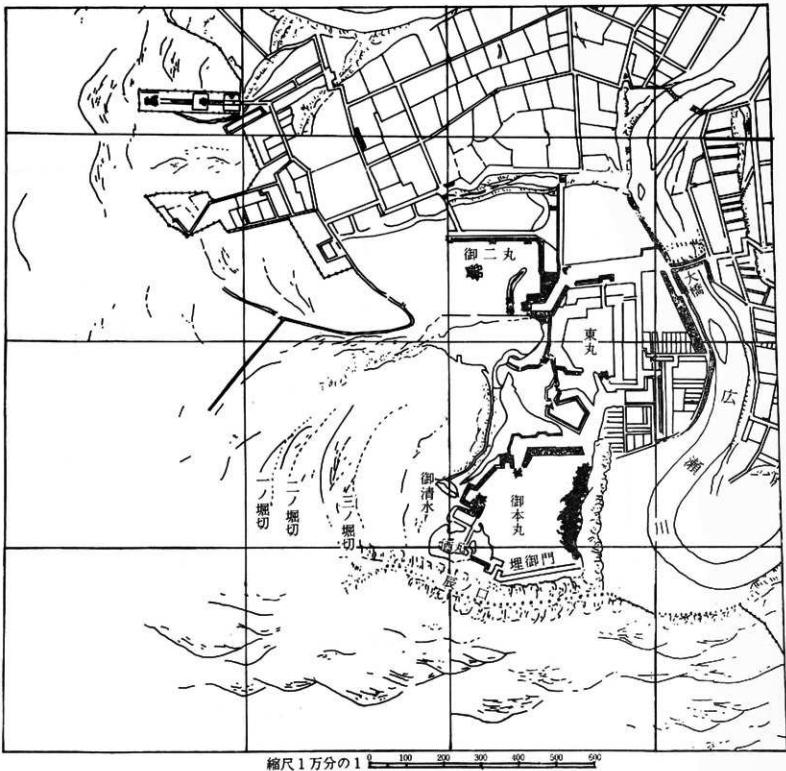
仙台城から折立・郷六へ通ずるルートとしては次の三コースが考えられる。

- (i) 本丸堀門または二の丸残月亭付近から出て尾根づたいに郷六へ

第4図 仙台城周辺の水系・溝水（御清水・三丸溝水）・堀切・切通し位置図



第5図 安政三年同六年製作安政補正改革仙府絵図



100 200 100 200 100 200

(ii) 埋門から竜ノ口（立退口）におりて、現在のゴルフ場をへて郷六へ

(iii) 龜岡御殿付近から広瀬川ぞいに郷六へ

第一の尾根づたいのコースは婦女子を含めた全員が安全に退却可能な地形になつてゐる。さらに好都合なことは本丸からも二の丸からも連絡ができるうえ、尾根一帯はモミ・クリ・ナラなどの巨木で被われた原始林的なものであつたことも間道の好条件になつてゐたようである。また間道の南側は竜ノ口峡谷で、北側は広瀬川の急崖で守られてゐるので、側面からの攻撃にも安全なルートになつてゐた。このような関係から大密林の木の伐採はもちろん、この密林には人食い大蛇が住んでいたから立ちよらないようにと村人の出入を禁じていた。

第二のコースは從来も一つの間道として考えられていたもので、日本城郭全集第九巻（東北北海道編）の中で井上宗和氏は次のように述べている。

「郷六御殿は仙台城の詰の城ともいうべきものであつた。万一、仙台城が苦戦した場合は、本丸の埋門より竜の口沢（立退口）をへて、郷六に達する手管になつてゐた……云々」

ここで問題になるのは、どのようにして竜ノ口峡谷におりるかということであるが、第4図に示した第二堀切付近の点線路から下りることもできるが、かなりの悪コースである。またずい道という考え方もでてくるが現在のところでは確認されていない。ただ東北大工学部機械系建物の西の沢で、地表下2mの所に一つのずい道が発見（千葉清太郎×幅三・六mで、方向は西南である。また応用理学建物の根切工事の際にも小規模な空洞が発見された。

第三のルートは難コースの一つで、単身の歩行はできるが、集団の行動は困難なので特殊な場合のほかは利用されなかつたと思われる。

第一の尾根づたいのコースは郷六方面だけでなく、大梅寺にも、また佐保山を通じて茂庭方面に出ることも容易な

コースなので、これが代表的な間道的連絡路になっていたものと思われる。

二の丸西の残月亭と御休所（御茶屋）を結ぶ通路、さらにこれから分岐延長している通路も間道に關係をもつ迷彩的な存在であったかも知れない。

第三章 土木地質学的事項

一 仙台城周辺の地盤と築城からみた地盤強度

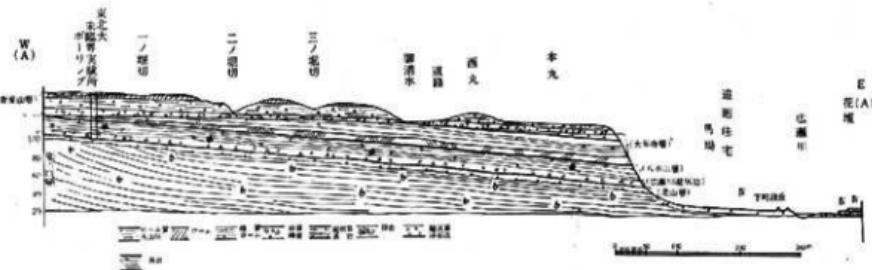
地盤を大別すると土層と岩盤とに大別されるが、仙台城の地盤をみると、表層は粘土、ローム、砂礫からなる土層で被われ、その下の基盤岩は亞炭層をはさむ凝灰岩と泥岩類で代表される軟岩がきている。

この地盤を地質層序・地質時代からみると第2表（一三三頁）のような関係になつていて、地質断面図で示すと、第6図に示した順序でかさなつてある。

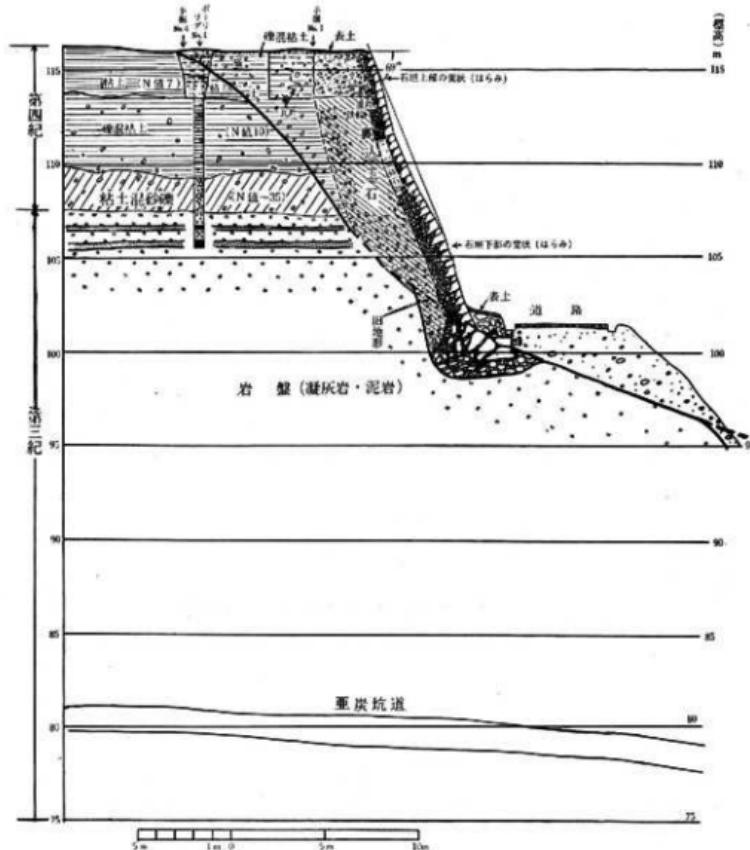
この國でもわかるように、仙台城は広瀬川の侵食・堆積作用でできた自然地形を利用して構築されたもので、本丸・二の丸・三の丸の建物の基礎地盤は段丘礫層（第四紀洪積世）で、城壁石組の基盤は大年寺層の軟岩（第三紀鮮新世の凝灰質泥岩～砂岩）になつてある。

本丸基礎地盤の地質構造については不明の点が多かつたが、宮城神社レスト

第6図 仙台城の地盤とその地質層序



第7図 本丸建物・城壁石垣基礎地盤と亞炭坑道深度を示す断面図



ハウス建設設計段階で、城壁保護の立場からその詳細を知る必要がおり、ボーリング二本（施主宮城神社）と手掘四個所（施主仙台市建設局）の結果からいくつかの新事実があきらかになつた。これらの調査結果をもとにして地下構造を組み立てみると、第7図のようになっているものと思われる。

この結果から明らかになつたことは、

(i) **本丸の平らな面**（海拔一一〇m）は人工的に整地されたものであるが、整地前の原地形は西の丸（海拔一三〇m）につづいていたゆるやかな傾斜地で、海拔高度は一一五m一二五mであつた。これは青葉山段丘礫層の層序や厚さから推察できるもので、青葉山周辺での段丘礫層下の着岩深度は地表下四・五m八・五mになっている。仙台城周辺での段丘礫層の厚さは一〇m二〇mが標準なので、少なくも五m一〇mの切取工事が行なわれたものと考えられる。この推察でゆくと大番士土手のうち、南方に残っている土手は整地前の地形を利用してつくったものとも解することができる。なお整地作業の残土のうち、礫質の部分は城壁裏ごめ材料や通路の盛土に利用されたが、大部分は前面の急崖下に捨てた。現在急崖下にできた崖錐はこの残土と風化物とで構成されている。

(ii) **城壁石垣**は丘陵周辺の斜面の一部を切つて構築したもので、城壁にそつた道路も切取、盛土工事でつくられたものである。切取工事前の原地形は道路ぞいの深沢右岸の斜面を思わせるものであり、この斜面は本丸の面近くまでつづいた。

以上のべた原地形を考えながら城壁周辺の地山の分布をしらべてみると、道路にそつた城壁石垣基礎は地山の部分をかなり切りとつつくられたことがわかる。一例として本丸南側の城壁付近を南北方向に切つてみると第7図に示したようになつている。

(iii) **城壁石垣の裏込**は石垣にそつた三層構造になつていて、石組み背後の第一層は石材加工時の碎石を三〇mの厚さに、その背後の第二層には広瀬川の河原から運搬したと思われる玉石を六〇mの厚さにつめて、ともに排水しやす

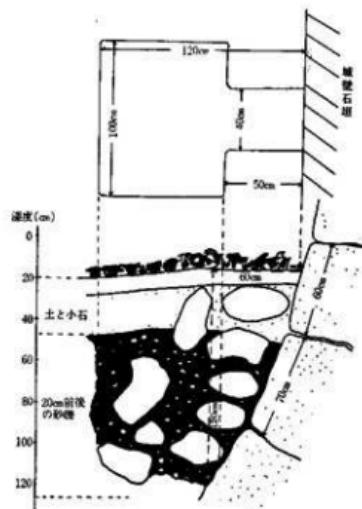
いように工夫してある。第三の材料には本丸を整地したときの礫まじり粘土を利用しているが、この盛土の厚さは七
尺である。第二層の玉石や第三層礫まじり粘土層中には、皿の破片、鉄輪、瓦の破片、木の根の断片が点在している
点から判断すると、地震の崩かいのたびごとに積みかえたことがうかがわれる。

(iv) 石垣の基礎の根入深度や地盤の状況をみるために二箇所の掘さくを試みたが、その結果は第9図に示したよう
な構造になつていて、城盤石垣の基礎は一・二尺以
上の深度にあって、おそらく軟岩（大年寺層の凝灰
質泥岩）を二尺内外まで掘り下げ、その上に玉石を
しいて石組みをのせたものと思われる。石垣の隅の
基礎を掘つた例では一・八尺掘り下げるも着岩して
いないで、石垣の前面に敷いてあつた大きい角石に
到達したため掘さく不能になった。以上の二例から
みて、石垣の基礎のうち、隅に当る要所には石垣基
礎と同程度の大きさの角石を石垣前面に敷いて安定
をはかっているが、その他の部分では第8図に示し
たように二五—三五尋の大玉石を石垣にそつて配置し、大玉石間には一五—二五尋の玉石や小礫を充てんしたものと
思われる。

(v) 本丸の地盤の表層は一般に軟弱で、このことは宮城神社社務所の建物の一部が新築後部分的に沈下、亀裂などの変状（昭和三五年一月～六月）がおこつたことからもわかる。

地盤の強度を知るために行なつたボーリング結果から判断すると、地表の粘土～ローム層のN値は三七で、礫まじ

第8図 本丸石垣基礎の断面図

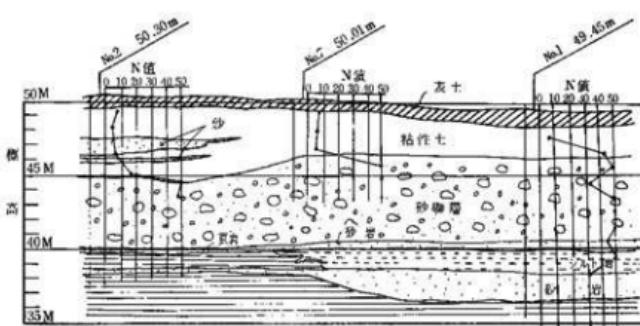


りの部分でも一五内外である。しかし地表下五・六m以下には粗砂利式の粘土まじり砂礫層があつて、N値は三〇～五〇の安定した地盤になつていて、この軟岩はいくぶん風化してい、N値は二五内外になつていて、した

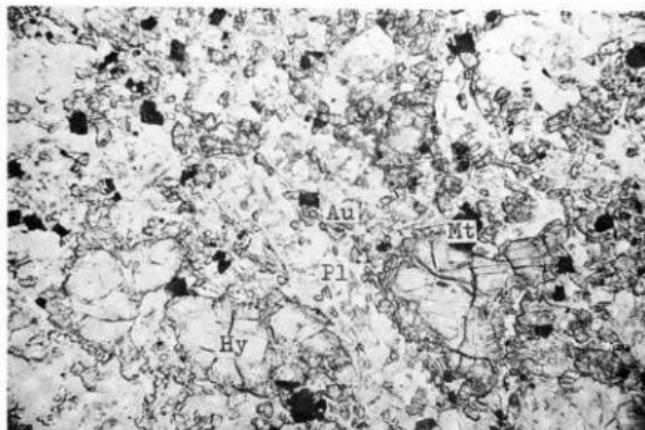
がつて将来本丸建物の復旧などを計画する場合には、直接基礎よりもクイ基礎が安定で、クイの支持層を砂礫層に求める場合のクイ長は六m程度で、基盤岩の場合は九m内外になる。なおボーリング調査にあらわれた各層の支持力は、表層の粘土層では四・八m²、中層の粘土まじり砂礫層では二五・三〇m²、基盤岩の風化帶で二〇・二五m²であるが、未風化の基盤岩では三五・五〇m²程度を期待することができる。

(vi) 二の丸の地盤も本丸とほぼ共通した傾向を示している。東北大記念講堂の地盤調査から判断すると第9図に示したように、表層の粘土層の厚さは三・五mで下部は砂質になっている。この下の砂礫層の厚さは五・六mで、地表下一〇m付近までつづき、その下には基盤岩の軟岩（竜ノ口層の砂岩・泥岩）が分布している。以上の地層の支持力をみると、表層の粘土・砂層（N値4～7）以外は本丸のそれよりも強く、砂礫層のN値は三四～五〇以上の値で、かなり締まった粗砂利になつていて、基盤岩の軟岩類は新鮮未風化で、N値は五〇以上で $50/2 \sim 100/2$ とすぐれた支持層になつていてことを示している。二の丸は本丸よりも条件のよい地盤構造になつていて、本丸よりも二の丸を重視して規模の大

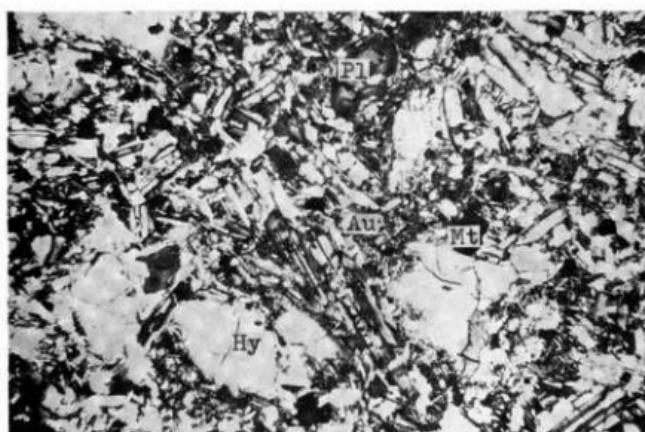
第9図 二の丸地盤の地質断面図



第10図 本丸城壁石垣石材（青緑石安山岩）の顕微鏡写真



オープンニコル



クロスニコル

Au. 普通輝石 Hy. しそ輝石
Mt. 磁鐵鉄 Pl. 斜長石

きい建物をたてたことは、地盤の点からもうなずけるものがある。
なお、二の丸敷地内の砂礫層の上面は全般的にみると北から南にゆるく傾斜しているが、これは段丘礫層が堆積した当時の広瀬川の流れの方向を示すものと思われる。

二 城壁石垣の石材の種類・产地と運搬経路

仙台城城壁の石垣の石材は安山岩で、その产地は仙台城から近距離にある山屋敷周辺であつたことは古くから言い伝えられていた。筆者はこの問題に興味をもつて、地形地質的に調査してみた。本格的な解決までにはいたつていなかつて、一応次のように解釈することができた。

(i) 石材の種類は安山岩で、仙台付近の地質層序

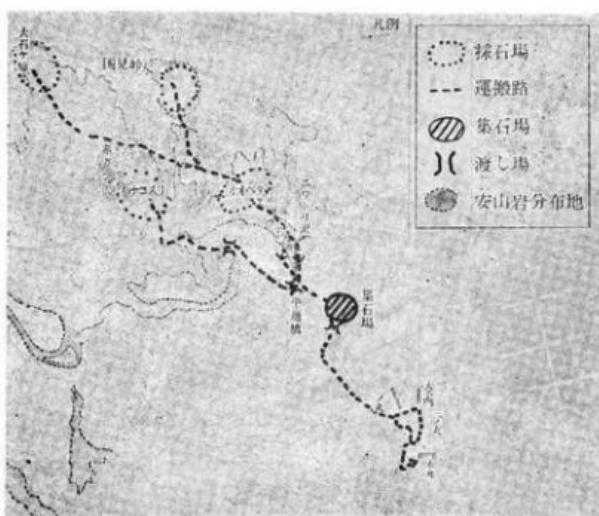
でいう三滝安山岩（第三紀鮮新世）に属するもので、正しくいえば両輝石安山岩とよぶものである。

この安山岩の特徴の一つは風化すると玉ねぎの皮をむくように脱落することで、大手門や清水門の石垣の石材にも、この玉ねぎ状の風化がよくあらわれている。参考までに石材に使われた安山岩の顕微鏡写真を第10図に示したが、その特徴は山屋敷周辺に分布している三滝安山岩のものと全く同一である。

(ii) 石材の产地は三滝安山岩の典型的な分布図で

ある三滝・山屋敷周辺であることは古くから知られていていたが、築城用石材の主産地を岩石学の立場から、また古考（黒田八兵衛一六代目の石材店主黒田虎治氏七一才）の言などから判断すると、次の四地点であることが明らかになつた（第11図）

第11図 築城用石材の产地とその運搬経路



(4) オオ(大)ヘタ山 現在の八幡住宅から仙台市上水道配水池付近にかけた一帯

(5) ハナコスリ 仙台女子商業高校付近踏切から約八〇〇m 山形よりの石山で、仙山線で二分されている。

(6) 国見峠 現在の米軍無線アンテナ東側一帯

(7) 大石ヶ原 国見峠西南面の安山岩(おもに転石分布地)

オオヘタ地区は仙台城に最も近い安山岩分布地で、本丸から直線距離で約三尋の所にある。この地区には築城当時に切り出されたと思われる安山岩の破片(石屋仲間でいうコッバ石)がかなりの範囲に厚く分布している。この地区を二〇年前に整地して家をたてた桜井龟代治氏(荒巻弘法山)の話によると、多数のコッバ石とともに寛文年間の古銭が出土したことである。オオヘタ地区からの石材は貯水池前を通っている急坂のウナリ坂(現在のウナギ坂)から運んだものと思われる。

ハナコスリ地区も代表的な安山岩分布地で、現在仙山線の両側に五ヶ所の採石場がある。このうちの二ヶ所は四〇年前に開発されたものであるが、その他はかなり古い歴史をもつていて、この地区から切り出した石材は地形的に最も便利なアカガニ(赤岩)沢から広瀬川ぞいに搬出したものと思われる。

国見峠地区もパコダ塔・バラボラアンテナ所在地中心に良質の安山岩を産出した点で有名で、石質が堅硬であるため近年まで石仮用として切り出されていた。仙台城城壁の石質からみると、この地区的安山岩が相当量使われたことがうかがえる。搬出路はオオヘタ地区に通ずる道が利用されたものと思われる。

大石ヶ原地区は巨大な転石の分布地として知られているが、野面(のすら)積みに使われた転石の一部はここから運び出されたことも考えられる。広瀬川の郷六・放山(はなれやま)一帯からも安山岩の転石を搬出したと思われるが、この地帶の転石は角ばっていて野面用としてはむしろ大石ヶ原の転石のほうが適しているように思われる。

(iii) 石材の運搬経路には道路や沢が利用されるが、各産地からの石材は現在の牛越橋下流の左岸河原にあつた講武

所付近に集積され、ここから広瀬川に河床路をつくつて対岸に渡し、亀岡から流入しているマヂチ沢にそつて運搬したものと思われる。この沢は現在深い沢のように感じられるが、これは近年になって川内三十人町の坂の勾配をゆくするために盛土したためで、当時は沢にそつて搬出しやすい地形になっていたものと思われる。

運搬経路は第一図に示したように二つのルートが考えられる。

一つはオオヘタ・国見・大石ヶ原地区などから搬出するルートで、ウナリ坂やニワトリ沢から滝前丁を通り、広瀬川ぞいに集積所に集められ、ここで再加工された。

もう一つはハナコスリ地区からのもので、アカガニ沢・ヒジリ（聖）沢から広瀬川に出て、河原にそつて集石場に運んだものと思われる。この当時の広瀬川の流路を絵図でみると、現在の牛越橋の上流の蛇行部は現在よりもかなり南に寄っていて、三居沢発電所の裏側を流れていったように西かれている。おそらくその後の地図で大量の土砂が押し出し、しだいに北寄りの流路をとるようになつたと判断される。

なお、ここで再考を要するのは牛越橋の存否の問題であるが、当時の絵図にはなく、渡河地点に石を積んでつくつた河床路（第12図）を牛に引かせて渡つたという意味からしたものと思われる。また巨大な石材の運搬にたてる木橋をつくることは容易でない点からも橋の存在はむしろ否定的である。もしあつたとすれば人や牛だけが渡りうる仮橋的なものであつたにちがいない。

(V) 石材の運搬の方法には地車（じぐるま）と修羅（しゅら）とが用いられたと思われる。

地車は二・四輪の車で、仙台では二輪のものを荷車、四輪（前輪小、後輪大）のものを荷馬車とよんでいる。当時の石運搬用のものは現在使用されるものよりも車台が低く重量にたえうるように工夫されてい

第12図 石材渡河運搬に利用されたと思われる河床路の一例



たと考えられる。地車は牛にひかせたらしいが、巨大な石材では數頭の牛と多人数の人力とが併用されたようである。

修羅はクリ・マツなどで作った丈夫な台枠で、荷車の車輪のないもので一種のソリと考えてよい。この利用法は路面にコロ（転木）をしき、その上に修羅を乗せてコロをころがしながら重い石を運んだわけである。地車と同じく人や牛で引くが、坂道などが急なときは、人間が後から木デコとよぶ支柱を斜めにつけて押しあげるのが普通で、一種のブレーキの作用をするテコ応用の道具も併用されていたものと思われる。また大石の巻きあげには現在でも七木工事に使われているカグラサン（絞車）や滑車なども利用されたにちがいない。

いずれにせよ大量の石材運搬には人海戦術にたよつたものと思われるが、一台の修羅や地車に数十人～数百人の人が網をつけて引くことなどはごくありふれた風景であったと思われる。

三 築城に使用した石材の数量

仙台城には城壁・石垣・敷石・土台石など多量の安山岩が使われたが、最も多く使用されたのは石垣である。仙台城の石材総量を概算するために、代表的な城壁石垣を中心にして個数と重量のおよそをしらべてみると次のようになる。石組みの様式は野面（のすら）積み、打込はぎ、切込はぎの三種に大別できるが、次の文ではそれぞれ（野）、（打）、（切）として示してある。

大手門北壁	（切）	一三七個（最大一・九三四×〇・九四五磅）
寅の門西壁	（切）	一七〇個（最大一・一五×〇・七〇磅）
タ タ 東壁	（野）	一〇〇個
本丸	（東端の四面）	（切）一大六〇個（最大一・一五×〇・九〇磅）
タ タ タ	（中央の二面）	（切）二〇八〇個

タ (鳥居東の二面) (切) 七四二個 (最大一・七〇×〇・八五)
 ク (鳥居西の二面) (切) 八四五個 (最大〇・九〇×〇・八〇)

三の丸入口 (野) 三〇〇個

清水門南壁 (野) 八八個 (径〇・六〇×〇・四〇)

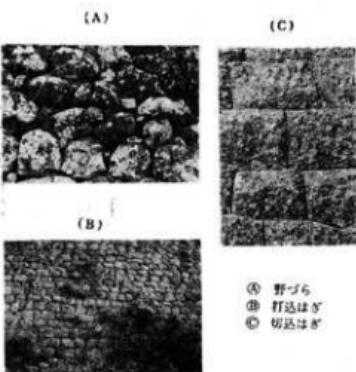
合計 六、一二三個

以上の石垣のほかに本丸西壁の切込はぎ、野面積みや清水門つきあたりの野面積みなどを含めると約一万個の石材が使用されたことになる。

この重量を全表面積 (約五、四八七平方メートル)、奥ゆき一メートル、比重二・六と仮定して求めると、その全重量は一四、二七一トンになる。

この数値から判断すると、実際に使われた石材の重量は約一萬トンをくだらないことになる。石材の産地から運んできた量は、実際に使われる石材の重量の一・五倍程度はあつたものと思われる。約二万メートルの石材をおもに人海戦術で運んだことになる。機械力の発達した今日でも、これだけの石材を運ぶとすれば、五メートルダンプでも延べ四、〇〇〇台を必要とするが、仙台城の石垣を見るたびに、權力の偉大さと土木技術の巧みさを感じるのは筆者一人だけではあるまい。

第13図 仙台城城壁石組みの三型



仙台城城壁石垣を石組みの方法から区別すると野づら (面)、打込はぎ、切込はぎの三種があることはすでに述べ

たが、最も美的な曲線美を示しているのは本丸の切込はぎで、素朴な美しさを示しているのは三の丸人口や酒水門周辺の野づらである（第13図）。

野づらは原始的な石組みの方法で、円形に近い自然石（径四〇—六〇尋の大玉石）をそのまま組みあわせて積みあげたものである。したがって玉石相互間のまさつ力は最も弱い関係で、仙台城でも低い石垣に応用され、勾配も小さく（約八四度）、曲線的勾配はみられない。また一つの城壁面で野づらは打込はぎと併用されている所もある。野づらをよくみると、第14図に示したように接触面を大きくするために、その部分だけを加工し食い合わせをよくしている。

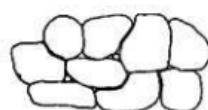
打込はぎは野づらと切込はぎの中間的な存在で、石の角をたたいて平らにして、互いに組合

わせてある。勾配はやや急で（六七度内外）直線的である。これも高い城壁にはつかわれてない。

切込はぎは最も進歩した石組みの方法で、のみを使って角石をけずつて互いに組合させたもので、仙台城ではこれが多く、本丸や大手門の美しい曲線で特徴づけられている。切込はぎの石垣で共通していることは次の三点である。

- (i) 本丸城壁の天端（てんぱ）付近は垂直に近い角度（六七—七〇度）になっているが、これは雨落し（あまおとし）とよばれるもので、敵がよじ登ることを防ぐ実用的な意味があるほかに、石垣に垂直にたてられている建物と石垣との間に連続感を与える効果もねらって工夫されたものである。雨落しの取りかたは、野づらでは上の一列の石だけ、打込はぎでは $\frac{1}{2}$ 、切込はぎでは $\frac{1}{4}$ 、とされているが、仙台城の石垣では、打込はぎにみられる程度で、大手門の石垣では天端から二段目までの一・二階間が雨落しになっていて、その比率は約 $\frac{1}{4}$ になっている。
- (ii) 本丸石垣の頂角から稜にかけた部分は立体的・平面的の曲線で構成され、平面的にみると第15図に示したように船のへさき型の曲線がみられる。このように石垣底面の勾配をゆるくして広い面積をとるようにすると、建物から受ける荷重を水平と垂直の二方向に分散させる効があるほか、底面積が大きくなるために単位面積にかかる荷重も小

第14図 野づら石組みの加工部
(太い線の部分)

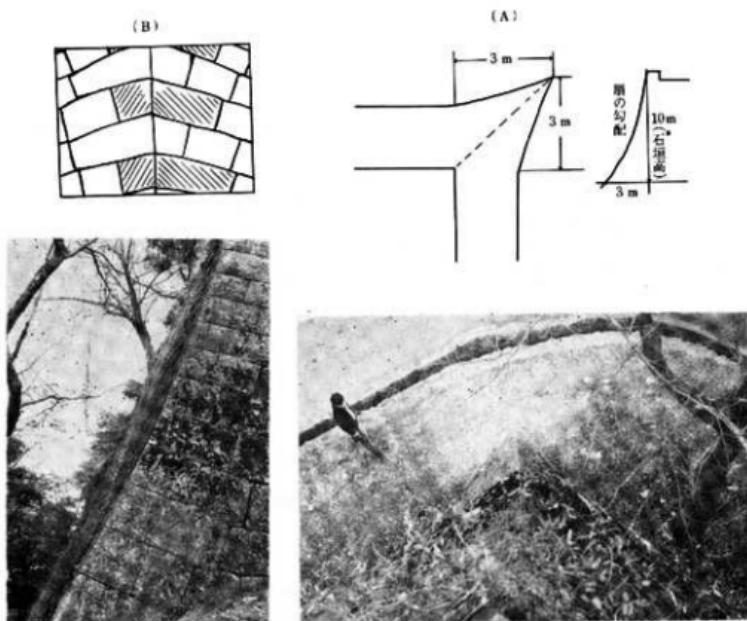


さくなる利点をもつことになる。したがつて地盤の弱い所でも、勾配をゆるくすることでかなりの安定性をもたせることができる。

隅角の石垣の部分には算木積とよばれる石組みがなされている。この方法は第15図に示したように大きな角石を交互に組み合わせて、荷重が平均にかかるようになし、上下の石の接触面をできるだけ大きくして石垣全体を強固にする効果をねらっている。石垣の変状をみると、この算木積の部分には全く変状はみられないで、これ以外の石垣の上部と下部には、はらみがみられる。本丸の例では地面に接している所から上方三と四筋にかけて変状が強くあらわれている（第16図）。

(iii) 切込みはぎの石垣の特徴は扇の勾配（寺勾配・繩勾配ともいう）とよばれる曲線美をもつていていることである。これは

第15図 本丸石垣の隅角の勾配(A)と算木積(B)の一例



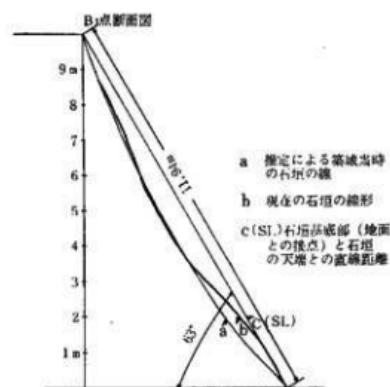
美的感覺だけでなく、石垣を堅固に保つ実利的な見地から発達したものである。本丸の参道にそった石垣の勾配を測定してみると、上部は約七〇度、下部は六五度内外になつていて、下部から上部にかけて次第に急になるような勾配がとられている。扇の勾配は石垣の上から一間（約一・八倍）下る」とに一尺（約〇・三倍）の割で勾配をとるとされているが、本丸の側でもほどこれに近い割合になつていて、このように工夫された石組みではあるが、現状はかなりはらみがあらわれていて、石垣保護対策をたてる必要がある。

城壁石垣の変状の傾向をみると、第16図に示したようになつていて、上部から二と四筋の部分と、下から三と四筋の部分にはらみがあらわれていて、

変状の原因には石組みの構造上の問題や、重車両の震動などもかなり影響している。

(1) 本丸変状部の石組みの状態をみると、間知石のように石の上角を切り取つて棱長にしているため、上下の石組み相互間の接触部が意外に少なく、石垣の上・中部では一五・三〇筋程度しか接していないなく、面も平面でない。この不安定さを補う意味で安山岩のコッパ（碎石）を裏ごめに使つていて、角ばつていていたため大きな震動にあつて移動しやすい欠点をもつていて（第7図参照）。近年になつて石垣のはらみが進行しているのは、交通量の増加に伴なう震動が原因しているようで、バスや工事用のダンプなどの通行が多くなるにつれて、さらにはらみが進行するものと思われる。また現在の参道の路面は築城当時からみると、〇・五一筋も切り下げているので、石垣の基礎を浅くした結果になり、はらみの誘因になつていているようである。この点は大手門の石垣でもよくあらわれ、一部はコンクリートのような壁でお

第16図 本丸城壁石垣の勾配と変状（はらみ）の一例

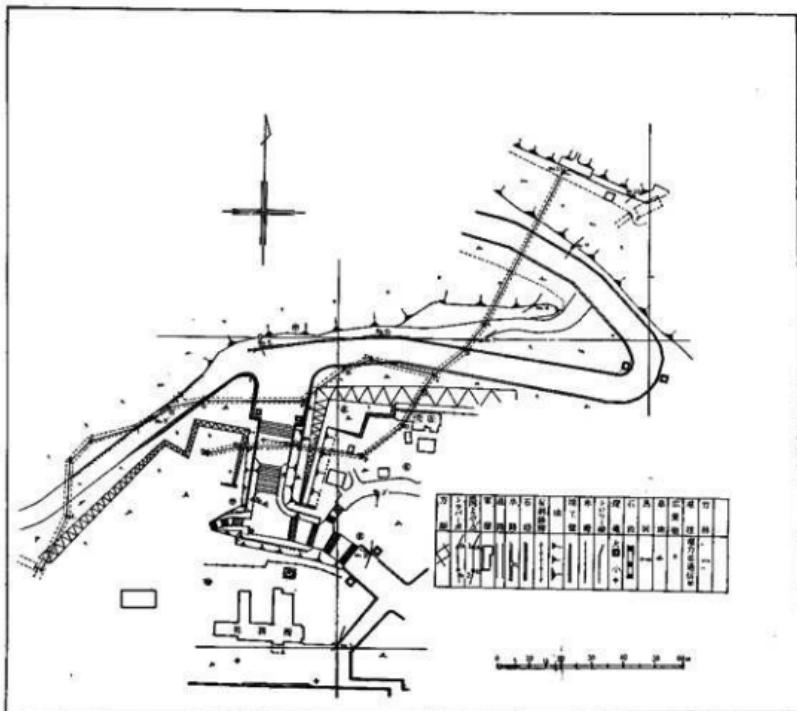


さえている。

(ii) はらみと地下水との関係は予想したほどではなく、裏ごめはコッパの裏にさらに川から運んだと思われる玉石をつめた二重構造になつてゐるので、排水は理想的に行なわれてゐる。ただし玉石の裏には整地のときの残土と思われる疎まじり粘土層が充てんされてゐるので、この粘土が玉石の中に流入して不透水層をつくった場合は、その付近に地下水がよどむことになるので、石垣のはらみを長することがありうる。

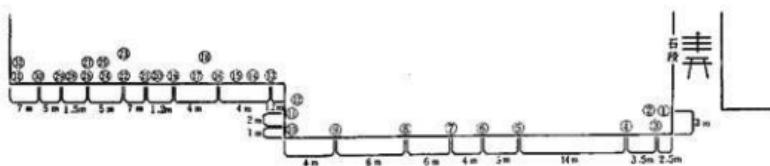
(iii) はらみと亞炭坑道との関係も注目されたことがある。筆者が市公圖課からの依頼で、亞炭坑道の位置・深度と地上構造物との関係を示したのが第17図で、坑道の

第17図 仙台城直下を走る亞炭坑道位置



第18図 刻印の代表的な類型(種類)の形と大きさ

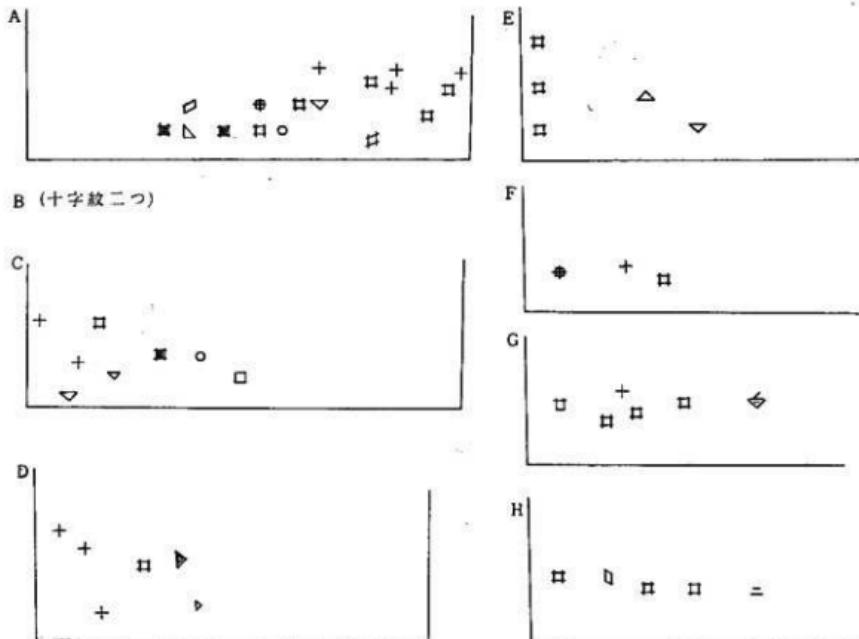
		刻印の所在位置の高さ、および大きさ					
	番号	類型番号	面積から の大きさ	大きさ(長さ× 幅、底辺)	備 考		
1	1	①③④⑤⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮	1	30cm	22cm×23cm		
	2	3	400cm	15cm×15cm			
	3	1	20cm	10cm×10cm			
2	4	1	40cm	15cm×15cm			
	5	1	10cm	10cm×10cm			
	6	4	25cm	5cm			
	7	6	50cm				
	8	5	30cm				
	9	1	500cm				
3	10	1	5cm	13cm×13cm			
	11	3	30cm	30cm×30cm			
	12	3	40cm				
	13	3	100cm				
	14	2	50cm	20cm×20cm			
4	15	1	100cm	12cm×12cm			
	16	3	130cm				
	17	2	180cm	10cm×10cm			
	18	4	300cm	5cm			
5	19	1	70cm	10cm×10cm			
	20	5	150cm	13cm×13cm			
	21	1	150cm	10cm×10cm			
	22	1	30cm	10cm×10cm			
	23	7	130cm	12cm×12cm			
6	24	1	50cm	13cm×13cm			
	25	2	170cm	10cm×10cm			
	26	1	50cm	10cm×10cm			
7	27	2	100cm	10cm×10cm			
	28	8	50cm	15cm×15cm			
	29	3	100cm				
	30	1	150cm	10cm×10cm			
	31	2	80cm	10cm×10cm			
	32	2	10cm	25cm×25cm	最大の横筋		



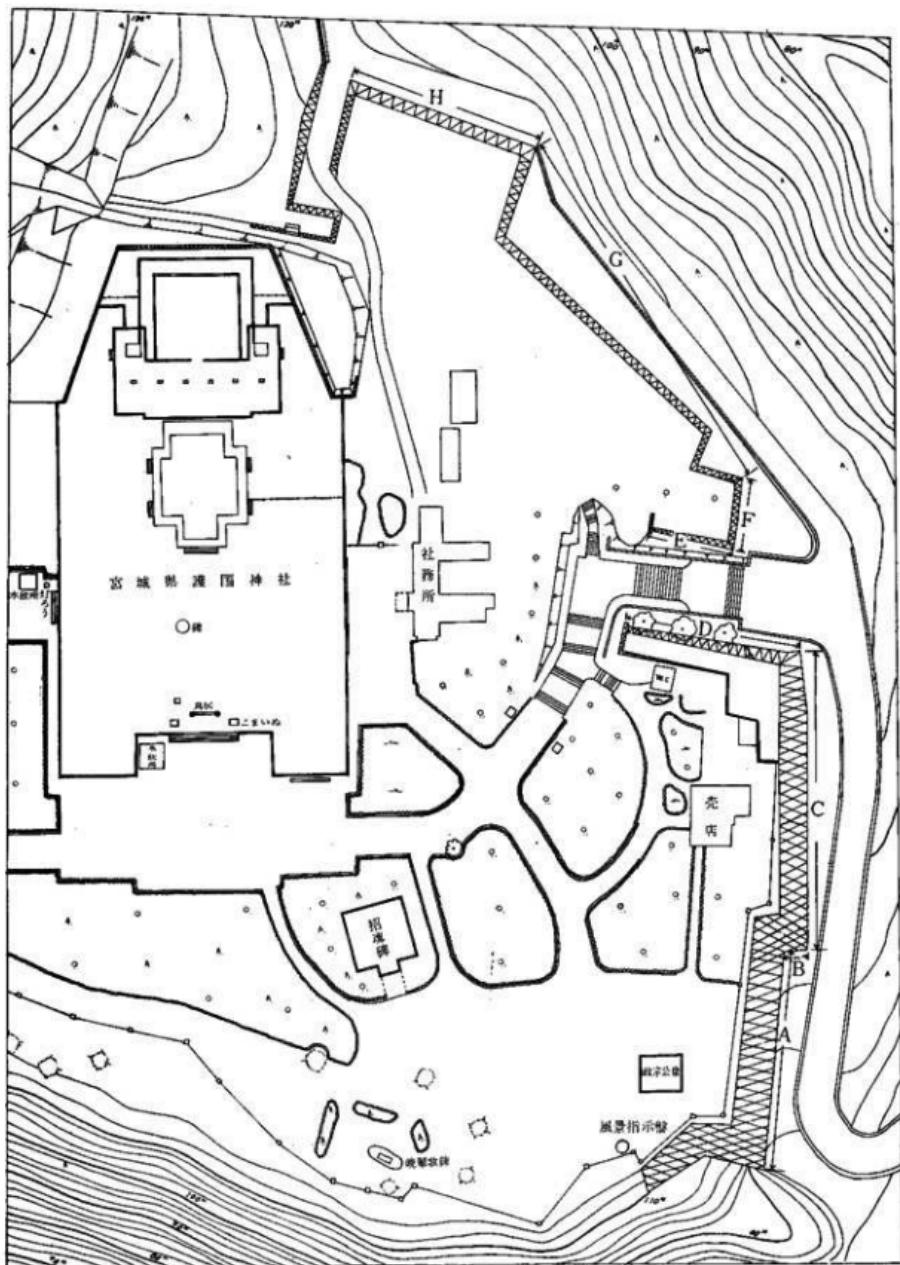
深度と石垣の基礎との関係をあらわしたのが第7図である。

向山と八木山地区で亜炭坑道による鉱害がおこっている例をみると、坑道と地表間の地層の厚さ（カブリ）が四尺以下の場合に確実にかん没・沈下がおこり、七尺一〇尺内外でもおこりうる可能性をもつていて。これ以上の深度で、カブリが第三紀層の凝灰岩類の場合には安全とみられていたが、地表や坑口近くを重車両がひんぱんに通る今日では、かなり条件がちがつてきている。このような点から判断すると、将来仙台城直下と周辺をすい道で抜く市道が通りのような計画があつた場合には、石垣保護のうえからも十分の警戒と対策が必要である。

第19図の石垣の部分 A~H



第19図 刻印の種類と分布位置



五 本丸城壁石垣の刻印

城壁の石垣にはその城固有の刻印がきざまれている。近畿・中部地方の城では多くみられるが、関東・東北では少ない傾向をもつてゐる。

仙台城をしらべてみると、本丸にだけ刻印があるが、他の部分にはみあたらない。

刻印の分布位置をみると、石垣の下半分の大きい石にきざまれ、大部分が現地表上三層の範囲内に分布している。現在までに判明した刻印の分布と種類の関係は第19図に示したようになつてゐる。全般的な傾向としては本丸参道にそつた高い石垣（19図のA-D）の下半分に多く、井げたに類したもののがかなりの割合をしめているのが特徴である。これに対して鳥居から西の低い石垣には個体数も種類も少ない。

刻印の分布に整然とした配列がみられないのは、地震時の崩かいごとに石垣が組みかえられたためと思われる。現参道の崖の肩のところに、組み残しの石が点在しているが、この中にも井げたの刻印の欠けたものが一個だけ含まれてゐる。

刻印の種類はさほど多くはないが、大きく分類すると井（井げ

第20図 代表的な刻印の類型（種類）その1～5
その1 二重井形（外15×15cm内4×4cm）

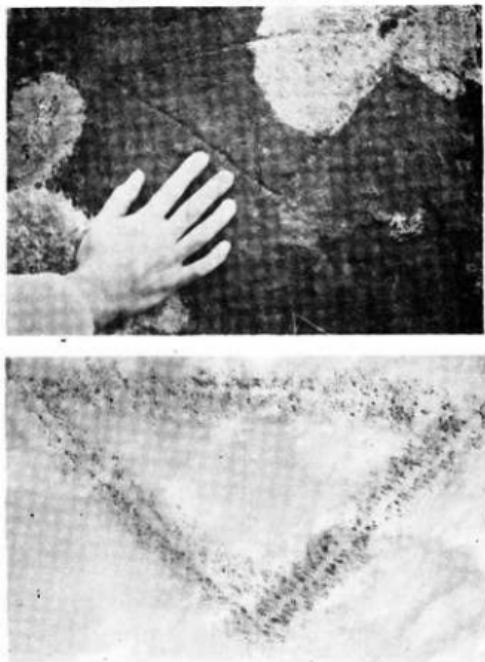


た)・+ (十文字)・○ (円)・△ (三角)・その他の五種に大別することがで
きる。さらに形から細分すると井げたは
一重のもの・二重になっているものは
かに、菱形に近いものとの三種がある。

また三角にも一重のほかに二重になつて
いるもの、横向き・下向きのもの、さら
に一本の横線で切られているものなど五
種がみられる。十文字と円形の形は大小
の差はあるが変形のものはない。その他
の中で珍しいのは今の字を逆にした形に
近いものが発見されたことと、G 地点に
ただ一個だけ認められた。これはへの下

にテを書いた屋号とも解される。このほか二の字に近いもの、田の字を思わせるものなどがあるが刻印としては正確
さをかいている。以上のように形の上からの分類では一一に細分することができるが、このほかに不明確なものを含
めると一三種に近い種類が認められることになる。しかし崩かいごとに組みかえられたものとする、井げたに近い
菱形は正しい位置に復元すれば井げたになるものと思われる。三角の横向き・下向き・逆三角についても同様のこと
が考えられる。このほか井げたの中に一本が認められるもの、三角の中に横線一本あるものなどは未完成の刻印でな
いとすれば刻印の種類としてあつかうべきものと思われる。

第20図その2 逆三角形 (30×20×20cm)



刻印の大小は井げた・三角・十文字・

円形に認められ、ほぼ三段階に大別する

ことができる。

井印では一边の長さが二〇~二五尋あるのが大、一二~一三尋のものが中、一〇尋程度のものは小と三段階にしてある。現在廿(菱形)のようにみえるものも、やはり同程度の三段階になつてゐる。このことからも、石垣が組みかえられたことが考えられる。

+印では大形のものは一五尋、中形六七一〇尋、小形のものは五尋の三種に大別できる。形のよいものでは縱・横の長さは等しいが、中形のものには二~三尋程度の差が認められる。この長さの差のもつ意味は不明であるが、石工の組別を示すものかもしれない。

△印では正しい位置にあるものは少なく、▽の逆三角や△の横向き三角が多い。これらを同一のものとしてみると、二〇~三〇尋の大形、八~一二尋の中形、三~五尋の小形の三種に大別できる。ともに正三角形ではないが二等辺三角形になつていて、大形のものでは底辺が斜辺より一〇尋、小形のものでは二尋程度長くなっている。

○印では大小の差はほとんどなく、大部分が直径五尋の円になつてゐる。

第20図その3 十字形



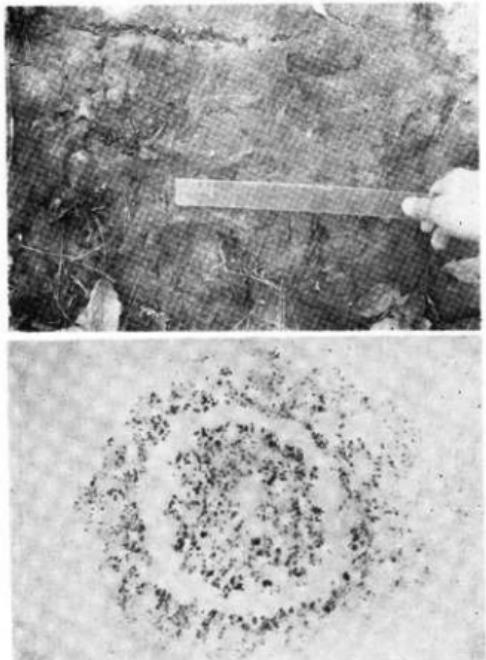
刻印のもつ意義については、いろいろの角度から検討してみたが、現在のところでは、石工頭の屋号という線が強い。これを裏づけるものとして井印があるが、この屋号は現在まで引きつがれ、石工頭黒田八兵衛氏の十四代の子孫の黒田虎治石材店の屋号になつていて、その刻印との関係は明らかでない。

築城当時の石工には黒田氏のほか、辻本七郎兵衛、鹿野清左衛門、能島与右衛門の三氏があるが、この屋号と仙台城前にものべたように、刻印の分布・種類からみると井印が最も多いことから、黒田組の勢力が大であったことがうなずける。また井印には大小があるほか、二重になっているものもあることなどからみると、石工頭の下にはいくつかの組があつたものと思われる。

築城完成当時の刻印の分布は、おそらく整然としていて石工の組分担をよく示したものと思われるが、地震の崩かい毎に組みかえられたため、現在のような分布を示すことになつたとも考えられる。

いずれにせよ、未解決の点が多い刻印については今後の研究調査にまつことにしたい。

第20図 その4 ○ (円) 形



六 仙台城の水理地質と給水対策

仙台城の巧みな地下水利用のしくみ

仙台城のような海拔一一七メートル（仙台市街地よりも約七〇~八〇m高い）の高台にある山城では、水堀や飲料水などの給水には万全の策がとられ他の城に見られないような工夫がなされていた。すなわち

(1) 水の供給源をすべて湧水と地下水にたよっていた。

(2) 地下水を人工的に養えるように池の配置を考えていた。

築城にあたって、このような立地条件を吟味したことはみあげたもので、まず本丸裏の谷に湧出している御清

水。（おさず）の水を本丸の貯水槽に引

いて利用した。この余水は谷（大深沢）

ぞいに流下して二の丸にある中島池に注

ぐようになっているが、この池の余水は

外堀（長沼）や育洗いの池にも流入する

ようになつていているが、この池の余水は

外堀（長沼）や育洗いの池にも流入する

ようになつていているが、この池の余水は

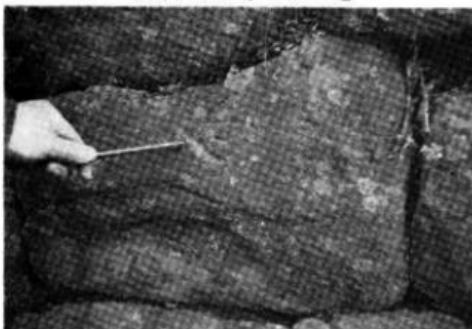
外堀（長沼）や育洗いの池にも流入する

ように工夫されていた。このように階段

的に数多くの貯水池をつくったことは、

降雨量の少ない季節にかなり効果的に作

第20図その5 今 の 遺



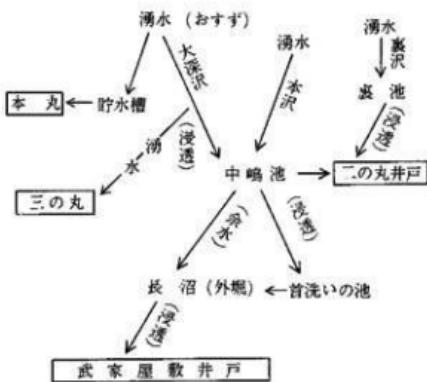
以上の関係を表示すると下の図のようになる。

この構想は近代にも生きていて、アメリカで大規模に行なわれている地下水かん養対策と共通したものがある。これは河川の流路をかえながら途中に数多くの巨大な人造湖をつくり、上流に源を発した河川水が河口に達するまでの間に、かなりの量が地下に浸透するようなしくみになつてゐる。また北欧では河川水をポンプアップして人造湖に注ぎ、前者と同様の効果をねらつてゐる。

仙台城の水源と水系

築城の常として、もう城時の用水源の確保が重視されたが、これには海拔一一〇尺の谷に湧出している泉が重要な役割りを果たしていた。この湧水は「おすず」と呼ばれ、これを見おろす地点に本丸の水の手槽があつて當時警戒していられた。このほか本丸内には手掘井戸二本、二の丸には手掘井戸五本、二の丸北側につづく西屋敷に三本と合計一〇本の井戸が給水源になつてゐた。このほか三の丸（東丸）とよばれる藏屋敷には湧泉があつて、これに接した門を清水門とよんでいた。この泉は水量・水質ともに恵まれていたため飲用のほかに酒造用にも利用されてゐた。（第23図）

水系としては三本の谷があるが、いずれも湧水が水源になつていて、常には一定した水温（一一一三°C）の沢水が流れている点が一つの特徴になつてゐる。この水系は防備上からも大切な存在になつていて、本丸・二の丸の西



の防備線にあたる本沢の三本の支流は、さらに人工的に切り下がられて、一の堀切（鹿）二の堀切、三の堀切と呼ばれていた。

第一の水系である深沢（大深沢ともいふ）は本丸の西側の高台（西の丸）の背後を走っていて、水源は「おすす」。そのほかの小湧水群からなっている。

第二の水系は本沢で、東北大植物園の中央部に三本の支流が分布し、各支流の上流部には湧泉群がみられる。現在は亞炭廃坑からの湧水も水源になっていて、以上の深沢と本沢とともに中鳩池に流入している。

第三の水系は裏沢で、二の丸に接した

西屋敷（現在の川内公務員住宅）の北側

を切っている。当時は上流の湧泉群（現在は亞炭廃坑からの湧水）からの沢水を導いて、裏池とよばれる池二面に貯え、その余水は自然の水系を利用した外堀的の裏沢下流に流していた。

以上の湧水に源を発する沢をせき止めて作った中鳩池や裏池などは、ともに地下水の水脈になっている。段丘疊層

第21図 正保2・3年製作奥州仙台城絵図をもとにした御清水手掘井戸分布図



の基底近くまで掘られているので、礫層から浸透した地下水は、井戸水を豊富にするのにかなり役立った。

本丸湧水の水理地質

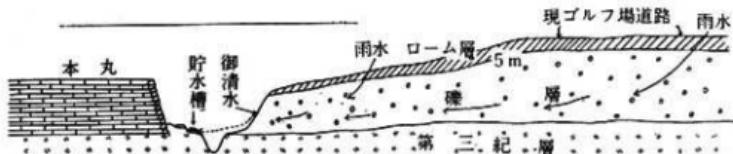
仙台城の本丸は海拔一七五mの高所にあるため、給水については二段がまえの方法がとられ、主水源は湧泉であるが、補助的には手掘井戸の自由地下水が利用されていた。

本丸の西側に当る台地背後には、ほぼ南北に走る深沢があるが、その上流部の山かげに湧泉群が潜在していた。これが本丸の命脈をにぎる給水源“おさず”であった。この湧泉から自然流下で城壁直下の貯水槽まで導いていた。この貯水槽は三・六メートル角、深さ一・五メートルの石積みで、底と外側を粘土で固めて漏水を防いでいた。

湧水点は礫層（青葉山層）と基盤岩（大年寺層）との境界線上にあって、礫層のうちの礫混りの砂層の部分から湧出している。仙台城が位置している青葉山一帯は一〇~二五mの厚さをもつていて、青葉山礫層の典型的な分布地帯であるため、雨水はこの礫層を浸透して自由地下水になるわけである。礫層と基盤との境界面は西から仙台城に向かってゆるやかに傾斜している関係で、仙台城背後の沢では、この地下水脈は沢底近くで露出するようになり地下水は湧泉の形で湧きでることになる。（第24図）

この湧泉の現在（昭三九・五~四〇・四）の湧出量は毎分三・六~三三m³で、最低値は五月末、最高値は一〇月中旬にあらわれ、平均値は毎分一五・九m³となる。（第23図）この湧出量は降雨量に支配されるが、その傾向は次にのべる三の丸湧泉と同じである。“おさず”的湧出量は年々減少する傾向をたどっているが、これは地表部がかなり開拓されたことと、深井戸の

第22図 御清水湧水の水理地質と給水対策



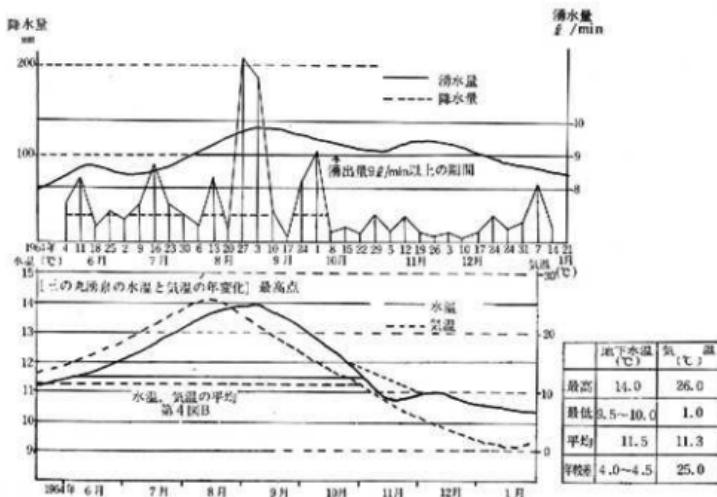
増加につれて深層地下水面が低下したこと、湧水の供給源の自由地下水が亜炭坑内に逃げることなどが原因しているようである。藩政時代の湧出量を築水面積などから推定すると、すでにのべたように現在の三倍以上であったことは確実で、古老人の言によつても明治末期の湧出量はすでに現在の二倍であったという。

「おすず」の水温は一 $-$ 一三℃とほぼ一定した値を示している。これは湧出点付近の青葉山礫層の厚さが一五 $-$ 二〇mあるため、恒温層に近い深度を自由地下水が流れているためと思われる。(恒温層とは年間地温が一定の層で、仙台ではその深度は約一三m、地温は一三 $-$ 五℃)

三の丸の湧水の水理地質は「おすず」と共通したものがあるが、ちがつてある点は段丘礫層の厚さが二 $-$ 三倍でうすいことと、基盤岩は広瀬川凝灰岩である点とである。

湧出量は平均毎分八 $-$ 五tで、最高は九月上旬の毎分一〇t、最低は六月上旬の毎分八 $-$ 四tで、

第23図 御清水の湧水量の変化と降水量の関係



くおさず、にくらべると安定した湧出量を示している。これは地形の差によるもので、
くおさず、は谷底に近い所に湧出点があるのに対して、三の丸湧泉は段丘崖の途中にあ
つて、雨水が集中しにくい地形になっているほか、くおさず、を水源とする沢水が供給
源になっているためである。しかし湧出量は雨量によつていくぶん影響され、次のよう
な関係が認められる。(第23図)

(イ) 八と一〇月の前半の雨量の多い時季には湧出量が多く九場以上になつていて、一
二月中旬まで湧出量が多くなつていて、逆に雨量の少ない一〇月後半と五月は三・
五場以下になつていて、この傾向は七月下旬までつづいている。ことに一〇と一二
月の雨量が少ない(連間雨量一〇と三〇場)期間が三ヶ月続いている点が強く影響
している。

(ロ) 一日の雨量が二〇場以上のときは、翌日から湧出量が六と八% (〇・五と〇・六
場) 増加する。六月一〇日の例をとると、九日に六六・六場の降雨量があつたが、
前回の測定日六月三日にくらべると〇・五場増の八・六場になつていて、また一月
一三日の例では、五日前の八日に六四・六場の雨が降つたが、前回よりも〇・六場
増しの九・四場になつていて。

水温を見ると、最高一四°C、最低一〇°Cで、その較差は四°C、平均一一・三°Cの
値を示しているが(第23図)、くおさず、にくらべると較差が大きい。これは段丘疊
層が薄い(二と三m)ことに原因していて、地下水の流路になつていての深度二と三
mの地温と共に通じた傾向がみられる。気温と地温・水温の最高・最低を同一深度に

第24図 ため池による二の丸地下水かん養の構想



ついて比較してみると、湧泉の水温の時間的なずれは約二〇日であるが、深度二尺の地温のそれは約一ヶ月である。深度二尺の仙台での地温の最高は九月一〇～三〇日の期間中で一九・一℃を、最低は三月一〇～二一日に八・一℃を示している。この地温と湧泉の水温との値には差が認められ、最高の値では、水温のほうが五℃だけ低温になる。これは三の丸湧泉の背後約二〇〇mを通る深沢の沢水も一つの供給源になっているためである。この沢水の水源は湧水（一一～一二℃）であるため、沢水の水温もほぼ安定した水温になつていて、湧水の水温よりも二℃内外の範囲で上下している。したがつて水量・水質の点から考えると、三の丸湧泉の供給源は深沢の湧水で、雨水の浸透は水量・水温に大きな影響を与えないとしてよい。

二の丸浅井戸の水理地質

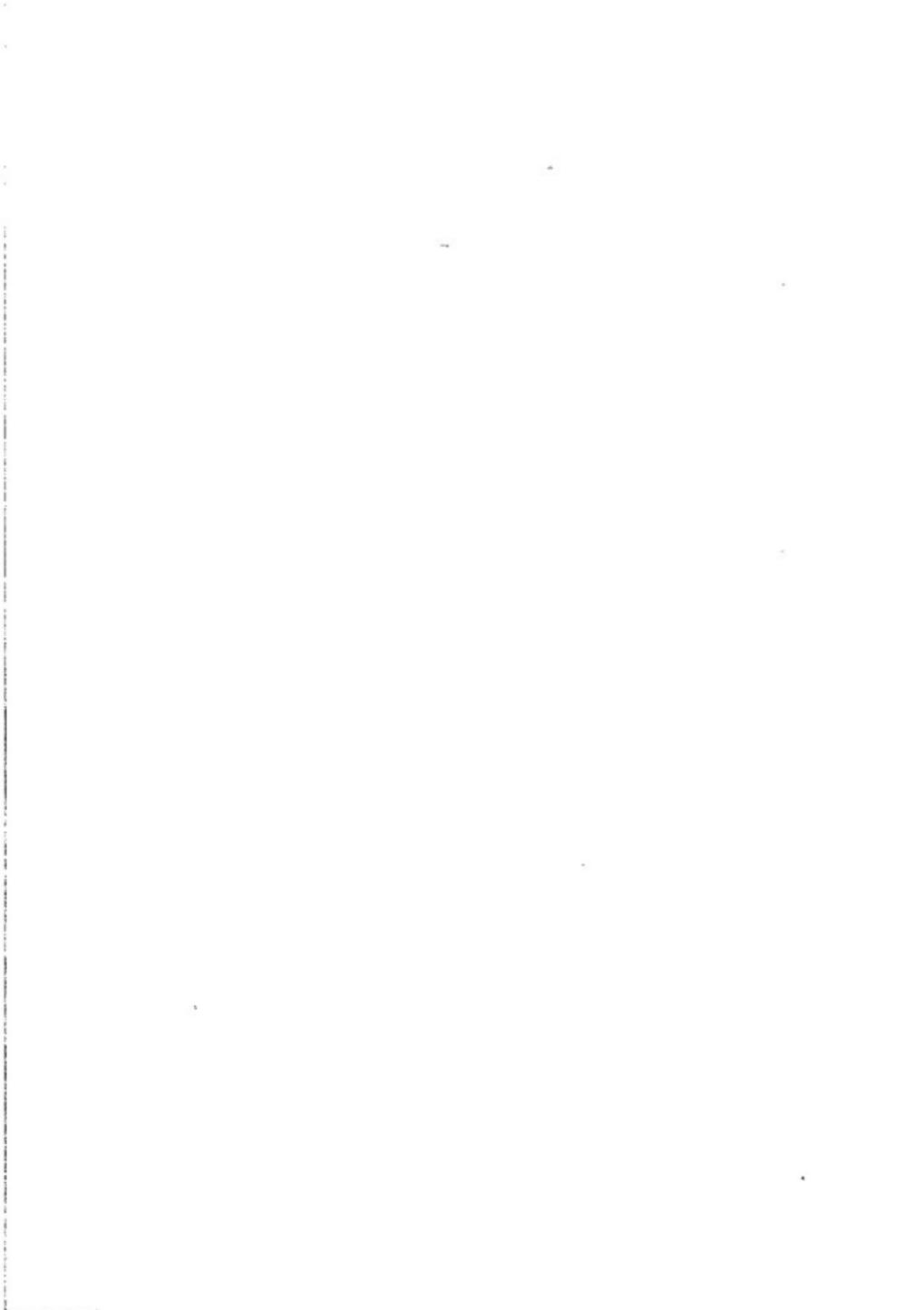
本丸浅井戸は補助的なものであるために、二本の浅井戸が掘られているにすぎない。これに対して、二の丸は湧泉がないため、本格的に浅井戸が掘られ、二の丸構内には八本の浅井戸が掘られていた。

二の丸の浅井戸の深度は三～五尺と推定されるが、三尺内外の段丘礫層と基盤岩の広瀬川凝灰岩との境界面上が自由地下水帯水層になつていて、この地下水を利用したものと思われる。当時の井戸は現存しないが、最近二の丸南側の川内地区で行なつた口径一・二尺、深度五尺の手掘井戸の試験結果から判断するとその水量は四～六m³/日程度と判断される。この水量は降雨量に支配されるので、当時はこれを調整するために、二の丸周辺にため池を配して地下水かん養の策がとられていた。その代表は二の丸南側にある中島池で、このため池は二の丸の面よりやや高い位置にあることと、段丘礫層下の基盤まで掘つて貯水したため、池から浸透した地下水は基盤岩上の段丘礫層中を流れ、井戸水のかん養に効果があつた。（第24図）中島池の時水量は約三万ガロンで、流入する沢水は現在は一八～二一四ガロン/日で、余水の大半は外堀の長沼へ、一部は二の丸の池や大手門下の首洗いの池などに流れている。このほかに二の丸北側にも同じ構造で作られた裏池があるが、この沢への現在の流入量は六〇～一〇六m³/日程度である。

以上のようなすぐれた地下水かん養対策があつたからこそ、大番上三千六百人を養うことができたわけで、一人当たり一〇㍑の給水量としても三六㍑/日必要なわけで、これを五本の手掘井戸で補なつてこととなる。二の丸に接した西屋敷の三本の井戸は補助的な存在であつたと思われる。

参考文献

- 1、奥州仙台城全図、正保二・三年（一六四五・六）
- 2、仙台市役所 稲台市測量全図、明治二六年（一八九三）
- 3、小倉強 仙台城の建築、仙台高等工業学校、昭和五年（一九三〇）
- 4、第二師団司令部 仙台城沿革、昭和九年（一九三四）
- 5、阿刀田令三 仙台城下絵図の研究、斎藤報恩会博物館図書部研究報告、第四卷、昭和一年（一九三六）
- 6、小倉博 仙台城の構造と城下の創設、昭和一四年（一九三九）
- 7、仙台市役所 仙台市都市計画・全附図、昭和三年（一九五六）
- 8、奥津春生 仙塙地区の地形地質、宮城県史一五・博物、三二八～三六四頁、昭和三一年（一九五六）
- 9、奥津春生 仙台城（青葉城）水源（地下水）の水理地質、日本地下水学会第九号、一〇～一三頁、昭和四〇年（一九六五）



仙台城
一帶の鳥相

加

藤

陸

奥

雄

仙台城跡一帯の鳥相

仙台城跡一帯、特に現在の東北大學理學部附屬青葉山植物園にはモミ *Abies firma* の自然林がよく残存され、イヌナナ *Fagus japonica*、ミメナラ *Quercus mongolica*、クリ *Castanea crenata* と共にみいとな森林を形成し、鳥類の生息、繁殖に好適な環境をなしている。

市街地を間近かにして、このような美しい森林をもち、かなりに豊富な鳥相がみられるることは特異的なものといつてよいであろう。

これは伊達政宗の築城以来、いわゆる御裏林につゞく地域と共によくその自然が保護されて今日に至ったことによるが、現在では御裏林地域は完全にその自然の姿を失い、この植物園地帯だけがその面影を残し、からうじて鳥類のすみかとなつている。

その昔、藩政時代には、この地域から御裏林につゞいて、大型の哺乳動物、すなわち野鹿（猪鹿）の生息が多数みられたことは本誌三原良吉氏の記述にもそれがうかがわれる。

現在の青葉山一帯にはシカの生息は全く認められないが、リス *Sciurus vulgaris* の生息は確実で、ノワサギ *Lepus timidus* はかなりに多い。

鳥類は仙台附近ではきわめて豊富な地域といふことができるが、小笠原嵩は一九六〇年以来東北大學青葉山植物園を中心として鳥類を調査している（東北大學理學部報告、生物學、第三十卷、五十七～六十五頁、一九六四）が、これによつて、仙台城跡一帯の鳥相について概観することができる。

この地帯で確認された鳥の種類はつきの表に示すように七十一種に達する。
その中五十種は燕雀類に属するものである。

燕雀目 カラス科

Corvus levaillantii japonensis Bonaparte (Japanese Jungle Crow) ハシブトガラス

Corvus corone orientalis Eversmann (Eastern Carrion-Crow) ハシボソガラス

Cyanopica cyanus japonica Parrot (Japanese Blue-Magpie) オナガ

Garrulus glandarius japonicus Temminck and Schlegel (Japanese Jay) カケス

スカドリ科

Sturnus cineraceus Temminck (Grey Starling) スカドリ

Sturnia strunina philippensis (Forster) (Red-checked Starlet) コスカドリ

キンバラ科

Passer montanus saturatus Stejneger (Japanese Tree-Sparrow) メズメ

アトリ科

Coccothraustes coccothraustes japonicus Temminck and Schlegel (Japanese Hawfinch) シメ

Eophona personata personata (Temminck and Schlegel) (Japanese Grosbeak) イカル

Chloris sinica minor (Temminck and Schlegel) (Small Japanese Greenfinch) コカワラヒワ

Carduelis spinus (Linné) (Siskin) マヒワ

Carduelis flammea flammæa (Linné) (Mcaly Redpoll) ベニヒワ

Uragus sibiricus sanguinolentus (Temminck and Schlegel)

(Japanese Long-tailed Rose-Finch) ベニマシコ

Pyrrhula pyrrhula griseiventris Lafresnaye (Japanese Bullfinch) ウツ

Emberiza spodocspala personata Temminck (Japanese Bunting) アオジ

Emberiza cioides ciopsis Bonaparte (Japanese Meadow Bunting) ホオジロ

Emberiza rustica latifascia Portenko (Kamchatkan Rustic Bunting) カシラダカ

セキレイ科

Motacilla alba lugens Gloger (Japanese Pied Wagtail) ハクセキレイ

Motacilla grandis Sharpe (Japanese Wagtail) セグロセキレイ

Motacilla cinerea caspica (S.G. Gmelin) (Eastern Grey Wagtail) キセキレイ

メジロ科

Zosterops palpebrosa japonica Temminck and Schlegel (Japanese White-Eye) メジロ

コジュウカラ科

Sitta europaea hondoensis Buturlin (Honshū Nuthatch) コジュウカラ

シジュウカラ科

Parus major minor Temminck and Schlegel (Japanese Great-Tit) シジュウカラ

仙台城
の
鳥

- Parus varius varius* Temminck and Schlegel (Varied Tit) ヤマガラ
- Parus atricapillus restrictus* Hellmayr (Japanese Willow-Tit) ノガラ
- Parus ater insularis* Hellmayr (Japanese Coal-Tit) ヒガラ
- Aegithalos caudatus trivirgatus* (Temminck and Schlegel) (Japanese Long-tailed Tit) エナガ
モズ科
- Lanius bucephalus bucephalus* Temminck and Schlegel (Bull-headed Shrike) キタマタ
- Lanius tigrinus* Drapiez (Thick-billed Shrike) チゴモズ
ヒコドリ科
- Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck) (Brown-eared Bulbul) ヒコドリ
サンショウウタ科
- Pericrocotus roseus divaricatus* (Raffles) (Ashy minivet) サンショウウタ
ヒタキ科
- Terpsiphone atrocaudata atrocaudata* (Eyton) (Japanese Paradise Flycatcher) サンショウウタ
ウツワカツバタ科
- Muscicapa latirostris latirostris* Raffles (Sumatran Brown Flycatcher) コサメビタキ
- Muscicapa narcissina narcissina* Temminck (Narcissus Flycatcher) キビタキ
- Muscicapa cyanomelana cyanomelana* Temminck (Japanese Blue Flycatcher) オオルリ
ウグイス科
- Regulus regulus japonensis* Blakiston (Japanese Goldcrest) キタイタダキ
- Phylloscopus occipitalis coronatus* (Temminck and Schlegel) (Temminck's Crowned Willow-Warbler) セソダイムシタイ
- Cettia diphone cantans* (Temminck and Schlegel) (Japanese Bush-Warbler) ウグイス
- Urosphena squameiceps squameiceps* Swinhoe (Short-tailed Bush-Warbler) カブサメ
- Acrocephalus arundinaceus orientalis* (Temminck and Schlegel) (Eastern Great Reed-Warbler)
オオヨシキリ
- フグミ科
- Turdus dauma toratugumi* Momiyama (Golden Mountain Thrush) トラフグミ
- Turdus cardis cardis* Temminck (Japanese Grey Thrush) タロウグミ
- Turdus naumanni eunomus* Temminck (Dusky Thrush) ツグミ
- Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas) (Daurian Redstart) ジョウビタキ
- Erythacus cyanurus cyanurus* (Pallas) (Japanese Bush) ルリビタキ
ミソサザイ科
- Troglodytes troglodytes fumigatus* Temminck (Japanese Wren) ミソサザイ
- ツバメ科
- Hirundo rustica gularis* Scopoli (Eastern House-Swallow) ツバメ
- Delichon urbica dasypus* (Bonaparte) (Japanese House-Martin) イワツバメ

雨燕目	アマツバメ科	
<i>Apus pacificus kurodae</i> (Domaniewski) (Kuroda's White-rumped Swift)	アマツバメ	
怪鳥目	ヨタカ科	
<i>Caprimulgus indicus jotaka</i> Temminck and Schlegel (Japanese Jungle Nightjar)	ヨタカ	仙台城 一帯の 鳥札
翡翠目	カワセミ科	
<i>Alcedo atthis bengalensis</i> Gmelin (Common Indian Kingfisher)	カワセミ	
啄木鳥目	キツツキ科	
<i>Picus awokera awokera</i> Temminck (Japanese Green Woodpecker)	アオゲラ	
<i>Dendrocopos major hondoensis</i> (Kuroda) (Honshū Great Spotted Woodpecker)	アカゲラ	
<i>Dendrocopos kizuki nippon</i> (Kuroda) (Honshū Pigmy Woodpecker)	コゲラ	
杜鵑目	ホトトギス科	
<i>Cuculus canorus telephonus</i> Heine (Japanese Cuckoo)	カッコウ	
<i>Cuculus saturatus horsfieldi</i> Moore (Himalayan or Oriental Cuckoo)	ツツドリ	
<i>Cuculus poliocephalus poliocephalus</i> Latham (Little Cuckoo)	ホトトギス	
<i>Cuculus jugax hyperythrus</i> Gould (Chinese Hawk-Cuckoo)	ジュウイチ	
鳴鳥目	フクロウ科	
<i>Otus scops japonicus</i> Temminck and Schlegel (Japanese Scops Owl)	コノハヅク	
<i>Ninox scutulata japonica</i> (Temminck and Schlegel) (Brown Hawk-Owl)	アオバヅク	
<i>Strix uralensis hondoensis</i> (Clark) (Honshū Ural Owl)	フクロウ	
鸞鷟目	ハヤブサ科	
<i>Falco tinnunculus interstinctus</i> Horsfield (Japanese Kestrel)	チヨウゲンボウ	
	ワシタカ科	
<i>Milvus migrans lineatus</i> (Gray) (Black-eared Kite)	トビ	
鶲鳩目	サギ科	
<i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i> Linnaeus (Night-Heron)	ゴイサギ	
鳩鳩目	ハト科	
<i>Streptopelia orientalis orientalis</i> (Latham) (Eastern-Turtle-Dove)	キジバト	
鳩目	シギ科	
<i>Scotopax rusticola rusticola</i> Linné (Woodcock)	ヤマシギ	
鳩鳩目	ヤシ科	
<i>Coturnix coturnix japonica</i> Temminck and Schlegel (Japanese Quail)	ウズラ	
<i>Bambusicola thoracica thoracica</i> (Temminck) (Chinese Bamboo Partridge)	ヨシケイ	
<i>Phasianus colchicus tohakaidi</i> Momiyama (Green Pheasant)	ヤジ	
<i>Phasianus saemmeringii scintillans</i> Gould (Honshū Copper Pheasant)	ヤマドリ	

以上のうち、この地域に普通にみられる主なものについていえば、

燕雀類のうち、

ヒヨドリ・ウグイス・シジュウカラ・エナガ・カケス・ホオジロは四季を通じて生息しており、「留鳥」である。この地域に営巣して繁殖している。

季節的にこの地域に出現する「旅鳥」の中で、春から夏にかけて生息しているものとして、キセキレイ・ズズメ・ムクドリ・コカワラヒワがある。その中キセキレイとコカワラヒワは森林地域で繁殖している。

セグロセキレイ・ミソサザイ・ウソ・ヤマガラ・コガラ・ヒガラ・キクイタダキは初秋から初夏の間にかけて姿をみせる。モズ・ハシブトガラスはやはりこのグループに属すると考えられるが、四季を通して生息している可能性がある。

渡り鳥の中、夏鳥としてはコムクドリ・サンコウチヨウ・コサメビタキ・キビタキ・サンショウクイ・アカモズ・ヤブサメ・クロツグミがあり、4月から8月にかけてあらわれこの地域で繁殖する。

マヒワ・ベニマシコ・ツグミは冬鳥であり、十一月すぎから三月にかけてみられる。

燕雀類以外に夏鳥としてはカッコウ・ツツドリ・ホトトギス・ジュウイチがあり、そのほかアオゲラ・コゲラ・チヨウゲンボウ・トビ・キジバト・ウズラ・コジョウケイ・キジ・ヤマドリは四季を通じて生息し、その中アオゲラ・コゲラ・チヨウゲンボウ・トビ・キジバト・コジョウケイ・キジは明らかにこの地域で繁殖している。

この中、キジは植物園内の歩道にすぐ接近して営巣しているのがよく観察される。

以上各種の鳥について、園内に出現する期間を一括して図示すると、つきのようになる。

仙台城跡一帯には今まで述べてきたように七十一種の鳥類が生息することが確認されたが、その中燕雀類が大部分を占め五十種に達している。

この燕雀類の中にはやはり既に述べたように留鳥、漂鳥、夏鳥、冬鳥があるが、これらが季節的にどのように変動

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ヒヨドリ														留鳥
ウグイス														燕雀
シジュウカラ														鳥
エナガ														漂鳥
カケス														鳥
ホオジロ														鳥
モズ														夏鳥
ハシブトガラス														鳥
セグロセキレイ														鳥
キセキレイ														鳥
スズメ														鳥
ムクドリ														鳥
コカラビワ														鳥
ミソサザイ														鳥
ウソ														鳥
ヤマガラ														鳥
コガラ														鳥
ヒガラ														鳥
キクイタダキ														鳥
コムクドリ														夏鳥
サンコウチヨウ														鳥
コサメビタキ														鳥
キビタキ														鳥
サンショウクイ														鳥
チゴモズ														鳥
ヤブサメ														鳥
クロツグミ														鳥
マヒワ														冬鳥
ベニマシコ														冬鳥
ツグミ														冬鳥
カッコウ														その他の
ツツドリ														危
ホトトギス														
ジュウイチ														
アオゲラ														
コゲラ														
チョウゲンボウ														
ビ														
キジバト														
ウズラ														
コジュウチ														
ジ														
ヤマドリ														

して鳥相を形成しているかについて検討してみる。

図にそれを示した。

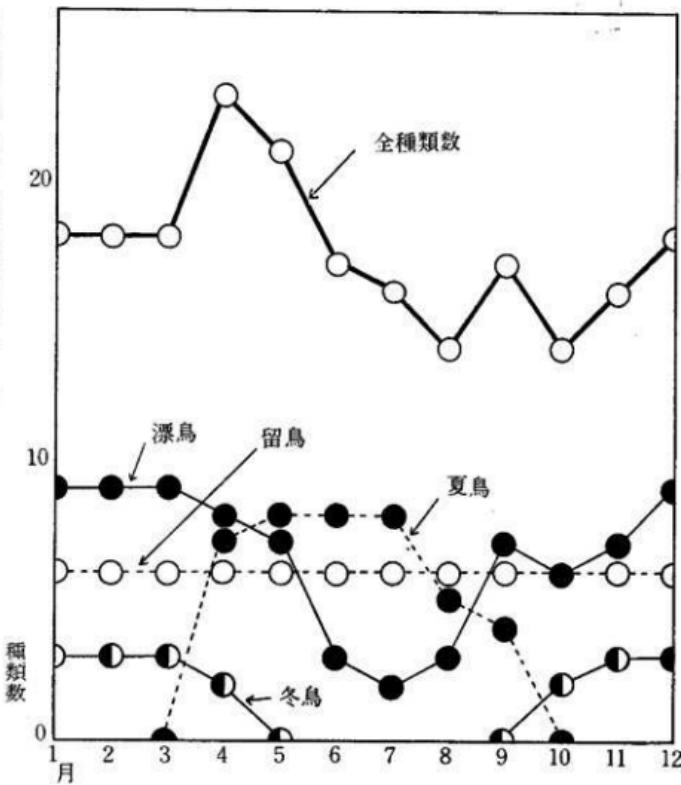
図にみられるように、最も種類数の多いのは四月で、以後次第に減少し八月ころ最も少なく、晚秋再び増加し春に至っている。

留鳥は六種類であり、もちろん年間を通じてかわらない。

漂鳥は六七月にかけて最少となり、晚秋にかけて増加し、冬期間は九種類に達する。

冬鳥は十月から出現しはじめ四月にこの地域から去つていく。

夏鳥は冬鳥に代って五月にあらわれはじめ七月をピークとして以後漸減し十月には姿を消してしまう。



以上をまとめるに、この地域では、六七月にわたる夏期鳥相と、十月から三月にわたる冬期鳥相とを区別することができ、この両相の交代期は四・五月と九月にあらわれる。

III

この地域の鳥のうち、チョウゲンボウは珍奇なものとして注意すべきものであろう。

この鳥は北海道、本州、四国、九州、伊豆七島、対島、種子島に分布するが、主として本州で繁殖する。夏期には主として山地に生息しており、冬期になると平地にも出現し、農耕地や海岸の干潟にもみうけられるという。

かなり最近まで国内での繁殖は確認されていなかつたが、一九三四四年六月山形県下で巣と雛とが、一九四〇年に下村によつて長野県下で巣と卵とが発見された。

つゞいて、一九五〇年糸田によつて長野県十三屋で二〇つがいが繁殖しているのがみられ、一九五三年には天然記念物として指定されている。

また、一九五五年日向によつて、山梨県韭崎の鎌無川及び塙川にのぞむ鷲の巣、観音淵、鷹岩等の険崖でチョウゲンボウの生息することがたしかめられた。

更に一九五六年清木は栃木県矢板市において第川に臨む山田の屏風岩と金和崎の険崖で生息するのを確認している。

これらはすべて川にのぞむ険しい崖でその岩穴に営巣している。

仙台城跡附近のチョウゲンボウは巣の口の絶壁中腹に営巣しており、一九六一年四月初旬に小笠原によつて発見された。

当時は六個の巣と古い巣二・三個が確認された。

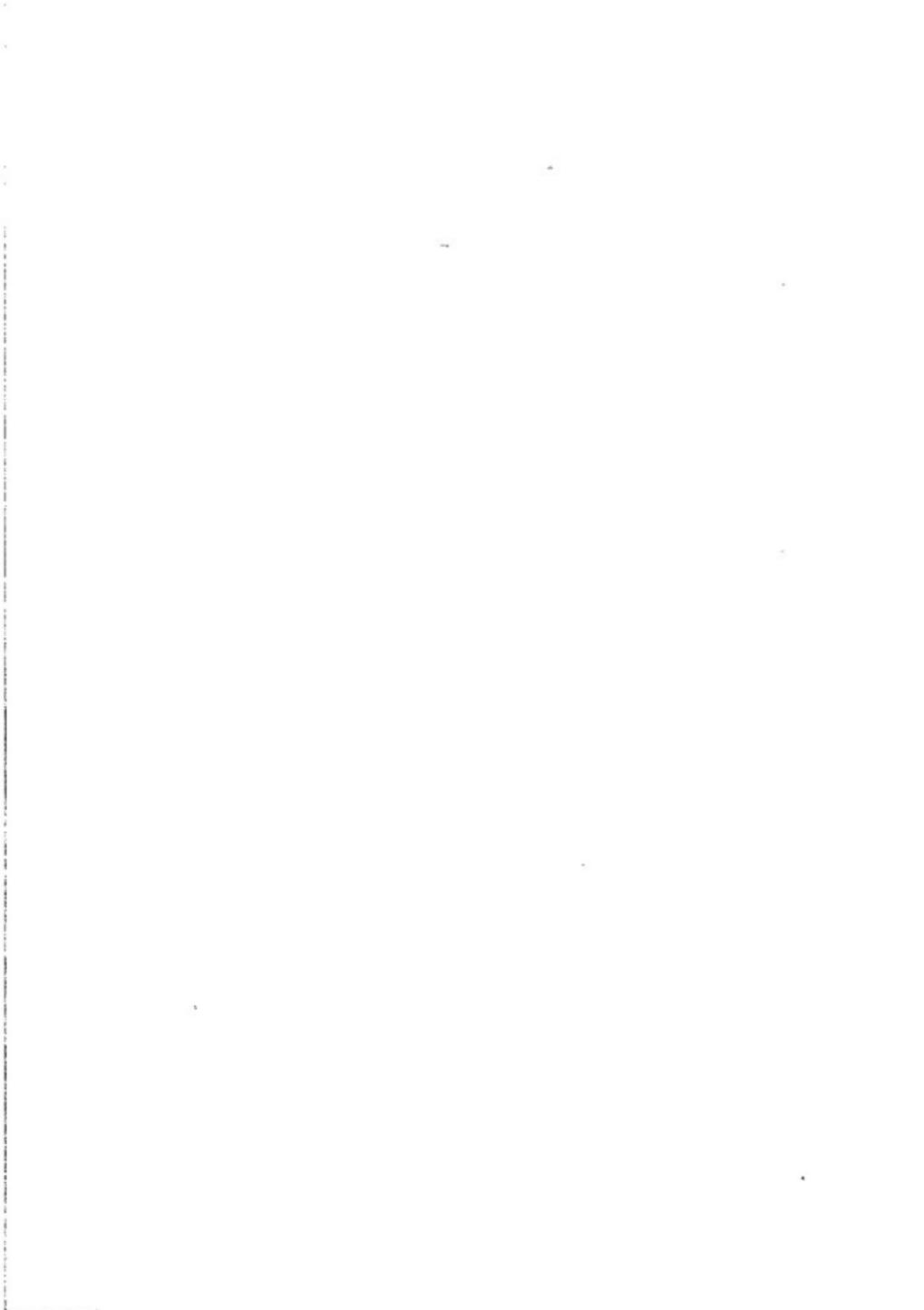
現在も周年この地域に出現し、繁殖を続いている。

今後とも絶滅をきたさないよう保護をはかるべきものと考える。

図版説明（すべて小笠原高氏撮影）

- 図版 78 上・シジュウカラ
図版 79 上・チゴモズ、給餌中の親と雛
図版 80 上・エナガの巣
図版 81 上・林中のキジ（雌） 中・シャガ群落の中の巣（卵）
図版 82 上・巣中のキジ卵
図版 83 上・チヨウゲンボウの巣穴のある竈の口沢の絶壁
図版 84 樹上のチヨウゲンボウ二態

下・懸垂して枝にとまっているエナガ
下・キクイタダキ
下・トビの巣
下・抱卵中の雌キジ
下・孵化したキジの雛
下・絶壁にあるチヨウゲンボウの巣穴



御
裏
林
の
植
物

木

村

有

香

御 裏 林 の 植 物

仙台城跡背後（西方）の地（現在東北大學理學部附屬植物園）を仙台の人々は昔から御裏林（ごりん）と呼んでいる。御裏林は城の搦手の防備のため大切な地域であったので、藩祖伊達政宗の築城以来密林のまゝになつてゐたが、維新以後は陸軍用地となりみだりに人為を加えることが許されなかつた。そのため現在の植物生育の状態は、太平洋側における温帶林と暖帯林との接觸地である仙台附近の低山丘陵地帯の植物界の人為の加わらない自然状態をほど完全に示している。城跡の森林やその下草が破壊されずに残つてゐることは大変珍らしいことであるが、大都市に近接してこのようない地域が保存されているのは現在では全く稀有のことと云える。

この地は海拔六〇〇mから一四六材に及ぶ丘陵地帯で、東は深沢の谷をはさんで旧本丸に相対し、北は直接旧二の丸に接し、西は旧陸軍工兵作業場の平坦地につき、南は断崖絶壁となつて龍ノ口沢の深い渓谷に臨み、現在の八木山地帯に相対している。地積は凡そ四八ヘクタール（約四五、〇〇〇坪）に及ぶ。

本地域内には高等植物（羊齒植物及び種子植物）のみでも六六六種が自生していて、その種類の豊富なことはこの地方としては稀に見るところである。地積の大部分を占めしかも美林をなしている優山樹種はモミである。これはかつて当地方にひろがつてゐた、モミの北限地帯の大森林が伐採よりまぬかれて今日に残つた貴重な記念物である。大木もあり又雜樹に富み、明らかに天然更新を示している。モミの大平洋側における分布北限は岩手県南部にあるが、森林を形成しよく天然更新を示すのは少くとも太平洋側内陸においては御裏林を以つて北限とする。モミの下層で最も著しいのはスズタケであるが、これが比較的硬生している數ヶ所の地点に、例年ヒメノヤガラ、ムヨウラン等の腐生ラン科植物が発生する。これらは全國的にも産地が少い稀有のものであるが、本地域は正に分布の北限もしくはそれに近い産地である。このことは本地域内のモミに着生して生育するカヤラン、ベニカヤラン等の着生蘭についても

同様のことがいえる。又、あまり產地の知られていないユウジンランが極めて豊富に産する事実をあわせ考えると本地域がこれらのラン科植物の発生、分布等に関する学術上重要な意義を持つことは明らかである。又、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、シロダモ、ユズリハ、タブノキ、イイギリ、モチノキ、カラスザンショウ、アカメガシワ等の暖地性樹種も見られるが、これらは本地域をもつて太平洋側内陸における生育北限地と見なし得る貴重な存在である。更に、モミを主体とする本地域は当然その所産植物の大部分は表日本植物区系要素と認められるものであるが、更に近接する裏日本植物区系から本州脊梁山脈を越えての侵入要素と考えられるものもある。すなわちマルバカクミノスノキ、ナガハシスミレ、ヒロハテンナンショウ等にその例を見る。又、ブナ、ナナカマド、サラサドウダン、シロヤシオ、マイヅルソク等が存在することから、背後のより高い山地植生との関連が考えられる。これらは本地域の別の特殊性を示すものとして特に注意すべきものである。更に、本地域内の隨所に仙台を原産地とするセンダンイザサ、エコザサ、ヒロハアズマザサ等のササ類が相当多量に見られるが、それらの眞の原産地である隣接の龜岡山が住宅地新設工事、道路工事等により急速に破壊され、ある現在これらのササ類は極めて貴重な存在といえる。

以上のことから本地域の持つ植物学上の重要意義、その貴重さについては何人も否定し得ない所と思われる。所がその位置が市街地に近接し、研究と教育の上から至便であるという優れた点もある反面、人口四十九万を擁する仙台市街を間近かにひかえているため人為による破壊を受ける危険もまた大きい。今や觀光施設等のため自然破壊を意に介せぬ風潮頗著なることを考えれば、この地域に対しますます保護の手の加えられることを希うこと切なるものがある。

御舟林の植物については、藻類・菌類・地衣類の調査はまだ終っていないが、苔類及び高等植物についての調査は一応完了している。以下参考のため本地域所産の苔類（一三七種）及び高等植物（六六六種）の目録を掲げる。苔類は服部植物研究所の水谷正美博士の調査によるものであり、高等植物は東北大学の菅谷貞男・相馬寛吉両博士並びに筆者の共同調査によるものである。

御 裏 林 植 物 目 錄

御
裏
林
の
植
物

- BRYOPHYTA 苔類植物
- HEPATICAE 苔類
- BLEPHAROSTOMATACEAE マツバウロコゴケ科
1. *Blepharostoma minus* Horikawa チャボマツバゴケ
- LEPIDOZIACEAE ムチゴケ科
2. *Bazzania albicans* Stephani シロムチゴケ
3. *Kurzia makinoana* (Stephani) Grolle スギバゴケ
4. *Lepidozia vitrea* Stephani エダウロコゴケ
- CALYPOGEIACEAE ツキヌキゴケ科
5. *Calyptolechia arguta* Montagne et Nees チャボホラゴケモドキ
6. *C. tomentosa* (Stephani) Stephani トサホラゴケモドキ
7. *Metacalyptolechia cordifolia* (Stephani) Inoue センダイホラゴケモドキ
- JUNGERMANNIACEAE ツボミゴケ科
8. *Jungermannia infusa* (Mitten) Stephani オオホウキゴケ
9. var. *ovalifolia* (Amakawa) Amakawa ハイツボミゴケ
10. *Nardia sieboldii* (Sande Lacoste) Stephani アカウロコゴケ
- SCAPANIACEAE ヒシャクゴケ科
11. *Diplophyllum serrulatum* (K. Mueller) Stephani ノコギリフタニウロコゴケ
- PLAGIOCHILACEAE ハネゴケ科
12. *Pedinophyllum truncatum* (Stephani) Inoue ヒナウロコゴケ
- LOPHOCOLEACEAE トサカゴケ科
13. *Chiloscyphus polyanthus* (Linn.) Corda フジウロコゴケ
14. *Heteroscyphus becherelei* (Stephani) Hattori オオウロコゴケ
15. *Lophocolea minor* Nees ヒメトサカゴケ
- CEPHALOZIACEAE ヤバネゴケ科
16. *Allobelia parvifolia* Stephani コバノツツバナゴケ

星標 (*)をつけたのは外来植物である。

17. *Cephalozia bicuspidata* (Linn.) Dumortier subsp. *otaruensis* (Stephani) Hattori
ヤマトヤバネゴケ
18. *Odontoschisma denudatum* (Nees) Dumortier フジゴケ
RADULACEAE ケビラゴケ科
19. *Radula cyanea* Stephani ヒメケビラゴケ
PORELLACEAE クラマゴケモドキ科
20. *Porella ulophylla* (Stephani) Hattori チダミカヤゴケ
FRULLANIACEAE ヤスデゴケ科
21. *Frullania japonica* Sande Lacoste アカヤスデゴケ
22. *F. muscicola* Stephani カラヤスデゴケ
23. *F. tamarisci* (Linn.) Dumortier subsp. *mordetii* (Reinwardt, Blume et Nees)
Kamimura ニダウチャヤスデゴケ
LEJEUNEACEAE タサリゴケ科
24. *Cololejeunea japonica* (Schiffner) Mizutani ヤマトヨウジヨウゴケ
25. *Jubula japonica* Stephani ヒメウルシゴケ
26. *Lejeunea japonica* Mittén ヤマトコミミゴケ
27. *L. punctiformis* Taylor コタサリゴケ
28. *Ptychocoleus nipponicus* Hattori ヒメミメリゴケ
FOSSOMBRONIACEAE ウロコゼニゴケ科
29. *Fissombronia japonica* Schiffner ウロコゼニゴケ
BLASIACEAE ウスバゼニゴケ科
30. *Btisia pusilla* Linnaeus ツスバゼニゴケ
PALLAVICINIACEAE クモノスゴケ科
31. *Pallavicinia longispina* Stephani クモノスゴケ
MAKINOACEAE マキノゴケ科
32. *Makinoea crispa* (Stephani) Miyake マキノゴケ
PELLIACEAE ミズゼニゴケ科
33. *Pellia friburgensis* Raddi ホソバミズゼニゴケ
34. *P. neesiana* (Gottsche) Limpricht ニゾミズゼニゴケ

METZGERIACEAE フタマタゴケ科

35. *Metzgeria conjugata* Lindberg subsp. *japonica* (Hattori) Kuwahara

ヤマトフタマタゴケ

36. *M. furticulosa* (Dickson) Evans コモチフタマタゴケ

RICCARDIACEAE スジゴケ科

37. *Riccardia miyakeana* Schiffner ミヤケテングサゴケ

38. *R. pinguis* (Linn.) Gray ロバノミズゼニゴケ

39. *R. planiflora* (Stephani) Hattori ヒメテングサゴケ

40. *R. sinuata* (Dickson) Trevisan ハネスジゴケ

CONOCEPHALACEAE ジャゴケ科

41. *Conocephalum conicum* (Linn.) Dumortier ジャゴケ

42. *C. supradecompositum* (Lindberg) Stephani ヒメジャゴケ

RICCIACEAE ウキゴケ科

43. *Riccia huebeneriana* Lindenberg コハタケゴケ

ANTHIROCEROTACEAE ツノゴケ科

44. *Phaeoceros leavis* (Linn.) Proskauer ナメリツノゴケ

MUSCI 藻類

TETRAPHIDACEAE ヨツバゴケ科

45. *Tetraphis pellucida* Hedwig ヨツバゴケ

BUXBAUMIACEAE キセルゴケ科

46. *Buxbaumia minskatae* Okamura タマノチヨウジゴケ

DIPHYSCIACEAE イクビゴケ科

47. *Diphyscium fulvifolium* Mitten イクビゴケ

POLYTRICHACEAE スギゴケ科

48. *Atrichum spinulosum* (Cardot) Mizushima ケイリンタチゴケ

49. *A. undulatum* (Hedwig) Beauvois var. *undulatum* ナミガタタチゴケ

50. *Pogonatum inflexum* (Lindberg) Paris ニワスギゴケ

51. *P. spinulosum* Mitten ハミズゴケ

52. *Polytrichum commune* Hedwig ウマスギゴケ

FISSIDENTACEAE ホウオウコケ科

53. *Fissidens adleptinus* Beschereille コホウオウゴケ
 54. *F. taxifolius* Hedwig キラボクゴケ

ARCHIDIACEAE ツチゴケ科

55. *Archidium japonicum* Brotherus ミヤコツチゴケ

DITRICHACEAE キンシゴケ科

56. *Ceratodon purpureus* (Hedwig) Bridel ヤノウエノアカゴケ
 57. *Ditrichum pallidum* (Hedwig) Hampe キンシゴケ

DICRANACEAE シッポゴケ科

58. *Anisothecium squarrosum* (Starke) Lindberg ヒロハノススキゴケ
 59. *Brotheria leana* (Sullivant) C. Mueller シシゴケ
 60. *Dioranthes heteromalla* (Hedwig) Schimper ススキゴケ
 61. *Dioranthes caesia* Mitten アオシッポゴケ
 62. *D. nipponense* Bescherelle オオシッポゴケ
 63. *D. scoparium* Hedwig カモジゴケ

LEUCOBRYACEAE シラガゴケ科

64. *Leucobryum bowringii* Mitten アラハシシラガゴケ
 65. *L. neiguerense* C. Mueller ホツバオキナゴケ

POTTIACEAE センポンゴケ科

66. *Hyophila propagulifera* Brotherus ハマキゴケ
 67. *Weissia controversa* Hedwig ツチノウエノコゴケ

GRIMMIACEAE ゲボウシゴケ科

68. *Grimmia pilifera* Beauvois ケボウシゴケ
 69. *Rhacomitrium canescens* (Hedwig) Bridel var. *ericoides* (Weber) Schimper
 スナゴケ

ERPODIACEAE ヒナノハイゴケ科

70. *Glyptothecium hamiltonianum* (Mitten) Cardot サヤゴケ
 FUNARIACEAE ヒヨウタンゴケ科
 71. *Funaria hygrometrica* Hedwig ヒヨウタンゴケ

- BRYACEAE カサゴケ科
- 御
72. *Bryum argenteum* Hedwig ガンゴケ
- 裏
73. *B. pseudotriquetrum* (Hedwig) Schwaegrichen オオハリガネゴケ
- 林
74. *Pohlia wahlenbergii* (Weber et Mohr) Andrews チョウチソバリガネゴケ
- MNIACEAE チョウチソバク科
- 林
75. *Mnium cuspidatum* Hedwig ツボゴケ
- の
76. *M. flagellare* Sullivant et Lesquereux エゾチョウチソバク
- 植
77. *M. levinerve* Cardot ナメリチョウチソバク
- 物
78. *M. maximoviczii* Lindberg フルチョウチソバク
79. *M. microphyllum* Dozy et Molkenboer コバノチョウチソバク
80. *M. punctatum* Hedwig ウチワチョウチソバク
81. *M. vesicatum* Bescherelle オオバチョウチソバク
- RHIZOGONIACEAE ヒノキゴケ科
82. *Rhizogonium dozyanum* Sande Lacoste イタチノシップ
- BARTRAMIACEAE タマゴケ科
83. *Bartramia pomiformis* Hedwig var. *crispata* (Weber et Mohr) Bruch,
Schimper et Gumber タマゴケ
84. *Philonotis felcata* (Hooker) Mitten カマツカゴケ
- ORTHOFRICHACEAE タチヒダゴケ科
85. *Macrocoma hymenostomum* (Montagne) Grout ホツミノゴケ
86. *Macromitrium incurvum* (Lindberg) Paris ミノゴケ
87. *Orthotrichum consobrinum* Cardot コダマゴケ
88. *Ulota japonica* (Sullivant et Lesquereux) Mitten エゾキンモウゴケ
- CLIMACIACEAE マンネンゴケ科
89. *Climacium dendroides* (Hedwig) Weber et Mohr フロウツウ
- HEDWIGIACEAE ヒジキゴケ科
90. *Hedwigia ciliata* (Hedwig) Beauvois シロヒジキゴケ
- CRYPTOPHYLLACEAE ツルゴケ科
91. *Forststroemia japonica* (Bescherelle) Paris イトスズゴケ

METEORIACEAR ハイヒモゴケ科

92. *Meteori um helminthocladum* (Cardot) Brotherus コハイヒモゴケ
NECKERACEAE ヒラゴケ科
93. *Neckera yesoensis* Bescherelle エゾヒラゴケ
LEMBOPHYLLACEAE トクメカゴケ科
94. *Dolichomitriopsis diversiformis* (Mitten) Noguchi コタサゴケ
HOOKERIACEAE アブラゴケ科
95. *Hookeria acutifolia* Hooker アブラゴケ
HYPOPTERYGIACEAE タジャクゴケ科
96. *Hypopterygium feuriei* Bescherelle タジャクゴケ
THELIACEAE ヒゲゴケ科
97. *Fauriella tenuis* (Mitten) Cardot エダウロコゴケモドキ
FABRONIACEAE コゴメゴケ科
98. *Schwezinskia denticulata* (Sullivant) Brotherus subsp. *japonica*
(Bescherelle) Iwatsuki イヌケゴケ
LESKEACEAE ツスグロゴケ科
99. *Okamuraea brachydictyon* (Cardot) Noguchi ホソオカムラゴケ
THUIDIACEAE シノヅゴケ科
100. *Boulaya mittenii* (Brotherus) Cardot チャボスズゴケ
101. *Haplodiadum capillatum* (Mitten) Brotherus コバノキヌゴケ
102. *H. subulaceum* (Cardot) Brotherus アサゴケ
103. *Haplolymerium triste* (Cesatl) Kindberg イワイトゴケ
104. *Herpetineuron toccosae* (Sullivant et Lesquereux) Cardot ラセンゴケ
105. *Rauliella fujisana* (Faris) Reimers バンダイゴケ
106. *Thuidium bipinnatum* Mittén チャボシノブゴケ
107. *T. dolosum* (Hedwig) Mittén コバノエゾシノブゴケ
108. *T. glaucinum* (Mitten) Mittén アオシノブゴケ
109. *T. toyamae* Noguchi トヤマシノブゴケ

海
裏
林
の
城
物

BRACHYTHECIACEAE アオガスゴケ科

110. *Brachythecium buchenani* (Hooker) Jaeger ナガヒツジゴケ
 111. *B. flagellare* (Hedwig) Jennings ハネヒツジゴケ
 112. *B. kuroishicum* Bescherelle タロイシヒツジゴケ
 113. *B. moerense* Bescherelle ヒツジゴケ
 114. *B. populeum* (Hedwig) Bruch, Schimper et Gumber アオガスゴケ
 115. *B. salicorum* (Hoffman) Bruch, Schimper et Gumber ヒロハフサゴケ
 116. *Bryinia novae-angliae* (Sullivant et Lesquereux) Grout ヤノキゴケ
 117. *Eurhynchium polystictum* (Mitten) Paris ツタシナギゴケ
 118. *E. riparioides* (Hedwig) Richards アオハイゴケ
 119. *Rhynchosstegium pallidifolium* (Mitten) Jaeger コカヤゴケ

ENTODONTACEAE ツヤゴケ科

120. *Entodon compressus* C. Mueller ヒラツヤゴケ
 121. *E. curvifolius* Cardot マガリツヤゴケ
 122. *E. rubicundus* (Mitten) Jaeger et Sauerbeck エダツヤゴケ
 123. *E. sullivantii* (C. Mueller) Lindberg ホソミツヤゴケ

PLAGIOTHECIACEAE サナダゴケ科

124. *Plagiothecium longisetum* Lindberg ナガエノサナダゴケ
 125. *P. roseum* Bruch, Schimper et Gumber マルフサゴケ
 126. *P. splendens* Schimper ex Cardot オオサナダゴケモドキ

SEMATOPHYLLACEAE ハシボソゴケ科

127. *Brotherella horrida* (Duby) Brotherus カガミゴケ
 128. *B. yokohamae* (Brotherus) Brotherus ケハイゴケ
 129. *Clastobryella kugatsuensis* (Bescherelle) Iwatsuki コモチイトゴケ
 130. *Heterophyllum haldanianum* (Greville) Kindberg クサゴケ

HYPNACEAE ハイゴケ科

131. *Dolichotheca spinulosa* (Sullivant et Lesquereux) Iwatsuki ミチノクハイゴケ
 132. *Hypnum revolutiforme* Wilson ハイゴケ
 133. *Isopterygium pohlescarpa* (Sullivant et Lesquereux) Mitten アカイチゴケ

- 荷
裏
林
の
植
物
134. *L. turfaceum* (Lindberg) Lindberg ツクモハイゴケ
135. var. *subellesiacum* Cardot オオツクモハイゴケ
136. *Taxiphyllum taxivarium* (Mitten) Fleischer キヤリハゴケ
HYLOCOMIACEAE ヒヨクゴケ科
137. *Hylocomium cavitolium* Sande Lacoste フトリュウビゴケ
- PTERIDOPHYTA 羊齒植物
- EQUISETACEAE トクサ科
138. *Equisetum arvense* Linnaeus スギナ
- LYCOPODIACEAE ヒカゲノカズラ科
139. *Lycopodium clavatum* Linnaeus var. *nipponicum* Nakai ヒカゲノカズラ
140. *L. serratum* Thunberg var. *serratum* ホソバノトウゲシバ
OPHIOGLOSSACEAE ハナヤスリ科
141. *Ophioglossum vulgatum* Linnaeus ヒロハハナヤスリ
142. *Scopelidium ternatum* (Thunb.) Lyon フニノハナワラビ
OSMUNDACEAE ゼンマイ科
143. *Osmunda japonica* Thunberg ゼンマイ
PTERIDACEAE ワラビ科
144. *Adiantum pedatum* Linnaeus タジャクシダ
145. *Conogramme intermedia* Hieronymus イワガネゼンマイ
146. *Dennstaedtia hirsuta* (Sw.) Mettenius イヌシダ
147. *D. Wilfordii* (Moore) Koidzumi オウレンシダ
148. *Pteridium aquilinum* (Linn.) Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Underwood ワラビ
ASPIDIACEAE オシダ科
149. *Atlyrium Cordillii* (Fr. et Sav.) Tagawa ホソバシケシダ
150. *A. deltoides* Makino サトメシダ
151. *A. japonicum* (Thunb.) Copeland シケシダ
152. *A. niponicum* (Mett.) Hance イヌワラビ
153. *A. pycnosorum* H. Christ ミヤマシケシダ

154. *A. squamigerum* (Mett.) Ohwi キヨタキシダ
155. *A. Vidalii* (Fr. et Sav.) Nakai ヤマイヌラビ
156. var. *Yamadae* (Miyabe et Kudo) Miyabe et Tatewaki エノイヌラビ
157. *A. yokoscense* (Fr. et Sav.) H. Christ ヘビノネゴザ
158. *Cyrtomium Fortunei* J. Smith ヤブソテツ
159. *Dryopteris crassirhizoma* Nakai オンダ
160. *D. laevis* (Thunb.) O. Kuntze タマワラビ
161. *D. Sebaei* (Fr. et Sav.) C. Christensen ミヤマイタチシダ
162. *D. tokyoensis* (Matsum.) C. Christensen タニヘゴ
163. *D. uniformis* (Makino) Makino オクマワラビ
164. *Lastrea japonica* (Baker) Copeland ハリガネワラビ
165. *L. quelpaertensis* (H. Christ) Copeland オオバシヨリマ
166. *Leptogramma mollissima* (Fisch.) Ching ミゾシダ
167. *Matteuccia orientalis* (Hook.) Trevisan イヌガンソク
168. *M. Struthiopteris* (Linn.) Todaro タサソテツ
169. *Oncosmia sensibilis* Linnaeus var. *interrupta* Maximowicz コウヤワラビ
170. *Phegopteris decursive-pinnata* (van Hall) Fée ゲジゲジシダ
171. *Polystichopsis Miquelianae* (Maxim.) Tagawa ナライシダ
172. *P. Standishii* (Moore) Tagawa リョウメンシダ
173. *Poliostichum retroso-paleosorum* (Kodama) Tagawa サカゲイノデ
174. var. *corallense* (H. Chr.) Tagawa イワシロイノデ
175. *P. tripteron* (Kunze) Presl ジュウモソシダ
- BLECHNACEAE シシガシラ科
176. *Struthiopteris niponica* (Kunze) Nakai シシガシラ
- ASPLENIACEAE チヤセンシダ科
177. *Asplenium incisum* Thunberg トランオシダ
- POLYPODIACEAE ウラボシ科
178. *Crypsinus hastatus* (Thunb.) Copeland ミフヅクラボシ
179. *Lepisorus Onoei* (Fr. et Sav.) Ching ヒメノキシノブ

180. *L. Thunbergianus* (Kaulf.) Ching ノキシノブ
 SPERMATOPHYTA 硬子植物
 GYMNOSPERMAE 裸子植物
 TAXACEAE イチイ科
 御
裏
林
の
植
物
181. *Torreya nucifera* (Linn.) Siebold et Zuccarini カヤ
 PINACEAE マツ科
 182. *Abies firma* Siebold et Zuccarini モミ
 183. *Pinus densiflora* Siebold et Zuccarini アカマツ
 TAXODIACEAE スギ科
 184. *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don スギ
 CUPRESSACEAE ヒノキ科
 185. *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Siebold et Zuccarini ヒノキ
 ANGIOSPERMAE 被子植物
 MONOCOTYLEDONEAE 单子葉植物
 TYPHACEAE ガマ科
 186. *Typha latifolia* Linnaeus ガマ
 GRAMINEAE イネ科
 187. *Agropyron ciliare* (Trin.) Franchet var. *minus* (Miq.) Ohwi アオカモジダサ
 188. *A. tsukushense* (Honda) Ohwi var. *transiens* (Hack.) Ohwi カモジダサ
 189. *Agrostis exarata* Trinjus var. *Nakabo* (Ohwi) T. Koyama ヌカボ
 * 190. *A. palustris* Hudson コスカダ
 191. *Alopecurus aequalis* Sobolewski var. *arrurus* (Komar.) Ohwi スズメノテッポウ
 192. *Arthraxon hispidus* (Thunb.) Makino コブナダサ
 193. *Arundinella hirta* (Thunb.) C. Tanaka var. *obtusa* Koidzumi ウスゲトダシバ
 194. *Bromus remotiflorus* (Steud.) Ohwi キツネガヤ
 195. *Erythrinia Schmidtii* Ohwi ホガエリガヤ
 196. *Calamagrostis Epigejos* (Linn.) Roth ヤマアワ
 197. *C. Pseudo-Phragmites* (Hallier fil.) Koeler ホッスガヤ
 198. *Cymbopogon Goeringii* (Steud.) A. Camus オガルガヤ

199. *Dactylis glomerata* Linnaeus カモガヤ
200. *Deyeuxia hakonensis* (Fr. et Sav.) Keng ヒメノガリヤス
201. *D. sylvatica* (DC.) Kuauth var. *brachytricha* (Steud.) Rendle ノガリヤス
202. *Digitaria adscendens* (H. B. K.) Henrard メヒシバ
203. *D. lechaerium* (Schreb.) Muhlenberg やダメヒシバ
204. *D. violaceos* Link アキメヒシバ
205. *Echinocloa crus-galli* (Linn.) P. Beauvois
var. *caudata* (Roshev.) Kitagawa ケイヌビエ
206. var. *praticola* Ohwi イヌビエ
207. *Eragrostis ferruginea* (Thunb.) P. Beauvois カゼクテ
208. *E. multiculis* Steudel ニワホコリ
209. *Festuca parvigluma* Steudel トボシガラ
210. *F. rubra* Linnaeus オオウツノケグサ
211. *Ischaeme globosa* (Thunb.) O. Kuntze チゴヅサ
212. *Lochium multiflorum* Lamarck ネズミムギ
213. *Melica nutans* Linnaeus コメガヤ
214. *Microstegium japonicum* (Miq.) Koidzumi ササガヤ
var. *boreale* (Ohwi) Ohwi キタササガヤ
216. *M. vimineum* (Trin.) A. Camus ヒメアンボソ
217. *Miscanthus sacchariflorus* (Maxim.) Bentham オキ
218. *M. sinensis* Andersson ススキ
219. *Muehlenbergia japonica* Steudel ネズミガヤ
220. *Opismenus undulatifolius* (Arduino) Roemer et Schultes ケチヂミヂサ
var. *japonicus* (Steud.) Koidzumi コチヂミヂサ
222. *Panicum biserratum* Thunberg スカキビ
223. *Paspalum Thunbergii* Kunth スズメノヒエ
224. *Pennisetum eleocharoides* (Linn.) Sprengel チカラシバ
225. *Phalaris arundinacea* Linnaeus タヤヨン
226. *Phleum pratense* Linnaeus オオアワガエリ

227. *Phragmites communis* Trinii var. *longivalvis* (Steud.) Miquel ロシ
 228. *Pleoblastus Chino* (Fr. et Sav.) Makino アズマネヂサ
 229. var. *gracilis* (Makino) Nakai ナヨダケ
 230. *Poa scrofulacea* Steudel ミゾイチゴソナギ
 231. *P. annua* Linnaeus スズメノカタビラ
 *232. *P. pratensis* Linnaeus ナガハグサ
 233. *P. sphondylioides* Trinii イチゴソナギ
 234. *Sasa lacteiviridis* Koidzumi コウスバヂサ
 235. *S. sendaiensis* Makino センダイヂサ
 236. *S. Veitchii* (Carr.) Rehder タマヂサ
 237. *Sesella Okadana* (Makino) Makino ヒロハアズマヂサ
 238. *S. ramosa* (Makino) Makino アズマヂサ
 239. *S. siroyamensis* (Makino) Makino シロヤマヂサ
 240. *S. Suwekoana* (Makino) Makino スエコヂサ
 241. *Sesamorpha purpurascens* (Hack.) Nakai スズタケ
 242. *Setaria Faberii* Hermann アキノエノコログサ
 243. *S. glauca* (Linn.) P. Beauvois var. *glauca* サンエノコロ
 244. var. *pallide-fusca* (Schumach.) T. Koyama コツブキンエノコロ
 245. *S. viridis* (Linn.) P. Beauvois エノコログサ
 246. *Themeda japonica* (Willd.) C. Tanaka メガルカヤ
 247. *Trisetum bifidum* (Thunb.) Ohwi カニツリヂサ
 248. *Zizania japonica* Steudel シバ
 CYPERACEAE カヤツリグサ科
 249. *Carex albata* Boott ミノボロスゲ
 250. *C. alterniflora* Franchet var. *alterniflora* オオイトスゲ
 251. *C. biopharicarpa* Franchet var. *biopharicarpa* ショウジョウスゲ
 252. *C. capillacea* Boott ハリガネスゲ
 253. *C. confertiflora* Boott ミヤマシラスゲ
 254. *C. conica* Boott ヒメカンスゲ

- 御 裏 林 の 情 物
235. *C. dispalata* Boott カサスゲ
236. *C. ferruginea* Franchet et Savatier クニガリスゲ
237. *C. gibba* Wahlenberg マスクサ
238. *C. incisa* Boott タニスゲ
239. *C. ischnostachya* Steudel ジュズスゲ
240. *C. japonica* Thunberg ヒゴクサ
241. *C. lanceolata* Boott ヒカゲスゲ
242. *C. lasiolepis* Franchet アズマスゲ
243. *C. lauochlora* Bunge アオスゲ
244. *C. macroglossa* Franchet et Savatier ヨジュズスゲ
245. *C. Maximowiczii* Miquel ゴウソ
246. *C. Miyabei* Franchet ピロウドスゲ
247. *C. mollicula* Boott ヒメシラスゲ
248. *C. multifolia* Ohwi ミヤマカンスゲ
249. *C. otaruensis* Franchet オタルスゲ
250. *C. pedogyna* Franchet et Savatier タヌキラン
251. *C. Reinii* Franchet コカソスゲ
252. *C. rhizopoda* Maximowicz シラコスゲ
253. *C. rugata* Ohwi タマスゲ
254. *C. shmidzianus* Franchet アズマナルコスゲ
255. *C. sidarosticta* Hance タガネソウ
256. *Cyperus brevifolius* (Rottb.) Hasskvar var. *leptolepis* (Fr. et Sav.) T. Koyama
ヒメクダ
257. *C. Iria* Linnaeus コヅメハヤツリ
258. *C. microcarpa* Steudel カヤツリグサ
259. *C. nipponicus* Franchet et Savatier アオガヤツリ
260. *Fimbristylis dichotoma* (Linn.) Vahl テンツキ
261. *F. subbisecta* Nees et Meyen ヤメイ
262. *Lipocarpha microcephala* (R. Br.) Kunth ヒンジガヤツリ

283. *Schoenus apogon* Roemer et Schultes ノグサ
284. *Scirpus juncoides* Roxburgh ホタルイ
285. *S. linearis* Michaux subsp. *Wickensii* (Böckeler) T. Koyama var. *Wickensii* 御
アイバソウ
ARACEAE サトイモ科
286. *Arisaema angustatum* Franchet et Savatier ホツバテンナンショウ
287. *A. monophyllum* Nakai ヒトツバテンナンショウ
288. *A. robustum* (Engler) Nakai ヒロハテンナンショウ
289. *A. Takedai* Makino オオマムシグサ
290. *A. Urashima* Hara ウラシマソウ
COMMELINACEAE ツユクサ科
291. *Commelinia communis* Linnaeus ツユクサ
JUNCACEAE イグサ科
292. *Juncus decipiens* (Buchen.) Nakai イ
293. *J. diastrophanthus* Buchenau ヒロハノコウガイゼキショウ
294. *J. papillosum* Franchet et Savatier アオコウガイゼキショウ
295. *J. tenuis* Willdenow タサイ
296. *Luzula capitata* (Miq.) Miquel スズメノヤリ
297. *L. plumosa* E. Meyer var. *macrocarpa* (Buchen.) Ohwi スカボシソウ
298. *L. rostrata* Buchenau ミヤマスカボシソウ
LILIACEAE ルリ科
299. *Cardiocrinum cordatum* (Thunb.) Makino var. *Glehnii* (Fr. Schm.) Hara
オオウバユリ
300. *Disporum sessile* Don ホウチャクソウ
301. *D. smilacinum* A. Gray チゴユリ
302. *Erythronium japonicum* Decaisne カタクリ
303. *Hediondalia orientalis* (Thunb.) C. Tanaka ショウジョウバカラ
304. *Hermonaemata fulta* (Linn.) Linnacus var. *Kwansonii* Regel ヤブカンゾウ
305. *H. Middendorffii* Trautvetter et Meyer var. *esculentum* (Koidz.) Ohwi ナッコウキスゲ

306. *Hosta lancifolia* (Thunb.) Engler var. *Thunbergiana* Stearn ゴバギボウシ
307. *Lilium auratum* Lindley ヤマユリ
308. *L'riope minor* (Maxim.) Makino ヒメヤツラン
309. *Melantherum dilatatum* (Wood) Nelson et Macbride マイズルソウ
310. *Metanarthecium luteo-viride* Maximowicz ノガラン
311. *Ophiopogon japonicus* (Linn. fil.) Ker-Gawler ジャノヒゲ
312. *O. planiscapus* Nakai オオバジャノヒゲ
313. *Paris tetraphylla* A. Gray ツクバネソウ
314. *Polygonatum falcatum* A. Gray ナルコユリ
315. *P. lasianthum* Maximowicz ミヤマナルコユリ
316. *Rohdea japonica* (Thunb.) Roth オモト
317. *Smilax China* Linnaeus サルトリイバラ
318. *S. nipponica* Miquel タチソオデ
319. *S. Sieboldii* Miquel ヤマガシユウ
320. *Tricyrtis affinis* Makino ヤマジノホトトギス
321. *Trillium spetalon* Makino エンレイソウ
322. *Veratrum Massoi* Regel var. *parviflorum* (Miq.) Hara アオヤギソウ
- DIOSCOREACEAE ヤマノイモ科
323. *Dioscorea japonica* Thunberg ヤマノイモ
324. *D. Tokoro* Makino オニドコロ
- IRIDACEAE アヤメ科
325. *Iris ensata* Thunberg var. *spontanea* (Makino) Nakai ノハナシヨウブ
326. *I. gracilipes* A. Gray ヒメシャガ
327. *I. Japonica* Thunberg シャガ
- ZINGIBERACEAE ショウガ科
328. *Zingiber Mioga* (Thunb.) Roscoe ミョウガ
- ORCHIDACEAE ラン科
329. *Cephalanthera erecta* (Thunb.) Blume ギンラン
330. *C. longibracteata* Blume ササバギンラン

331. *C. subaphylla* Miyabe et Kudo ユウショウラン
 332. *Cremnastra Variabilis* (Blume) Nakai サイハイラン
 333. *Cymbidium Goeringii* (Reichb. fil.) Reichenbach fil. シュンラン 御
 334. *Epipactis papillosa* Franchet et Savatier エゾスズラン 賀
 335. *E. Thunbergii* A. Gray カキラン 林
 336. *Gastrochilus Matsurana* (Makino) Schlechter マツラン の
 337. *Goodyera Schlechtendaliana* Reichenbach fil. ミヤマウメラ 植
 338. *Hetaeria shikokiana* (Makino et F. Maekawa) Tuyama ヒメノヤガラ 物
 339. *Lecanorchis Japonica* Blume スヨウラン
 340. *Liparis Krameri* Franchet et Savatier ジガバチソウ
 341. *L. Kurnokiri* F. Maekawa クモカリソウ
 342. *Listera japonica* Blume ヒメフタバラン
 343. *Neolindleya camtschatica* (Cham.) Neveski ノビネチドリ
 344. *Oreorchis patens* (Lindl.) Lindley コケイラン
 345. *Pogonia Japonica* Reichenbach fil. トキソウ
 346. *P. minor* (Makino) Makino ヤマトキソウ
 347. *Sarcophilus Japonicus* (Reichb. fil.) Miquel カヤラン
 348. *Spiranthes sinensis* (Pers.) Ames ネジバナ
 349. *Tulotis ussuriensis* (Reg.) Hara トンボソウ
- DICOTYLEDONEAE 双子葉植物
- ARCIICHLAMYDEAE 離弁花類
- SAURURACEAE ドクダミ科
350. *Houttuynia cordata* Thunberg ドクダミ
 CHLORANTHACEAE センリョウ科
351. *Chloranthus serratus* (Thunb.) Roemer et Schultes フタリシヅカ
 352. *Tricercandra Japonica* (Sieb.) Nakai ヒトリシヅカ
- SALICACEAE ヤナギ科
353. *Populus Sieboldii* Miquel ヤマナラシ
 354. *Salix Bakko* Kimura バッコヤナギ

355. *S. Gilgiana* Seemen カワヤナギ
 356. *S. gracilistyla* Miquel ネコヤナギ
 357. *S. hondoensis* Koidzumi ミチノクシロヤナギ
 358. *S. integrifolia* Thunberg イヌコリヤナギ
 359. *S. Reinhii* Franchet et Savatier ミネヤナギ
 360. *S. sachalinensis* Fr. Schmidt オノエヤナギ
 361. *S. ×sendalica* Kimura センダイヤナギ
 362. *S. subfragilis* Andersson タチャヤナギ
 363. *S. vulpina* Andersson キツネヤナギ

JUGLANDACEAE クル:科

364. *Juglans mandshurica* Maximowicz var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo)
 Kitamura オニグルミ

BETULACEAE カバノキ科

365. *Alnus hirsuta* Turczaninow ケヤマハンノキ
 366. var. *alborea* (Fischer) C. K. Schneider ヤマハンノキ
 367. *A. japonica* (Thunb.) Steudel ハンノキ
 368. *Carpinus cordata* Blume サワシバ
 369. *C. japonica* Blume クマシデ
 370. *C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume アカシデ
 371. *C. Tschonoskii* Maximowicz イヌシデ
 372. *Corylus Sieboldiana* Blume グメハシバミ
 373. *Ostrya japonica* Sargent アサガ

FAGACEAE ブナ科

374. *Castanea crenata* Siebold et Zuccarini クリ
 375. *Cyclobalanopsis scuta* (Thunb.) Oerstedt アカガシ
 376. *C. glauca* (Thunb.) Oerstedt アラカシ
 377. *C. myrsinæfolia* (Blume) Oerstedt シラカシ
 378. *C. salicina* (Blume) Oerstedt ウラジロガシ
 379. *Fagus crenata* Blume ブナ

380. *F. japonica* Maximowicz イヌヅナ
 381. *Quercus mongolica* Fischer var. *grosseserrata* (Blume) Rehder et Wilson ミズナラ
 382. *Q. serrata* Thunberg コナラ
 ULMACEAE ハレ科
 383. *Celtis sinensis* Persoon var. *japonica* (Planch.) Nakai ホノキ
 384. *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ケヤキ
 MORACEAE クワ科
 385. *Broussonetia Kazinoki* Siebold コウゾ
 386. *Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai タワクサ
 387. *Humulus japonicus* Siebold et Zuccarini カナムグラ
 388. *H. Lupulus* Linnaeus var. *cordifolius* (Miq.) Maximowicz カラハナソウ
 389. *Morus bombycis* Koidzumi ヤマグワ
 URTICACEAE イラクサ科
 390. *Boehmeria longispica* Steudel ヤブミオ
 391. *B. spicata* (Thunb.) Thunberg コアカソ
 392. *B. tricuspidata* (Hance) Makino アカソ
 393. var. *unicuspis* Makino クサコアカソ
 394. *Elatostema involucratum* Franchet et Savatier ウツバミソウ
 395. *Laportea bifurcata* (Sieb. et Zucc.) Weddell ムカゴイラクサ
 396. *Nanocnide japonica* Blume カテンソウ
 397. *Pilea Hemsleyi* Makino ミズ
 398. *P. mongolica* Weddell オオミズ
 SANTALACEAE ピャクダン科
 399. *Buckleya lanceolata* (Sieb. et Zucc.) Miquel ツタバネ
 400. *Thesium chinense* Turczaninow カナビキソウ
 POLYGONACEAE タデ科
 401. *Persicaria lapathifolia* (Linn.) S. F. Gray オオイヌタデ
 402. *P. longistata* (De Bruyn) Kitagawa イヌタデ
 403. *P. nepalensis* (Meisn.) H. Gross ダニソバ

404. *P. nipponensis* (Makino) H. Gross ヤノネグサ
 405. *P. pubescens* (Blume) Hara var. *acuminata* (Franch. et Savat.) Hara ポントクタデ
 部
 406. *P. sagittata* (Linn.) H. Gross var. *Steboldii* (Meissn.) Nakai ウナギクカミ
 裏
 407. *P. Thunbergii* (Sieb. et Zucc.) H. Gross ミゾバ
 体
 408. *P. Yokosiana* (Makino) Nakai ハナタデ
 の
 409. *Polygonum aviculare* Linnaeus ミチャナギ
 植
 410. *Reynoutria japonica* Houttuyn イタドリ
 物
 411. var. *uzonensis* Honda ケイタドリ
 *412. *R. sachalinensis* (Fr. Schm.) Nakai オオイタドリ
 *413. *Rumex acetosa* Linnaeus ヒメスイバ
 414. *R. japonicus* Houttuyn ギンギン
 *415. *R. obtusifolius* Linnaeus subsp. *agrestis* Danser エゾノギンギン
 416. *Sunania filiformis* (Thunb.) Hara ミズヒキ
 CHENOPODIACEAE アカザ科
 417. *Chenopodium album* Linnaeus var. *centrorubrum* Makino アカザ
 AMARANTHACEAE ヒュ科
 418. *Achyranthes Fauriei* Léveillé et Vaniot ヒナタイノコヅチ
 419. *A. japonica* (Miq.) Nakai イノコヅチ
 420. *Euxolus viridis* (Linn.) Moquin-Tandon ホナガイスピニ
 PHYTOLACCACEAE ヤマゴボウ科
 421. *Phytolacca esculenta* Van Houtte ヤマゴボウ
 CARYOPHYLLACEAE ナデシコ科
 422. *Ceratium cespitosum* Gilibert var. *lanthes* (Williams) Hara ミミナグサ
 *423. *C. viscosum* Linnaeus オランダミミナグサ
 424. *Cucubalus bacifer* Linnaeus var. *japonicus* Miquel ナンバンハコベ
 425. *Dianthus superbus* Linnaeus var. *longicalyxinus* (Maxim.) Williams カワラナデシコ
 426. *Lychins Miquellana* Rohrbach フシグロセンノウ
 427. *Melandryum firmum* (Sieb. et Zucc.) Rohrbach f. *pubescens* (Makino) Ohwi
 ケフシグロ

- 御
表
林
の
植
物
428. *Sagina japonica* (Sw.) Ohwi ツメクサ
429. *Stellaria Alpina* Grimm var. *undulata* (Thunb.) Ohwi ノミノスマ
430. *S. aquatica* (Linn.) Scopoli ウシハコベ
431. *S. diversiflora* Maximowicz サワハコベ
432. *S. modesta* Fenzl コハコベ
433. *S. neglecta* Weihe ミヤマハコベ
434. *S. sessiliflora* Yabe ミヤマハコベ
- CERCIDIPHYLLACEAE カツラ科
435. *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zuccarini カツラ
- RANUNCULACEAE キンポウゲ科
436. *Anemone Raddeana* Regel アズマイチゲ
437. *Cimicifuga scirina* (Sieb. et Zucc.) C. Tanaka オオバシヨウマ
438. *C. simplex* Wormskjord サランナシヨウマ
439. *Clematis apilifolia* A. P. de Candolle ポタングル
440. *C. japonica* Thunberg var. *brevipedicellata* Makino アズマハンショウヅル
441. *C. Maximowicziana* Franchet et Savatier センニンソウ
442. *C. patens* Morren et Decaisne カザグルマ
443. *Coptis japonica* (Thunb.) Makino var. *dissecta* (Yatabe) Nakai セリバオウレン
444. *Ranunculus japonicus* Thunberg ウマノアシガタ
445. *R. quelpaertensis* (Lév.) Nakai キツネノボタン
446. *Thalictrum minus* Linnaeus var. *hypoleucum* (Sieb. et Zucc.) Miquel アキカラマツ
- LARDIZBALACEAE アケビ科
447. *Akebia quinata* (Thunb.) Decaisne アケビ
448. *A. trifoliata* (Thunb.) Koidzumi ミツバアケビ
- BERBERIDACEAE メギ科
449. *Berberis Thunbergii* A. P. de Candolle メギ
450. *Epimedium grandiflorum* Morren var. *Thunbergianum* (Miq.) Nakai イカリソウ
- MAGNOLIACEAE モクレン科
451. *Magnolia obovata* Thunberg ホオノキ

452. *Schisandra repanda* (Sieb. et Zucc.) Radlkofler マツブサ
 LAURACEAE クスノキ科
- 列 453. *Lindera umbellata* Thunberg var. *surantica* (Murai) Hiyama f. *membranacea*
 (Maxim.) Makino オオバクロモジ
- 異 454. *Machilus Thunbergii* Siebold et Zuccarini タブノキ
- 体 455. *Neolitsea sericea* (Blume) Koidzumi シロダモ
- の PAPAVERACEAE ケン科
- 植 456. *Chelidonium majus* Linnacus subsp. *asiaticum* Hara クサノオウ
- 物 457. *Corydalis Incisa* (Thunb.) Persoon ムラサキケマン
- CRUCIPERAE アブラナ科
458. *Arabis hirsuta* (Linn.) Scopoli ヤマハタガオ
459. *Capsella Bursa-pastoris* (Linn.) Medicus var. *triangularis* Grunner ナズナ
460. *Cardamine dentipetala* Matsumura var. *glabrescens* Hara サワガラシ
461. *C. soutate* Thunberg subsp. *fallex* (O. E. Schulz) Hara タチタネツケバナ
 subsp. *Regelianae* (Miq.) Hara オオバタネツケバナ
462. *Draba nemorosa* Linnacus var. *hebecarpa* Lindley イヌナズナ
- *464. *Lepidium virginicum* Linnaeus マメグンバイナズナ
465. *Rorippa Indica* (Linn.) Hiern イヌガラシ
466. *R. Islandica* (Oeder) Borbás スカシタブボウ
- SAXIFRAGACEAE ニキノシタ科
467. *Astilbe microphylla* Knoll チダケサン
468. *A. Thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Miquel var. *congesta* H. Boissieu トリアシショウマ
469. *Chrysosplenium Grayanum* Maximowicz ネコノメソウ
470. *C. japonicum* (Maxim.) Makino ヤマネコノメソウ
471. *C. macrostemon* Maximowicz var. *shioharense* (Franch.) Hara
 ニッコウネコノメソウ
472. *Deutzia crenata* Siebold et Zuccarini ウツギ
473. *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) Seringe subsp. *macrophylla* var. *magacarpa*
 Ohwi エゾアジサイ

474. *H. paniculata* Siebold ノリウツギ
475. *H. petiolaris* Siebold et Zuccarini ツルアジサイ
476. *Parnassia palustris* Linnaeus var. *multiseta* Ledebour ウメバチソウ
477. *Rodgersia podophylla* A. Gray ヤダルマソウ
478. *Saxifrage Fortunei* Hooker fil. var. *incolubata* (Engl. et Irm.) Nakai
ダイモンジソウ
479. *Schizophragma hydrangeoides* Siebold et Zuccarini イリガラミ
HAMAMELIDACEAE マンサク科
480. *Hemerocallis japonica* Siebold et Zuccarini マンサク
ROSACEAE バラ科
481. *Agrimonia pilosa* Ledebour キンミズヒキ
482. *A. nipponica* Koidzumi ヒメキンミズヒキ
483. *Amelanchier asiatica* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ザイブリボク
484. *Aruncus dioicus* (Walter) Fernald var. *tenulifolius* (Nakai) Hara
ウスバヤマブキシヨウマ
485. *Duchesnea chrysanthia* (Zoll. et Mor.) Miquel ヘビイチゴ
486. *Geum japonicum* Thunberg ダイコンソウ
487. *Kerria japonica* (Thunb.) A. P. de Candolle ヤマブキ
488. *Malus Sieboldii* (Regel) Rehder オニ
489. *M. Tschonoskii* (Maxim.) C. K. Schneider オオウラジロノキ
490. *Potentilla centigrana* Maximowicz f. *patens* Hiyama ヒメヘビイチゴ
491. *P. cryptotaeniae* Maximowicz ミツモトソウ
492. *P. fragarioides* Linnaeus var. *major* Maximowicz キジムシロ
493. *P. Freyniana* Bornmüller ミツバツチグリ
494. *P. Kleiniana* Wight et Arnott オヘビイチゴ
495. *Polygonum villosa* (Thunb.) Decaisne var. *Zollingeri* (Decne.) Nakai ケカマツカ
496. *Prunus apetala* (Seib. et Zucc.) Franchet et Savatier チョウジザクラ
497. *P. Grayana* Maximowicz ウワミズザクラ
498. *P. pendula* Maximowicz f. *ascendens* (Makino) Ohwi アズマヒガン

御
真
林
の
植
物

499. *P. verecunda* (Koidz.) Koehne カスミザクラ
500. *Rosa polyantha* Siebold et Zuccarini ノイバラ
501. *Rubus crataegifolius* Bunge クマイチゴ
502. *R. microphyllus* Linnaeus fil. ニガイチゴ
503. *R. palmatus* Thunberg var. *copiophyllus* (A. Gray) O. Kuntze エミジイチゴ
504. *R. phoenicolasius* Maximowicz エビガライチゴ
505. *Sanguisorba officinalis* Linnaeus ワレモコウ
506. *Sorbus alnifolia* (Sieb. et Zucc.) K. Koch アズキナシ
507. *S. commixta* Hedlund ナナカマド
508. *S. japonica* (Decne.) Hedlund ウラジロノキ
509. *Stephanandra incisa* (Thunb.) Zabel コゴメウツギ

LEGUMINOSAE マメ科

510. *Abizzia Julibrissin* Durazzini ネムノキ
511. *Amphicarpa Edgeworthii* Bentham var. *trisperma* (Miq.) Ohwi ウスバヤブマメ
512. *Apios Fortunei* Maximowicz ホドイモ
513. *Desmodium racemosum* (Thunb.) A. P. de Candolle ススピトハギ
514. *Dumasia truncata* Siebold et Zuccarini ノササゲ
515. *Glycine Soja* Siebold et Zuccarini ツルマメ
516. *Indigofera pseudo-thectoria* Matsumura コマツナギ
517. *Kummerowia striata* (Thunb.) Schindler ヤハズソウ
518. *Lathyrus Davidii* Hance イタチササゲ
519. *Lespedeza Buergeri* Miquel オハギ
520. *L. cuneata* (Du Mont, d. Cours.) G. Don メドハギ
521. *L. horoloba* Nakai ツクシハギ
522. *L. pilosa* (Thunb.) Siebold et Zuccarini ネコハギ
523. *Lotus corniculatus* Linnaeus var. *japonicus* Regel ミヤコグサ
524. *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi タズ
*525. *Trifolium pratense* Linnaeus アカツメクサ
*526. *T. repens* Linnaeus シロツメクサ

527. *Viola unijuga* A. Braun ナンテンハギ
528. *Wisteria floribunda* (Willd.) A. P. de Candolle ツジ
GERANIACEAE フウロソウ科
529. *Geranium nepalense* Sweet var. *Thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Kudo ゲンノショウコ
OXALIDACEAE カタバミ科
530. *Oxalis corniculata* Linnaeus カタバミ
531. *f. atropurpurea* Van Houtte ウスアカカタバミ
RUTACEAE ミカン科
532. *Fagara silianthoides* (Sieb. et Zucc.) Engler カラスザンショウ
533. *F. mantchurica* (Bennett) Honda イヌザンショウ
534. *Orixa japonica* Thunberg コクサギ
535. *Zanthoxylum piperitum* (Linn.) A. P. de Candolle サンショウ
SIMAROUBACEAE ニガキ科
536. *Pliosoma quassioloides* (D. Don) Bennett var. *glabrescens* Pampanini ニガキ
POLYGALACEAE ヒメハギ科
537. *Polygala japonica* Houttuyn ヒメハギ
EUPHORBIACEAE トウダイグサ科
538. *Acalypha australis* Linnacus エノキグサ
539. *Daphniphyllum macropodum* Miquel ユズリハ
540. *Mallotus japonicus* (Thunb.) Müller-Arg. アカメガシワ
541. *Tithymalus adenochlorus* (Morren et Decaisne) Hara ノウルシ
542. *T. pekinensis* (Ruprecht) Hara タカトウダイ
543. *T. Sieboldianus* (Morren et Decaisne) Hara ナツトウダイ
544. *Triadica japonica* (Sieb. et Zucc.) Baillon シラキ
ANACARDIACEAE ウルシ科
545. *Rhus ambigua* Lavallée ツタウルシ
546. *R. javanica* Linnaeus スルデ
547. *R. trichocarpa* Miquel ヤマウルシ

錦
異
林
の
植
物

AQUIFOLIACEAE モチノキ科

548. *Buxus crenata* Thunberg イヌツゲ

549. *L. Integra* Thunberg モチノキ

550. *L. macrospoda* Miquel アオハダ

551. *L. serrata* Thunberg ウメモドキ

CELASTRACEAE ニシキギ科

552. *Celastrus orbiculatus* Thunberg var. *strigillosus* (Nakai) Makino

オニツルウメモドキ

553. *C. stephanotifolius* (Makino) Makino オオツルウメモドキ

554. *Euonymus alatus* (Thunb.) Siebold var. *alatus* f. *situs* ニシキギ

f. *ciliato-dentatus* (Fr. et Sav.) Hiyama コマユイ

556. *E. Fortunei* (Turcz.) Handel-Mazzetti var. *radicans* (Sieb.) Rehder ツルマサキ

557. *E. oxyphyllus* Miquel ツリバナ

ACERACEAE カエデ科

558. *Acer carpinifolium* Siebold et Zuccarini チドリノキ

559. *A. cissifolium* (Sieb. et Zucc.) K. Koch ミツデカエデ

560. *A. diabolicum* Blume カジカエデ

561. *A. distylum* Siebold et Zuccarini ヒトツバカエデ

562. *A. Japonicum* Thunberg ハウチワカエデ

563. *A. mono* Maximowicz var. *ambiguum* (Pax) Rehder オニイタヤ

564. var. *marmoratum* (Nichols.) Hara f. *heterophyllum* Nakai イタヤカエデ

565. *A. nikkoense* Maximowicz メグスリノキ

566. *A. palmatum* Thunberg subsp. *amoenum* (Carr.) Hara オオモミジ

567. subsp. *Matsumurae* Koidzumi ヤマモミジ

568. *A. rufinerve* Siebold et Zuccarini ウリハダカエデ

569. *A. Sieboldianum* Miquel コハウチワカエデ

SABIACEAE アワヅキ科

570. *Meliosma myriantha* Siebold et Zuccarini アワヅキ

- BALSAMINACEAE クリフネソウ科
571. *Impatiens noli-tangere* Linnaeus キツリフネ
572. *I. Textori* Miquel フリフネソウ
- RHAMNACEAE クロウメモドキ科
573. *Berberis racemosa* Siebold et Zuccarini タマヤナギ
574. *Hovenia dulcis* Thunberg f. *latifolia* (Y. Kimura) Hara ヒロハケンボナシ
575. *Rhamnus Japonica* Maximowicz var. *decipiens* Maximowicz クロウメモドキ
- VITACEAE ブドウ科
576. *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautvetter var. *heterophylla*
(Thunb.) Hara ノブドウ
577. *Cayratia japonica* (Thunb.) Gagnepain ヤブカラシ
578. *Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planchon フタ
579. *Vitis Colignetiae* Pulliat ヤマブドウ
580. *V. flexuosa* Thunberg var. *tsukubana* Makino ウスゲサンカクズル
- ACTINIDIACEAE マタタビ科
581. *Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.) Planchon サルナン
582. *A. polygama* (Sieb. et Zucc.) Planchon マタタビ
- THEACEAE ツバキ科
583. *Camellia japonica* Linnaeus ヤブツバキ
584. *Eurya japonica* Thunberg ヒサカキ
- HYPERICACEAE オトギリソウ科
585. *Hypericum Ascyron* Linnaeus トモエソウ
586. *H. erectum* Thunberg オトギリソウ
587. *H. pseudopeltatum* Keller var. *Muranianum* (Makino) Y. Kimura イソテオトギリ
588. *Sarothra laxa* (Blume) Y. Kimura コケオトギリ
- VIOLACEAE スミレ科
589. *Viola eizanensis* (Makino) Makino エゾスミレ
590. *V. grypoceras* A. Gray タチツボスミレ
591. *V. hondoensis* W. Becker et H. Boissieu アオイスミレ

御
裏
林
の
植
物

- 部
 裏
 林
 の
 植
 物
592. *V. Keiskei* Miquel f. *Okuboi* (Makino) F. Maekawa ケマルバスミレ
 593. *V. Kusanoana* Makino f. *Kusanoana* オオイタチツボスミレ
 594. *V. mandshurica* W. Becker スミレ
 595. *V. obtusa* (Makino) Makino ニオイタチツボスミレ
 596. *V. Rossii* Hemsl. アケボノスミレ
 597. *V. rostrata* Pursh ナガハジスミレ
 598. *V. Tokubuchiana* Makino var. *Takedana* (Makino) F. Maekawa ヒナスミレ
 599. *V. vaginata* Maximowicz スミレサイン
 600. *V. vescunda* A. Gray var. *vescunda* ニオイスミレ
 601. *V. violacea* Makino var. *Makinoi* (Boissieu) Hiyama マキノスミレ
 FLACOURTIACEAE イイギリ科
 602. *Iodesia polycarpa* Maximowicz イイギリ
 STACHYURACEAE キヅン科
 603. *Stachyurus praecox* Siebold et Zuccarini キヅン
 ELAEAGNACEAE グミ科
 604. *Elaeagnus multiflora* Thunberg var. *hortensis* Maximowicz トウグミ
 605. *E. umbellata* Thunberg var. *coreana* (Lév.) Léveillé ミチノクアキグミ
 ALANGIACEAE ウリノキ科
 606. *Morus pustanifolia* Siebold et Zuccarini var. *triloba* Miquel ウリノキ
 ONAGRACEAE アカバナ科
 607. *Circsea erubescens* Franchet et Savatier タニタデ
 608. *C. mollis* Siebold et Zuccarini ミズタマソウ
 609. *Epilobium pyrrhopodium* Franchet et Savatier アカバナ
 HALORAGACEAE アリノトウグサ科
 610. *Haloragis minorantha* (Thunb.) R. Brown アリノトウグサ
 ARALIACEAE ウコギ科
 611. *Acanthopanax innovans* (Sieb. et Zucc.) Franchet et Savatier タカノツメ
 612. *A. sciadophylloides* Franchet et Savatier コシアブラ
 613. *A. Sieboldianus* Makino ヒメウコギ

614. *A. spinosus* (Linn. fil.) Miquel ヤマウコギ
615. *Aralia cordata* Thunberg ウド
616. *A. elata* (Miq.) Seemann var. *elata* タラノキ 御
翠
617. *Fatsia japonica* (Thunb.) Decaisne et Planchon ヤツデ 林
618. *Hedera rhombifolia* Siebold et Zuccarini キブタ 林
619. *Kaempferia picta* (Thunb.) Nakai ハリギリ
620. *Panax japonicus* C. A. Meyer トチバニンジン
- UMBELLIFERAE セリ科 物
621. *Angelica decursiva* (Miq.) Franchet et Savatier ノダケ
622. *A. polymorpha* Maximowicz シラネセンキュウ
623. *Chamaele decumbens* (Thunb.) Makino セントウソウ
624. *Cryptotaenia japonica* Hasskarl ミツバ
625. *Hydrocotyle ranunculoides* Maximowicz オオチドメ
626. *H. sibthorpioides* Lamarck チドメグサ
627. *Oenanthe javanica* (B'ume) A. P. de Candolle セリ
628. *Osmorrhiza aristata* (Thunb.) Makino et Yabe ヤブニンジン
629. *Sanicula chinensis* Bunge ウマノミツバ
630. *Spiraeopimpinella calycina* (Maxim.) Kitagawa カノフメソウ
- CORNACEAE ミズキ科
631. *Aucuba japonica* Thunberg アオキ
632. f. *longifolia* (T. Moore) Schelle ホソバノアオキ
633. *Benthamidia japonica* (Sieb. et Zucc.) Hara ヤマボウシ
634. *Cornus controversa* Hemsley ミズキ
635. *C. macrophylla* Wallich タマノミズキ
636. *Heptaptera japonica* (Thunb.) F. G. Dietrich ハナイカダ
- METACHLAMYDEAE 合弁花類
- DIAPENSIACEAE イワウメ科
637. *Shortia uniflora* Maximowicz イワウチワ

CLETHRACEAE リョウブ科

- 638.
- Clethra barbinervis*
- Siebold et Zuccarini リョウブ

PYROLACEAE イチヤクソウ科

- 639.
- Chimaphila japonica*
- Miquel ウメガサソウ

- 640.
- Monotropa Hypopithys*
- Linnaeus var.
- japonica*
- Franchet et Savatier
-
- シャクジョウソウ

- 641.
- M. uniflora*
- Linnacus アキノギンリョウソウ

- 642.
- Monotropastrum globosum*
- H. Andres マルミギンリョウソウ

- 643.
- Pyrola japonica*
- Klenze イチヤクソウ

- 644.
- P. renifolia*
- Maximowicz ジンヨウイチヤクソウ

ERICACEAE ツツジ科

- 645.
- Eubotrysoides Grayana*
- (Maxim.) Hara var.
- oblongifolia*
- (Miq.) Hara ハナヒリノキ

- 646.
- Hugeria japonica*
- (Miq.) Nakai アクシバ

- 647.
- Lyonia elliptica*
- (Sieb. et Zucc.) Okuyama ネジヤ

- 648.
- Rhododendron japonicum*
- (A. Gray) Suringar レンゲツツジ

- 649.
- R. Kaempferi*
- Planchon ヤマツツジ

- 650.
- R. quinquefolium*
- Bisset et Moore ゴヨウツツジ

- 651.
- R. semibarbatum*
- Maximowicz バイカツツジ

- 652.
- R. Wadanum*
- Makino トウゴクミツバツツジ

- 653.
- Tripetaela paniculata*
- Siebold et Zuccarini var.
- latifolia*
- Maximowicz ホツヅジ

- 654.
- Tritomodon campanulatus*
- (Miq.) F. Maekawa サラナドケダン

- 655.
- T. subsessilis*
- (Miq.) F. Maekawa アブラツツジ

- 656.
- Vaccinium hirtum*
- Thunberg var.
- pubescens*
- (Koidz.) Mizushima

- f.
- Motosukeanum*
- (Koidz.) Mizushima マルバカクミノスノキ

- 657.
- V. Oldhami*
- Miquel ナツハゼ

MYRSINACEAE ヤブコウジ科

- 658.
- Ardisia japonica*
- (Thunb.) Blume ヤブコウジ

PRIMULACEAE サクラソウ科

- 659.
- Lysimachia clethroides*
- Duby オカトラノオ

660. *L. Fortunei* Maximowicz メマトラノオ
661. *L. vulgaris* Linnaeus subsp. *davurica* (Ledeb.) Tatewaki クサレダマ
662. *Primula Sieboldii* E. Morren サクラソウ
- 樹
木
の
植
物
- SYMPLOCACEAE ハイノキ科
663. *Palura chinensis* (Lour.) Koidzumi var. *leucocarpa* (Nakai) Hara
- 樹
木
の
植
物
- f. pilosa* (Nakai) Hara サワフタギ
- STYRACACEAE エゴノキ科
664. *Styrax japonicus* Siebold et Zuccarini エゴノキ
665. *S. Obcisa* Siebold et Zuccarini ハクウンボク
- 樹
木
の
植
物
- OLEACEAE モタセイ科
666. *Fraxinus Sieboldiana* Blume マルバアオダモ
667. *Ligustrum japonicum* Thunberg ネズミモチ
668. *L. obtusifolium* Siebold et Zuccarini イボタノキ
669. *Osmanthus Illicifolius* (Hassk.) Moulliefert ヒイラギ
- 樹
木
の
植
物
- GENTIANACEAE リンドウ科
670. *Gentiana scabra* Bunge var. *orientalis* Hara リンドウ
671. *G. squarrosa* Ledebour コケリンドウ
672. *G. Zollingeri* Fawcett フダリンドウ
673. *Swertia bimaculata* (Sieb. et Zucc.) Hooker fil. et Thomson アケボノツウ
674. *S. japonica* (Schultes) Makino センブリ
675. *Tripterospermum japonicum* (Sieb. et Zucc.) Maximowicz ツルリンドウ
- 樹
木
の
植
物
- ASCLEPIADACEAE ガガイモ科
676. *Cynanchum osundatum* (Miq.) Maximowicz イケツ
677. *Metaplexis japonica* (Thunb.) Makino ガガイモ
678. *Tylophora aristolochioides* Miquel オオカセメヅル
- 樹
木
の
植
物
- BORAGINACEAE ムラサキ科
679. *Bothriospermum tenellum* (Hornem.) Fischer et Meyer ハナイバナ
680. *Omphalodes Krameri* Franchet et Savatier ルリソウ
681. *Trigonotis peduncularis* (Trevir.) Bentham タビラコ

VERBENACEAE タマツヅラ科

682. *Callicarpa japonica* Thunberg ムラサキシキブ
 表林の樹
683. *C. mollis* Siebold et Zuccarini ヤブムラサキ
 684. *Clerodendron trichotomum* Thunberg クサギ
 LABIATAE シソ科
 685. *Ajuga decumbens* Thunberg キランソウ
 686. *A. shikokanensis* Miyabe et Tatewaki ツルカコソウ
 687. *A. yessoensis* Maximowicz var. *tsukubana* Nakai ツクバキンモンソウ
 688. *Clinopodium chinense* (Benth.) O. Kuntze subsp. *grandiflorum* (Maxim.) Hara
 var. *shibataense* (Lév.) Koidzumi ヤマタルマバナ
 689. *C. micranthum* (Regel) Hara イストウバナ
 690. *Cormanthosphace sublanuginosa* (Miq.) S. L. Moore テンニンソウ
 691. *Echitria ciliata* (Thunb.) Hylander ナギナタコウジュ
 692. *Glechoma hederacea* Linnaeus subsp. *grandis* (A. Gray) Hara カキドウシ
 693. *Isodon inflexus* (Thunb.) Kudo ヤマハツカ
 694. *Lamium album* Linnaeus var. *barbatum* Franchet et Savatier オドリコソウ
 695. *Lycopus Makinoanus* (Maxim.) Makino ヒメシロネ
 696. *L. ramosissimus* Makino var. *japonicus* (Matsum. et Kudo) Kitamura コシロネ
 697. *Mesia dianthera* (Hamil.) Maximowicz ヒメジソ
 698. *M. punctulata* (J. F. Gmel.) Nakai イヌコウジュ
 699. *Prunella vulgaris* Linnaeus subsp. *asellata* Hara ウツボグサ
 700. *Salvia iutescens* Koidzumi var. *oreonata* (Makino) Murata ケナツノタムラソウ
 701. *S. nipponica* Miquel キバナアキギリ
 702. *Teucrium japonicum* Houttuyn ニガクサ
 SCROPHULARIACEAE ゴマノハグサ科
 703. *Mazus japonicus* (Thunb.) O. Kuntze トキワハゼ
 704. *M. Miquelianus* Makino ムラサキサギゴケ
 705. *Melampyrum laxum* Miquel var. *nikkoense* Beauverd ミヤママコナ
 706. *M. roseum* Maximowicz var. *japonicum* Franchet et Savatier ママコナ

* 707. <i>Veronica arvensis</i> Linnaeus	タチイヌノフグリ	
* 708. <i>V. persica</i> Poiret	オオイヌノフグリ	
	OROBANCHACEAE ハマウツボ科	御 裏
709. <i>Aeginetia sinensis</i> G. Beck	オオナシバンゴセル	林
	PHRYMACEAE ハエドクソウ科	の
710. <i>Phryma leptostachys</i> Linnaeus var. <i>oblongifolia</i> (Koidz.) Honda	ハエドクソウ	植
	PLANTAGINACEAE オオバコ科	物
711. <i>Plantago asiatica</i> Linnaeus	オオバコ	
* 712. <i>P. lanceolata</i> Linnaeus	ヘラオオバコ	
	RUBIACEAE アカネ科	
713. <i>Gallium gracile</i> (A. Gray) Makino	ヒメヨツバムグラ	
714. <i>G. Kikumugura</i> Ohwi	キクムグラ	
715. <i>G. pseudo-capitellum</i> Makino	オオバノヤエムグラ	
716. <i>G. spuriu</i> Linnaeus var. <i>echinispermon</i> (Wallr.) Hayek	ヤエムグラ	
717. <i>Hedysotis Lindleyana</i> Hooker var. <i>hirsa</i> (Linn. fil.) Hara	ハシカグラ	
718. <i>Mitchella repens</i> Linnaeus subsp. <i>undulata</i> (Sieb. et Zucc.) Hara	ツルアリドウシ	
719. <i>Paeonia scandens</i> (Lour.) Merrill var. <i>Mairei</i> (Lév.) Hara	ヘタソカズラ	
720. <i>Rubia cordifolia</i> Linnaeus var. <i>Mungoia</i> Miquel	アカネ	
	CAPRIFOLIACEAE スイカズラ科	
721. <i>Abelia spathulata</i> Siebold et Zuccarini var. <i>stenophylla</i> Honda	ウゴクバネウツギ	
722. <i>Lonicera Japonica</i> Thunberg	スイカズラ	
723. <i>L. tenuipes</i> Nakai var. <i>glandulosa</i> (Maxim.) Nakai	ケミヤマウグイスカグラ	
724. <i>Sambucus racemosa</i> Linnaeus subsp. <i>Sieboldiana</i> (B'ume) Hara	エワト	
725. <i>Viburnum dilatatum</i> Thunberg	ガマズミ	
726. <i>V. phlebotrichum</i> Siebold et Zuccarini	オトヨウヅメ	
727. <i>V. plicatum</i> Thunberg var. <i>tormentosum</i> (Thunb.) Miquel	ヤブデマリ	
728. <i>V. Wrightii</i> Miquel	ミヤマガマズミ	
729. <i>Weigela hortensis</i> (Sieb. et Zucc.) K. Koch	タニウツギ	

VALERIANACEAE オミナエシ科

730. *Patrinia villosa* (Thunb.) Jussieu オトコエンドウ

CUCURBITACEAE ウリ科

731. *Gynostemma pentaphyllum* (Thunb.) Makino アマチャヅル

732. *Melothria japonica* (Thunb.) Maximowicz スズメウリ

CAMPANULACEAE キキョウ科

733. *Adenophora triphylla* (Thunb.) A. P. de Candolle var. *japonica* (Regel) Hara
ツリガネニンジン

734. *Campanula punctata* Lamarck ホタルブクロ

735. subsp. *hondoensis* (Kitam.) Kitamura ヤマホタルブクロ

736. *Codonopsis lanceolata* (Sieb. et Zucc.) Trautvetter フルニンジン

737. *Percarpe carnosae* (Wall.) Hooker fil. et Thomson var. *circaseoides*
(Fr. Schm.) Makino タニギキョウ

COMPOSITAE キク科

738. *Adenoscelis himalaicum* Edgeworth ノブキ

739. *Ainsliaea acerifolia* Schultz-Bipontinus var. *subapoda* Nakai オクモミジハグマ

740. *A. apiculata* Schultz-Bipontinus キッコウハグマ

- *741. *Ambrosia artemisiifolia* Linnaeus var. *elatior* (Linn.) Descourtiles ブタクサ

742. *Artemisia Keiskeana* Miquel イヌヨモギ

743. *A. princeps* Pampanini ≡ ± ♀

744. *Aster ageratoides* Turczaninow var. *ovatus* (Franch. et Savat.) Nakai ノヨンギク

745. *A. Giehni* Fr. Schmidt var. *hondoensis* Kitamura ゴマナ

746. *A. lelophylloides* Franchet et Savatier シロヨメナ

747. *A. scaber* Thunberg シラヤマギク

748. *Atractylodes japonica* Koidzumi オケラ

- *749. *Bidens frondosa* Linnaeus アメリカセンダンダサ

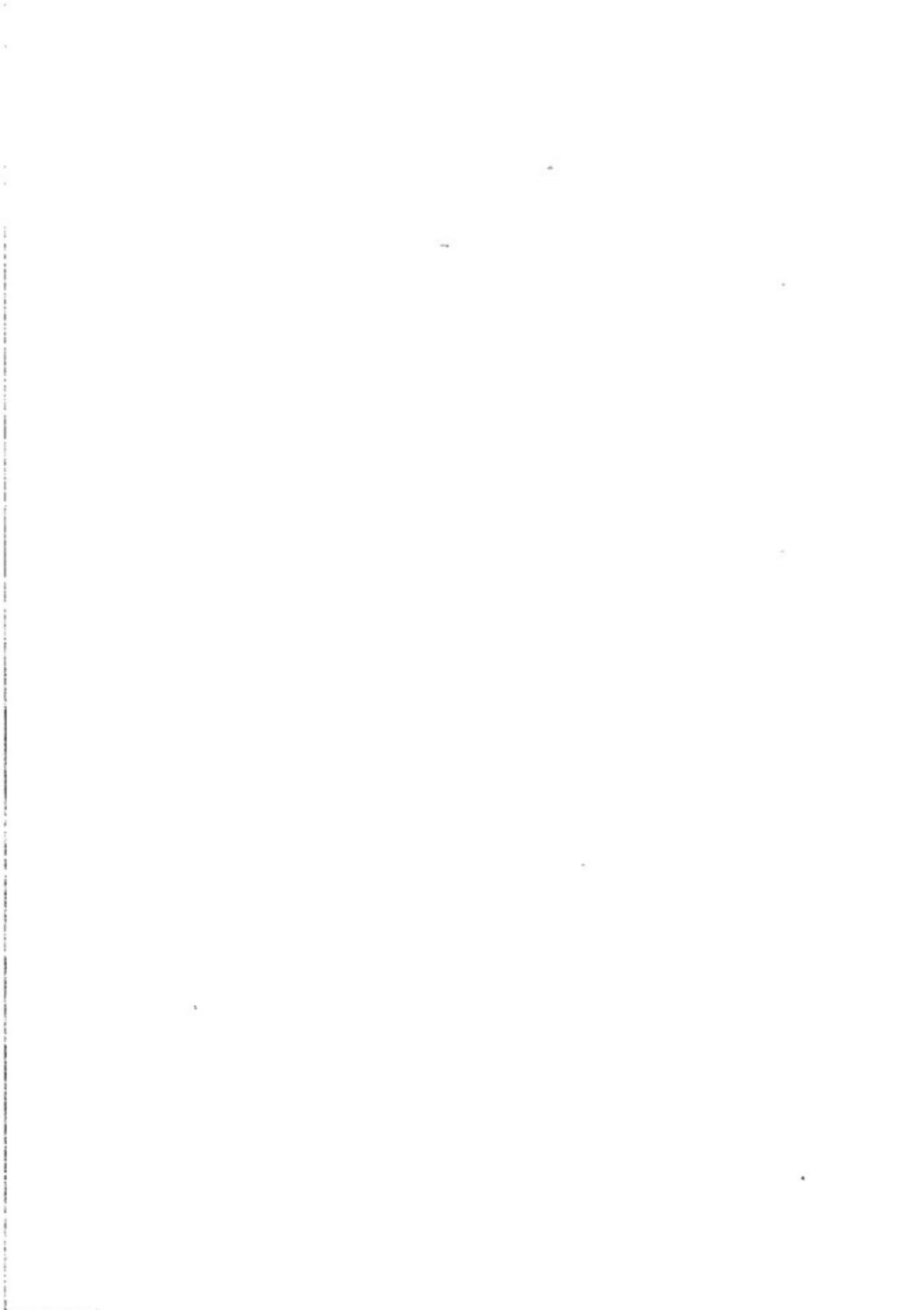
750. *Cacalia delphinifolia* Siebold et Zuccarini モミジガサ

751. *C. farfaraefolia* Siebold et Zuccarini var. *bulbilera* (Maxim.) Kitamura タマブキ

752. *C. nikomontana* Matsumura オオカニコウモリ

753. *Carpesium abrotanoides* Linnaeus ヤブタバコ
 754. *C. diversostatum* Siebold et Zuccarini ガンクビソウ
 755. *C. glossophyllum* Maximowicz サジガシクビソウ 開
 756. *C. Koidzumii* Makino ホソバガンクビソウ 真
 757. *Centipeda minima* (Linn.) A. Braun et Ascherson トキソウ 林
 758. *Cirsium nipponicum* (Maxim.) Makino ナンブアザミ 物
 759. *C. Sieboldii* Miquel マアザミ
 * 760. *Erechtites hieracifolia* (Linn.) Rafinesque ダンドボロギク 物
 * 761. *Erigeron annuus* (Linn.) Persoon ヒメジョオン 物
 * 762. *E. bonariensis* Linnaeus アレチノギク
 * 763. *E. canadensis* Linnaeus ヒメカシロモギ
 764. *E. Thunbergii* A. Gray アズマギク
 765. *Eupatorium chinense* Linnaeus var. *simplicifolium* (Makino) Kitamura ヒヨドリバナ
 766. subsp. *secalinense* (Fr. Schm.) Kitamura ヒツバヒヨドリ
 767. *Gnaphalium affine* D. Don ハハコグサ
 768. *G. hypoleucum* A. P. de Candolle アキノハハコグサ
 769. *G. japonicum* Thunberg チチコグサ
 770. *Inula salicina* Linnaeus var. *assatica* Kitamura カセソウ
 771. *Ixeris dentata* (Thunb.) Nakai ニガナ
 772. var. *abiflora* (Makino) Nakai シロバナニガナ
 773. f. *amplifolia* (Kitam.) Hiyama オオベニガナ
 774. *I. japonica* (Burman) Nakai オオジシバリ
 775. *I. stolonifera* A. Gray イワニガナ
 776. *Kallstroemia pinnatifida* (Maxim.) Kitamura ユウガギク
 777. *K. pseudo-yunnana* Kitamura カントウヨメナ
 778. *Lactuca indica* Linnaeus var. *laciniata* (O. Kuntze) Hara アキノノゲシ
 779. f. *indica* (Makino) Hara ホソバアキノノゲシ
 780. *L. Raddeana* Maximowicz var. *elata* (Hemsl.) Kitamura ヤマニガナ
 781. *Lapsana humilis* (Thunb.) Makino ヤブタビラコ

782. *Leibnitzia Anandria* (Linn.) Nakai センボンヤリ
783. *Ligularia dentata* (A. Gray) Hara マルバダケブキ
784. *L. stenocephala* (Maxim.) Matsumura et Koidzumi メタカラコウ
785. *Macroclinidium trilobum* Makino オヤリハグマ
786. *Pertya glabrescens* Schultz-Bipontinus ナガバノコウヤボウキ
787. *Petasites japonicus* (Sieb. et Zucc.) Maximowicz subsp. *giganteus*
(Fr. Schm.) Kitamura アキタブキ
788. *Pteris hieracioides* Linnaeus subsp. *japonica* (Thunb.) Krylov コウゾリナ
789. *Prenanthes acerifolia* (Maxim.) Matsumura フクオウソウ
790. *Saussurea nipponica* Miquel subsp. *sendtosa* (Franch.) Kitamura
センドダイトウヒン
* 791. *Senecio vulgaris* Linnaeus ノボロギク
792. *Siegesbeckia glabrescens* (Makino) Makino コメナモミ
793. *S. pubescens* (Makino) Makino メナモミ
* 794. *Solidago gigantea* Aiton var. *leophylla* Fernald オオアワダチソウ
795. *S. Virga-aurea* Linnaeus subsp. *asiatica* (Nakai) Kitamura アキノキリソウ
796. *Sonchus asper* (Linn.) Hill オニノゲシ
797. *S. oleraceus* Linnaeus ノゲシ
798. *Synoilessis palmata* (Thunb.) Maximowicz ヤブレガサ
799. *Taraxacum hondoense* Nakai エゾタシボボ
* 800. *T. officinale* Weber セイヨウタンボボ
801. *Xanthium Strumarium* Linnaeus オナモミ
802. *Youngia dentiulata* (Houtt.) Kitamura ヤクシソウ
803. *Y. japonica* (Linn.) A. P. de Candolle オニタビラコ



仙
台
城
年
表

三

原

良

吉

仙台城年表

永禄一〇	丁卯	一五六七	
天正七	己卯	八	三 伊達政宗米沢館山城に生る
天正一二	甲申	五	一五七九
天正一五	丁亥	八	〔織田信長の安土城七層天守成る〕
天正一七	己丑	一五八四	〔豊臣秀吉の大坂城成る〕
天正一八	庚寅	一五八七	〔秀吉の聚楽第成る〕
天正一九	辛卯	一五八九	〔政宗芦名氏を亡ぼして会津黒川城に入る〕
天正一九	一五九一		〔政宗再び米沢城に移る〕
天正一九	二三		政宗岩手沢城に転封、岩出山に改む

文禄元 王辰 一五九二

正 五 朝鮮役起り政宗將兵を率い岩出山を発す

〔秀吉の朝鮮役基地肥前名護屋城成る〕

三 四 文禄二癸巳 一五九三

三 四 政宗肥前名護屋に至る

三 四 文禄三甲午 一五九四

一三 政宗釜山に渡る

三 四 文禄四甲午 一五九五

一八 名護屋に帰還

三 四 文禄五丙申 一五九六

八秀吉の伏見城完成

三 四 文禄六庚子 一五九八

国分盛重常陸に走り国分氏亡ぶ

三 四 文禄七庚子 一五九八

〔秀吉卒す。年六三〕

三 四 文禄八庚子 一六〇〇

一二 関ヶ原役追り政宗大坂より帰り北目城に入る

二四 白石攻城作戦、城翌日陥る

一四 白石城修築、石川昭光を城代とす

〔関ヶ原役〕

一〇 九 文禄九庚子 一六〇一

政宗の福島方面上杉氏作戦終る

一一

家康より仙台城普請許可さる

一二

一二 二四 仙台城普請開始、千代を仙台と改む。祝儀の能五番あり。二十六日北目城に帰る

慶長 六 辛丑

正一

一一 仙台城御創立普請始、總奉行後藤信康、川島景泰、石工横梁辻本七郎兵衛、鹿野清右衛門、

黒田八兵衛

三四

政宗作事中の仙台城に移る

二二

仙台橋（大橋）成る。擬宝珠銘虎哉、大工与左衛門、長さ五十間、巾五間

〔池田輝政の姫路城修築着工、同十四年成る〕

慶長 七 王貢

一六〇二

三四 近郷の百姓を仙台城築城に動員す

一六 片平丁茂庭延元邸前の濱普請に小人組反乱を起し愛宕下覧範寺に據り百三十一名殺さる

一五 去る二月一日よりこの日まで岩出山より家臣及び町人を移す

五八 仙台城成る

この年、青葉山及び川内より虚空蔵堂、大満寺を経ヶ峰に、竜川院、定禪寺、寂光寺を城

下に移す

慶長 八 癸卯

一六〇三

政宗岩出山より仙台城に徙り、わたましの式を行う

〔二条城成る〕

〔佐竹義宣の秋田久保田城成る〕

- 慶長 九 甲辰 一六〇四
 一二 一五 松島五大堂成る。工匠鶴衛門家次
- 慶長一一 丙午 一六〇六
 七 玄蘭盆中城下土屋敷、町屋に残らず灯籠をかゝげしめ江戸より下向の政宗長女五郎八姫に
 城樓より見せしむ
- 九 江戸城修築成る
- 慶長一二 丁未 一六〇七
 六 二〇 一宮塙笠神社成る。工匠鶴衛門家次
- 八 一二 大崎八幡神社成る。工匠日向守家次、刑部左衛門国次
- 一〇 二四 木下薬師堂成る。工匠駿河家次
- 「この年加藤清正の熊本城成る ○黒田長政の福岡城成る
- 慶長一三 戊申 一六〇八
 九 鈴木重信、奥山兼清に命じ花壇に於て家臣の知行割りを為さしむ
 この年柳生宗矩の斡旋により玄野又五郎を大和國権森より召下し城内太鼓部屋下に御城内
 定詰御酒御用を命ず
- 「毛利輝元の萩城成る
- 慶長一五 庚戌 一六一〇
 松島瑞巖寺成る。工匠刑部左衛門国次
 仙台城本丸大広間成る。工匠梅村日向

〔名古屋城着工〕

慶長一六 辛亥 一六一

一〇 二八 地震、城壁櫓橋破損す。津浪起り一、七八三人溺死

〔この年津軽信牧の弘前城成る〕

慶長一八 癸丑 一六一三

九 一五 支倉常長月ノ浦出港、ローマに向う

一〇 一二 政宗追廻馬場に馬を視る

〔この年上杉景勝の米沢城修築成る〕

慶長一九 甲寅 一六一四

四 一 政宗越後に赴き高田城修築、七月成り二十一日帰城

一〇 七 大坂冬役起り出動命令下る

一六一五

元和 元 乙卯 一六一五
六 大坂夏役、政宗の軍道明寺口及び若江に戰う。八日大坂城陥り豊臣氏亡ぶ

仙台に帰還

閏 六 一三 〔幕府一国一城の制を布く〕

七 一 〔幕府武家諸法度十三条を頒ち、諸国居城は許可なくして修補すべからず、新規の築城を禁ずる旨令す。〕

元和 二 丙辰 一六一六
〔家康駿府に卒す。年七十五〕

元和	三	丁巳	二八	地震、仙台城櫓、城壁崩る
元和	四	庚申	一一	大雨、大橋、花壇橋流失
一〇	九		二一	松平忠輝夫人五郎八姫離絶して下仙、城山西のふもと西曲輪に住し西館と称す
			一一〇	政宗の江戸城々壁修築成る。要したる役夫延四十二万三千百七十九人、黄金二千六百七十枚
寛永	三	丙寅	一六二六	
寛永	八	一九	一九	將軍家光に先供して上洛、從三位権中納言に叙任
寛永	五	戊辰	一六二八	
寛永	二	二二	二二	若林古城に屋敷普請を願出て許さる
寛永	一	一六	一六	若林城成り政宗わたましの祝儀を行う
寛永	六	己巳	一六二九	
寛永	三	三		政宗江戸城石垣、城濠修築に着手、七月成る
寛永	九			政宗西曲輪に於て一門に茶を賜う
寛永	八	辛未	一六三一	江戸より歌舞伎役者左源太、淨瑠璃太夫掃部下り政宗西曲輪に観る
四	三			政宗西曲輪に張能す

寛永一三 内子 一六三六

正 八 江戸赤坂、麹町、市ヶ谷の堀橋修築を課せらる。政宗の分担二万四千四百四十六坪三合

三 二八 政宗西曲輪に觀桺と能を催し四月二十日若林より參勤發駕

「日光東照宮成る」

四 五 二四 政宗江戸桜田屋敷に卒す。年七十

九 二〇 裁許所を置く

寛永一四

丁丑

一六三七 二代忠宗

六 二三 封内洪水、大橋、花燈橋流失

一〇 二四 政宗靈廟瑞鳳殿成る。工匠米野内藏助近吉、山内四郎兵衛貞次、香華院瑞鳳寺成る

寛永一五 戊寅

一六三八 忠宗

七 一六 幕府忠宗に仙台城二ノ丸普請を許可す

九 四 二ノ丸鉢立普請始、總奉行奥山大学常良

一〇 一三 西曲輪の三河守宗泰の屋敷を上地し二之丸屋形の地形取付を為す

一四 二之丸地祭

一一 一四 若林城より焼火之間、虎之間、松之間等十三室を二之丸に移し上棟

寛永一六 己卯

一六三九 忠宗

二 二七 二之丸御座之間地祭

三 一五 若林城を破却す

三 二八 二之丸御座之間、寝所、奥方居間、寝所上棟

正保	三	丙戌	五	二六	以降十二月二十日までに二之丸大手門、大書院、大広間、徒之間、舞台上棟
正保	四	丁亥	二	二八	〔幕府諸大名に命じ国絵図並びに諸城の木型図を作らしむ
慶安	元	戊子	三	一四	忠宗仙台城背の山に賛子二千人を出動せしめ鹿猪を催し九十頭を獲る
慶安	二	己丑	四	二六	大地震、仙台城本丸城壁崩れ樓櫓悉く倒壊す
慶安	四	辛卯	九	一九	去年地震に破損せる本丸の修復を幕府に願出で許可さる
承応	元	壬辰	正	一六四八	忠宗
承応	二	癸巳	六	一六四九	仙台城修復成る
承応	一六五二	忠宗	二八	本丸石垣普請工	雲居希磨名取郡綱木の番山に隠退、忠宗祥岩寺を開基し雲居を開山とす。後大梅寺と改む
承応	一六五三	忠宗	一七	翌夏首焰硝藏爆発し三棟焼失、死者八名を出す	
一〇	一六	忠宗茂ヶ崎に獵し鹿一四五頭を捕る			

承応 三 甲午 一六五四 忠宗

三

万治 元 戊戌 一七 仙台東照宮成り遷座式を行う。この年霧居根白石照岡山に忠宗創建の永安寺開山となる

万治 元 戊戌 一六五八

忠宗

万治 三 庚子 一二 忠宗仙台城に卒す。年六〇

七

一六六〇 三代綱宗

寛文 四 甲辰 一八 綱宗逼塞を命ぜられ呂川邸に移る。八・二五龟千代後の綱村総封、寛文事件起る

五

一六六四 四代綱村

寛文 六 丙午 一六六六 綱村

一六六八 綱村

寛文 八 戊申 一六六九 綱村

一六六九 大地震、城壁崩る

寛文 一 辛亥 一六七一 綱村

一六七一 本丸石垣修復許さる

寛文 三 二七 寛文事件終る

一六七三 綱村

延宝 元 癸丑 一六七五 花燐焰硝蔵二棟爆発、六人焼死す

一六七五 一二 仙台城石垣普請許可さる

延宝 三 乙卯 一六七五 綱村

九	一九	綱村十七才初入部、儀衛三、四八〇余人
九	二	二之丸に記録所を設く
二	二	二之丸に歴世靈牌を祀る万善堂成る
延宝	四	綱村
延宝	四	丙辰
延宝	六	戊午
延宝	六	戊午
天和	三	癸亥
天和	三	癸亥
閏	五	一
閏	五	一
元	辛酉	仙台城本丸修復成る
元	辛酉	仙台城本丸修復成る
元	壬戌	二之丸新馬場成る
元	壬戌	二之丸の愛宕神祠成る
貞享	四	丁卯
貞享	四	丁卯
元禄	四	二
元禄	四	二
元	戊辰	若林焰硝咸爆発、八人焼死す
元	戊辰	若林焰硝咸爆発、八人焼死す
正	一〇	二八
正	一〇	二八
八	二九	若林焰硝咸爆発千六百貫爆発し焼死八人
八	二九	若林焰硝咸爆発千六百貫爆発し焼死八人
一三	二	城背に普請の郷六屋敷地祭
一三	二	城背に普請の郷六屋敷地祭
二	二	二之丸寝所地祭、綱村賀葺と為すを命ず
二	二	二之丸寝所地祭、綱村賀葺と為すを命ず

元禄 九 一三 二之丸寝所上棟

元禄 三 庚午 一六九〇 綱村

元禄 一〇 二五 二之丸万善堂修造地祭

元禄 四 辛未 一六九一 綱村

元禄 五 王申 一六九二 綱村

元禄 五 甲戌 一六九三 綱村

元禄 七 甲戌 一六九四 綱村

元禄 八 乙亥 一六九五 綱村

元禄 正 二一 朝迦堂上棟、工匠松原助兵衛

元禄 三 八 朝迦堂、二天門、櫛貫門、石碑、馬場、的場成る

元禄 九 二九 仙台城修築を許さる

元禄 一〇 二五 榴ヶ岡朝迦堂策立普請始

元禄 一一 二九 仙台城修築を許さる

元禄 一二 二九 朝迦堂上棟、工匠松原助兵衛

元禄 一六九七 綱村

元禄 一〇 丁丑 一六九八 綱村

元禄 二 二七 小田原高松万寿寺開堂

元禄 三 八 大年寺成り鉄牛道機入山

元禄 一 一 戊寅 一六九八 綱村

仙 台 城 年 表

元禄	一三	庚辰	六	二	二之丸輪藏成る			
宝永	四	丁亥	正	一七〇〇	網村			
正徳	元	辛卯	一一	二之丸奥方成る				
享保	三	癸巳	一二	二之丸より熊野、稻荷の神祠を龜岡千手院に移す				
閏	五	一七〇七	五代吉村					
享保	元	丙申	一三	仙台城修補築成り幕府に告ぐ				
閏	五	一七一三	吉村					
享保	二	丁酉	一七一六	夜大雨、本丸大鼓部屋破壊さる				
享保	三	戊戌	一八	本丸石垣復旧成るを幕府に達す				
一九	本丸、二之丸、追廻川前等の石垣土手普請成る	一六	一八	仙台城修補成り幕府に告ぐ				
	地震、城内一部破損	一七一七	吉村					
	大雨水、城中諸所被害あり	一〇	三					
	吉村	一七一八						

- 享保 四 己亥 一七一九 吉村
- 享保 五 庚子 八 二八 大雨城内土居崩る
- 享保 六 辛丑 四 六 仙台城修保成り幕府に報ず
- 享保 六 辛丑 一七二〇 吉村
- 閏 七 二 仙台城修保成り幕府に報ず
- 享保 八 壬卯 五 一六 大雨洪水、濁橋、大橋、評定橋、仲之瀬橋流失
- 享保 一〇 乙巳 一七二三 吉村
- 一〇 二 一 仙台城濁橋を幕府に願出づ
- 享保 一六 辛亥 一七三一 吉村
- 五 二八 本丸修造成るを幕府に告ぐ
- 元文 元 丙辰 一七三六 吉村
- 三 二〇 西刻より翌曉まで地震数十回、城中被害多く濁橋落つ
- 六 一八 城中地震破損復旧成る
- 元文 四 己未 一七三九 吉村
- 八 一九 仙台城修補成る
- 寛延 三 庚午 一七五〇 六代宗村
- 二 一五 鄭六屋敷別荘の三層書院成る

仙 台 城 年 表

宝曆	元 辛未	一七五一	宗村
閏 六	二七	二八まで大雨洪水、大手門の堀、石垣崩る。渡橋流失	
宝曆	三 癸酉	一七五三	宗村
安永三年	甲午	一四	小泉屋敷に重層書院成る
	一〇	一〇	同一九の両日重村本丸御裏林に鹿猪を獵す
天明	三 癸卯	一七八三	重村
	一七八五	「大凶作、封内飢疫の死者二十五万	
寛政	五 癸丑	一七九三	八代斎村
	一八〇四	重村の夫人觀心院近衛氏年子内帑一万両を以て城中に赤子養育方を置く	
文化	元 甲子	一八〇四	九代周宗
文化	二 乙丑	一八〇五	周宗
	一〇	二之丸再建地祭	
文化	三 丙寅	一八〇六	周宗
	一八〇九	二之丸中奥造営成る	
文化	六 己巳	一	二之丸造営成る
	四		
文化	七 庚午	一八一〇	周宗

			一一〇	二之丸万善堂修補成る
			一八二〇	一代斎義
			八	二之丸奥対面所に星場を設く
			壬午	文政五
			一八二二	斎義
			六	川内山屋敷旗元足輕山下周吉城背辰ノ口沢巡視中埋木を発見す
			乙未	天保六
			一八三五	一二代斎邦
			六	二五 地震、本丸城壁崩る
			一八三六	天保七丙申
				大飢渴、封内の飢疫死者三十万
			一八四六	弘化三丙午
			一八四九	一三代慶邦
			九	閏九
			一八四九	追廻北既より出火、片倉、水沢伊達、佐沼亘理、布施諸邸類焼す
			正	嘉永二己酉
			二三	二六両日慶邦本丸御裏林に猪鹿を獵す
			一八五四	安政元甲寅
			五	一八五四
			一一	二之丸四如闕門に南山古梁の扁額を懸く
			一一	一一一二 慶邦御裏林に猪鹿を獵す
			一八五五	安政二乙卯
				慶邦
				一 一 一 屋、二之丸因縁殿火災、歴世四十三位、七靈牌焼失、開祖念西公と十六世輝宗画像災を免 る。慶邦消火を指揮す

文久	三	二之丸因縁殿並に城内愛宕神祠再建上棟
安政	五	慶邦
六	戊午	一八五八
正	己未	二之丸中奥馬場に備荒倉成る
文久	元	一八五九
慶応	辛酉	慶邦
三	丁卯	一一 地震、仙台城被害多く幕府より金三万両を借る
正	一〇	一二 慶邦五靈牌を因縁殿に安置し伊達成実、片倉景綱を政宗に、伊達宗重、柴田朝意を綱村に、中村義景を周宗に伴祭す
慶応	戊辰	一八六一
四	一四	一八六七 慶邦
正	一八六八	一八六八 「徳川慶喜政権奉還
慶応	三	一七 「鳥羽伏見の戦、戊辰役起る
四	一七	一八六九 仙台藩に会津征討の令下る
正	二三	一九 奥羽鎮撫總督九條道孝入仙
五	二一	一九 仙台城二之丸に軍事局を置き玉虫左太夫、若生文十郎を義事応接頭取とす
六	一〇	一九 輪王寺宮能久親王仙台城に入り令旨を賜う
七	一一	一九 仙台藩降伏、戊辰役終る
八	一一	一九 「江戸開城
九	一一	一九 仙台城二之丸に軍事局を置き玉虫左太夫、若生文十郎を義事応接頭取とす
九	一一	一九 仙台藩降伏、戊辰役終る
九	一一	一九 慶邦川内亀岡第に移る

二六 奥羽鎮撫總督四條隆説の先鋒一、二〇〇名仙台城に入る

一〇 六 四條總督仙台入城

一三 七 仙台城を公収、二十八万石として家名を立てしめ伊達亀三郎に仙台城監守を命ず。一一亀

三郎相続、慶邦隠居し楽山と改む

明治 二 己巳 一八六九

六 一七 版籍奉還を許され亀三郎仙台藩知事を命ぜらる。九・一七宗基と改め從五位に叙せらる

一〇 一 藩務と家務を区分し慶邦家族を中奥に移らしむ

一〇 一一 二之丸に勤政庁を置く

明治 三 庚午 一八七〇

勤政庁始政式を行う

正 三 辛未 一八七一
二之丸に知学局を開設す

明治 四 癸酉 一八七一

七 一四 廃藩置県、仙台県を置き塩谷良輔縣參事となる

一一 一二 東北鎮台を国分町より二之丸跡に移す。この日より虎ノ門に午砲を始む

明治 五 癸酉 一八七三

東北鎮台を仙台鎮台と改む

明治 六 乙亥 一八七五

旧本丸大広間その他を悉く破却し民間に払い下ぐ。城内の礎石、城壁上層の一重等を櫓ヶ

岡歩兵四聯隊兵舎に供す

明治 九	丙子	一八七六
六	二六	東北御旅行の明治天皇乗馬にて旧本丸跡に登臨す
明治一四	辛巳	一八八一
八	一〇	旧二之丸仙台鎮台參謀本部全焼す
明治一五	壬午	一八八二
九	七	午前一時旧二之丸米藏跡仙台鎮台陸軍用地材木小屋焼失す
明治一七	甲申	一八八四
四	二	仙台鎮台本營火災、二之丸造構の九割一七、八棟焼失す
明治一八	乙酉	一八八五
六	一	追廻より馬上蠣崎神社を良寛院丁に移す
明治一九	丙戌	一八八六
正	二八	仙台鎮台を第二師團と改む
明治二一	戊子	一八八八
明治二二	己丑	一八八九
五	一	仙台鎮台本營を第二師團司令部とす
明治二三	庚寅	
一八九二		
明治二十五	壬辰	
一八九二		
師團司令部經理部大手門を破却せむとす。師團長佐久間左馬太これを却け、大蔵省に修理 予算を請求し金具の鍍金復原等により外觀を一新す		

八二四 大橋の鉄橋竣工

明治三二 己亥 一八九九

明治三三 二四の両日、本丸跡と追廻に於て仙台開府三百年祭式典を行う

明治三四 辛丑 一九〇一

一一一〇 陸軍特別大演習統監の明治天皇、旧二之丸前庭に於て群臣に宴を賜う。之に先立ち八日政宗に正三位の追贈あり

明治三五 壬寅 一九〇二

一一一二 旧本丸跡に昭忠碑成る。ゴチック式、地上六六尺、上にプロンズの金鶴を載す

明治三七 甲辰 一九〇四

一一二八 本丸跡に招魂祭殿成る

大正五 丙辰 一九一六

師団長河内礼蔵、司令部構内旧二之丸史跡の整備保護に努め要所に説明標示を立て、桜花、紅葉の二季市民に解放す

大正九 庚申 一九二〇

一二五 師団司令部、寅ノ門を破却し遺材を新坂上師団長官邸正門建築の用材とす

大正一四 乙丑 一九二五

一一〇 第二師団より大手門等を含む二、九五七坪を借地し仙台市青葉山自然公園となし、大手門の出入自由となる

昭和四 己巳 一九二九

- 二 一 仙台市役所新庁舎落成、電気サイレンにより正午を報じ寅の門の午砲を廃す
- 昭和 六 辛未 一九三一
- 一一 一四 東北大学工学部教授小倉強の調査により仙台城大手門（櫓門、屋根入母屋本瓦葺）脇櫓（一層多間櫓、二層櫓、本丸井）国宝に指定
- この半木造鉄案吊橋八木山橋完成
- 昭和一〇 乙亥 一九三五
- 五 三三 政宗三百年祭記念事業として県連合青年団発起、本丸に建設の銅造伊達政宗騎馬像除幕式行なわる。作者小室達、地上三十尺
- 昭和一三 戊寅 一九三八
- 九 三二 大橋の鉄筋コンクリート拱橋成る
- 昭和一四 己卯 一九三九
- 四 一〇 諏訪神社法制定、招魂社を県諏訪神社と改め社殿改革に着手、本丸詰ノ門左右城壁の基部前方に低く石垣を築き車寄せ跡まで石隣を積む。詰ノ門西方城壁の一部を一々石に番号を付して積み直し、詰ノ門前より堀門跡及八木山橋への道路を開く。暗渠を大深沢へ開口せしめたため西ノ門下の水溜疊石破壊さる
- 昭和一五 庚辰 一九四〇
- 八 一 第二師団を仙台師団と改む
- 昭和一九 甲申 一九四四
- 一一 一二 政宗銅像戦時金属回収のため供出、藤原出陣と称し社行式行なわる

昭和二〇 乙酉 一九四五

深更空襲により大手門、脇橋、衛戍衛兵所（二之丸表舞台樂屋遺構）護国神社々殿全焼
「太平洋戦争終る」

九一八 米軍仙台進駐開始、二之丸師團司令部跡陸軍用地を占領、アメリカ軍人軍属の住宅、クラブ等建築、二之丸遺跡徹底的に破壊され三之丸巽門（櫓門）破却、中島池、奥方庭園池泉、藩主居間前庭の瓢箪池、中奥外の濠、筋連橋付近深谷みな埋め立てる

一〇一〇 追廻に住宅営団の職災者住宅着工、翌二一・四に六二一戸成る

昭和二一 丙戌 一九四六

九一九 仙台郷土研究会委員石川謙吾塩釜市金属集積所より政宗銅像上半身を白費にて払下げ青葉

神社に安置す

一一一 一 一 一 追廻を緑地に指定す

昭和二五 庚寅 一九五〇

一一一 謙國神社にて本丸一帯国有地の払下げを受く

昭和二七 壬辰 一九五二

七一 本丸に土井曉翠の荒城の月詩碑除幕式行なわる

昭和二八 癸巳 一九五三

一〇一 九 白色コンクリート造伊達政宗立像、小野田セメント会社より仙台市に寄贈、本丸に除幕式を行う。作者柳原義達、像高四・五メートル

昭和二九 甲午 一九五四

二

護國神社所有地本丸の一部二〇、九三三坪を仙台市管理に移し五色沼、長沼一帯国有地一
二、六四三坪を加え三三、五七六坪を公園地とす

昭和三〇 乙未 一九五五

追廻を公園地に編入す

昭和三一 内申 一九五六

四 二七 丸光社長佐々木光男本丸に旧仙台城全図標示板を立て本丸・三之丸に史跡標示を三十三ヶ

所に立て市に寄贈す

昭和三二 丁酉 一九五七

九 市、五色沼、長沼を浚渫す

一一 一三 二之丸跡米軍より返還さる

昭和三三 戊戌 一九五八

四 二 二之丸の一部青葉山一三五、一九五坪の国有地を東北大学の管理に移し理学部附属植物園
とす

昭和三五 庚子 一九六〇

一一 三 三之丸排水地均し工事成る

昭和三六 辛丑 一九六一

三之丸にライオンズ・クラブ、支倉常長記念碑を建つ

一〇 三之丸に仙台郷土博物館成る。工費三七〇〇万円、一〇・一〇開館す

一〇 三之丸子之門石垣を修理、同土居全塗を整備す

一六 六五

昭和三七 壬寅 一九六一、

八木山橋着工。

二 二之丸勘定所跡に東北大学創立五十周年記念委員会建築の東北大学講堂成る。工費一億八千百十三万円。

昭和三八 癸卯 一九六二、

三 市、本丸一帯に植樹

三 二五 市、本丸詰ノ門より追廻に至る護國神社所有道路敷地四、五四三坪を一千三十一万八百三十八円にて買収す。

昭和三九 甲辰 一九六四、

八 政宗コンクリート像、本丸跡より岩出山城跡に移さる。

一〇 九 市観光協会千七百万円にて政宗旧銅像鋳型により再鋳し旧位置に除幕式を舉ぐ。

昭和四〇 乙巳 一九六五、

三 一八 市の清水門脇櫓跡石垣復原修築成る。

三 三一 大手門北側土居修築成る。

四 一五 新八木山橋成る。デビダーケ工法コンクリート橋、全長一一七尺、巾八・五尺、高さ六〇尺、旧橋より十八尺長く七尺高し。工費一億五千四百五十万円。

この年春、野口増蔵発企の大手門脇櫓成る。木造漆喰塗込、工費二千万円。

〔参考文献〕

伊達家治家記録

仙台城年表

仙 台 城 年 表

伊達政宗卿傳記史料

仙台戊辰史

伊達家文書

續仙台叢書

伊達家史雜考

源貞氏耳袋

眞理家記

仙台郷土研究

登米十五代史

大正版仙台市史

昭和版仙台市史

仙台都市計画

終職後の享徳に開いては市広報課の小野寺斉治氏から多大のご援助をいたしました。

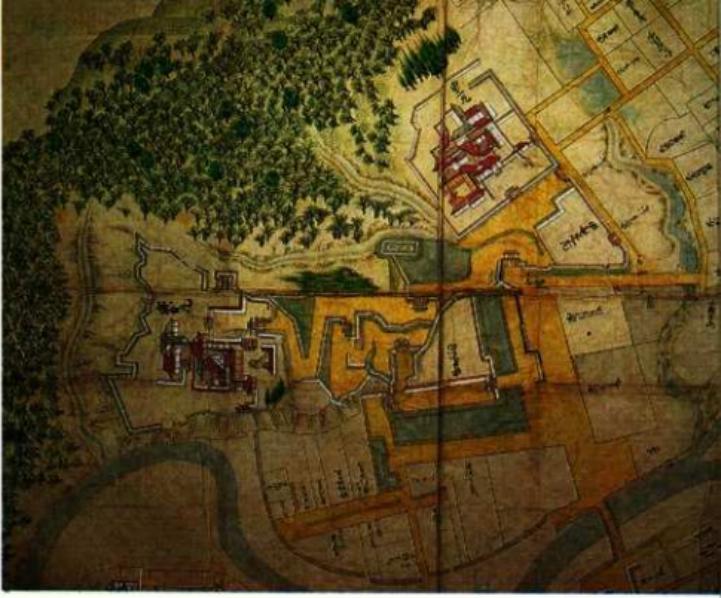
図

版



第1 奥州仙台城絵図（齊藤報恩会蔵）に描かれた仙台城

正保2年（1645）の製作で仙台城の絵図としてもっとも古いものである。本丸詰門左右の脇櫓、長櫓、異櫓などが描かれていて仙台城のもっとも完成した姿を示している。



第2 仙台御城下絵図(宮城県図書館蔵)に描かれた仙台城。寛文4年(1664)の仙台城の姿である。本丸および二の丸の建物が描かれているのは珍らしい。



第3 仙台城下絵図(宮城県図書館蔵)に描かれた仙台城。本丸の壁が前図とは変っている。寛文8年7月21日の地震で崩れたためである。



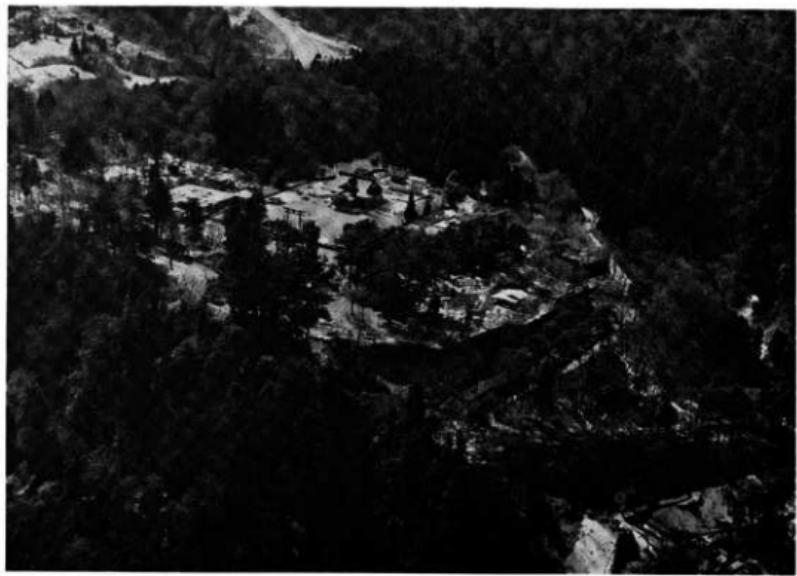
第4 鳳凰図屏風（松島博物館蔵）

本丸大広間上段ノ間の床の間張付で、あとで屏風にしたもの。極彩色で鳳凰の図を力強く描いている。



第5 二の丸松之間障屏画（仙台市博物館蔵）

二の丸正殿の表対面所次之間の北に松之間があった。72畳を敷き、襖は全部金を貼った上に松を描いてあった。



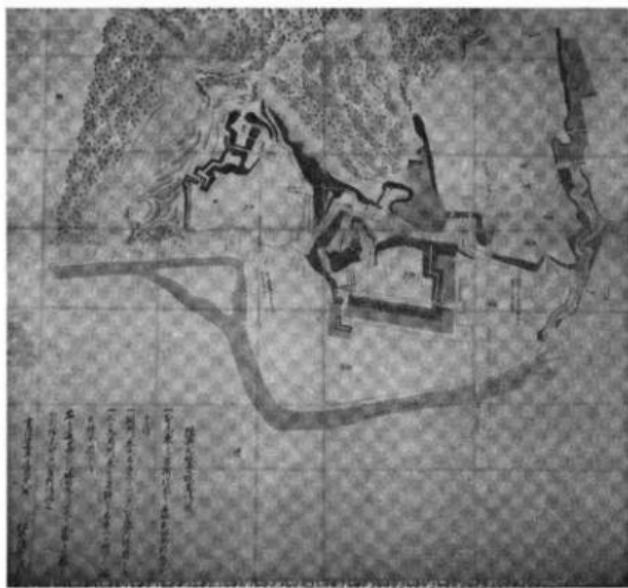
第6 北東からみた仙台城本丸全景（航空写真、河北新報社提供）手前の石垣が本丸城壁、中央の建物は宮城県護国神社。



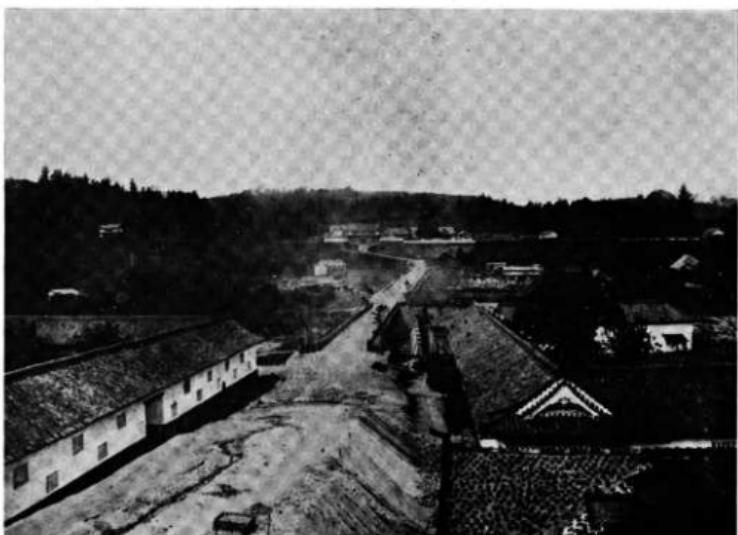
243 第7 南からみた仙台城本丸全景（航空写真、河北新報社提供）手前に白くみえるのが竜ノ口渓谷、中央の白い部分が本丸跡、その上方が三の丸跡で建物は仙台市博物館。



第8 奥州仙台城並城下絵図（宮城県図書館蔵）に描かれた仙台城。
天和2年（1682）の絵図である。本丸西南方に西の丸、腰曲輪などの増設が見られる。



第9 陸奥国仙台城普請窓（宮城県護国神社蔵）に描かれた仙台城。
享保15年（1730）の風雨で石垣や土手が崩れたのを修理するた
め幕府に窓を出したもの。



第10 明治15年9月焼失以前の二の丸正面。大手門の右奥に二の丸の建物が見える。大橋は木橋を存している。前方道路両側の建物は藩の荷藏造構、上部左端は寅の門、なお大手門への通路に注意



第11 現在の二の丸跡を鈴彦ビル屋上より望む。山頂に見える建物は東北大学工学部

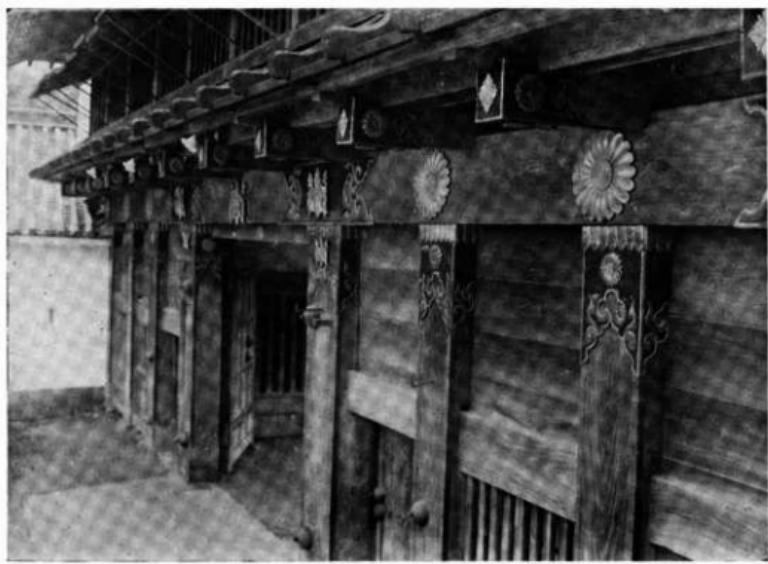


第12 大手門東面（正面）全景



第13 大手門西面（背面）全景

第14 大手門南面全景





第16 大手門扉詳細（東北大学建築学科藏）



第17 大手門隅櫓北面全景



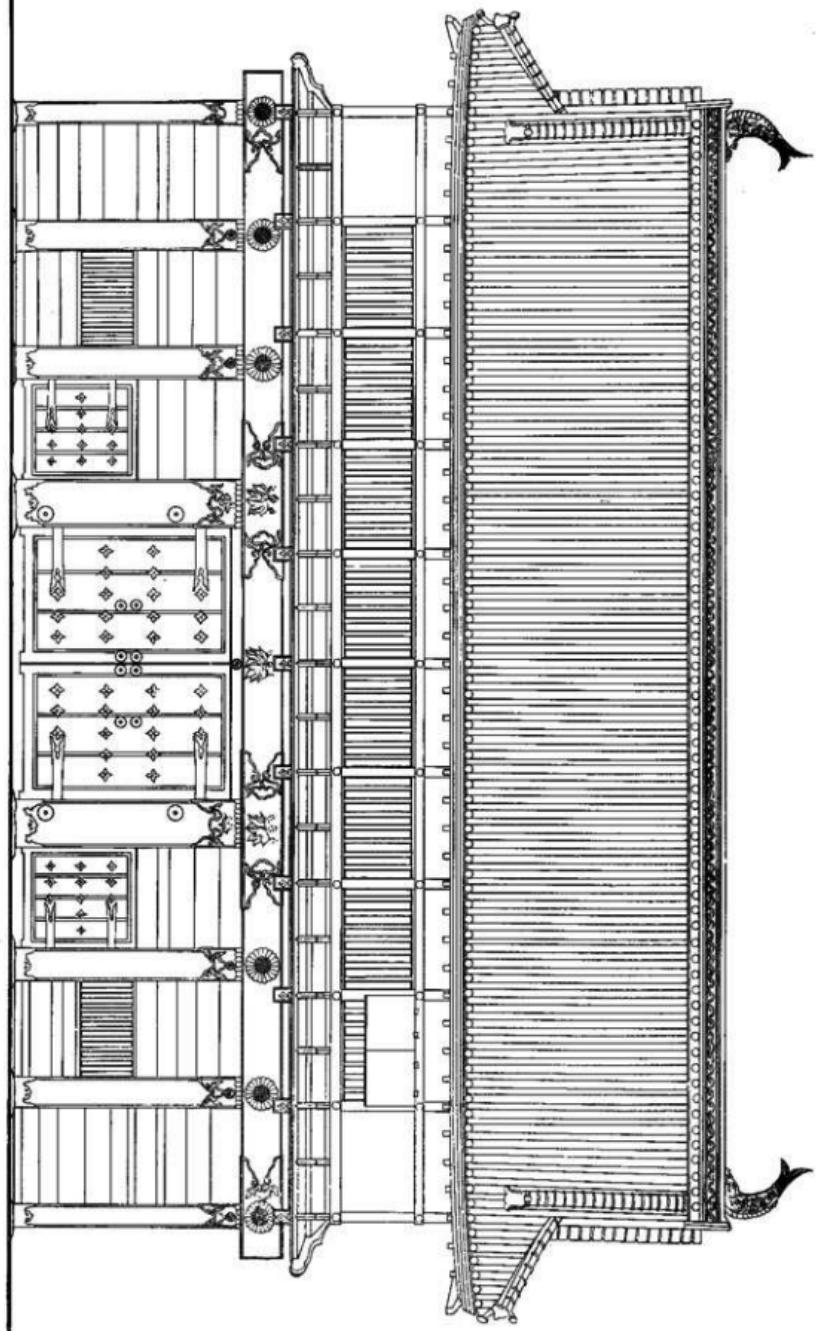
第18 大手門隅櫓南西面全景



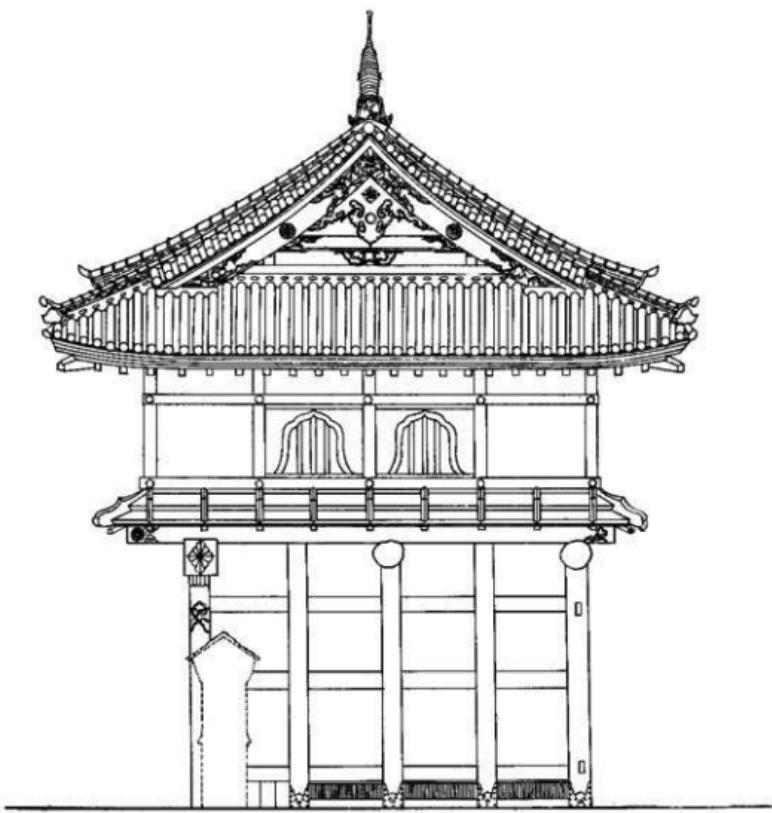
第19の1 大手門全景ならびに両脇石垣（森権五郎氏蔵）



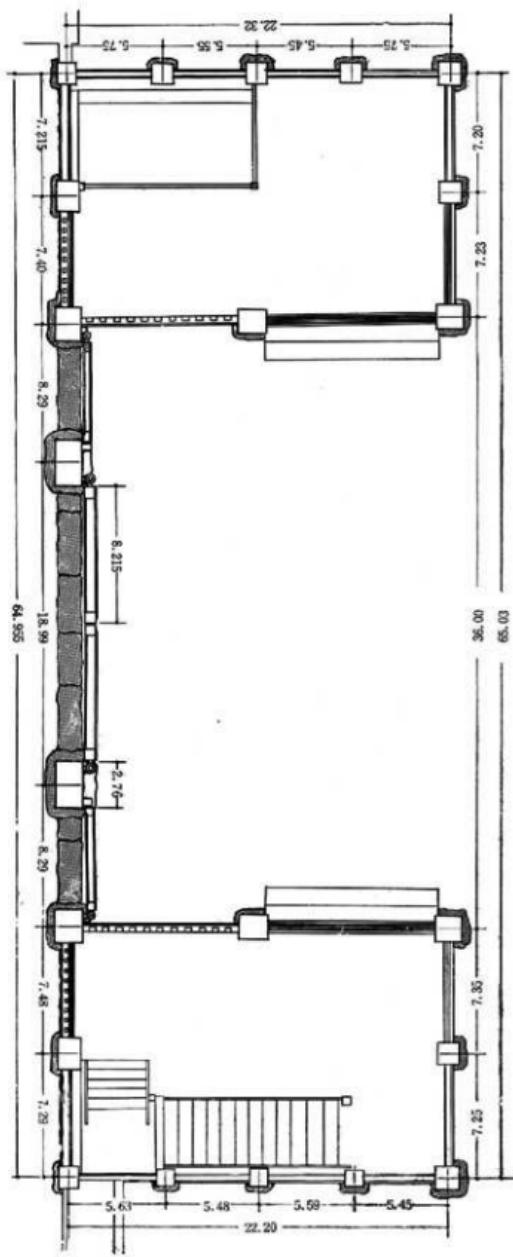
第19の2 北東よりみた隅櫓と大手門（森権五郎氏蔵）



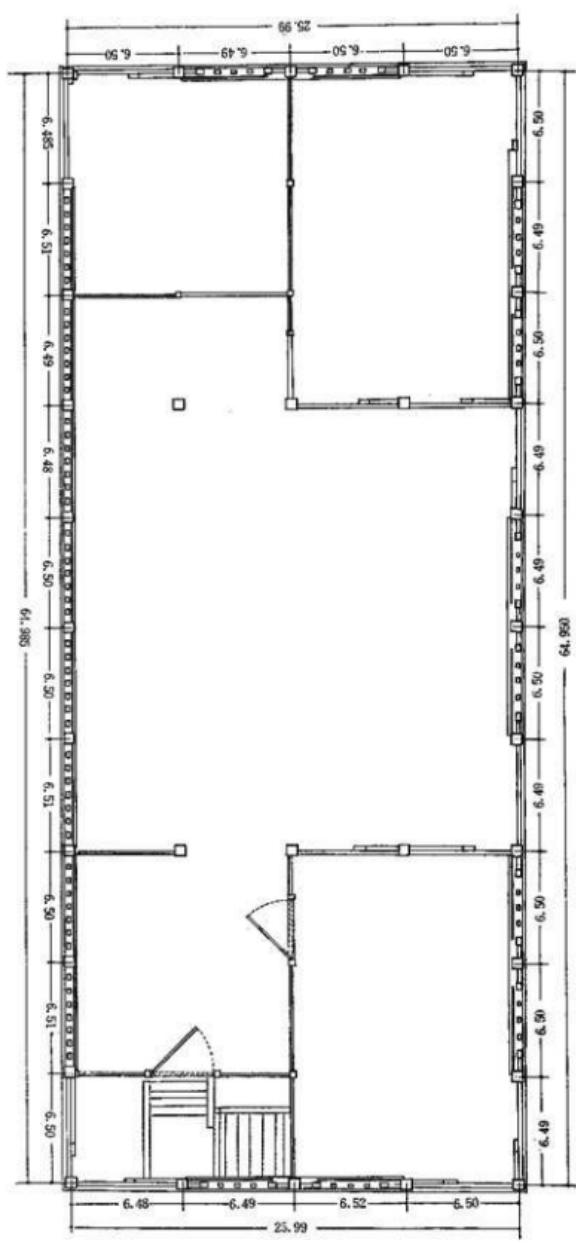
第20 大手門正面図（美濃図）



第21 大手門側面図（実測図）

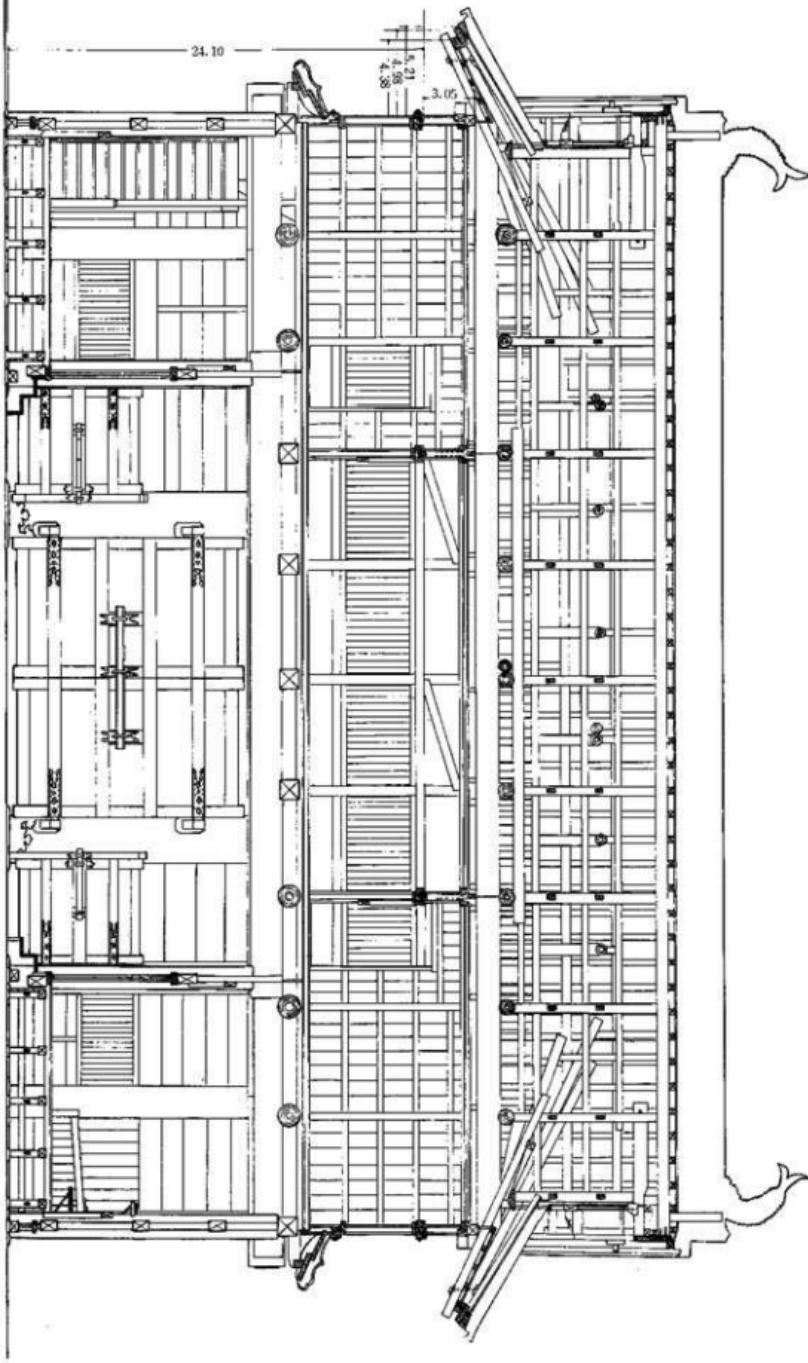


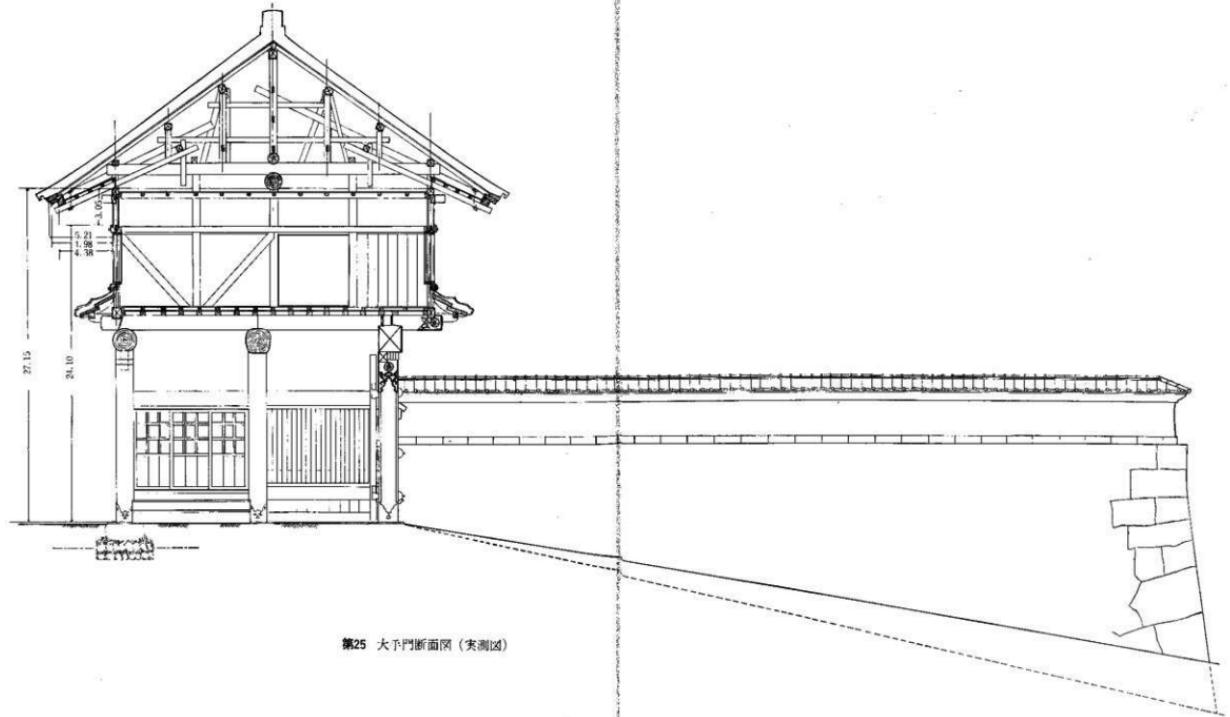
第22 大手門一階平面図（実測図）



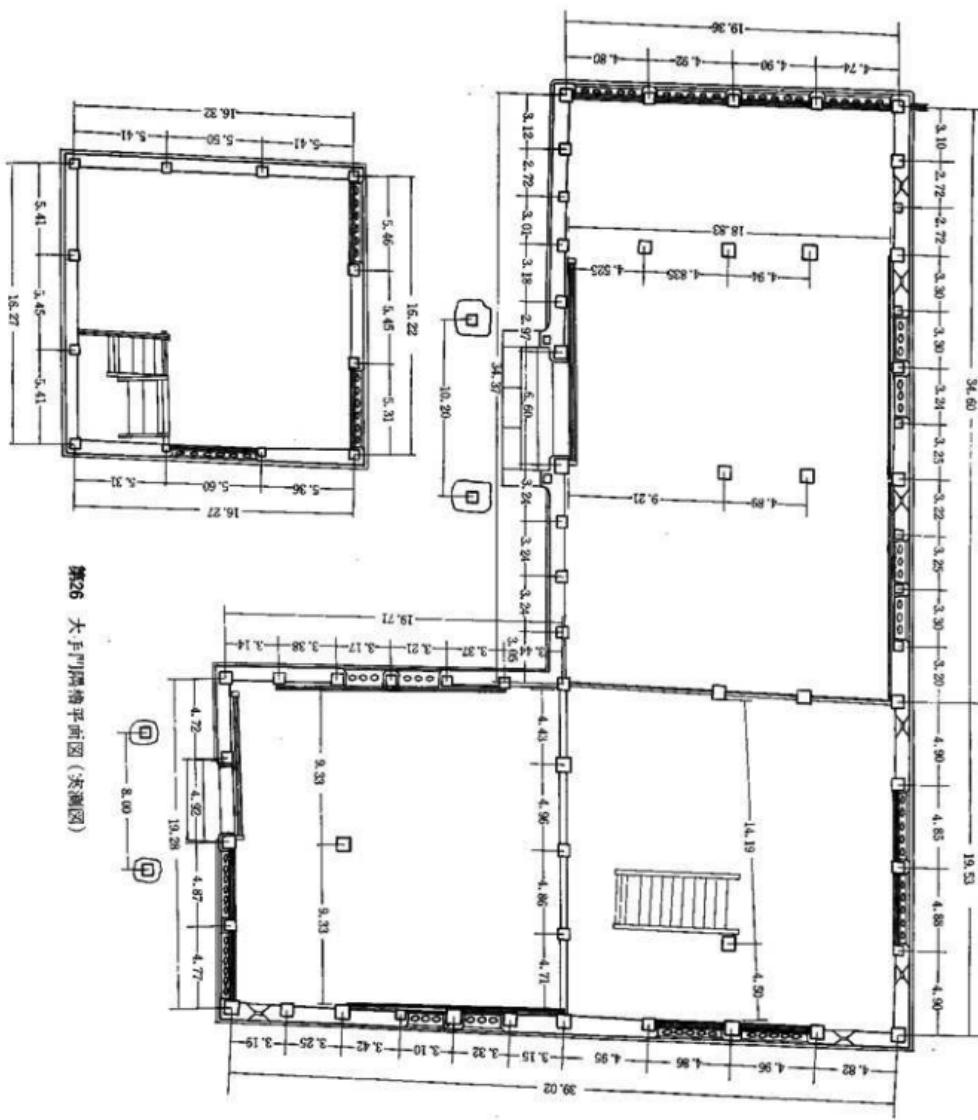
第23 大南門二層平面圖（英測圖）

第24 大手門断面図(実測図)

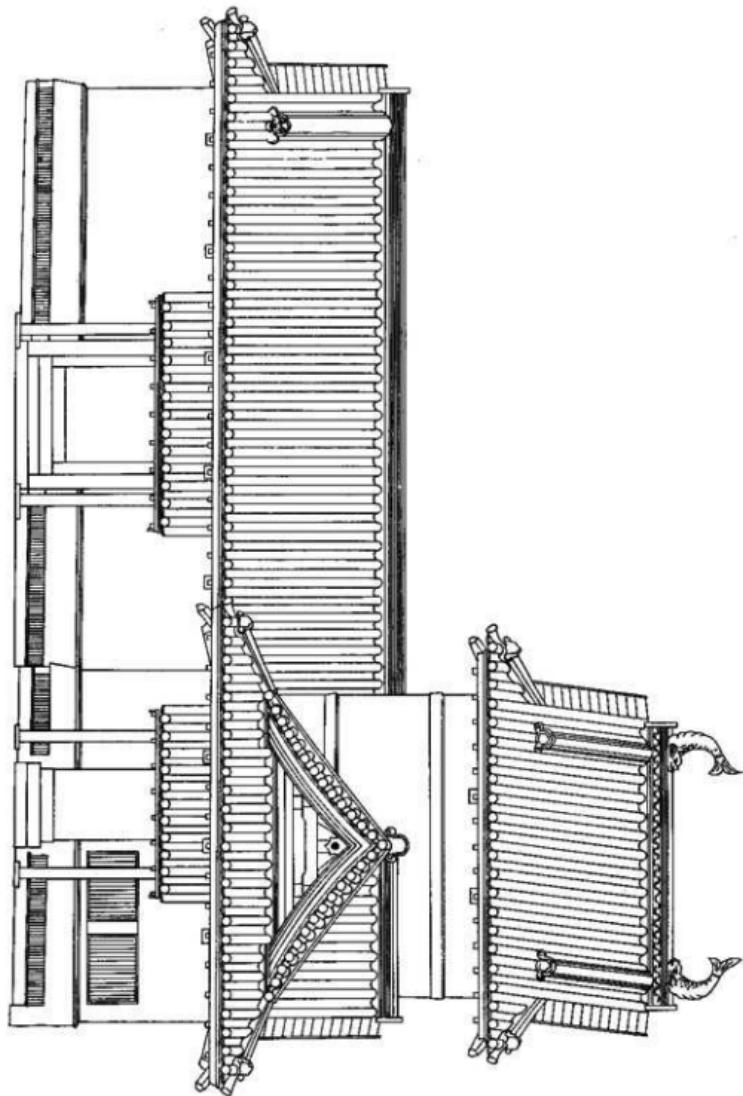




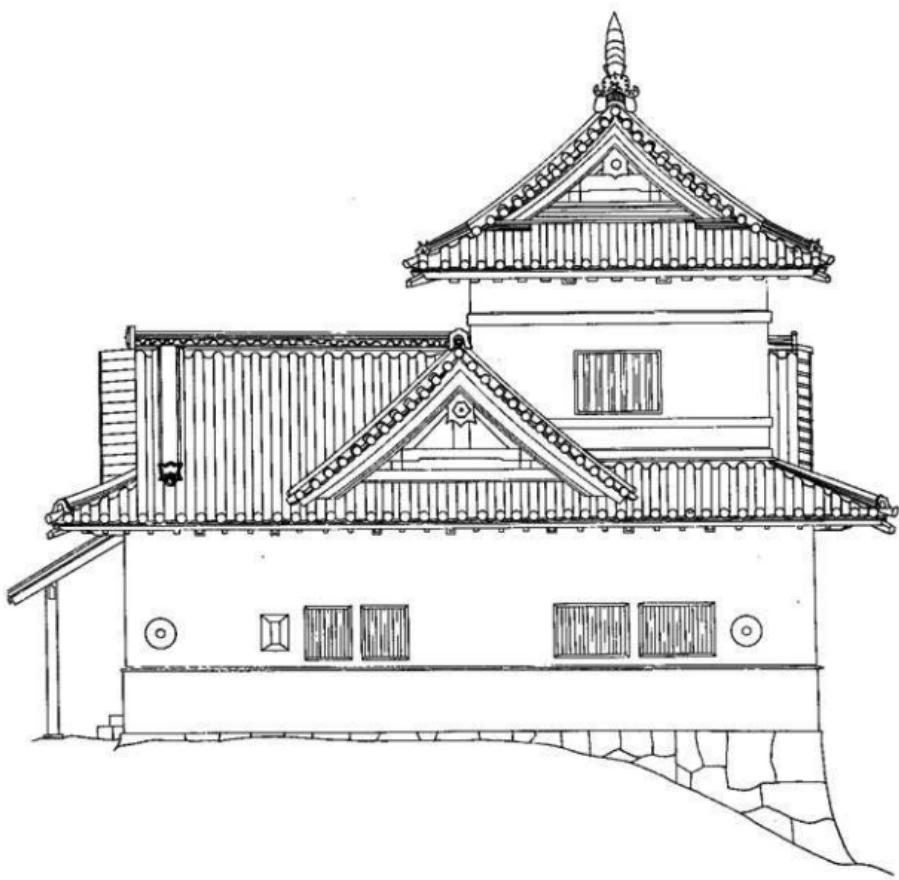
第25 大手門断面図（実測図）



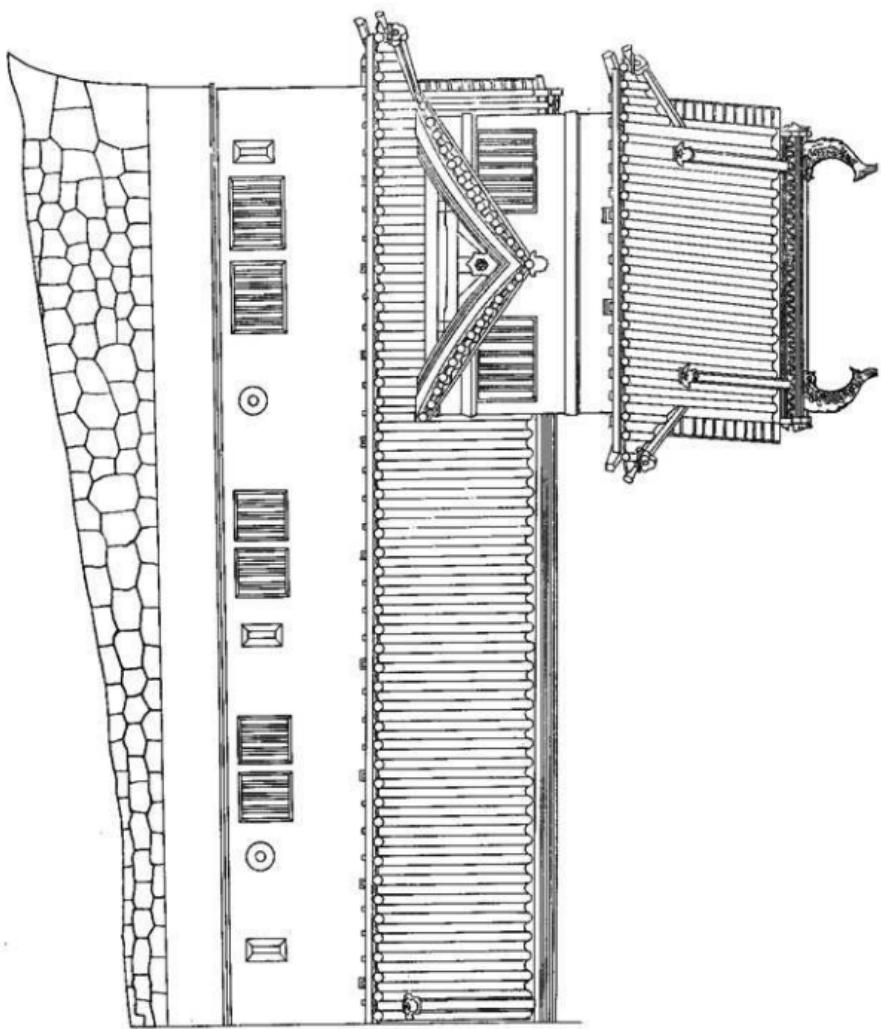
第26 大手門構造平面図(実測図)



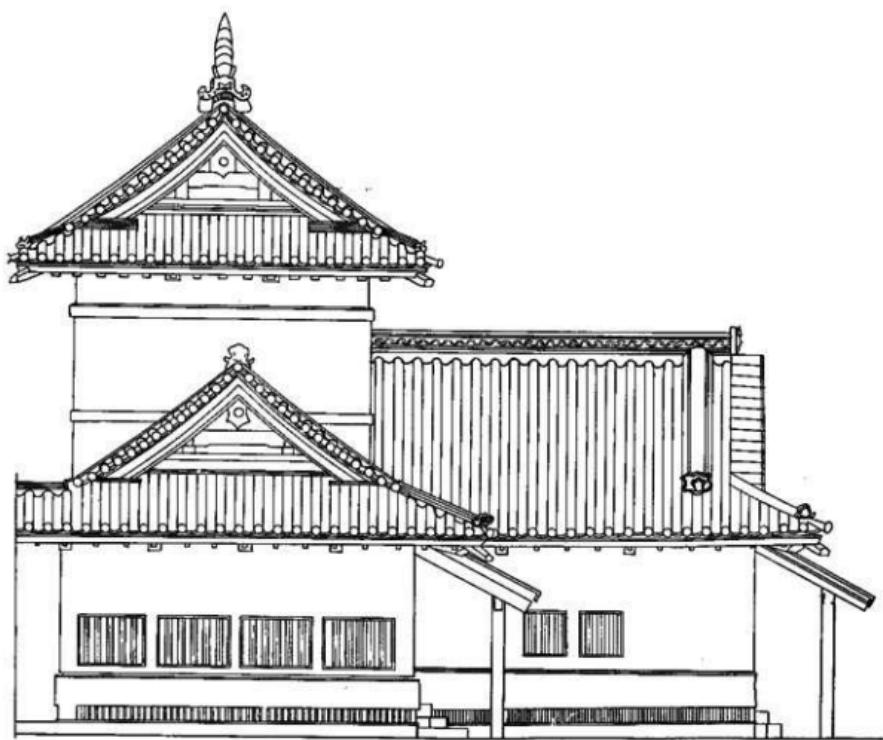
第27 大南門構造断面図(実測図)



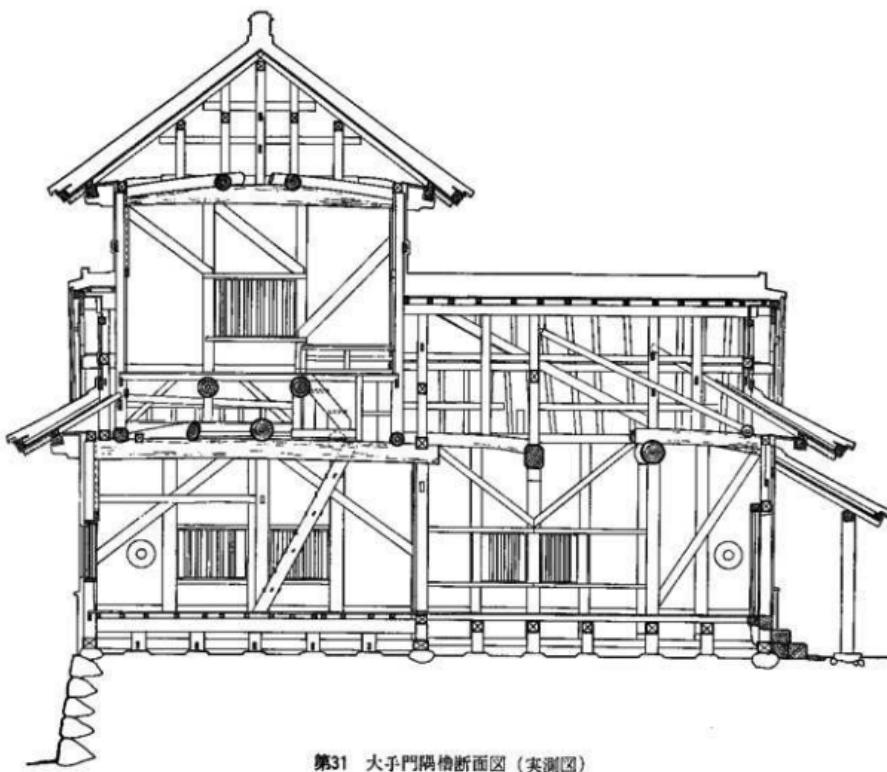
第28 大手門構櫓東面図（実測図）



第29 大手門構造北面図（実測図）



第30 大手門講櫓西面図（実測図）



第31 大南門構構断面図（実測図）

第32

本丸詰の門前面、向って右西脇橋跡、左東脇橋跡



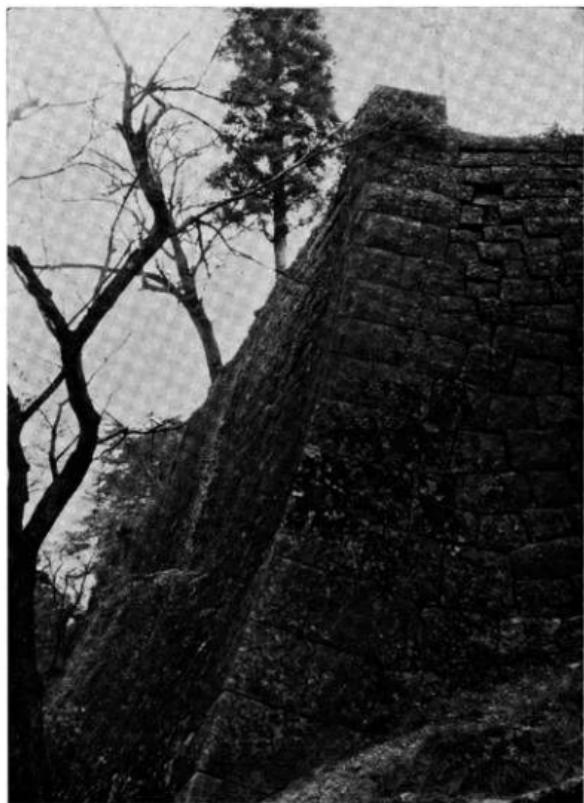
第33 本丸詰の門東方城壁屈折部

264

第34 本丸跡の門西脇櫓跡



第35 本丸跡の門東脇櫓跡

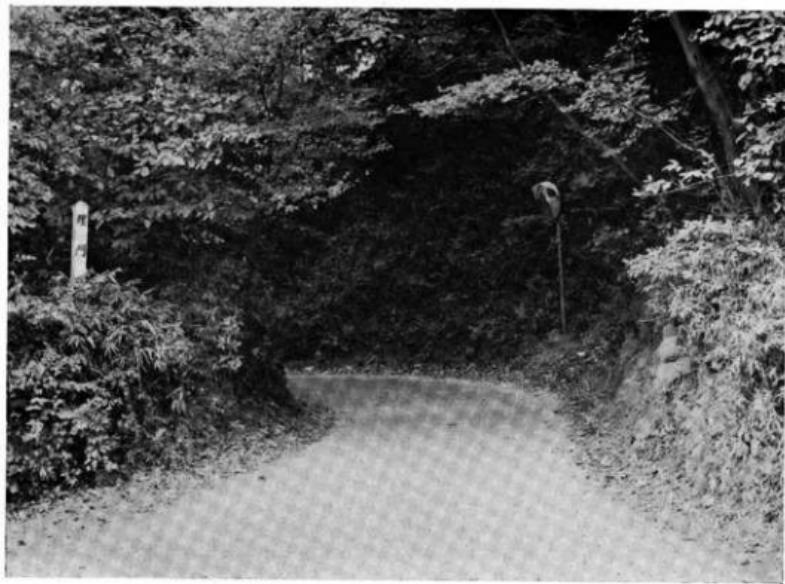




第36 本丸西側石垣

第37 本丸西側の西の門跡附近石垣





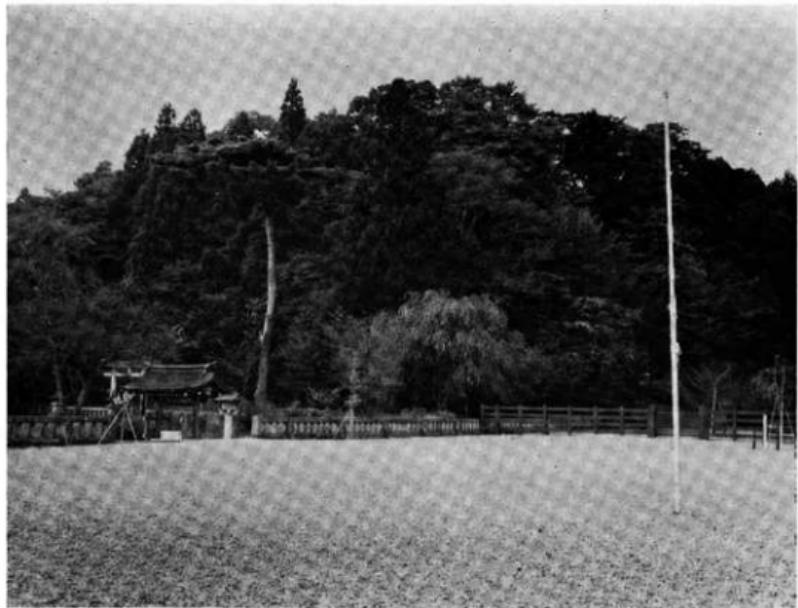
第38 本丸埋門跡、東方より樹形を見る



第39 本丸切通門跡、天守台の西側にある



第40 本丸車寄門（俗に日暮門という）跡礎石



第41 東方より見たる 本丸天守台



第42 本丸艮櫓跡



第43 本丸巽櫓跡



第44 本丸南側土居、大番土手



第45 本丸城番所入口石階、護国神社の背後にある



第46 本丸水源（植物園内）



第47 本丸水溜め（上部コンクリート排水口は昭和年代のもの）



第48 二の丸大手門跡北側城壁



第49 同じく東面部分



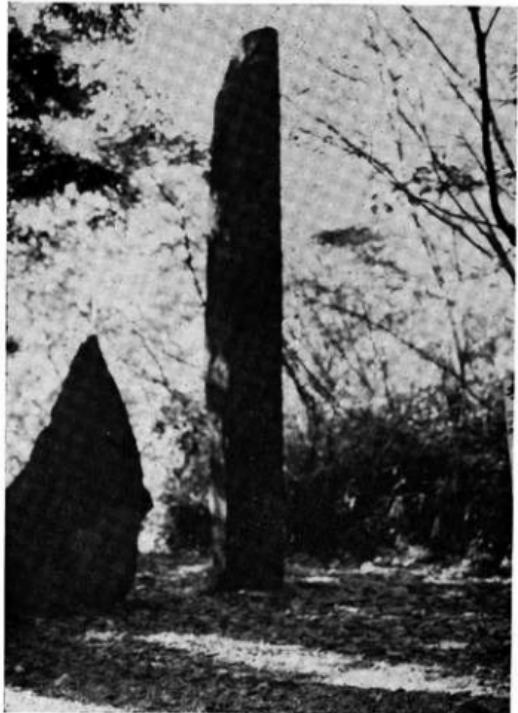
第50 二の丸賓の門跡、西側



第51 二の丸諸の門附近上店、東側



第52 二の丸残月亭跡



第53

二の丸築古の碑（向って左は弘安碑）

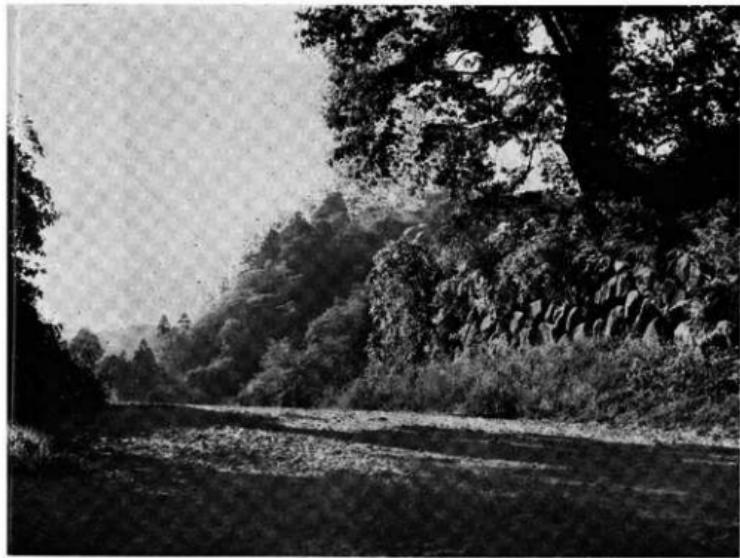


第54
二の丸中奥北側杉並木



第55 二の丸裏門千貫橋跡より東方渓谷を見る

第56
三の丸堀門跡、追廻し口



第57 三の丸子の門跡（現在の博物館入口）

第58

五色沼より大手門隅櫓を見る
(隅櫓は現在のもの)



第59

三の丸外濠長沼より本丸を見る





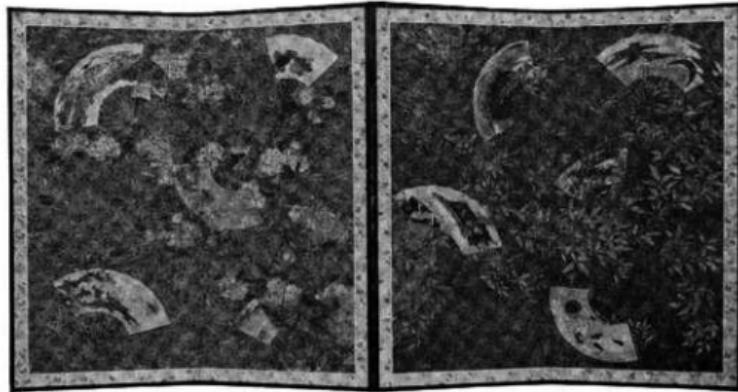
第60 追廻口、清水門城壁（昭和40年積直し）



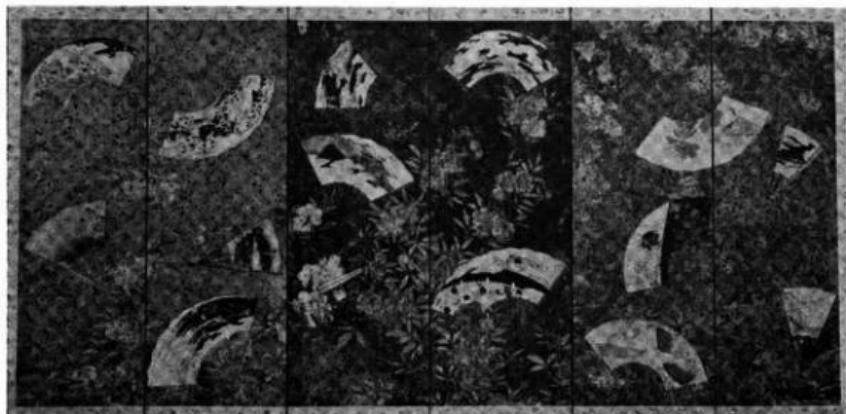
第61 清水門跡、清水涌口



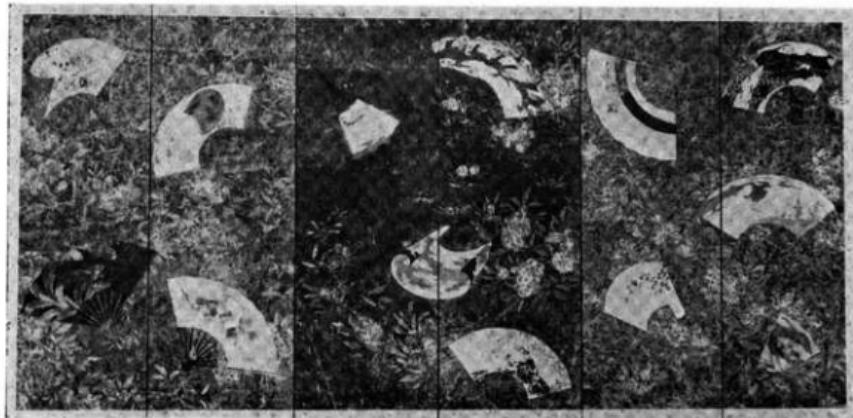
第62 竹図屏風（後藤久三郎氏蔵）
あとで屏風に直したもの



第63 扇面二曲屏風一雙（仙台市博物館蔵）



第64 扇面六曲屏風（仙台市博物館蔵）



第65 扇面六曲屏風（仙台市博物館蔵）



第66 本丸大広間玄関襖股、透影牡丹文（関菊治氏藏）



第67 本丸扉（浅野久治郎氏藏）



第68 本丸所用透影竹雀文（後藤久三郎氏藏）



第69 本丸大広間花狹間（仙台市博物館藏）



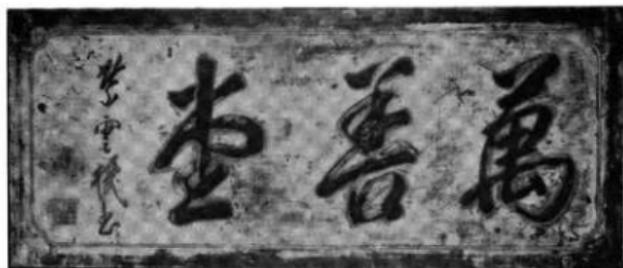
第70 本丸菊花彫（青葉神社藏）



第71 本丸釘かくし（杉村豊太郎氏蔵）



第72 本丸大広間妻部の懸魚六葉飾り（近江氏蔵）



第73 二の丸佛堂万善堂扁額、元祿年中大年寺開山鉄牛道
機書（瑞鳳寺藏）



第74 二の丸佛堂因縁殿扁額、同鉄牛道後書（東秀院藏）



第75 大手門扉釘かくし（近江氏藏）



第76 二の丸兵具藏造構（現七郷農協倉庫）



第77 二の丸金蔵造構鬼瓦（三種）
(日野財次郎氏蔵)



第78 シジュウカラ

懸垂して枝にとまっているエナガ

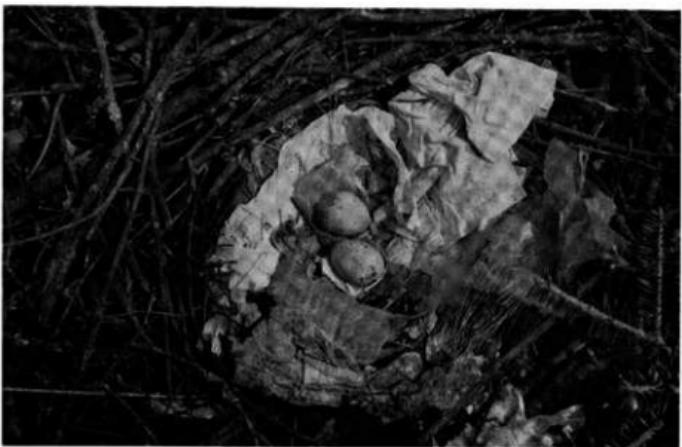




第79 チゴモズ、給餌中の親と雛

キクイタグキ





第81

林中のキジ（雌）



シヤガ群落の中の巣（卵）



抱卵中の雄キジ

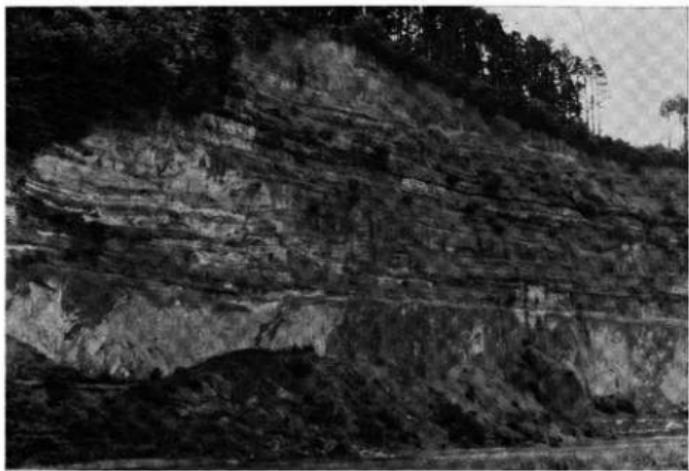


第82巣中のキジ卵



孵化したキジの雛





第83 チョウゲンボウの巣穴のある竜の口沢の絶壁



絶壁にあるチョウゲンボウの巣穴



第84 樹上のチョウゲンボウ 二態





第85 御裏林のモミ



第86 ヒメシャガ



第87 ヒメノヤガラ（約2倍）



第88

ユウシュンラン、落葉はイヌブナの葉（約15倍）

編集後記

最近文化財の保護、なかでも史跡を破壊から守ろうという声が各方面で聞かれるが、仙台市はひと足早く昭和十七年十二月に文化財保護条例を施行し文化財の保護に乗り出した。国、県指定の文化財以外の文化財で仙台市にとって貴重なものを保護しようというわけである。

そこで文化財保護委員会がつくられ、われわれが委員に任命されたが、さて何から手をつけようかということになつたとき、やはり仙台市民になじみがあり、仙台市発展の基礎となつた伊達六十二万石の居城『仙台城』をおいてはない、ということで仙台城に関する調査が進められることになった。そのうち、調査を徹底的に行ない報告書を作ろうということになり、各委員が各自の専門分野を担当し調査をはじめたのが、この本のできるそもそもの発端であった。

委員の分担は本文にみるとおりであるが、なかでも歴史を担当した前委員長の伊東、年中行事と年表を担当した三原、建築担当の佐藤（巧）の各委員の方々には写真図版の選定までお頼いし大変ご苦労をかけた。

できあがつたこの本をみると、なお不備の点も多いが、これは一つには編集の期間の短かつたためでもあり、また人文科学から自然科学までを網羅して一冊の本にしたという特殊性にもあると思う。しかしながら、この本を土台としてもつと完備したものができるのを期待するものである。

終りに本書の編集にあたつて、貴重な写真を提供して下さつたり、あるいは撮影について便宜を与えられた宮城県図書館、斎藤報恩会、松島博物館、河北新報社、護國神社、後藤久三郎氏、杉村豊太郎氏、森柳五郎氏、仙台市博物館、仙台市公民館、その他の各位に対し心から深謝の意を表するとともに、事務局関係者、出版社等の労を多とするものである。

仙 台 城

¥1,500円

昭和42年3月25日印刷
昭和42年3月31日発行

編 著 仙台市文化財保護委員会

発 行 者 仙台市教育委員会

印 刷 東海林活版製本所

仙台市外記丁30番地
TEL 3661



仙台城 図版

第 89 図

肯山公造制木写之略図（本丸部分図）

第 90 図

肯山公造制木写之略図（二之丸部分図）

第 91 図

御二丸御指図

第 92 図

享和二年之御家作御絵図写（二之丸）

第 93 図

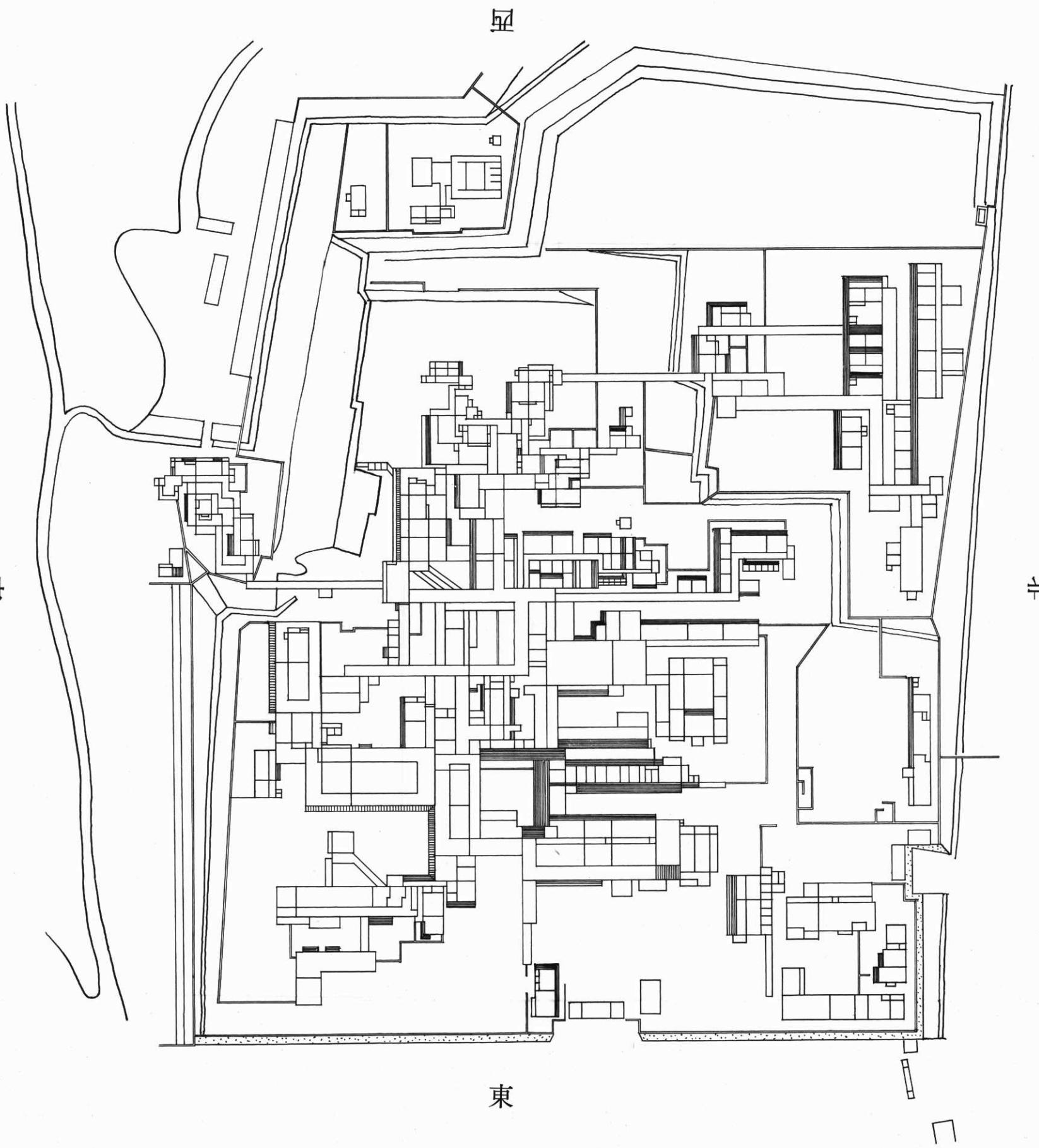
御二丸御家作水駄御絵図

第 94 図

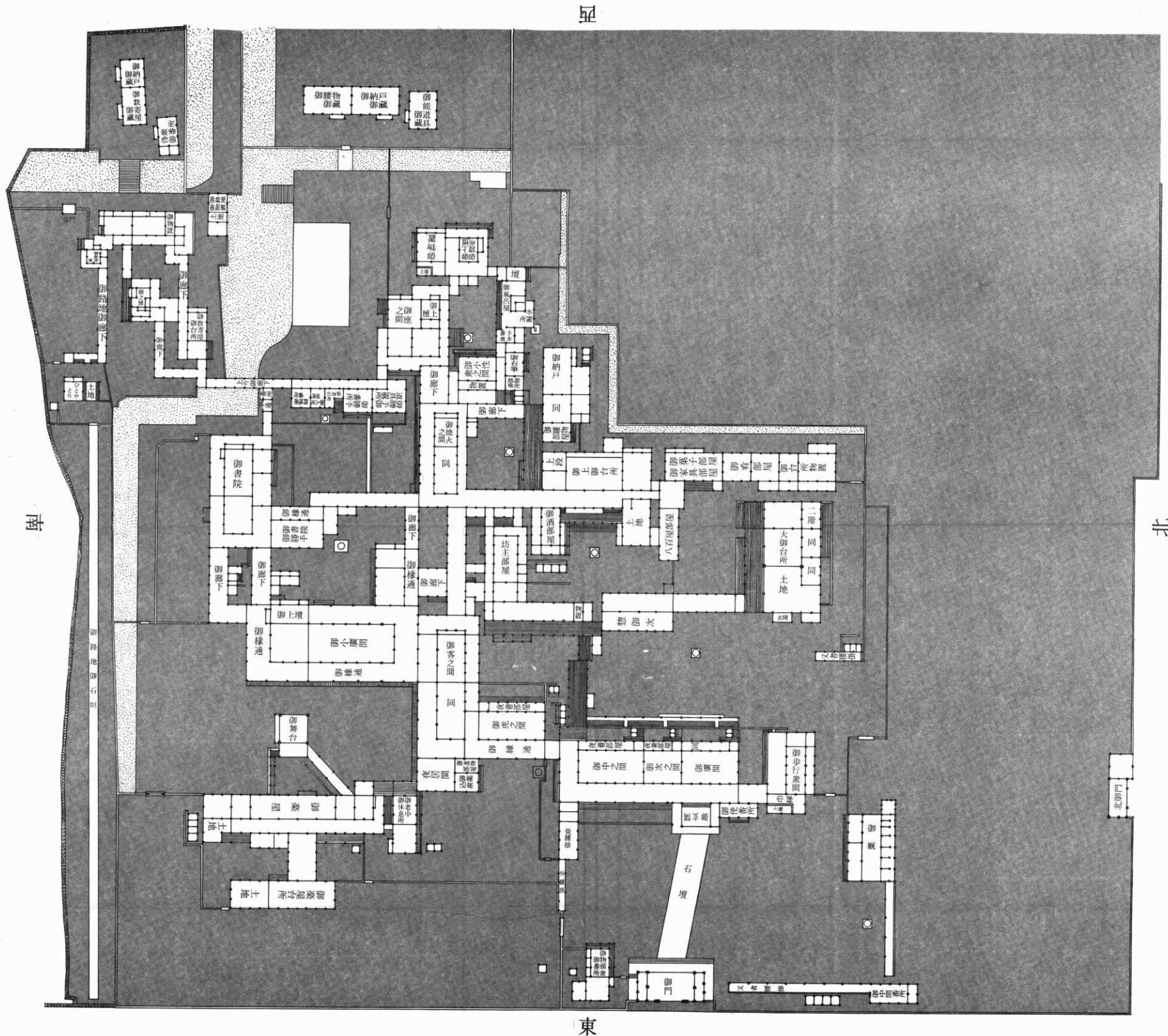
御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図



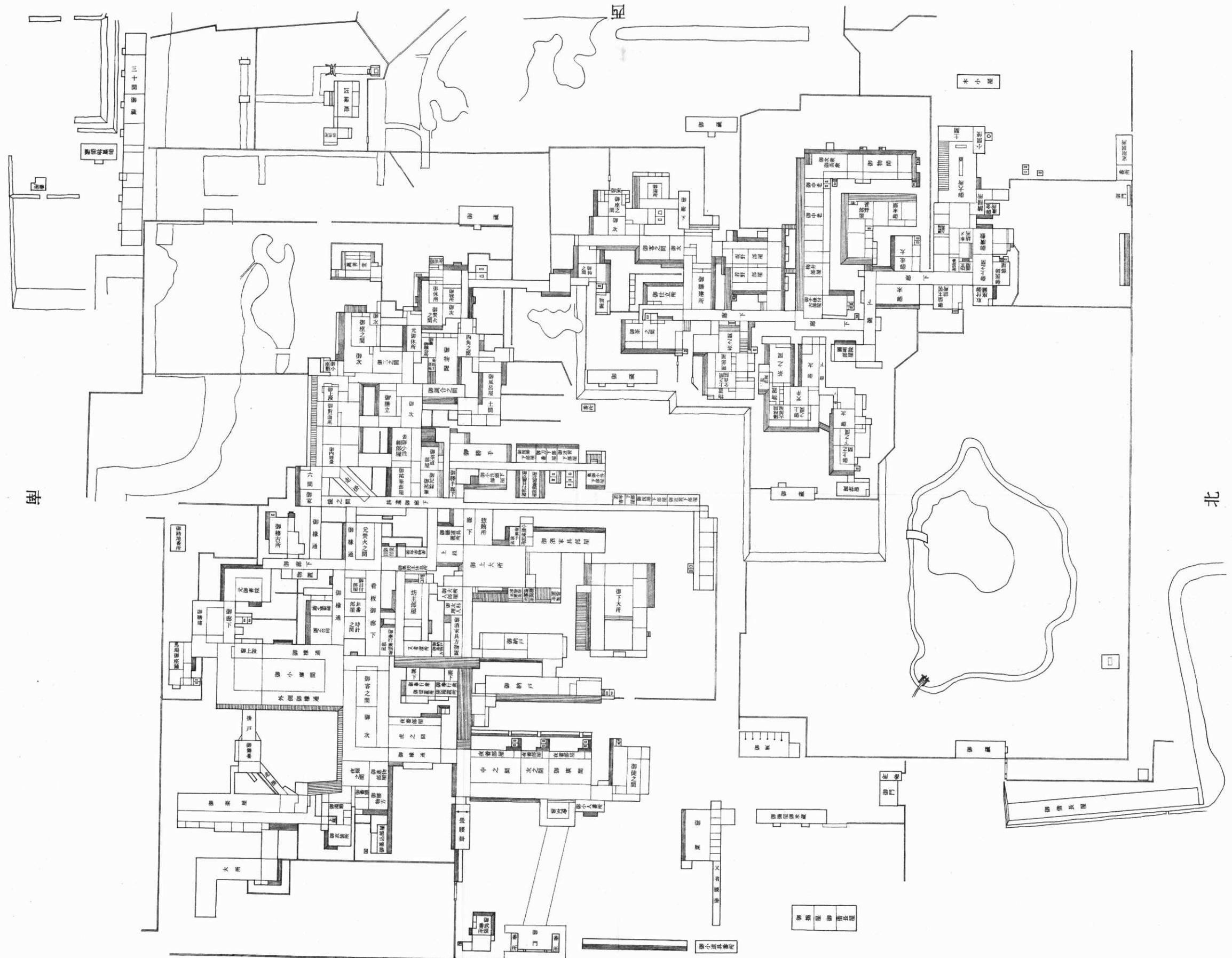
第89図 肯山公造制木写之略図（本丸部分図）



第90図 背山公造制木写之略図（二丸部分図）

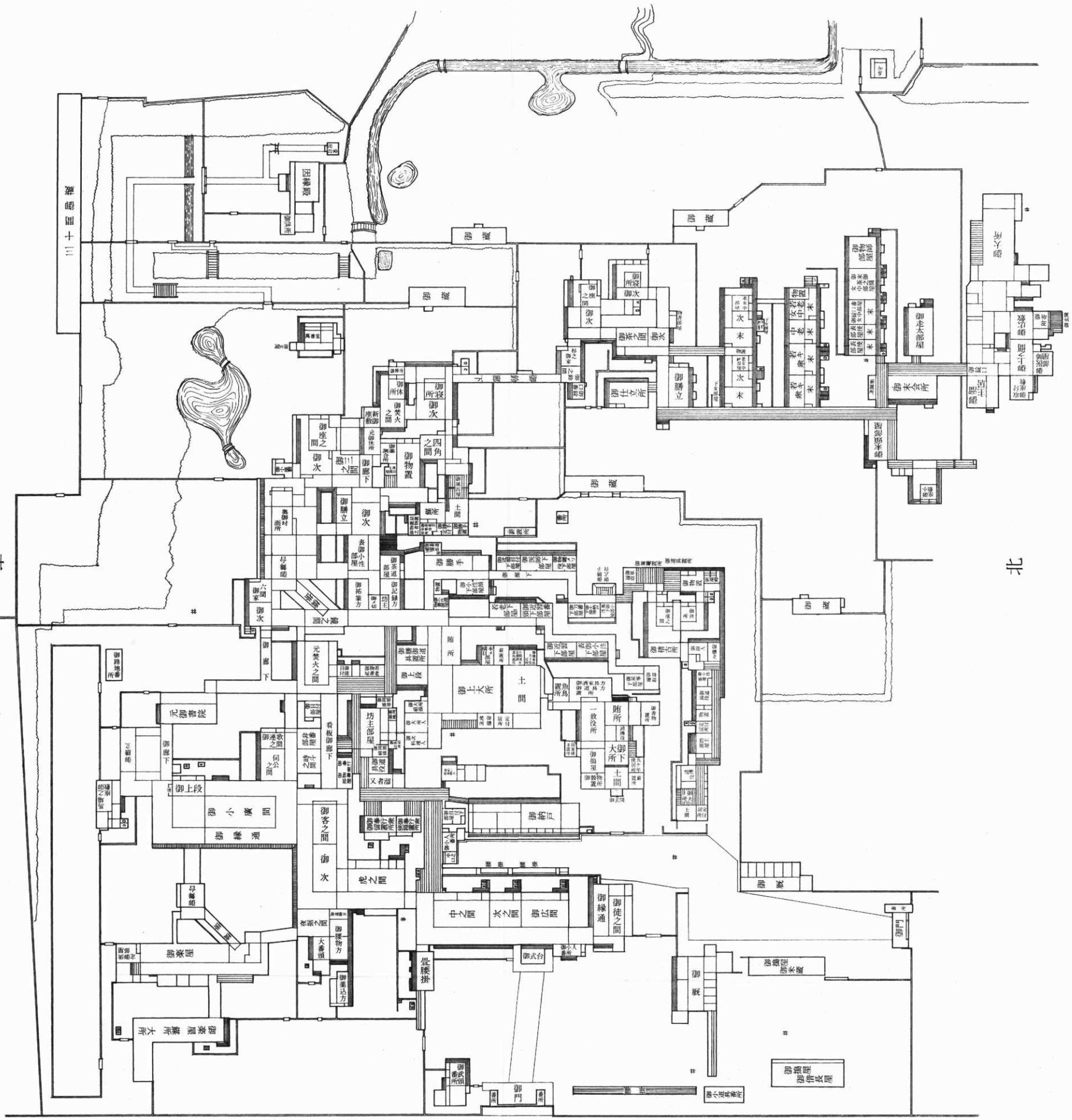


第91図 御二丸御指図

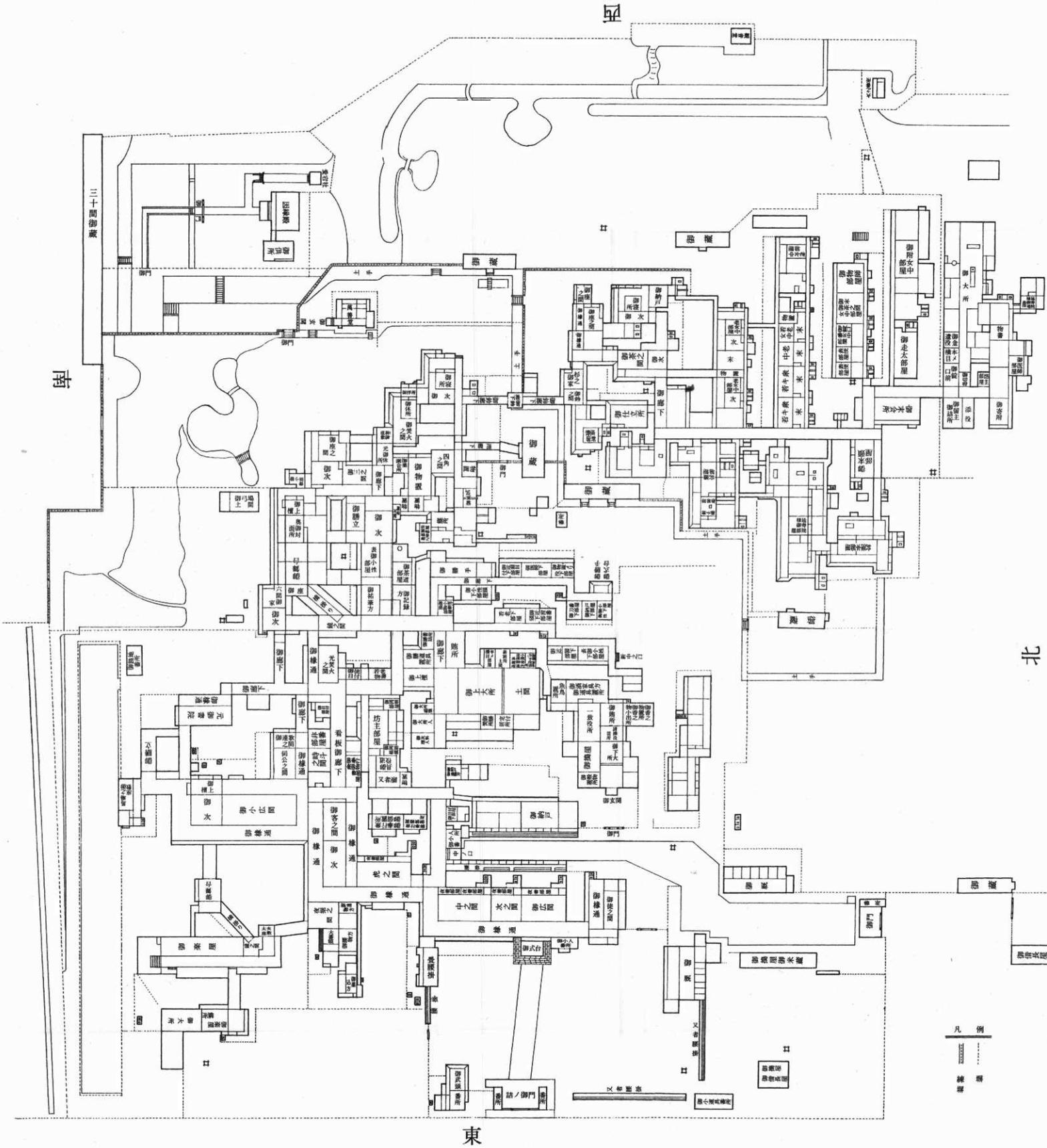


東

第92図 享和二年之御家作御絵図写（仙台城二九）



第93図 御二丸御家作水祓御絵図



第94図 御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図・嘉永6年（仙台市史・第3巻=附図仙台城二の丸図より）

